

町 遺 跡

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第45集

2015

国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

町 遺 跡

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第45集

2015

国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



1 平成24年度調査 44区 調査区全景 1号建物床板出土状況 西から



2 平成24年度調査 44区 1号建物遺物出土状況 (漆碗)



3 平成24年度調査 44区 1号建物遺物出土状況 (団扇)



4 平成24年度調査 44区 1号建物遺物出土状況 (横笛)



5 平成24年度調査 44区 1号建物遺物出土状況 (下駄)



1 平成24年度調査 44区 1号建物西壁土層断面 東から



2 横 笛



3 将棋駒 桂馬と歩兵



4 小柄に施された彫金細工



5 小 弓

序

八ッ場ダムは、治水・利水・発電を行う多目的ダムとして計画され、吾妻郡長野原町を中心に関連工事が進められています。八ッ場ダム関連の建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、当事業団が平成6年度から実施し、本年度で21年目を迎えます。

本書で報告します町遺跡は、吾妻川左岸に位置する遺跡で、平成23年度から平成25年度に発掘調査を実施したものです。

この調査により、天明三年（1783年）の浅間山大噴火に伴う泥流で被災した、旧長野原村の宿場集落の東側が明らかとなりました。主要な遺構には、宿場集落の東端に位置する大型の建物、建物の東側に広がる畑、そして宿場集落内を通る草津路などがあります。特に注目されるのは、敷物を敷いた床板が残る大型建物です。被災した当時の姿をそのままに、陶磁器、漆器、木製品、金属製品が出土し、18世紀後半の生活様相を伝えてくれる発見でした。これらの調査成果は、本地域の近世の様相を知る上でも貴重な資料であり、今後の研究資料の一つとして役立つものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、国土交通省八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会、長野原町教育委員会をはじめ、関係する機関や地元関係者の皆様には、多大なご指導・ご協力を賜りました。本報告書の上梓に際し、関係者の皆様に心から感謝申し上げますと共に、本書が歴史研究の資料として広く活用されますことを願い、序といたします。

平成27年2月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 吉 野 勉

例 言

1. 本書は、ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査による、町遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 町遺跡は、群馬県吾妻郡長野原町大字長野原173-3、173-4、174-3、175-5、甲227-1、甲227-3、228-1、228-2、228-3、229-5、甲230-1、乙230-1、231-1、231-2、232-2、237-13、238-2、238-3、238-5、238-11、238-12、238-13、238-15、238-16、238-24、238-25、238-26、238-27、238-28、240-5、241-2、244-15、244-16、244-17、240-6番地および無地番（赤道）に所在する。
3. 事業主体は、国土交通省ハッ場ダム工事事務所である。
4. 調査主体は、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（平成24年4月に公益財団法人に組織改定）である。
5. 調査期間と調査面積、体制は次の通りである。

調査期間・発掘調査担当

平成23年7月1日～平成23年7月31日（平成23年度） 小野和之（調査課長）、山口逸弘（上席専門員）
平成24年5月16日～平成24年5月31日、平成24年6月12日～平成24年9月10日（平成24年度）
山口逸弘（上席専門員）、黒澤照弘（主任調査研究員）
平成25年10月3日～平成25年10月4日（平成25年度） 小野和之（専門官兼調査課長）、関俊明（主任調査研究員）

調査面積

5,326㎡（平成23年度 630㎡、平成24年度 4,483㎡、平成25年度 213㎡）

遺跡掘削工事 株式会社 測 研（平成23・25年度）、歴史の杜（平成24年度）
6. 整理事業の期間と体制は次の通りである。

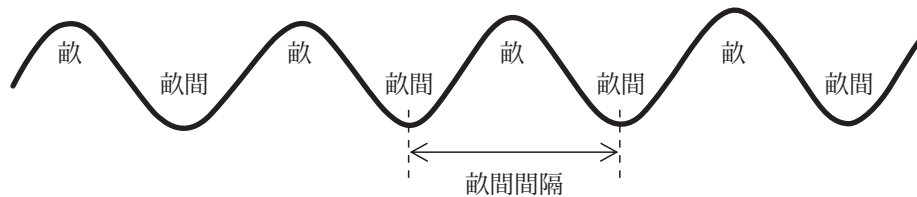
整理期間 平成26年4月1日～平成26年10月31日（平成26年度）
整理担当 谷藤保彦（上席専門員）
7. 本書作成の担当者は以下のとおりである。

本文執筆 谷藤保彦
遺物観察 谷藤保彦
デジタル編集 齊田智彦（主任調査研究員）
遺物写真 谷藤保彦
保存処理 関邦一（補佐（総括））
整理補助員 吉田豊子、黒岩扶美枝、川津えみ子、日野亮子
8. 発掘調査および整理事業での委託

遺構測量 株式会社 測 研（平成23～25年度）
自然科学分析 株式会社 パレオ・ラボ
出土獣骨の鑑定 宮崎重雄
大型建築材の実測・トレース・写真撮影 株式会社 測 研
9. 石材の同定は、飯島静男（地質学者・群馬地質研究会）に依頼した。また、木製品の樹種同定は、関邦一が行った。
10. 発掘調査および報告書の作成にあたり群馬県教育委員会事務局文化財保護課、長野原町教育委員会事務局のご指導とご助言を得た。
11. 発掘調査の記録資料と出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

凡 例

1. 本書で使用した座標値および方位は、国家座標（座標第Ⅸ系）を用い、座標北で示した。
調査区は、X=61220～61430、Y=-106140～-106320の範囲に収まる。
真北方位角は $-0^{\circ} 42' 24.10''$ （座標：X=61360、Y=-106240）である。
2. 等高線・遺構断面図等に記した数値は、海拔標高を示す。
3. 遺構図・遺物図については、各挿図中にスケールを添付したが、原則下記の縮尺で掲載した。また、遺物写真の縮尺は、実測図と同一の縮尺を原則とした。
遺構図： 遺構全体図1/400 建物・土坑1/40 畑1/200 1/40 石垣・円形平坦面 1/40 道1/100
鍛冶関連遺物分布図1/60
遺物図： 陶磁器4/5 1/3 骨角製品1/3 建築材1/6 1/10 木製品類 1/2 1/3 1/4 1/6 1/10
金属製品類（鍛冶関連遺物を含）4/5 1/2 1/3 石器・石製品1/3
4. 遺物の掲載は、種別に限らず遺構毎に通し番号とした。
5. 図中で使用したスクリーンパターンおよびマークは、各図毎に表示をした。
6. 遺構の計測は、全容が計測できない遺構について残存値（ ）で表記してある。
なお、畑の計測では、畝間から隣の畝間までの間を畝間間隔として計測した。



7. 本遺跡で検出された畑の畝間を埋めているAs-A（浅間A軽石）は、天明三（1783）年の浅間山噴出軽石の略である。
また、「天明泥流」あるいは「泥流」は、天明三年新暦8月5日の浅間山噴火に伴う泥流堆積物の略称である。
8. 遺物観察表での表現および記載法は、以下の通りである。
 - ・遺物観察表は遺構毎とし、第5章の後ろに纏めて掲載した。
 - ・遺物計測位置の表現は、陶磁器類は口径：口、底径：底、器高：高、高台径：台と略記し、他の遺物についても長さ：長、幅、厚さ：厚、高さ：高、外径：径、孔径：孔、重さ：重と略記した。また、銭貨の内輪径は、孔と略記した。
 - ・計測値の単位はcmとし、重量はgで表記している。
 - ・欠損した遺物の計測値には、（ ）で現存値を記した。
 - ・建築材を含めた木製品類の樹種同定は、掲載遺物全体には及んでいない。
9. 本書で使用した地形図は下記の通りである。
国土地理院：地形図 1:50,000 「草津」（平成11年発行）

目次

序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
表目次	
写真目次	

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	2
第3節 調査の経過	3
第4節 調査区の概要	6

第2章 遺跡の環境

第1節 歴史的環境	11
第2節 周辺の天明泥流下の遺跡	12
第3節 基本層序	17

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 調査の概要	
(1) 平成23年度調査	18
(2) 平成24年度調査	18
(3) 平成25年度調査	18
第2節 天明泥流下・浅間A軽石	
降下直前の遺構と遺物	
(1) 建物	18
(2) 畑	67
(3) 石垣・土手(段差)	84
(4) 円形平坦面	87
(5) 道状遺構	89
(6) 遺構外出土遺物	90
第3節 浅間A軽石降下以前の遺構と遺物	
(1) 鍛冶関連遺構	94
(2) 鍛冶関連遺物	94

第4章 自然科学分析

第1節 花粉分析	100
第2節 大型植物遺体	103
第3節 昆虫遺体	109
第4節 出土材の樹種同定	115
第5節 出土獣歯骨	128

第5章 調査の成果(総括)

第1節 天明泥流の様相	132
第2節 旧長野原村における 町遺跡の位置と草津路	132
第3節 総括	134

遺物観察表	135
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図	遺跡の位置図	1	第39図	1号建物出土遺物(20)	木製品類	55
第2図	中・小グリッド配置模式図	2	第40図	1号建物出土遺物(21)	木製品類	56
第3図	町遺跡調査範囲図	4	第41図	1号建物出土遺物(22)	木製品類	57
第4図	遺構配置全体割り付け図	7	第42図	1号建物出土遺物(23)	木製品類	58
第5図	遺構配置全体図(1)	8	第43図	1号建物出土遺物(24)	木製品類	59
第6図	遺構配置全体図(2)	9	第44図	1号建物出土遺物(25)	木製品類	60
第7図	遺構配置全体図(3)	10	第45図	1号建物出土遺物(26)	木製品類	61
第8図	天明泥流下の遺跡分布図	14	第46図	1号建物出土遺物(27)	木製品類	62
第9図	基本層序図	17	第47図	1号建物出土遺物(28)	木製品類	63
第10図	1号建物平面図(1) 検出状況	21	第48図	1号建物出土遺物(29)	金属製品類	64
第11図	1号建物平面図(2) 床板	22	第49図	1号建物出土遺物(30)	金属製品類・石製品類	65
第12図	1号建物平面図(3) 根太・大引・敷居	23	第50図	1号建物出土遺物(31)	石製品類	66
第13図	1号建物平面図(4) 束・礎石	24	第51図	畑区画図		69
第14図	1号建物断面図(1)	25	第52図	1・2号畑平面図		70
第15図	1号建物断面図(2)	26	第53図	1・2号畑断面図		71
第16図	1号建物平面図(5) 下面	27	第54図	3・4号畑平面図		72
第17図	1号建物遺物出土位置図(1)	30	第55図	3・4号畑断面図(1)		73
第18図	1号建物遺物出土位置図(2)	31	第56図	3・4号畑断面図(2)		74
第19図	1号建物遺物出土位置図(3)	32	第57図	6号畑-1・2平面図		75
第20図	1号建物出土遺物(1) 建築材-床板	36	第58図	6号畑-1・2断面図(1)		76
第21図	1号建物出土遺物(2) 建築材-床板・根太	37	第59図	6号畑-1・2断面図(2)		77
第22図	1号建物出土遺物(3) 建築材-根太	38	第60図	5・7・8号畑平面図		78
第23図	1号建物出土遺物(4) 建築材-根太	39	第61図	5・7・8号畑断面図		79
第24図	1号建物出土遺物(5) 建築材-根太	40	第62図	9号畑-1・2・3平面図		80
第25図	1号建物出土遺物(6) 建築材-根太	41	第63図	9号畑-1・2・3断面図		81
第26図	1号建物出土遺物(7) 建築材-大引	42	第64図	10号畑平・断面図		82
第27図	1号建物出土遺物(8) 建築材-大引	43	第65図	1号石垣平・断面図		85
第28図	1号建物出土遺物(9) 建築材-大引・敷居	44	第66図	2号石垣平・断面図		86
第29図	1号建物出土遺物(10) 建築材-束	45	第67図	1・2号円形平坦面平・断面図		88
第30図	1号建物出土遺物(11) 陶磁器類	46	第68図	道状遺構平・断面図		89
第31図	1号建物出土遺物(12) 陶磁器類・木製品類	47	第69図	遺構外出土遺物(1) 陶磁器類		91
第32図	1号建物出土遺物(13) 木製品類	48	第70図	遺構外出土遺物(2) 木製品類・金属製品類		92
第33図	1号建物出土遺物(14) 木製品類	49	第71図	遺構外出土遺物(3) 金属製品類・石製品類		93
第34図	1号建物出土遺物(15) 木製品類	50	第72図	鍛冶関連遺物分布平面図		95
第35図	1号建物出土遺物(16) 木製品類	51	第73図	鍛冶関連遺物(1)		96
第36図	1号建物出土遺物(17) 木製品類	52	第74図	鍛冶関連遺物(2)		97
第37図	1号建物出土遺物(18) 木製品類	53	第75図	鍛冶関連遺物(3)		98
第38図	1号建物出土遺物(19) 木製品類	54	第76図	旧長野原村周辺の道と村		133

表目次

第1表	天明泥流下の周辺遺跡	15	第5表	1号建物出土遺物観察表	135
第2表	畑計測表	66	第6表	遺構外出土遺物観察表	144
第3表	石垣・土手計測表	66	第7表	鍛冶関連遺物観察表	145
第4表	円形平坦面計測表	66			

写真目次

口絵 1	1	平成24年度調査	44区	調査区全景	1号建物床板出土状況	西から
	2	平成24年度調査	44区	1号建物遺物出土状況 (漆椀)		
	3	平成24年度調査	44区	1号建物遺物出土状況 (団扇)		
	4	平成24年度調査	44区	1号建物遺物出土状況 (横笛)		
	5	平成24年度調査	44区	1号建物遺物出土状況 (下駄)		
口絵 2	1	平成24年度調査	44区	1号建物西壁土層断面	東から	
	2			横 笛		
	3			将棋駒 桂馬と歩兵		
	4			小柄に施された彫金細工		
	5			小 弓		
P L . 1	1	町遺跡 (40地区-33区) 全景	北東から			
	2	平成23年度調査	33区	As-A 泥流下	6号畑-1 全景	南から
P L . 2	1	平成23年度調査	33区	6号畑-1 全景	西から	
	2	平成23年度調査	33区	6号畑-1 全景	東から	
P L . 3	1	平成23年度調査	6号畑-1	東から		
	2	平成23年度調査	6号畑-1	西から		
	3	平成23年度調査	6号畑-1	西から		
	4	平成23年度調査	1号平坦面	東から		
	5	平成23年度調査	6号畑-1 断割り	東から		
	6	平成23年度調査	6号畑-1 断割り	東から		
	7	平成23年度調査	遺構検出状況			
	8	平成23年度調査	6号畑-1	検出状況		
P L . 4	1	平成24年度調査	33区	調査区全景	東から	
	2	平成24年度調査	33区	As-A 泥流下全景	北東から	
P L . 5	1	平成24年度調査	33区 (北西部)	2号畑	東から	
	2	平成24年度調査	33区 (中央部)	4・5・6-1・7号畑	西から	
P L . 6	1	平成24年度調査	33区 (南東部)	6-2・7号畑	北から	
	2	平成24年度調査	3号畑	西から		
	3	平成24年度調査	3・4号畑	畝変換部	西から	
	4	平成24年度調査	3号畑・1号土手	南東から		
	5	平成24年度調査	4号畑	西から		
P L . 7	1	平成24年度調査	4号畑	軽石集中箇所	東から	
	2	平成24年度調査	4号畑	西から		
	3	平成24年度調査	4号畑 (As-A 除去後)	南東から		
	4	平成24年度調査	6-2・7号畑	北から		
	5	平成24年度調査	7・9-1号畑	東から		
	6	平成24年度調査	7・9-1号畑	南から		
	7	平成24年度調査	9号畑-1 (南東端部)	西から		
	8	平成24年度調査	2号畑断面	東から		
P L . 8	1	平成24年度調査	4号畑断面	東から		
	2	平成24年度調査	1号石垣	北から		
	3	平成24年度調査	2号石垣	東から		
	4	平成24年度調査	2号石垣	南から		
	5	平成24年度調査	2号円形平坦面	南から		
	6	平成24年度調査	泥流下畑	遺物出土状況	東から	
	7	平成24年度調査	泥流下畑	遺物出土状況		
	8	平成24年度調査	泥流下	遺物出土状況		
P L . 9	1	平成24年度調査	鍛冶関連遺物集中	南東から		
	2	平成24年度調査	鍛冶関連遺物集中	南東から		
	3	平成24年度調査	鍛冶関連遺物集中	東から		
	4	平成24年度調査	鍛冶関連遺物集中	北東から		
	5	平成24年度調査	遺構検出状況			
	6	平成24年度調査	遺構検出状況			
	7	平成24年度調査	遺構検出状況			
	8	平成24年度調査	遺構検出状況			
P L . 10	1	平成24年度調査	33区西	調査区全景	1号畑	南東から
	2	平成24年度調査	33区南①	調査区全景	8号畑	南東から
P L . 11	1	平成24年度調査	33区南②	調査区全景	9号畑-3	南東から
	2	平成24年度調査	33区南③	調査区全景	9号畑-2	北西から
P L . 12	1	平成24年度調査	43区西	調査区全景	As-A 泥流下面	東から
	2	平成24年度調査	44区	調査区全景	1号建物	東から
P L . 13	1	平成24年度調査	1号建物床	上敷物出土状況	西から	
	2	平成24年度調査	1号建物床板	検出状況	西から	
	3	平成24年度調査	1号建物床下	検出状況	東から	
	4	平成24年度調査	1号建物根太	検出状況	東から	
	5	平成24年度調査	1号建物根太	検出状況	北から	
	6	平成24年度調査	1号建物礎石	検出状況	北から	
	7	平成24年度調査	1号建物礎石	検出状況	東から	
	8	平成24年度調査	1号建物礎石	検出状況	西から	
P L . 14	1	1号建物	遺物 (小柄)	出土状況	東から	
	2	1号建物	遺物 (木製品)	出土状況	東から	
	3	1号建物	遺物 (金属製品)	出土状況	東から	
	4	1号建物	遺物 (お櫃)	出土状況	東から	
	5	1号建物	遺物 (墨書木札)	出土状況	東から	
	6	1号建物	遺物 (竹製品)	出土状況	東から	
	7	1号建物	遺物 (下駄)	出土状況	東から	
	8	1号建物	遺物 (下駄)	出土状況	東から	
P L . 15	1	1号建物	遺物 (下駄鼻緒)	出土状況		
	2	1号建物	遺物 (木製品)	出土状況		
	3	1号建物	遺物 (杓子)	出土状況		
	4	1号建物	遺物 (木製品)	出土状況		
	5	1号建物	遺物 (櫛)	出土状況		
	6	1号建物	遺物 (櫛)	出土状況		
	7	1号建物	遺物 (櫛)	出土状況		
	8	1号建物	遺物 (焼印木札)	出土状況		
P L . 16	1	1号建物	遺物 (草履)	出土状況		
	2	1号建物	遺物 (墨書板・鹿角製品)	出土状況		
	3	1号建物床下	1号土坑	西から		
	4	1号建物床下	1号土坑	土層断面	北から	
	5	1号建物床下	焼土 (2・3号土坑)	北から		
	6	1号建物床下	焼土断面 (2号土坑)	北から		
	7	1号建物床下	焼土断面 (3号土坑)	北から		
	8	1号建物床下	焼土断面 (4号土坑)	東から		
P L . 17	1	平成25年度調査	22区	調査区全景	東から	
	2	平成25年度調査	10号畑	西から		
	3	平成25年度調査	10号畑・土層断面	南から		
	4	平成25年度調査	道状遺構	西から		
	5	平成25年度調査	調査風景	西から		

P L. 18 1 40地区-33区 尋常小学校跡地 南辺石垣 南から
2 尋常小学校跡地 南辺石垣 崩落状況 南東から
3 尋常小学校跡地 南辺石垣 残存状況 南から
4 尋常小学校跡地 南辺石垣 残存状況 南東から
5 尋常小学校跡地 南辺石垣 残存状況 南から
P L. 19 1号建物出土遺物
P L. 20 1号建物出土遺物
P L. 21 1号建物出土遺物
P L. 22 1号建物出土遺物
P L. 23 1号建物出土遺物
P L. 24 1号建物出土遺物
P L. 25 1号建物出土遺物

P L. 26 1号建物出土遺物
P L. 27 1号建物出土遺物
P L. 28 1号建物出土遺物
P L. 29 1号建物出土遺物
P L. 30 1号建物出土遺物
P L. 31 1号建物出土遺物
P L. 32 1号建物出土遺物
P L. 33 1号建物出土遺物・遺構外出土遺物
P L. 34 遺構外出土遺物
P L. 35 鍛冶関連出土遺物
P L. 36 鍛冶関連出土遺物

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

群馬・長野県境の鳥居峠に源を発する吾妻川は、浅間山・草津白根山の中間を東流して万座川・熊川・白砂川等の支流を合わせ、途中に「吾妻峡」と称される美景をつくりながら、さらに温川・四万川・名久田川等の支流を合わせ、渋川市付近で利根川へと合流する全長76.2kmの一級河川である。

八ッ場ダムは、その吾妻川の中流に①洪水調節、②流水の正常な機能維持、③都市用水の補給（水道用水・工業用水）等を目的とした多目的ダムとして計画され、天端標高586m、堤高131m、流域面積3.04km²、総貯水容量1.075億m³の規模を測る重力式コンクリートダムである。

八ッ場ダム建設計画は、「昭和24年利根川改修改定計画」の一環として、昭和27年5月に調査着手し、平成4年7月に「八ッ場ダム建設事業に係る基本協定書」および「用地補償調査に関する協定書」が締結されることによって本格着工となった。

八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関しては、平成6年3月18日に建設省関東地方建設局長

と群馬県教育委員会教育長との間で「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」が締結され、埋蔵文化財発掘調査事業の実施計画が決定した。これにより、委託者である建設省関東地方建設局長と、受託者である群馬県教育委員会教育長とが、年度区分ごとに発掘調査受委託契約を締結し、以後の発掘調査の実施が決定された。その上で、平成6年4月1日に建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長との間で発掘調査受託契約を、さらに同日、群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長とが発掘調査受託契約を締結し、八ッ場ダム進入路関連遺跡を調査箇所とする八ッ場ダム埋蔵文化財発掘調査が開始された。その後、協定書の変更が数度に亘って締結され、現在の調査体制に至っている。

町遺跡の発掘調査は、八ッ場ダム建設工事に絡む県道林・長野原線建設に伴い実施された。この県道建設に伴う発掘調査は、これまでも本遺跡の東に流れる白砂川の東側に位置する長野原一本松遺跡をはじめとする楡木Ⅱ遺跡、上原Ⅳ遺跡等や、白砂川の西側で本遺跡に近接する林中原Ⅰ遺跡・長野原城跡で実施されてきた。

町遺跡は、群馬県教育委員会による平成23年5月31日



第1図 遺跡の位置図（国土地理院5万分の1地形図「草津」使用）

第1章 調査の経過

の試掘調査で遺構が確認され、同年6月10日に長野原町教育委員会から新規遺跡として県教育委員会文化財保護課に届け出が出された。町遺跡の調査にあたっては、平成23年度当初の発掘調査計画には挙がっていなかったものの、群馬県教育委員会と国土交通省ハッ場ダム工事事務所との協議を経て、平成23年6月21日付けでハッ場ダム工事事務所長から発掘調査の追加調査依頼を群馬県教育委員会文化財保護課が受け、同日、同文化財保護課から当埋蔵文化財調査事業団へ発掘調査の実施の通知があった。これにより、当事業団では7月からの発掘調査に向けて準備が進められた。なお、工事計画との調整から、発掘調査は平成23・24・25年度の3ヶ年に亘って断続的に継続する形となった。

第2節 調査の方法

(1) 調査区とグリッドの設定

平成6年から始まったハッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査においては、遺跡名称の略号やグリッドの設定などについて「ハッ場ダム関連埋蔵文化財発掘調査方法」に基づき進められている。3ヶ年度に亘っての断続的な調査となった本遺跡ではあるが、各調査年度毎の調査区名は特に設定していない。

1. 遺跡名称の略号（遺跡番号）

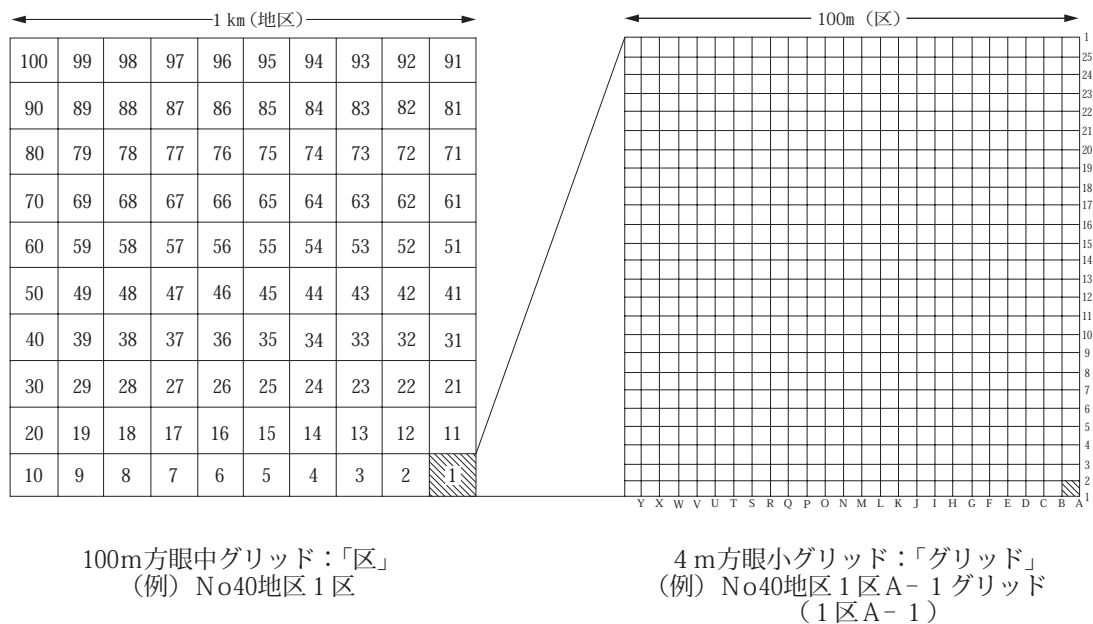
ハッ場ダムの略称はYD、次に長野原町の大字5地区に、1：川原畑地区、2：川原湯地区、3：横壁地区、4：林地区、5：長野原地区と区分し、さらに各地区に所在する遺跡の調査順に番号を付すこととなっており、町遺跡は長野原地区での6番目の調査である。よって、町遺跡の遺跡番号は、YD5-06となる。

2. グリッドの設定

グリッドの設定は、国家座標第IX系を使用し、東吾妻町大字大柏木付近を基点（座標値：X=58000.0、Y=-97000.0）として、北西方向に60区画の1km方眼が設定され大グリッド（地区）としている。本遺跡は、40地区とした大グリッドに位置する。

大グリッド（地区）内を100m方眼の中グリッド（区）に100分割し、分割された中グリッドは、大グリッドの南東隅を基点とする。本調査区は、22・23・32・33・43・44区に跨ることとなる。さらに、この中グリッド（区）内を4m方眼に625分割し、中グリッドの南東隅を基点にY軸となる東から西へA～Y、X軸となる南から北へ1～25を付し、最小のグリッドとして呼称した（第2図）。また、大グリッドの境界が本調査区を通らないため、大グリッドの番号を省略し、中グリッドと小グリッドを「33区H-17」のように標記した。

なお、調査区の設定方法については、「第2章 第2



第2図 中・小グリッド配置模式図

節八ッ場ダム関連埋蔵文化財発掘調査方法』『長野原一本松遺跡（1）』（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002）に詳しい。

（2）発掘調査の方法

平成23年度調査は、中グリッド32区および33区中央東寄りに架かる山際寄りを調査区（対象面積630㎡）とし、7月1日～同月31日までの1ヶ月間を要して行われた。翌24年度調査は、33区を主に23・43・44区に跨る7地点からなる国道145号の両側沿線を調査区（対象面積4,483㎡）に、5月16日～同月31日と、11日間の中断を経て、6月12日～9月10日までを調査期間として行った。さらに、25年度調査では、22区での国道145号線の東側沿線を調査区（対象面積213㎡）として、10月3・4日の二日間に行われた（第3図）。

発掘調査は、表土除去に重機を使用し、表土除去後の各作業は発掘作業員により実施した。重機使用にあたっては、国道と近接する箇所においては交通誘導員を配した。遺構確認作業はジョレンを用いて行い、面的な遺構の把握に努めた。遺構確認は、まず天明三年新暦8月5日の浅間山噴火に伴う泥流堆積物である天明泥流下を確認面とし、天明三年（1783年）の浅間山噴出軽石であるAs-A（浅間A軽石）に埋もれた畑を検出した。畑の検出は、畝間に残るAs-Aを除去しない状態で確認した。特に、33区においては、石垣や土手で区画された畑が顕著であり、さらには畑下に鍛冶関連遺物を集中的に出土させた箇所を確認した。また、44区の地点では、天明泥流下に大型建物の一部を確認したことから、床板上面、床下下面（大引・根太面、礎石面）の各面の調査を順次進めた。なお、43区に位置する東側の地点については、天明泥流下の遺構確認をした状態で調査を中断した際に水没し、崩落の危険性から記録をとれないまま埋め戻す結果となってしまった。

遺構等の測量は、測量業者に委託して調査期間の短縮を図った。縮尺は、1/10、1/20、1/40を基本とし、それぞれの遺構の性格に合わせて適宜使用した。

写真撮影は、中判カメラでの白黒フィルム、デジタル撮影データの2種類を基本とし、調査区の全景写真等は、調査の進展にあわせて行った。なお、撮影した写真のデジタルデータは、HDやDVD-ROM等のメディアに保存し、

データのファイル名は、調査区・遺構略号・番号・撮影方向・内容を数値化したものに置き換えるリネーム作業を行った。

遺物洗浄の内、木製品類の洗浄、種子類の土壌洗浄、鍛冶関連遺物の洗浄および土壌洗浄は、調査終了時まで現地で終了させた。

第3節 調査の経過

（1）発掘調査の経過

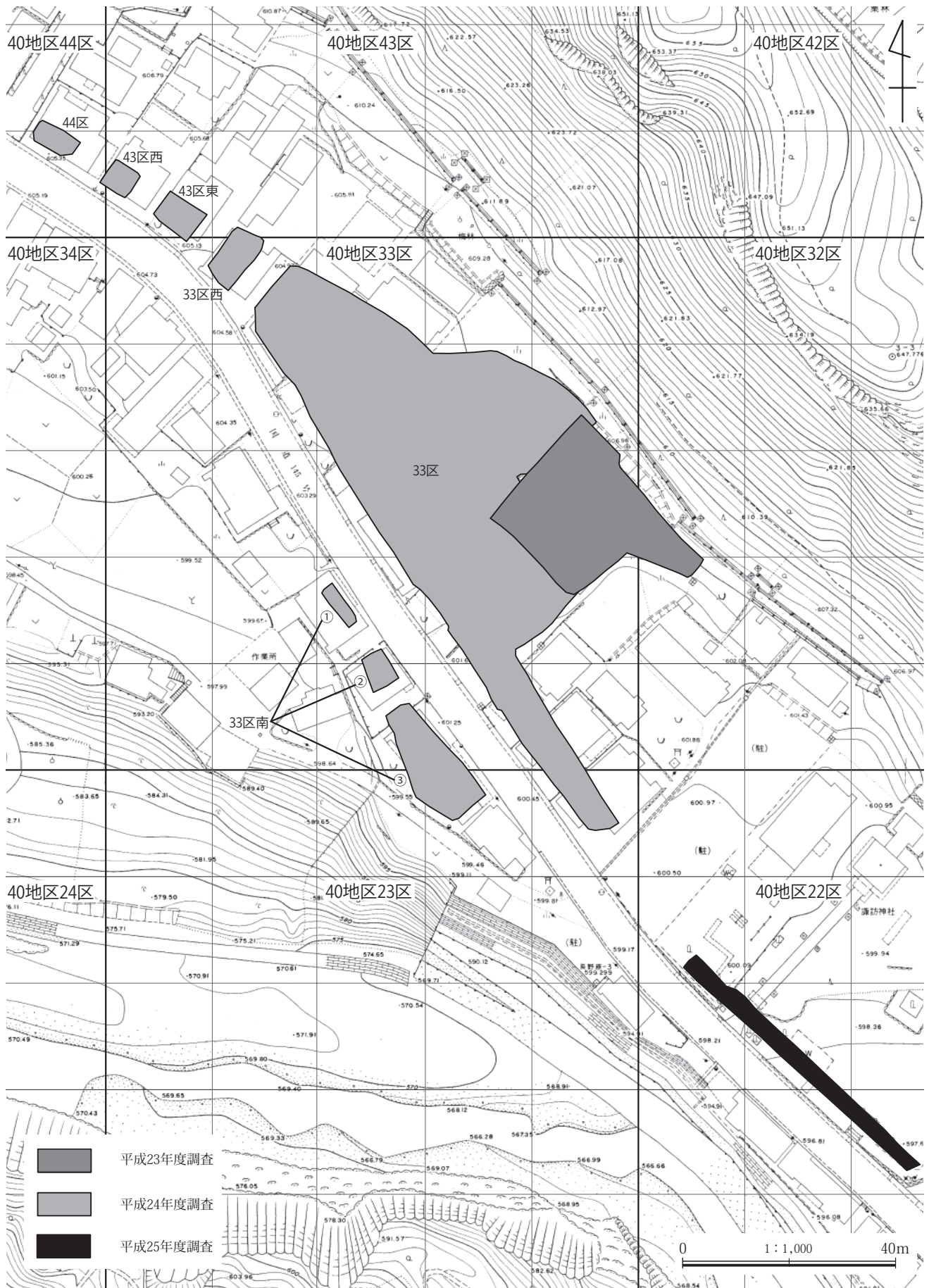
発掘調査は、平成23年度から平成25年度までの3ヶ年度に亘って断続的に調査が進められた。

平成23年度調査

平成23年7月5日より調査を開始し、先ずは重機による表土掘削から始めた。翌6日からは、重機による表土・泥流掘削を行うと共に、天明泥流下面を確認面とした遺構確認作業としてA下畑検出作業を進めた。同月12・13日には、調査区の全景写真および遺構の部分写真撮影を行い、A下畑下の耕作土への断ち割り調査、さらにA下畑下面への試掘調査を開始した。併せて、翌14日には、調査対象地が尋常小学校跡であることから、尋常小学校跡由縁の石垣を清掃し、写真等の記録を行った。なお、試掘の結果、A下畑下面に遺構の確認はできなかった。同月19日からは、埋め戻しと撤収作業を開始し、同月29日に調査を終了し、現地の引き渡しを行った。

平成24年度調査

平成24年5月16日より、調査対象地北西端に点在する4地点（33・43・44区に位置する小範囲区画）を優先して調査を開始した。先ず、44区に位置する最西北端の地点から重機による表土・泥流掘削を行ったところ、天明泥流下面に建築部材等が出土し、天明泥流で倒壊した建物（1号建物）の存在が明らかとなった。このため翌17日以降からは、建物調査に多くの時間が費やされることとなる。建物調査の手順として、①床板上面の調査、②床板調査、③床下調査（根太・大引の調査）、④床下調査（礎石の調査）、⑤床下調査（旧地面の調査）の各段階を経ると共に、各段階での遺物の取り上げ作業が加わる。取り上げた遺物数も700点を超え、その種類としては陶磁器類を始め、木製品に櫛、茶筌、団扇、横笛、下



第3図 町遺跡調査範囲図

駄、草履、墨書板、碁盤、漆椀、おひつ蓋、木杓子、砧、各種建築部材、焼印板等の生活具、そして石製品に砥石、鹿角製品、金属製品に小柄、キセル、銭貨等が出土している。なお、1号建物調査を終了したのは8月8日である。この1号建物の調査を継続させながら、翌5月18日から33区西側の地点での重機による表土・泥流掘削、さらに天明泥流下面での遺構確認作業を行ったところ、A下畑を検出した。同月22日に33区西側地点の調査区全景等の写真撮影を行い、翌23日に埋め戻しを行った。翌24日に43区西側の地点、25日には43区東側の地点での重機による表土・泥流掘削を開始し、併せて天明泥流下面での遺構確認作業を行ったところ、43区東側の地点においてA下畑を検出した。同月30日に43区西側地点の調査区全景等の写真撮影と、遺物取り上げを行った。

6月1日から同月11日までの間は、他の遺跡調査のため、本遺跡調査を一時中断する。

6月12日に調査を再開するが、前日までの降雨により44区および43区西側・東側の3地点共に水没し、排水作業後、43区西側地点を埋め戻し、東側地点においても崩落の危険性から記録をとれないまま埋め戻さざるを得ない状況にあった。

翌6月13日からは、44区の1号建物調査を継続させながら、国道145号の南西側沿線に点在する3地点（33区南①・②・③）に調査を移行させた。まず、33区南①を優先して重機による表土・泥流掘削を行い、併せて天明泥流下面での遺構確認作業を行ったところ、A下畑を検出した。14日～18日にかけて、33区南①→③→②の順で表土・泥流掘削とA下畑の検出作業、写真撮影、A下畑下面への試掘調査を進め、20日には33区南の埋め戻しを終了した。併せて20日には、33区を通る国道145号の北東側へと調査を進展させた。

この国道145号北東側の調査区は最も広い調査区であり、排土置き場等の都合から大きく4区画に分割して調査を進めた。まず、33区南東端から調査を開始し、継続して22日からは33区南側を重機による表土・泥流掘削を行い、併せて天明泥流下面での遺構確認作業を行った。33区南東端での23区と33区の中グリッド境付近では遺構の検出ができなかったが、33区側ではその後の調査に続くA下畑が明確に検出された。33区南東端の写真撮影は6月27日に行い、その後のA下畑下面調査終了後に埋め

戻しを行った。33区南側ではA下畑およびA下畑を区画する石垣が検出され、7月4・5日に写真撮影、その後のA下畑下面調査終了後に埋め戻しを行った。さらに、33区中央北側の重機による表土・泥流掘削を開始したのは7月4日からで、同月10日にA下畑の写真撮影を行った。この33区中央北側では、A下畑に伴う大きな段差（土手）が検出されている。一方で、同10日から23日にかけては、尾坂遺跡へ排土の搬出を行った。また、併行して同月18日からは33区東側の重機による表土・泥流掘削を開始した。天明泥流下からはA下畑が検出され、同月26日に写真撮影を行い、遺物取り上げ、そしてA下畑下面調査終了後となる8月2日から33区中央の重機による表土・泥流掘削を再開した。同月20日にA下畑の写真撮影を行ったが、調査区の南西部の一部に鉄滓類が出土したため、A下畑下の調査が必要不可欠となった。翌21日からはA下畑下の調査に主体を移し、鍛冶関連遺物集中箇所を限定して調査を進めた。同月28日からは、鍛冶関連遺物集中箇所の調査に併行して、同調査区の埋め戻しを開始した。そして9月10日に埋め戻しを完了させ、翌11日に調査を終了し、現地の引き渡しを行った。

この調査の間、8月18日に開催した現地説明会には、地元の多くの方々の参加があった。また、8月3日には、東海大学附属高校生徒および教職員の見学もあった。

平成25年度調査

平成25年10月3日に調査を開始し、重機による表土・泥流掘削を行うと共に、天明泥流下面を確認面とした遺構確認作業としてA下畑検出作業を進め、調査区の全景写真撮影を行った。翌4日には、遺構の部分写真撮影を行い、さらに図化終了後に埋め戻しを行い、調査を終了した。

(2) 整理事業の経過

整理事業は、平成26年4月1日から平成26年10月31日までの7ヶ月間を予定して行った。

作業は、遺構平面図類および遺構写真の確認から開始し、出土遺物の分類作業を行った。

遺構については、図の修正作業の後にデジタル編集作業を行い、併せて遺構写真の選定、本文執筆を行った。

遺物については、陶磁器類、木製品類・建築材、骨角製品・獣歯骨、金属製品、鍛冶関連遺物、石器・石製品

第1章 調査の経過

といった種別ごとに、接合・復元、掲載遺物の選定、写真撮影、実測作業、これら遺物図のトレース作業を行い、各遺物の観察表の執筆を行った。なお、木製品類・建築材の一部については、実測作業後に保存処理を施した。

また、大型の建築材については、写真撮影および実測図の作成を業者委託した。

一連の作業後、報告書版下のレイアウト作成、全体のデジタル編集作業およびデジタル組版を行い、印刷・製本を業者委託して発掘調査報告書を刊行した。また、整理した遺物や写真等については、管理台帳を作成し、活用に備えて遺物や資料類の収納作業を行い、すべての整理業務を完了した。

第4節 調査区の概要

調査対象地は、大グリッド40地区のうち中グリッド22・23・32・33・43・44区に跨り、建設が進められている県道林・長野原線と国道145号が取り付く部分に当たる。そのため調査区は、国道145号を挟んだ両側沿線に及び、さらに近隣の生活道を維持する必要性から、調査地点を細かく分割せざるを得なかった。特に、平成24年度に調査した各調査地点には、便宜的に第4図に示した地点名を付して調査を進めた。

調査区の最西北端は中グリッド44区の南東隅に位置し、この最西北端の調査地点を44区と称した。その南東側の2カ所の調査地点は、中グリッド43区南西隅に位置することから、西側の地点を43区西、東側の地点を43区東とした。中グリッド33区には5カ所の調査地点が偏在し、その一部は中グリッド23区の北東側にまで架かる。

中グリッド33区の北西隅付近で、国道145号の北東沿線となる43区東とした調査区の南東側に33区西とした地点が、その南東側の最も調査範囲の広い地点を33区とした。この33区は、平成23年度と平成24年度に調査を行っている。さらに、国道145号の南西沿線は3カ所の調査地点に分かれ、南側の地点では中グリッド23区に跨る。

この3カ所を北西側から順に、33区南①、33区南②、33区南③として調査した。また、中グリッド22区に位置する調査地点は、調査区の最南東端であり、平成25年度に調査した地点である。

各調査地点での遺構検出の結果、調査地点44区では天明泥流下に建物の一部が検出され1号建物とした。この1号建物は、礎石上に大引や根太、床板がほぼそのままの位置を保ち、多くの建築材と共に生活用具が散乱した状態で出土した。それら遺物の中には、漆塗りの横笛、碁盤、将棋の駒、竹製の小型弓といった遊技具も含まれており、建物の性格を考える必要性を感じさせる。

1号建物が検出された調査地点44区の南東に位置する調査地点43区西では、遺構は検出されていない。

調査地点43区東においては、畑の畝間がAs-A（浅間A軽石）に埋もれたA下畑を検出した。しかし、先述した状況下、本調査地点の図示等は掲載できないが、本地点以東の各調査地点からは、同様のA下畑が検出されている。

調査面積の最も広い調査地点33区のA下畑の状況をみると、やや平坦な緩斜面地を耕作地とした畑で、より平坦面を造りだすように各畑の区画境には段差を設け、部分的に石積みを行っている。また、畑面には、円形平坦面が2カ所検出されている。さらに、この33区では、A下畑下より鍛冶関連遺物が多量に出土しており、鍛冶遺構は検出されていないものの、天明三年よりも古い段階の鍛冶遺構が存在していたことが窺える。

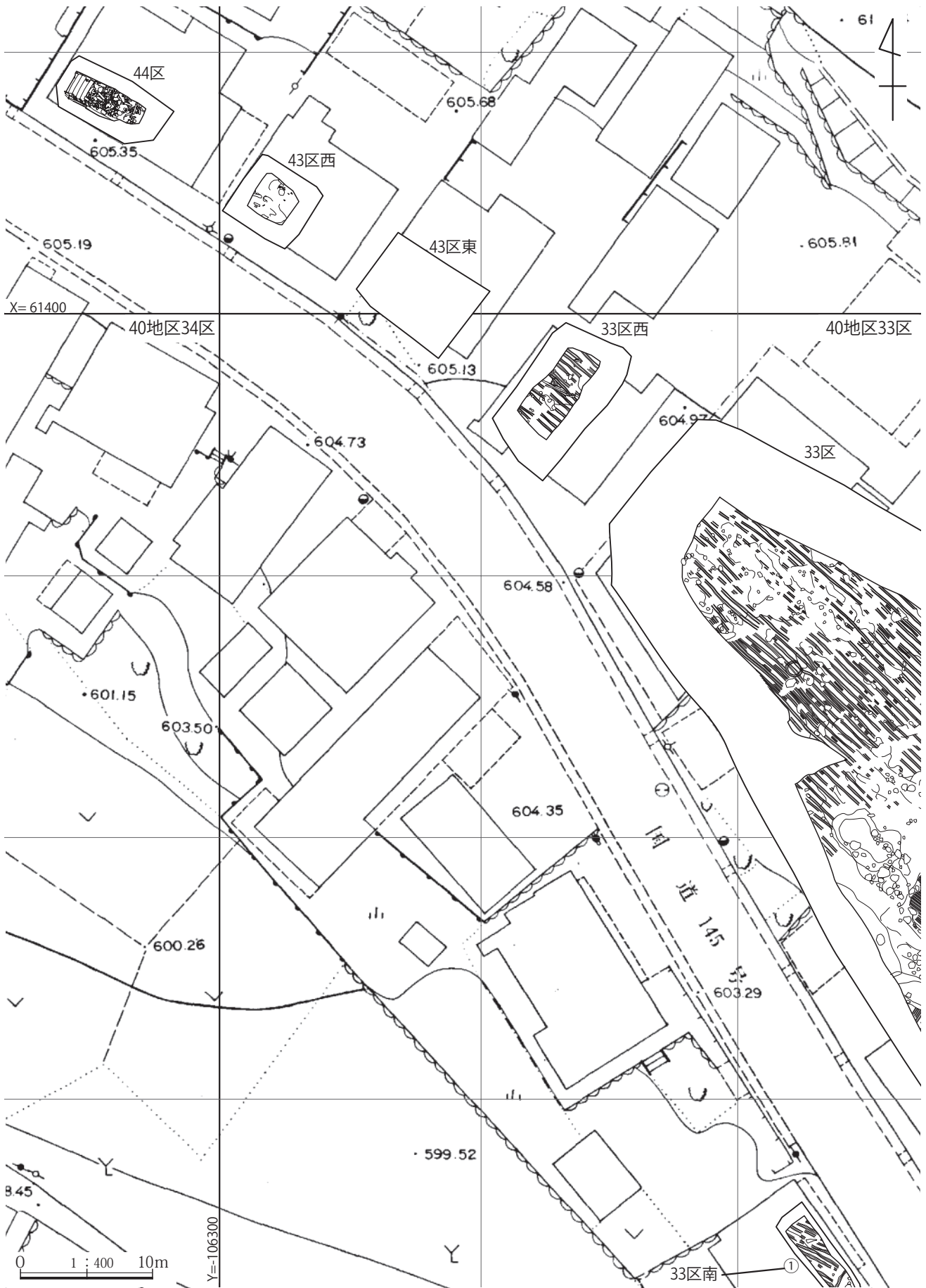
調査区の最も南東端に位置する調査地点22区においては、A下畑と道状遺構が検出されている。

以上、今回の調査で検出された遺構には、天明泥流下に建物が1棟、畑の畝間がAs-A（浅間A軽石）に埋もれたA下畑が10区画および畑境の段差・石積み、畑面に残る円形平坦面2基、道状遺構がある。

なお、遺構配置全体図を第4～7図に示した。



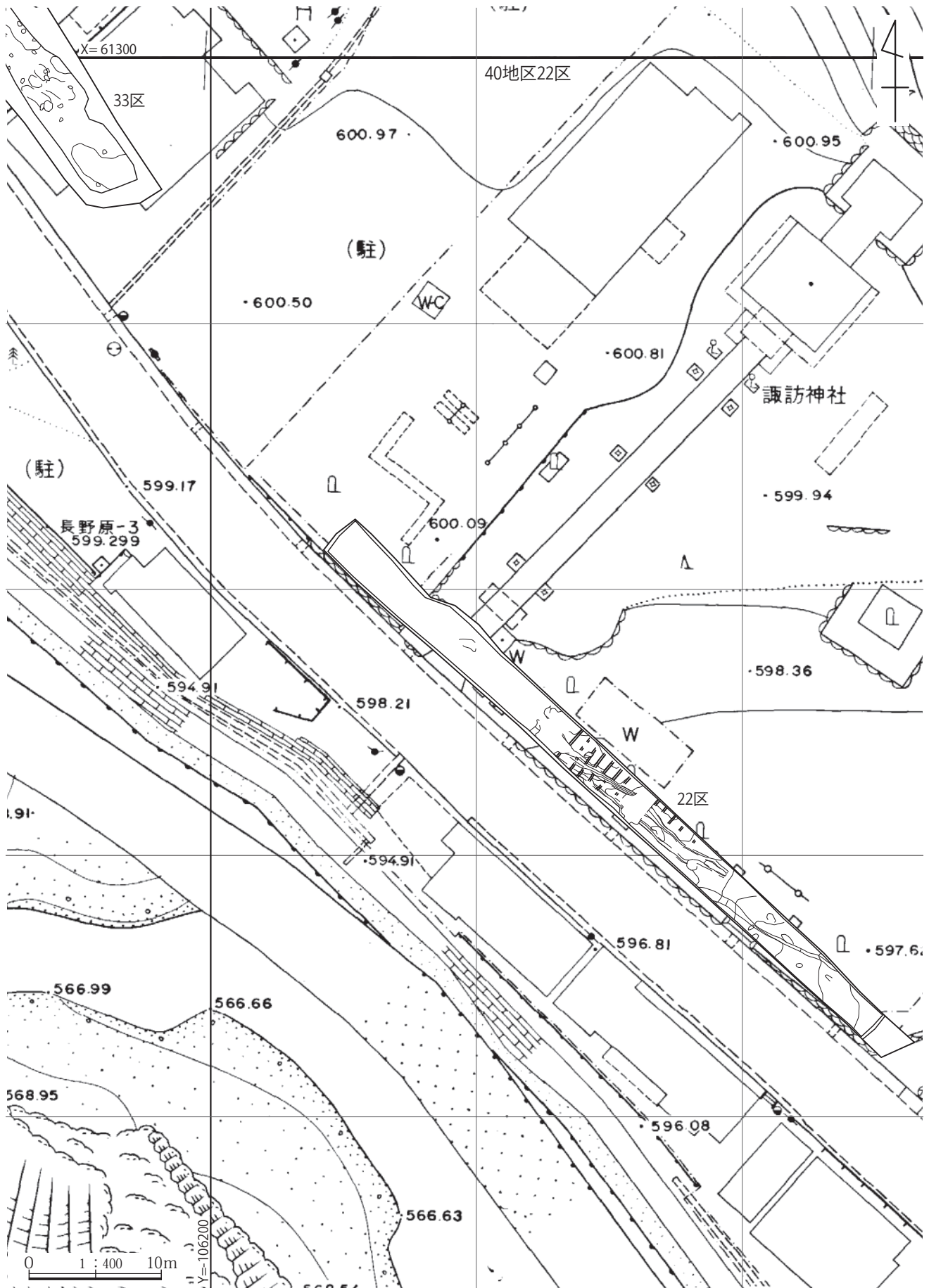
第4図 遺構配置全体割り付け図



第5図 遺構配置全体図(1)



第6図 遺構配置全体図(2)



第7図 遺構配置全体図 (3)

第2章 遺跡の環境

第1節 歴史的環境

遺跡のある長野原町は県北西部に位置し、東に東吾妻町、北に中之条町・草津町、西に嬭恋村、南に浅間山を頂き、吾妻川が各支流を合流させながら東へと流下する。こうした県北西部は、長野県や新潟県とも接し、人や物資の往来が盛んであったことはよく知られているところである。その状況は、遙か縄文時代に遡って垣間見ることができる。

ここでは、歴史的環境として各時代を通じた概要を記すこととする。

1. 旧石器時代

吾妻郡内での旧石器時代の遺跡調査事例は極めて少なく、高山村に所在する新田西沢遺跡¹が知られているのみで、長野原町では柳沢城跡²で細石器文化に伴うスクレイパーが出土しているに止まっている。

2. 縄文時代

吾妻川およびその支流沿岸の段丘面、特に中・上・最上位河岸段丘、丘陵部に遺跡が多く分布し、集落が展開する。

まず、草創期末から早期初頭にかかる遺跡として、表裏縄文・撚糸文土器を出土させた石畑Ⅰ岩陰³があり、該期土器研究の著名な遺跡であると共に、長野県湯倉洞窟との比較が興味深い。早期前半では、撚糸文期の集落が確認された楡木Ⅱ遺跡⁴が知られ、他にも立馬Ⅰ遺跡⁵や立馬Ⅲ遺跡⁶等で撚糸文期・沈線文期の住居が検出されている。早期後半の条痕文系土器群の時期としては、立馬Ⅲ遺跡に住居がある。

前期になると、初頭の花積下層Ⅰ式期の集落として坪井遺跡⁷や上原Ⅰ遺跡⁸、林中原Ⅱ遺跡⁹等があり、花積下層Ⅰ式土器と共に長野県に標識遺跡をもつ塚田式土器が多量に共伴している。前葉の遺跡には暮坪遺跡¹⁰、長畝Ⅱ遺跡¹¹、楡木Ⅱ遺跡⁴等が知られ、二木式期～有尾式・黒浜式期の住居跡が検出されている。後葉の

諸磯式期の住居跡を検出した遺跡には、林中原Ⅰ遺跡¹²、楡木Ⅱ遺跡⁴等がある。

中期になると大集落が形成され、その活動は一段と増す傾向にある。初頭の五領ヶ台式期には楡木Ⅱ遺跡⁴、上原Ⅱ遺跡¹³、立馬Ⅱ遺跡¹⁴、林中原Ⅱ遺跡⁹等があり、集落と共に多くの土器が出土している。中葉から後葉にかけての集落遺跡には、横壁中村遺跡¹⁵、林中原Ⅱ遺跡⁹、幸神遺跡¹⁶、上ノ平Ⅰ遺跡¹⁷等があり、阿玉台式・勝坂式土器や長野県で設定された焼町式土器が出土している。また、中期後半になると列石を伴う拠点集落が出現し、長野原一本松遺跡¹⁸、横壁中村遺跡¹⁵、林中原Ⅱ遺跡⁹、尾坂遺跡¹⁹、坪井遺跡²⁰等に代表され、加曾利E式土器と共に、長野県の郷土式土器を主とし、さらには近年再認識された新潟県から長野県にかけての柝倉式土器が多量に出土している。

後期の遺跡には、先の中期末から続く後期初頭・前葉の遺跡として、長野原一本松遺跡¹⁸、横壁中村遺跡¹⁵、林中原Ⅱ遺跡⁹が代表され、列石や（柄鏡形）敷石住居、掘立建物、配石墓等の遺構が検出されている。また、上郷岡原遺跡²¹では柄鏡形敷石住居に後期初頭の称名寺Ⅱ式土器と新潟県を主体とする三十稲場式土器が伴出し、林中原Ⅰ遺跡²²では柄鏡形敷石住居に後期前葉堀之内Ⅱ式の特異な釣手付き注口土器が出土している。一方、後期中葉以降の遺跡は少なく、横壁中村遺跡に住居が検出されているに止まり、他遺跡からの例は遺物のみの出土である。

晩期においても遺構の検出例は少なく、末葉の住居が検出されている遺跡に、立馬Ⅰ遺跡⁵、横壁中村遺跡¹⁵が挙げられ、立馬Ⅰ遺跡では長野県松本盆地に分布する女鳥羽川式土器が、川原湯勝沼遺跡²³の土坑の1基は壺棺再葬墓であることが知られている。なお、遺構外ではあるが、該期出土土器には長野県の水式土器、東北地方の大洞式土器等も知られている。

3. 弥生時代

近年の調査で、中期前半までの遺跡が増加し、丘陵上

や最上位河岸段丘に立地する傾向が強い。

中期前半までの遺跡には、坪井遺跡²⁴や林中原Ⅱ遺跡²⁵で住居や土坑が、長野原一本松遺跡¹⁸・尾坂遺跡¹⁹・上原Ⅰ遺跡²⁶・向原遺跡²⁷で土坑（再葬墓を含む）、横壁中村遺跡では東海地方の檜王式土器の甕が出土している。また、遺構外ではあるが、上ノ平遺跡からは纏まった資料が出土している。中期後半の遺跡としては、立馬Ⅰ遺跡⁵で住居と土坑（土器棺墓を含む）が検出されている。一方、後期の遺跡は、石畑遺跡²⁸で土坑1基が検出されているのみである。

4. 古墳時代

平成15年度以降の調査で、最上位段丘や中位段丘面に立地する集落の存在が明らかとなってきた。

まず、上原Ⅰ遺跡²⁶では、前期と考えられる住居が検出されている。5世紀後半から6世紀前半の住居は、林宮原遺跡²⁹、下原遺跡³⁰、上原Ⅳ遺跡³¹に検出されている。また、川原湯勝沼遺跡²³からは、遺構外ではあるが剣形模造品が出土している。

5. 奈良・平安時代

奈良時代の遺跡としては、羽根尾Ⅱ遺跡が知られているのみで、近年の調査でも増加していない。その後の平安時代の遺跡は、調査によって数多く知られるところとなった。長野原町教育委員会による調査では、坪井遺跡⁷、向原遺跡²⁷、長畝Ⅰ遺跡³²、長畝Ⅱ遺跡¹¹、林宮原遺跡²⁹、東原Ⅰ遺跡³³、田通Ⅱ遺跡³⁴、上原Ⅰ遺跡²⁶、上原Ⅲ遺跡³⁵、上原Ⅳ遺跡³¹、中棚Ⅰ遺跡³⁶、山岸Ⅱ遺跡³⁷といった各遺跡で、住居や土坑等の遺構が検出されている。また、八ッ場ダム関連で当事業団が調査した遺跡では、横壁勝沼遺跡³⁸、花畑遺跡³⁹、横壁中村遺跡⁴⁰、西久保Ⅳ遺跡⁴¹、長野原一本松遺跡¹⁸、尾坂遺跡¹⁹、立馬Ⅰ遺跡⁵、楡木Ⅰ⁴¹・Ⅱ遺跡⁴²、下原遺跡³⁰、三平Ⅰ遺跡⁴³、上ノ平Ⅰ遺跡¹⁷、川原湯勝沼遺跡²³、上郷岡原遺跡⁴⁴の各遺跡で、住居や掘立柱建物・土坑等の遺構が検出されている。これら多くの遺跡は、9世紀後半から10世紀前半期に位置づけられる住居が主体をなし、鍛冶工房を伴う遺跡もある。中でも楡木Ⅱ遺跡は、住居38棟および竪穴遺構3基が検出され、「長」・「三家」の墨書土器、刻字「称」の石製紡錘車が出土している。また、上ノ平Ⅰ遺跡からは、皇

朝十二銭「貞観永寶」が出土して注目されている。

6. 中世

吾妻川流域は、中世城館跡が多い地域として、県内でも知られている。著名な城郭には、吾妻川と利根川の合流点に位置する白井城、東吾妻町の吾妻川左岸に位置する岩櫃城とその周辺に内出城、稲荷城、高野平城、岩下城、根小屋城等の城跡が点在する。さらに、長野原町には羽根尾城、長野原城¹²、林城¹²、丸岩城、柳沢城²といった城跡が吾妻川の両側に点在する。なお、林中原Ⅰ遺跡として調査された範囲内に、掘立柱建物群を含む林城の一部が検出されている。

一方、城郭とは別に、掘立柱建物や土坑、土坑墓といった遺構も近年の調査で明らかとなってきている。これらの遺構が検出された主な遺跡には、上郷岡原遺跡⁴⁴、楡木Ⅱ遺跡⁴²、三平Ⅱ遺跡⁴³、東原Ⅲ遺跡⁴⁵、横壁中村遺跡⁴⁰、長野原一本松遺跡¹⁸等が挙げられ、横壁中村遺跡からは屋敷跡が確認されている。

7. 近世

ここでは、天明三年（1783年）の浅間山噴火に伴う泥流被害を受けていない遺跡を対象に記述し、泥流に被災した遺跡については後述する。

近年の八ッ場ダム関連の調査は、最上位段丘面に立地する遺跡も対象とされ、泥流被害を受けていない江戸時代の遺構を検出した遺跡が確認された。長野原地区に位置する遺跡として、長野原一本松遺跡¹⁸で掘立柱建物9棟、幸神遺跡¹⁶で畑が検出されている。林地区では、楡木Ⅰ遺跡⁴¹で礎石建物や石垣をもつ屋敷跡が、東原Ⅲ遺跡⁴⁵で江戸時代後期の礎石建物、二反沢遺跡⁴⁶で天明三年以降の畑が検出されている。さらに、川原畑地区では、上ノ平Ⅰ遺跡¹⁷に16基の墓壙が検出されている。

第2節 周辺の天明泥流下の遺跡

天明三年（1783年）の浅間山の噴火については、「浅間大變覚書」や「文月浅間記」、「浅間山焼に付見聞覚書」、等の多くの文書・記録が残され、その状況が生々しく伝えられている。「浅間大變覚書」から噴火の様子を掻い

摘むと、噴火活動の始まりは天明三年4月9日（新暦5月9日）で、その後の5月25・26日に大きな噴火があり降灰（浅間A軽石）を伴って噴火活動期に入ったようである。噴火活動はその後も続き、大噴火は7月6・7日と日増しに激しさを増し、翌8日昼四つ半時分（新暦8月5日午前10時頃）に、噴火とともに火砕流が火口から北側に流出し、吾妻郡鎌原村（孀恋村）の村落を埋没させながら吾妻川に流出したことが記されている。さらに泥流は、吾妻川の両岸まで押し上げながら東へと流下する。現長野原町、東吾妻町、中之条町、渋川市の流域沿いに甚大な被害をおよぼして利根川へと合流し、合流した泥流はより勢いを増し、利根川両岸の村々まで押し上げる。現玉村町五料付近でも、七分川が埋まり三分川が幹線（利根川）となるのをはじめ、その勢いは千葉県銚子を経て太平洋へ、さらに関宿から分流して江戸川を流下し、江戸湾に達していたことは多くの文書・記録から知られている。

利根川両岸の泥流被害の様子は、遺跡調査からも確認できる。玉村町上福島中町遺跡では、泥流に流されて埋もれた集落が、前橋市田口上田尻遺跡では建物が調査されている。また、渋川市中村遺跡（関越自動車道 渋川伊香保インターチェンジ）では、現在の地表下約4mに泥流で埋もれた大豆畑が、伊勢崎市宮柴前遺跡では、泥流に押し潰され酸化した稲、農作業時の足跡、田の草取りの跡を残す水田が調査されている。さらに、前橋市田口上田尻遺跡、横手南川端遺跡、横手湯田遺跡、高崎市萩原団地遺跡、西横手遺跡群、玉村町下之宮高俣遺跡、下之宮中沖遺跡等からは、泥流被害後に耕地復旧した痕跡が数多く調査されている。

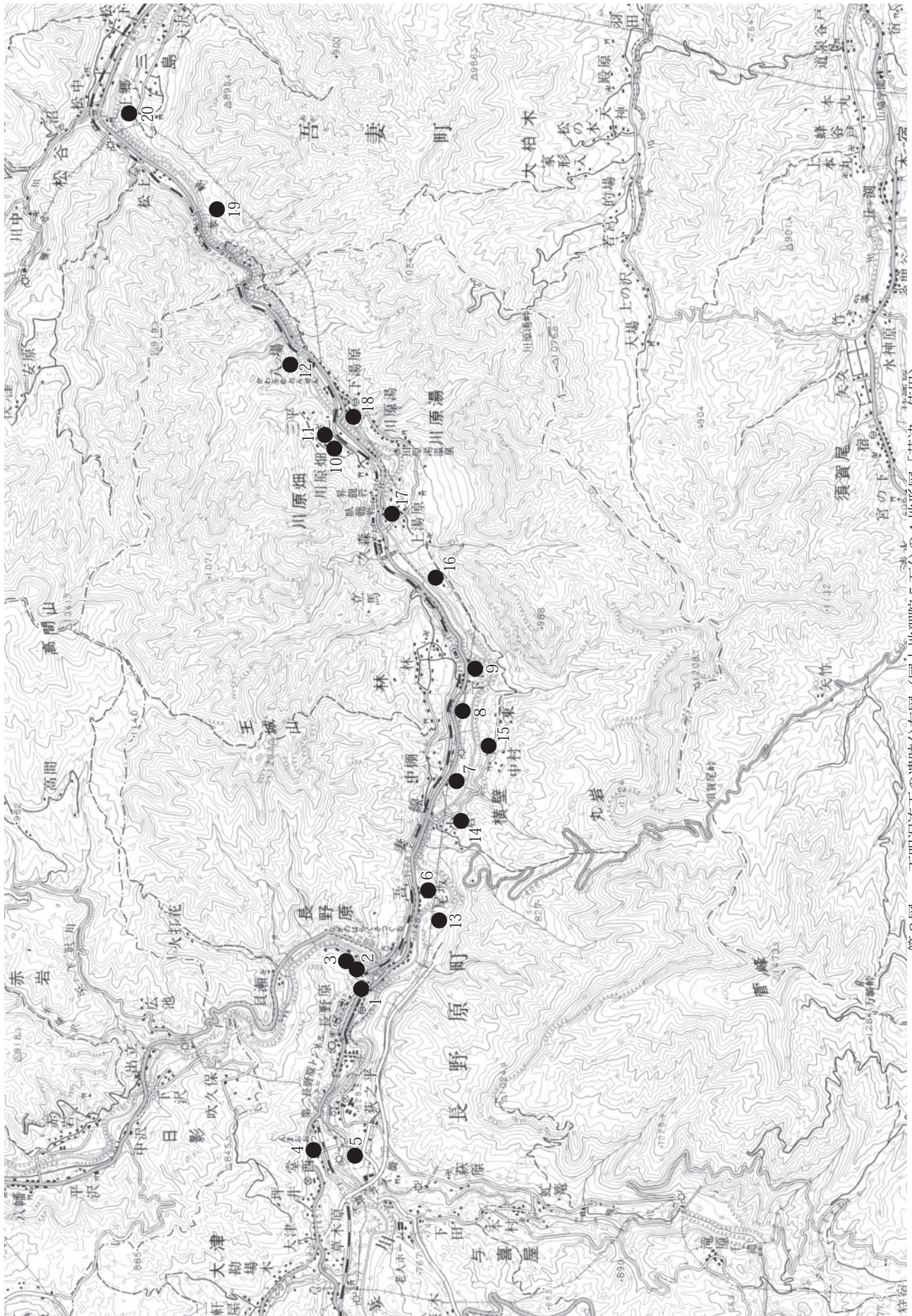
一方、浅間山火口から北側に流出した鎌原火砕流で被災した鎌原村については、浅間山麓埋没村落総合調査会（学習院大学）が組織され、昭和54年から昭和56年にかけて本格的な発掘調査が行われた⁴⁷。昭和60年からは孀恋村教育委員会が6年次にわたり調査を行い、埋没した延命寺が確認され、その存在が明らかとなった⁴⁸。

長野原町内では、昭和55年に吾妻川右岸でのグラウンド造成中に日待供養塔・石臼・農具等が泥流中から出土し、旧新井村跡（5）の痕跡が確認された。長野原町教育委員会による調査では、平成14年度に当時の分限者小林助右衛門の屋敷である小林家屋敷跡（4）が調査され、礎

石建物・土蔵・石垣が検出されている。また、平成16年には、標高602m、吾妻川との比高差34mにある嶋木I遺跡（3）の調査で、泥流下に畝間が浅間A軽石で埋もれた畑が検出されている。同年、長野原市街地における下水工事で、建築部材・薬缶・鉄釜・石臼、他に青面金剛塔が泥流中から出土し、旧長野原村が壊滅的な被害を受けた一端を垣間見せている。平成19年には標高596mにある久々戸遺跡（13）の調査で畑が、平成23年にはJR羽根尾駅の南側に位置し、標高667mにある小滝II遺跡の試掘調査で畑が検出されている。さらに、八ッ場ダム関連の調査では、本書で報告する町遺跡（1）で泥流下の建物と泥流下に畝間が浅間A軽石で埋もれた畑、町遺跡に近接する白砂川右岸に位置する長野原城A区とした地点（2）でも同様の畑が検出されている。こうした泥流下の建物や屋敷は、吾妻川左岸に位置する尾坂遺跡（6）、下田遺跡（9）、西宮遺跡（10）、東宮遺跡（11）で検出されており、右岸に位置する石川原遺跡（17）では寺院と想定される遺構も確認されている。そして、泥流下に畝間が浅間A軽石で埋もれた畑が検出されている遺跡には、吾妻川左岸に位置する、尾坂遺跡（6）、中棚II遺跡（7）、下原遺跡（8）、下田遺跡（9）、東宮遺跡（11）、石畑遺跡（12）、右岸に位置する久々戸遺跡（13）、西久保IV遺跡（14）、横壁中村遺跡（15）、川原湯勝沼遺跡（16）、石川原遺跡（17）、西ノ上遺跡（18）等が挙げられる。これらの各遺跡は、旧長野原村、旧林村、旧横壁村、旧河原畑村、旧川原湯村にあたる位置にあり、そのほとんどが下位・中位段丘面に立地する遺跡である。

吾妻川沿いの吾妻溪谷を隔てた東吾妻町内においても、八ッ場ダム関連の調査で泥流下の遺跡が調査されている。上郷西遺跡（19）では、畝間が浅間A軽石で埋もれた畑。上郷岡原遺跡（20）では、建物を伴う屋敷、畑、道等が数多く検出されている。両遺跡の位置は、旧三島村にあたる。

以上の遺跡を、第8図に天明泥流下の遺跡分布図として示し、第1表に纏めた。



第8図 天明泥流下の遺跡分布図（国土地理院5万分の1地形図「草津」使用）

第1表 天明泥流下の周辺遺跡

NO	遺跡名	所在地	旧村名	天明泥流下の遺構	備考	文献
1	町遺跡	長野原町大字長野原	長野原村	建物・畑・道	本報告書	
2	長野原城	長野原町大字長野原	長野原村	畑		12
3	嶋木Ⅰ遺跡	長野原町大字長野原	長野原村	畑		53
4	小林家屋敷跡	長野原町大字長野原	坪井村	屋敷		50
5	旧新井村跡	長野原町大字与喜屋	新井村			49
6	尾坂遺跡	長野原町大字長野原	長野原村	畑・平坦面	整理作業者中	54
7	中棚Ⅱ遺跡	長野原町大字林	林村	畑・平坦面		55・56
8	下原遺跡	長野原町大字林	林村	畑・水田・平坦面・道		30
9	下田遺跡	長野原町大字林	林村	建物・畑	平成26年調査あり	57
10	西宮遺跡	長野原町大字川原畑	川原畑村	屋敷・道	平成26年調査	
11	東宮遺跡	長野原町大字川原畑	川原畑村	屋敷・畑・道	平成26年調査あり	58
12	石畑遺跡	長野原町大字川原畑	川原畑村	畑		28
13	久々戸遺跡	長野原町大字長野原	長野原村	畑・平坦面		52・55・56
14	西久保Ⅳ遺跡	長野原町大字横壁	横壁村	畑・平坦面・畑道		41
15	横壁中村遺跡	長野原町大字横壁	横壁村	掘立柱建物・畑		40
16	川原湯勝沼遺跡	長野原町大字川原湯	川原湯村	畑		59
17	石川原遺跡	長野原町大字川原湯	川原湯村	寺院・畑	平成26年調査	
18	西ノ上遺跡	長野原町大字川原湯	川原湯村	畑・平坦面		56
19	上郷西遺跡	東吾妻町三島	三島村	畑		60
20	上郷岡原遺跡	東吾妻町三島	三島村	屋敷・畑・道		44

註・文献

- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004『新田西沢遺跡・新田平林遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第334集
- 長野原町教育委員会 1995『柳沢城跡』長野原町埋蔵文化財調査報告書 第4集
- 中隆之 1979『石畑遺跡概報』長野原町教育委員会・高崎鉄道管理局
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009『嶋木Ⅱ遺跡(2)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第458集
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006『立馬Ⅰ遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第388集
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009『立馬Ⅲ遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第457集
- 長野原町教育委員会 2000『坪井遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告書 第7集
- 上原Ⅰ遺跡は、平成23・24年度に長野原町教育委員会、平成24年度に当埋文事業団が各々調査し、両者共に現在、整理作業が進められている。
- 林中原Ⅱ遺跡は、平成20・21年度に当埋文事業団が調査し、現在、整理作業が進められている。
- 長野原町教育委員会 2001『暮坪遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告書 第8集
- 長野原町教育委員会 1992『長畝Ⅱ遺跡 坪井遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告書 第3集
- (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2014『長野原城 林中原Ⅰ遺跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第586集
- 上原Ⅱ遺跡は、平成23年度に長野原町教育委員会が調査し、現在、整理作業が進められている。
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006『立馬Ⅱ遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第375集
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005『横壁中村遺跡(2)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第355集
 同 2006『横壁中村遺跡(3)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第368集
 同 2006『横壁中村遺跡(4)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第381集
 同 2007『横壁中村遺跡(5)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第406集
 同 2008『横壁中村遺跡(6)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第436集
- 同 2007『横壁中村遺跡(7)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第439集
- 同 2009『横壁中村遺跡(8)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第462集
- 同 2009『横壁中村遺跡(9)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第466集
- 同 2010『横壁中村遺跡(11)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第492集
- 同 2012『横壁中村遺跡(12)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第526集
- 同 2013『横壁中村遺跡(13)』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第559集
- 同 2014『横壁中村遺跡(14)』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第587集
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『山根Ⅲ遺跡(2) 上原Ⅳ遺跡 幸神遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第429集
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『上ノ平Ⅰ遺跡(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第440集
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『長野原一本松遺跡(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第278集
 同 2007『長野原一本松遺跡(2)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第408集
 同 2008『長野原一本松遺跡(3)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第433集
 同 2008『長野原一本松遺跡(4)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第441集
 同 2009『長野原一本松遺跡(5)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第461集
 同 2013『長野原一本松遺跡(6)』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第554集
 同 2014『長野原一本松遺跡(7)』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第578集
- 尾坂遺跡は、平成18～22・25・26年度にかけて当埋文事業団が断続的に調査し、現在、整理作業が進められている。
- 長野原町教育委員会 2000『坪井遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告書 第7集
 同 2002『第2章2. 坪井遺跡Ⅳ』『町内遺跡Ⅰ』長野原町埋蔵文化財調査報告書 第9集

第2章 遺跡の環境

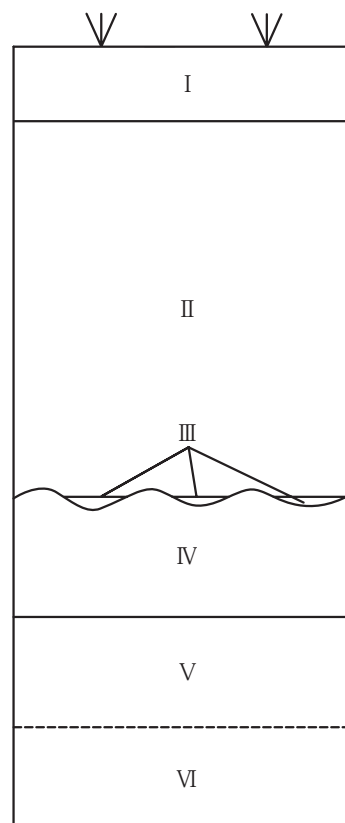
- 同 2003「第2章1. 坪井遺跡V」『町内遺跡II』長野原町埋蔵文化財調査報告 第10集
- 21 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009『上郷岡原遺跡(3)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第471集
- 22 長野原町教育委員会 2010『林中原I遺跡IV』長野原町埋蔵文化財調査報告 第20集
- 23 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005『川原湯勝沼遺跡(2)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第356集
- 24 長野原町教育委員会 2013『坪井遺跡VIII』『町内遺跡XII』長野原町埋蔵文化財調査報告 第25集
- 25 長野原町教育委員会 2011『林中原II遺跡XII』『町内遺跡X』長野原町埋蔵文化財調査報告 第21集
- 26 上原I遺跡は、平成23・24年度に長野原町教育委員会が調査し、現在、整理作業が進められている。
- 27 長野原町教育委員会 1996『向原遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告 第5集
- 28 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002「第2章 石畑遺跡」『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第303集
- 29 長野原町教育委員会 2004「林宮原遺跡II」『町内遺跡IV』長野原町埋蔵文化財調査報告 第13集
- 30 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006『下原遺跡II』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第389集
- 31 上原IV遺跡は、平成24年度に長野原町教育委員会が調査し、現在、整理作業が進められている。
- 32 長野原町教育委員会 2004「h. 長畝I遺跡II」『町内遺跡IV』長野原町埋蔵文化財調査報告 第13集
- 33 長野原町教育委員会 2006「3. 東原I遺跡」『町内遺跡IV』長野原町埋蔵文化財調査報告 第13集
- 34 長野原町教育委員会 2011「2. 田通II遺跡」『町内遺跡XI』長野原町埋蔵文化財調査報告 第13集
- 35 上原III遺跡は、平成23年度に長野原町教育委員会が調査し、現在、整理作業が進められている。
- 36 中棚I遺跡は、平成23年度に長野原町教育委員会が調査し、現在、整理作業が進められている。
- 37 山岸II遺跡は、平成24年度に長野原町教育委員会が調査し、現在、整理作業が進められている。
- 38 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002「第4章 横壁勝沼遺跡」『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第303集
- 39 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002「第8章 花畑遺跡」『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第303集
- 40 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010『横壁中村遺跡(10)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第488集
- 41 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2012『楡木I・上原IV遺跡(2)・西久保IV遺跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第549集
- 42 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『楡木II遺跡(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第432集
- 43 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007『三平I・II遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第401集
- 44 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007『上郷岡原遺跡(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第410集
- 同 2008『上郷岡原遺跡(2)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第438集
- 45 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010『東原I遺跡・東原II遺跡・東原III遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第502集
- 46 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006『上郷B遺跡・廣石A遺跡・二反沢遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第379集
- 47 浅間山麓埋没村落総合調査会 1982『天明3年(1783)浅間山大噴火による埋没村落(鎌原村)の発掘調査』昭和56年度科学研究費補助金〔総合研究(A)〕研究成果報告書
- 48 嬭恋村教育委員会 1994『埋没村落 鎌原村発掘調査概報(よみがえる延命寺)』
- 49 長野原町教育委員会 1990『長野原町の遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告 第1集
- 50 長野原町教育委員会 2005『小林家屋敷跡』長野原町埋蔵文化財調査報告 第12集
- 51 長野原町教育委員会 2013「第3章a. 小滝II遺跡」『町内遺跡XII』長野原町埋蔵文化財調査報告 第25集
- 52 長野原町教育委員会 2009「第3章e. 久々戸遺跡」『町内遺跡VIII』長野原町埋蔵文化財調査報告 第18集
- 53 長野原町教育委員会 2005「第2章1. 嶋木I遺跡」『町内遺跡V』長野原町埋蔵文化財調査報告 第15集
- 54 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002「第10章 尾坂遺跡」『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第303集
- 55 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003『久々戸遺跡・中棚II遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第319集
- 56 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004『久々戸遺跡(2)・中棚II遺跡(2)・西ノ上遺跡・上郷A遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第349集
- 57 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002「第7章 下田遺跡」『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第303集
- 58 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2011『東宮遺跡(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第514集
- 同 2012『東宮遺跡(2)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第536集
- 59 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002「第4章 川原湯勝沼遺跡」『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第303集
- 60 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『上郷西遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第448集

第3節 基本層序

本遺跡は吾妻川左岸の中位段丘面に立地し、先述したように、天明三年の泥流が大小の礫を含み遺跡全体を被覆している。この泥流の厚さは、調査地点33区の北東側山際斜面ほどやや薄くなる。しかし、各調査地点の層序はほぼ同じである。天明泥流下には、畝間に白色軽石のAs-A（浅間A軽石）が堆積し、噴火直前の畑面が大きく広がる。畑面下は、当時の耕作土であり、若干の遺物を含む。また、畑面には、基盤礫層の大型礫上部が突出している箇所も見られる。耕作土はあまり厚くなく、20cm前後を測る。耕作土下は黄褐色土のローム土となり、その下が基盤礫層となる。

以下、基本層序を第9図に示し、堆積する各層について述べる。

- I層：暗褐色土 表土。
- II層：暗褐色砂質土 天明泥流堆積物で、川原石（円礫）や浅間石を多量に含む。
- III層：白色軽石 天明三年（1783年）の浅間山噴火に伴い降灰した浅間A軽石。
- IV層：暗褐色土 天明三年時の耕作土で、上面は畑の耕作面となる。
- V層：黄褐色土 ローム土で5mm前後の白色・黄色軽石粒を少量含む。
- VI層：基盤礫層



第9図 基本層序図

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 調査の概要

(1) 平成23年度調査 (PL. 1～3)

中グリッド32区および33区中央東寄りに架かる山際寄りを調査区(対象面積630㎡)とし、本報告で調査地点33区とした北東側の一角にあたる。検出された遺構は、天明泥流下に畑の畝間がAs-A(浅間A軽石)に埋もれたA下畑で、畑は傾斜のややきつい山際まで耕作が及び、畑面には円形平坦面が1カ所検出された。

(2) 平成24年度調査 (PL. 4～16)

国道145号線の東側沿線に5カ所、南側沿線に3カ所の計8カ所に調査地点を分割して調査を行った。調査対象地北西端となる中グリッド44区の南東隅に位置する地点は、本報告で調査地点44区(PL.12-2)、その南東側に調査地点43区西(PL.12-1)、調査地点43区東、調査地点33区西(PL.10-1)と連なり、さらに調査地点33区の平成23年度調査分をのぞいた箇所(PL. 4～9)。一方、国道145号を挟んだ南側の地点では、北西側から順に33区南①(PL.10-2)、33区南②(PL.10-1)、33区南③(PL.10-2)として調査した。

検出された遺構は、調査地点44区で天明泥流下に建物の一部が検出された。建物は、礎石上に大引や根太、床板がほぼそのままの位置を保ち、多くの建築材と共に生活用具が散乱した状態で出土し、1号建物とした。この調査地点44区の南東に位置する調査地点43区西では、天明泥流下に遺構は検出されていない。調査地点43区東では、天明泥流下に畑の畝間がAs-A(浅間A軽石)に埋もれたA下畑を検出したが、図示等の記録は取れる状況になかった。しかし、調査地点43区東から東側に位置する各調査地点からは、同様のA下畑が検出された。調査地点33区は調査面積の最も広い調査区であり、検出されたA下畑は、やや平坦な緩斜面を耕作地とした畑で、より平坦面を造りだすように各畑の区画境には段差を、部分的に石積みを検出した。また、畑面には、円形平坦面が検出された。さらに、この33区では、A下畑下より鍛

冶関連遺物が多量に出土しており、鍛冶遺構は検出されていないが、天明三年よりも古い段階の鍛冶遺構の存在が窺える。

(3) 平成25年度調査 (PL.17)

中グリッド22区の国道145号線東側沿線を調査区(対象面積213㎡)とし、本報告で調査地点22区にあたる。検出された遺構は、天明泥流下に畑の畝間がAs-A(浅間A軽石)に埋もれたA下畑と、道状遺構が検出されている。

第2節 天明泥流下・浅間A軽石 降下直前の遺構と遺物

(1) 建物

今調査での建物の検出は1棟のみである。調査対象地の北西端となる中グリッド44区南東隅に位置する調査地点44区において、天明泥流下に建物の一部が検出された。調査範囲が狭いため、検出された建物およびその周囲の全容は不明である。

1号建物 (第10～50図、第5表、口絵1・2、PL.12～16・19～33)

1 建物の概要

検出されたのは建物の一部であり、その全容は明らかではないが、主屋的な要素が強い。要所に礎石と束が配置され、その上面に大引が乗る状況が確認されているものの、束の掘り込みも確認されており、掘立柱建物か土台建物の両者の要素を併せもつ複雑な構造のようであるが判然としない。大引の上には根太が渡され、その上に床板が敷き詰められ、床板の一部には薄い敷物も確認されている。なお、束の出土状況等からは、建物全体が東側へややずれた様子が窺え、浅間山噴火に伴う天明泥流が、吾妻川から溢れて本遺跡の位置する中位段丘面を西から東へと流下したことがわかる。

2 建物の構造（第13図、PL.13-6～8）

〔位置・規模〕

調査地点44区全体が、本建物内部にある。その為、建物の全体位置・規模を知ることはできない。

〔礎石の配置〕

礎石は、11石を確認することができた。礎石は列をなし、東西方向に礎石1～4の列、礎石5～8の列、礎石9～11の列が並行する。また、南北方向には、礎石1～4の列に対し、礎石3を基点に礎石5・9が直行する列となり、礎石4を基点に礎石8・11が直行する列となる。大型の礎石は1・3・4で、中型礎石は5・6・8～10、他はやや小型の礎石を使用する。

礎石間の心々寸法は、礎石1～4列の礎石1・2・3の各間は概ね90cmで、礎石3と4の間では210cmを測る。礎石5～8列の礎石5～8の間は210cmで、礎石5と6の間は50cm、礎石6と7の間は70cm、礎石7と8の間は90cmを測る。礎石9～11列も礎石5～8列と同様に、礎石9～11の間は210cmで、礎石9と10の間は50cm、礎石10と11の間は160cmを測る。また、礎石3・5・9の間は各々90cm、礎石4・8・11の間は各々90cmを測る。

礎石の上に直接乗る建築部材は、礎石3と4に架かる20のみで、観察表では大引として扱ったが、土台である可能性も否めない。また、礎石列とはややずれた位置に束が存在し、束は掘り込みをもつことも確認されており、礎石と束の関係が今一つ判然としない。

これらの礎石は、使用する各礎石の大きさに応じて敷設すると共に、にぶい黄橙色粘土やロームブロックを混在する黒・暗褐色土といった整地土によって土間状の整地地面を構築している。さらに、礎石8の東側に集石状の石を検出したが、その性格は不明であり、囲炉裏の痕跡である可能性もある。

〔束の位置〕

束は計4本出土しているが、1本を除く3本が原位置ないし原位置に近い状態で検出されている。また、掘り込みをもつことが確認されている。

束26は礎石9の北東脇に位置し、ほぼ垂直に出土していることから原位置と思われる。一方、束25は礎石1の北西脇に位置し、上端が東側に傾いて出土。礎石6の北東にやや離れて位置する束24も、上端が東側に傾いて出土している。この上端が東側に傾く両束は、ほぼ原位置

に近いと思われる。

これらの束には当然のことながら、柄や柄孔で大引きと組合う状態で出土しており、後述する2号床のずれはあるものの、比較的原位置に近い状態にあることは明らかで、礎石との位置関係に疑問が残る。考えられるのは、礎石から全体がずれ落ちた状態で出土したか、或いは、束と礎石の両者が共存して建物を支えるという複雑な構造であるか、礎石が異なる時期のものとする考え方が想定できる。東宮遺跡例からすれば、束と礎石の両者が共存して建物を支えるという、複雑な構造の建物と考えることができる。

3 1号床（第10～15・20～29図、口絵1、PL.13）

〔位置・出土状況〕

調査地点44区の西側で、44区C・D-5・6グリッドに位置し、東側に2号床が隣接する。

床板は幅33cm前後、厚さ1.5cmの板材が使用され、8・10～12等の東西方向に渡る根太の上に、1～4等の床板6枚が南北方向に敷かれて出土し、その南端に21の敷居が東西方向に位置する。床板の遺存状況は、出土時には比較的良好であったが、土圧等により変形が著しく、取り上げ後の状況は極めて悪い。床板の上には、藁状の薄い敷物が確認され、床全体を覆っていた様子が窺える。

〔規模〕

検出された範囲は、南北方向179.5cm（大引17の長さ）×東西方向247cm（根太12の長さ）を測る。しかし、実際の規模は、床板・根太・大引の出土状況や、各建築材に確認できる痕跡から、現状よりも西側および北側にもっと広がることが十分に予測される。

〔構造・所見〕

基本的な構造は、礎石と束の上に大引が、大引の上根太、根太の上に床板が敷かれる構造で、さらに床板上には敷物をもつ。また、南側は敷居によって画されていたものと思われる。

床板は、1～4を含めた計6枚の板材が出土し、長さ185cm前後、幅33cm前後、厚さ1.5cmの大型板材を南北方向に敷き詰められ、北側の端部は根太12に架かっていた。板材には、小さい釘孔が数カ所に確認され、根太に釘留めされていたことがわかる。この根太12に架かる板材は、さらに北側にも存在し、本1号床が北側へ広がることは

明らかである。

床板の下に組まれる根太は、8・10～12を含めた計5本が出土し、何れも半割り材を面取り加工した部材で、西側の17と東側の18の両大引の上に、東西方向に渡されている。各根太間の心々寸法は、大引17位置で35～55cmとまちまちである。これらの根太は、取り上げの際に調査地点の西側で切断したことから、本1号床が西側へ広がることは明らかである。これら根太と大引との接合部は、根太端部の裏面切り込み部を、大引18の上に乗せるように組み合わせている。同様に、根太中間の裏面切り込み部を、大引17の表面切り込み部の上に乗せるように組み合わせている。また、大引との接合部である根太端部および中間の表面に、径3.0cmほどの穴を穿ち、鉄釘を打ち込んで接合部の補強を行っている。なお、根太12は、他の根太（幅16～18cm、厚さ8～9cm）よりもやや太く（幅18.5cm、厚さ10cm）、表面には2列の釘孔が観察でき、この根太上に南側と北側の床板が架かっていたことがわかる。

根太8の南側に位置する根太は、床板の南端部が架かる位置にあたり、この根太の上に敷居21が乗るように出土していることから、この根太の位置が本1号床の南側を画していると思われる。また、根太の東端は礎石4に架かり、西側は東25に乗るものと思われる。但し、この根太の遺存状況は極めて悪く、図示できなかった。また、図示した根太9と10は、接合する。

根太を乗せる大引は、17と18の2本が出土した。17は幅13cm、厚さ11cmの半割り材を面取りした四角から五角状の材で、18は幅11.7cm、厚さ4.8cmのやや細めの角材である。西側に位置する大引17の上には、先述した5本の根太が架かり、その南端には東25が位置する。大引南端部（下端）の突出する杓と、東の杓孔とが接合部となると思われる。また、東側の大引18は、北側で東26に支えられるように乗り、角材の側面を上面とした接合状態で出土している。この東側の大引18にも大引17と同様に、5本の根太の端部が架かかり、根太12との接合状態は良好に確認できた。

束は芯持ちの角材で、2本出土した。東25は、長さ41cm、幅12.5cm、厚さ12cmで、上端側面に左右に抜ける杓溝（深さ12.0cm、幅4.0cm）を有し、中央表面から裏面に抜ける長さの異なる杓孔（表面長さ20.0cm、裏面長



1号建物1号床 床板の出土状況 東から



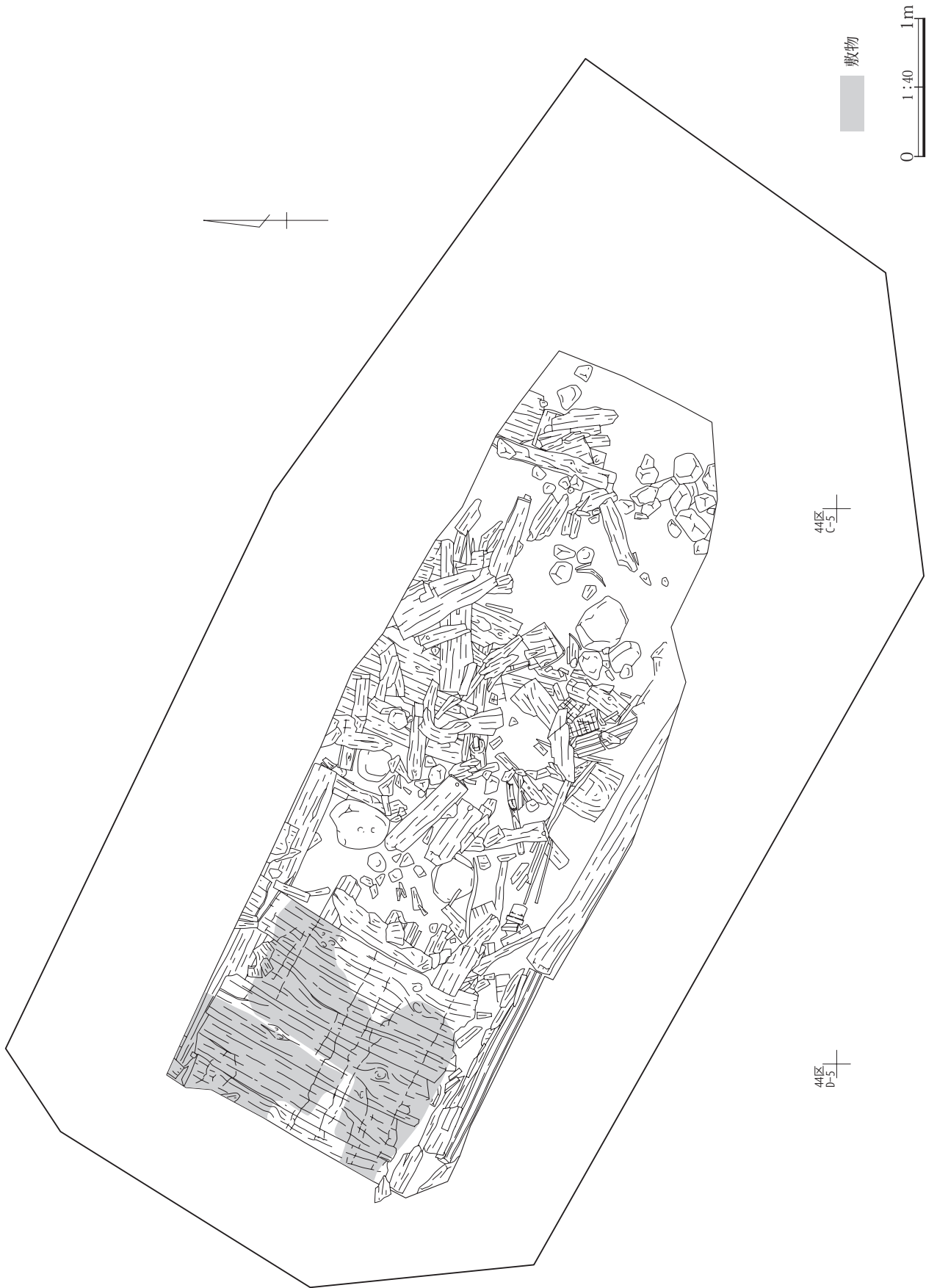
1号建物1号床 根太・大引の接合状況 西から



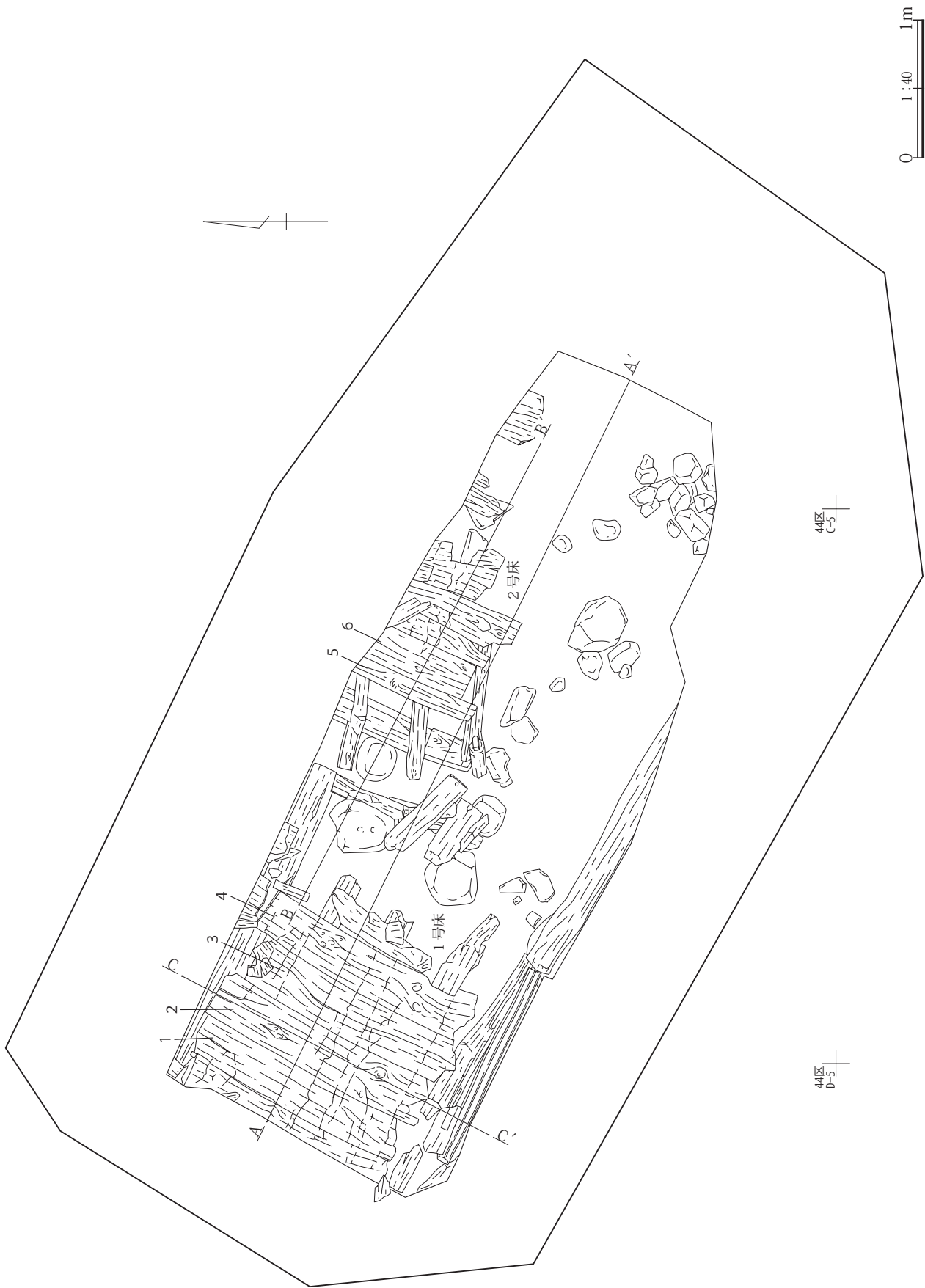
1号建物1号床 根太・大引・束の接合状況 西から



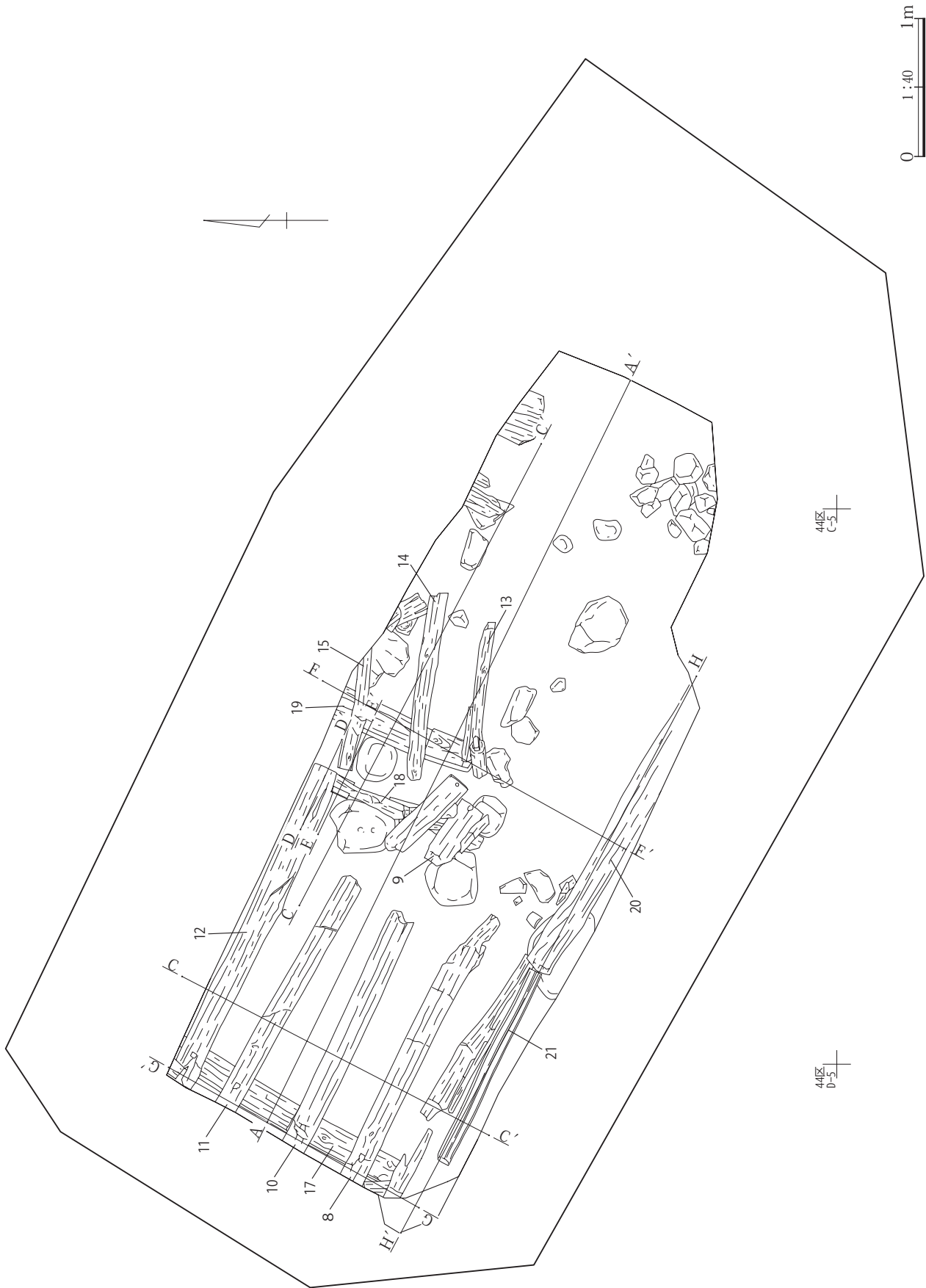
1号建物1号床 根太・大引・束の接合状況 南から



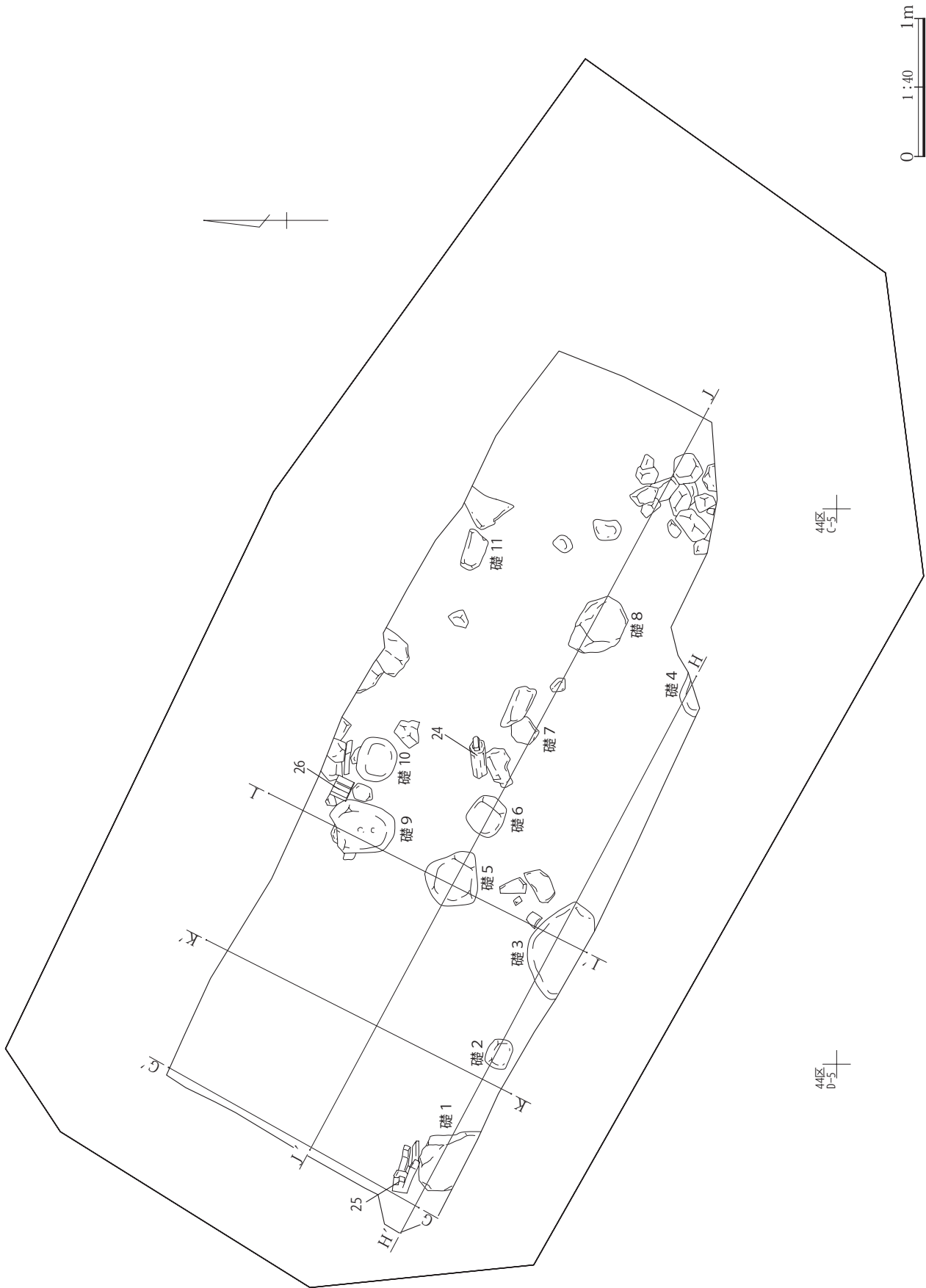
第10図 1号建物平面図(1) 検出状況



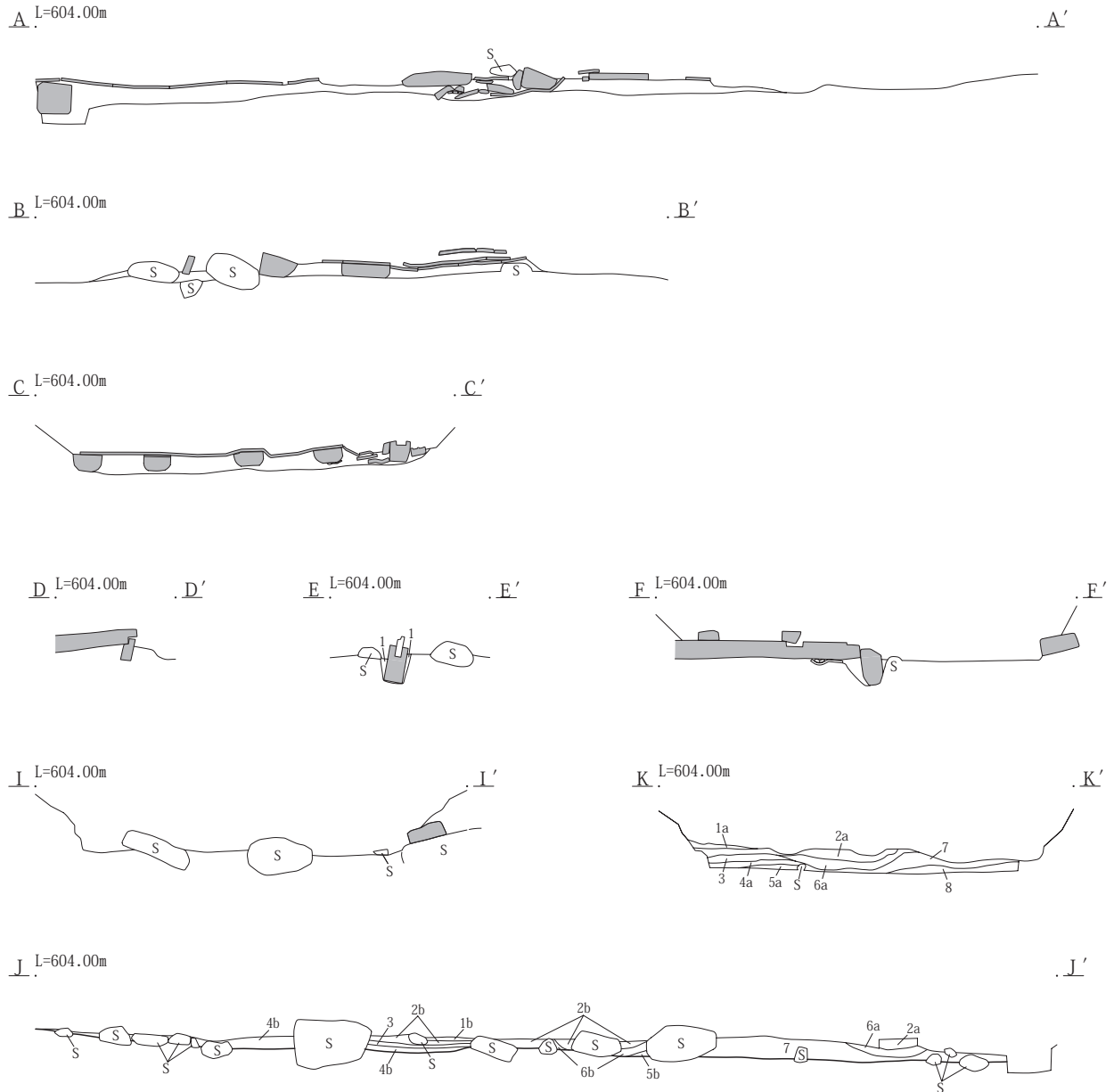
第11図 1号建物平面図(2) 床板



第12図 1号建物平面図(3) 根太・大引・敷居



第13図 1号建物平面図(4) 東・礎石



J-J', K-K'

- 1 a 暗褐色土 しまりあり。粘質。白色粒子、1 cm程のロームブロック散在。
- 1 b 暗褐色土 1 a層に近似。
- 2 a 黒褐色土 しまりあり。粘質。1～2 cm程の礫を含む。1 cm未満のロームブロック散在。
- 2 b 黒褐色土 2 a層に近似。
- 3 にぶい黄橙色土 粘土。固くしまる。白色粒子、灰が散在。
- 4 a 黒褐色土 しまりあり。やや粘質。白色粒子を含む。1～2 cm程の礫を層下半に多く含む。1 cm未満のロームブロック散在。
- 4 b 黒褐色土 1 cm程の礫を含む。4 a層に近似。
- 5 a 褐灰色土 灰層。炭化物粒を含む。
- 5 b 褐灰色土 5 a層と地山ブロックの混土。汚れた灰層。5 a層に近似。
- 6 a 暗褐色土 ややしまりあり。やや粘質。1～5 cm程の礫散在。1～2 cm程のロームブロックを多量に含む。
- 6 b 暗褐色土 ロームブロックをより多く含む。6 a層に近似。
- 7 黒褐色土 ややしまりあり。やや粘質。白色粒子を含む。1 cm未満の礫をやや多く含む。1 cm未満のロームブロック散在。
- 8 黒褐色土 しまりあり。やや粘質。層上半を中心にしてロームブロックを多く含む。

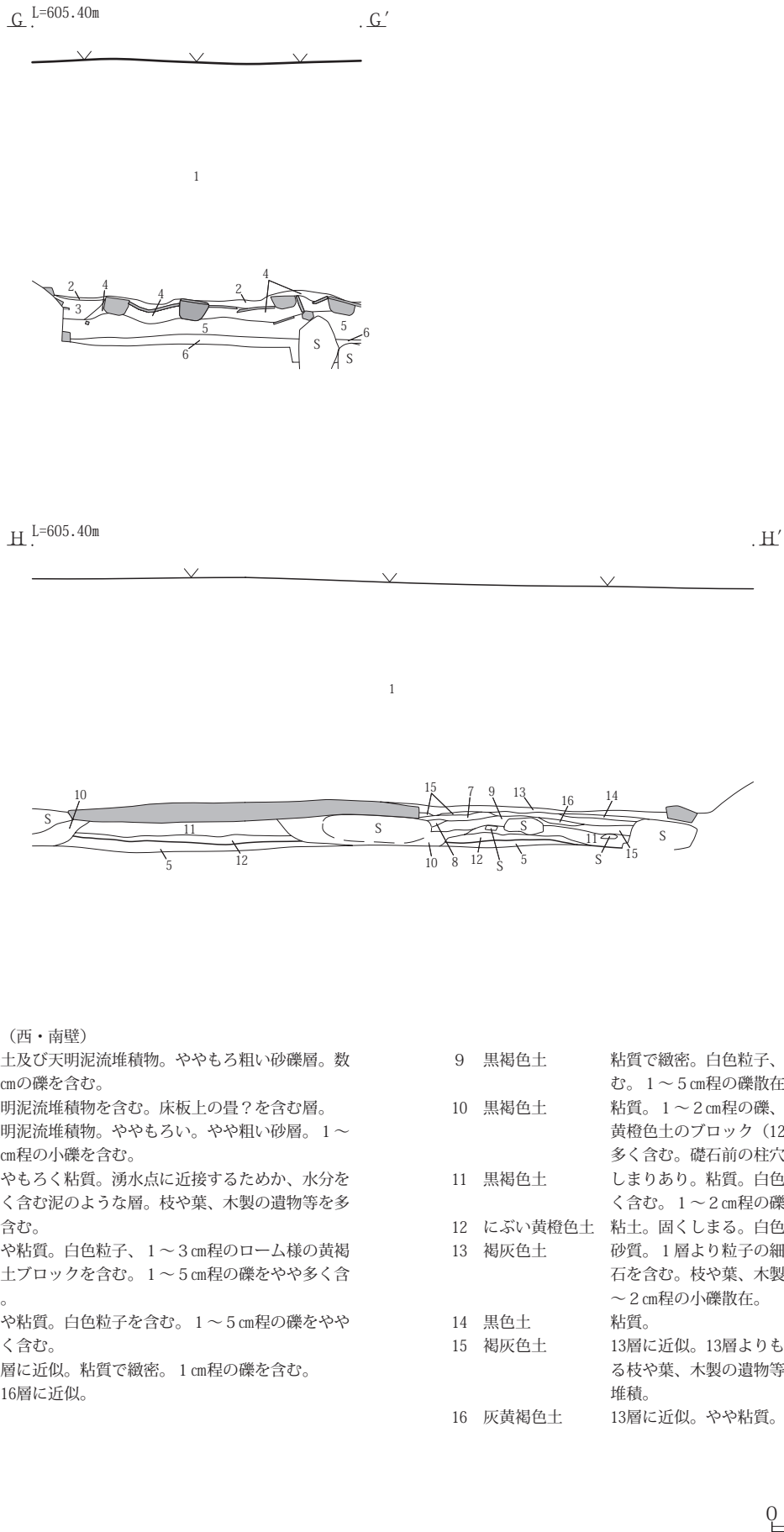
E-E'

- 1 暗褐色土 粘質で、1 cm程の淡黄白色土のブロック散在。

0 1:40 1m

第14図 1号建物断面図(1)

第3章 検出された遺構と遺物

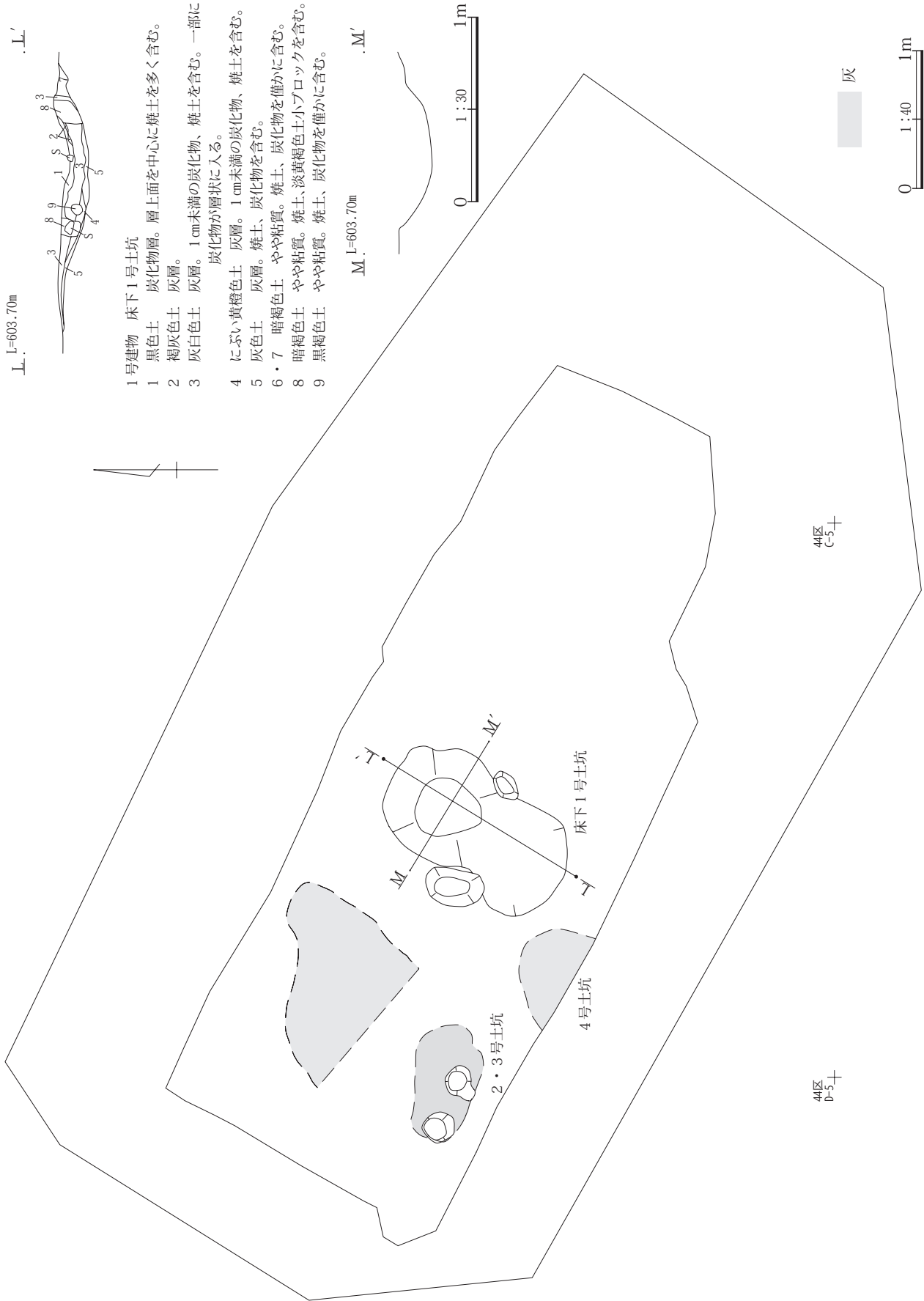


G-G'、H-H' (西・南壁)

- | | |
|---|--|
| <p>1 褐灰色土 表土及び天明泥流堆積物。ややもろ粗い砂礫層。数十cmの礫を含む。</p> <p>2 暗褐色土 天明泥流堆積物を含む。床板上の畳?を含む層。</p> <p>3 褐灰色土 天明泥流堆積物。ややもろい。やや粗い砂層。1~2cm程の小礫を含む。</p> <p>4 黒褐色土 ややもろく粘質。湧水点に近接するためか、水分を多く含む泥のような層。枝や葉、木製の遺物等を多く含む。</p> <p>5 黒褐色土 やや粘質。白色粒子、1~3cm程のローム様の黄褐色土ブロックを含む。1~5cm程の礫をやや多く含む。</p> <p>6 黒褐色土 やや粘質。白色粒子を含む。1~5cm程の礫をやや多く含む。</p> <p>7 黒褐色土 15層に近似。粘質で緻密。1cm程の礫を含む。</p> <p>8 灰黄褐色土 16層に近似。</p> | <p>9 黒褐色土 粘質で緻密。白色粒子、赤色粒子を僅かに含む。1~5cm程の礫散在。</p> <p>10 黒褐色土 粘質。1~2cm程の礫、1~2cm程のにぶい黄褐色土のブロック(12層のブロック土)を多く含む。礎石前の柱穴覆土となるか。</p> <p>11 黒褐色土 しまりあり。粘質。白色粒子、赤色粒子を多く含む。1~2cm程の礫を多く含む。</p> <p>12 にぶい黄褐色土 粘土。固くしまる。白色粒子を含む。</p> <p>13 褐灰色土 砂質。1層より粒子の細かい砂層。浅間A軽石を含む。枝や葉、木製の遺物等を含む。1~2cm程の小礫散在。</p> <p>14 黒色土 粘質。</p> <p>15 褐灰色土 13層に近似。13層よりも粒子細かく、含まれる枝や葉、木製の遺物等は僅か。ラミナ状の堆積。</p> <p>16 灰黄褐色土 13層に近似。やや粘質。浅間A軽石を含む。</p> |
|---|--|

0 1:40 1m

第15図 1号建物断面図(2)



第16図 1号建物平面図(5) 下面

第3章 検出された遺構と遺物

さ13.2cm、幅4.2cm)をもつ。出土位置は、礎石1の北西脇にあり、上端が東側に傾いて出土している。束26は、長さ20.3cm、幅・厚さ11cmで、上端に左右に抜ける柄溝(深さ5.5cm、幅4.2cm)をもつ。出土位置は、礎石9の北東脇にあり、ほぼ垂直に出土している。

なお、1号床の範囲内には礎石1・3・5・9が確認されているが、この内、礎石の上面に建築部材が乗るのは礎石3で確認されただけである。

4 2号床(第10・15・21・25・27・29図)

〔位置・出土状況〕

調査地点44区の中央北寄り、44区B・C-5グリッドに位置し、西側に1号床の東端が接する。

床板は幅のまちまちな板材が使用され、13～15の東西方向に渡る根太の上に、5・6等の床板8枚が南北方向に敷かれて出土している。床板の遺存状況は、出土時には比較的良好であったが、取り上げ後の状況は極めて悪い。床板の上には、1号床で見られた敷物は確認されていない。なお、東西方向に渡る根太の出土状況は、1号床での根太方向とやや違い、北東方向に扇状にずれている状況にあった。

〔規模〕

検出された範囲は、南北方向111cm(大引19の長さ)×東西方向280cm(束24の根本から、根太13の延長先にある東端の板材までの長さ)を測る。しかし、実際の規模は、床板・根太・大引の出土状況や、各建築材に確認できる痕跡から、南側を除く各方向に広がるのが十分に予測される。

〔構造・所見〕

基本的な構造は、礎石と束の上に大引が、大引の上に根太、根太の上に床板が敷かれる構造であり、本2号床の南側は土間であった可能性がある。

床板は、5・6を含め、根太13の延長先にある東端の板材までの計8枚の板材が、南北方向に敷かれた状態で出土した。いずれの板材も、北側の調査区外へと延びるものであったが、切断して取り上げた。従って、本2号床が北側へ広がることは明らかである。最も遺存の長い5で長さ91cm、幅12cm、厚さ1.2cmと細長い板材が使用され、6は幅29.5cm、厚さ1.5cmの幅広板材であり、こうした幅の異なる板材を組ませて床を構成してい

る。また、各板材の南端は、根太13に架かった状態にあり、この根太よりも南側に延びる板材は検出されていない。なお、板材には、釘孔は確認されていない。

床板の下に組まれる根太は、13～15の3本が出土したが、全体に遺存率は悪く、東側に位置する部分は欠損している。13は側面に柄孔をもつ幅9cm、厚さ3.5cmの細長い角材を使用し、14・15は半割り材を面取り加工した幅10cm、厚さ7cm前後の部材であり、1号床の根太に比べやや細い。これら3本の根太は、大引19の上に東西方向に渡されているが、大引に乗る根太の位置は根太の西端ではなく、西端から約40cm前後の位置である。また、北側の根太15の西端を支点にするように、南側の根太14さらに13の西端が扇状に東へずれるように開いて出土している。出土時の各根太間の心々寸法は、大引19位置で40～45cmである。根太と大引の接合部は、根太14が大引の表面切り込み部の上に乗せるように組み合わせているのみで、他に釘留め等の仕草はない。なお、根太13が、2号床の南側を画すると思われるが、側面に柄孔をもつ角材であることから、転用材である可能性がある。



1号建物2号床 床板・根太・大引の出土状況 南から



1号建物2号床 東の出土状況 南から

根太を乗せる大引は、半割材を面取りした五角状の材で、側面が僅かに弧状に湾曲し、下端に大きく突出する柄をもつ19の1本が出土した。大引の上には、先述した3本の根太が架かり、その南端には東24が位置する。大引南端部（下端）の突出する柄は、東の柄孔が接合部となり、出土時は嵌っていた。

出土した東24は、芯を残す角材利用の東で、四隅を面取りし、表面の下端は大きく削られて薄くなる。上端表側には、13の根太を受ける浅い切り込みをもつ。表面中央には、大引19の柄を受ける縦10.5cm、幅3.8cmの柄孔をもつ。出土位置は、礎石6の北東にやや離れた位置で、上端が大きく東側に傾いて出土している。

なお、2号床の範囲内には礎石6・8・10・11が確認されているが、礎石の上面に建築部材が乗る例は確認されていない。

5 床下の状況（第16図、PL.16-3～8）

ここでは、先述した1・2号床の下面（礎石等を全て除去した面）の状況について触れる。

下面からは、床下1号土坑と4基のピットが検出されている（第16図）。1号土坑は、調査地点44区のほぼ中央で、44区C-5グリッドに位置する。平面形は長さ1.42m、幅0.82mの楕円状を呈し、深さ18cmを測り、長軸は北北東を向く。東西の両縁中央には、浅い掘り込みのピットを1基ずつもつ。埋土には、炭化物や焼土を多く含む黒色土、灰が主となる灰白色土等を主とし、出土遺物に土製の狛犬（第31図53）と、鉄製の釘（第48図176）がある。

他に、調査地点の西側に、3カ所の焼土が確認されており（第16図）、調査時は2・3号土坑および4号土坑として調査した。2基の浅いピットをもつ例もある。

6 出土遺物（第17～19・30～50図27～203、第5表、PL.14～16-1・2、PL.23～33）

ここでは、出土した建物に関する建築材以外の遺物について記載するが、比較的に残存状態の良好な遺物を優先して掲載した。

遺物には、陶磁器類をはじめとし、鹿角製品、漆器を含む木製品類、金属製品類、石製品類、サルノコシカケと、多くの生活用具が出土している。特に、木製品類の

出土が多く、バラバラになった不明な部品や、残存度の悪い細くなった部品が多々ある。こうした遺物の多くは、床下から出土した物が主体を占め、床上での出土は少ない状況にあった。遺物の中で注目する物に、横笛、将棋の駒、「碁」の墨書をもつ上蓋、小型の弓といった遊戯具、さらに彫金を施した小柄等といった遺物が含まれており、本建物の性格を窺い知ることのできる内容と思われる。

以下、各遺物を大別して記述する。

1) 陶磁器類（第30・31図27～53、PL.23・24）

出土した陶磁器類は、少ないながらも碗をはじめとし、皿、香炉、灯火皿等といった各器種が出土しており、残存度は何れも悪く、細片が多い。

碗 図示できたのは11点で、残存度は悪い。肥前磁器・陶器の染付碗が主を占め、28・29・33は陶胎染付、35は白磁の猪口か。36は染付後に赤彩を施した、色絵の碗である。37は瀬戸・美濃陶器である。

皿 図示できたのは3点で、残存度は極めて悪い。38・39は肥前磁器の染付皿で、38は内外面に、39は内面に染付をもつ。40は瀬戸・美濃陶器で、内面に重ね焼き痕を残す。

香炉 大小の差はあるが、41・42は美濃陶器の筒形香炉である。

灯火皿 図示した1点のみの出土。志戸呂陶器で、外面および内面口縁部に油煙・煤を顕著に残す。

すり鉢 図示した2片のみ出土。瀬戸および瀬戸・美濃系陶器で、内面に掻き目をもつ体部片である。

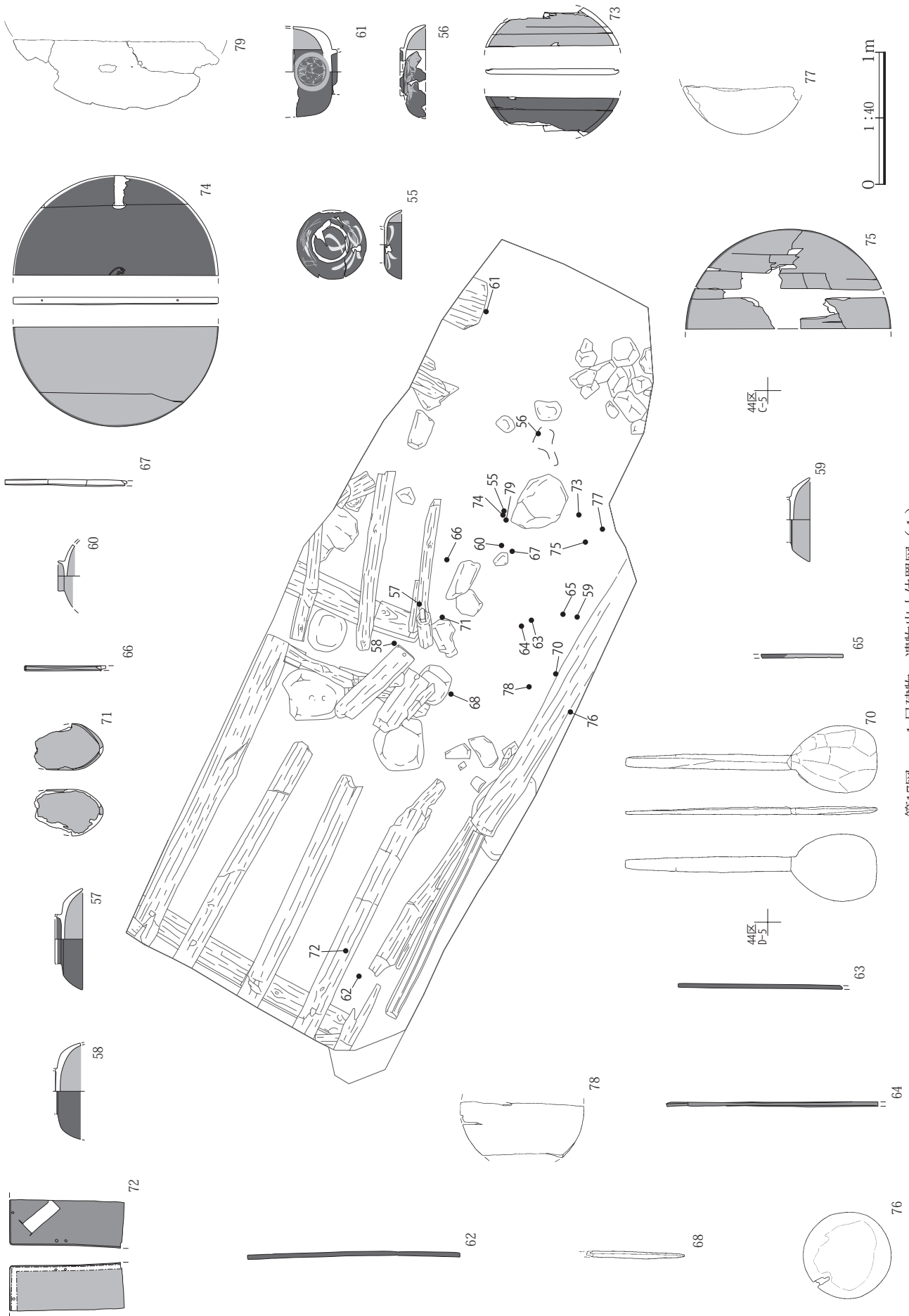
内耳土器 図示した3片のみ出土。在地土器で、46・47は口縁部片。48は底部片で、底面に砂目が顕著。

円盤状高台部 碗高台部の周囲を打ち欠き、円形状に成形したもので、図示した3点が出土した。49・51は肥前陶器の呉器手碗、50は瀬戸・美濃陶器の碗を利用している。

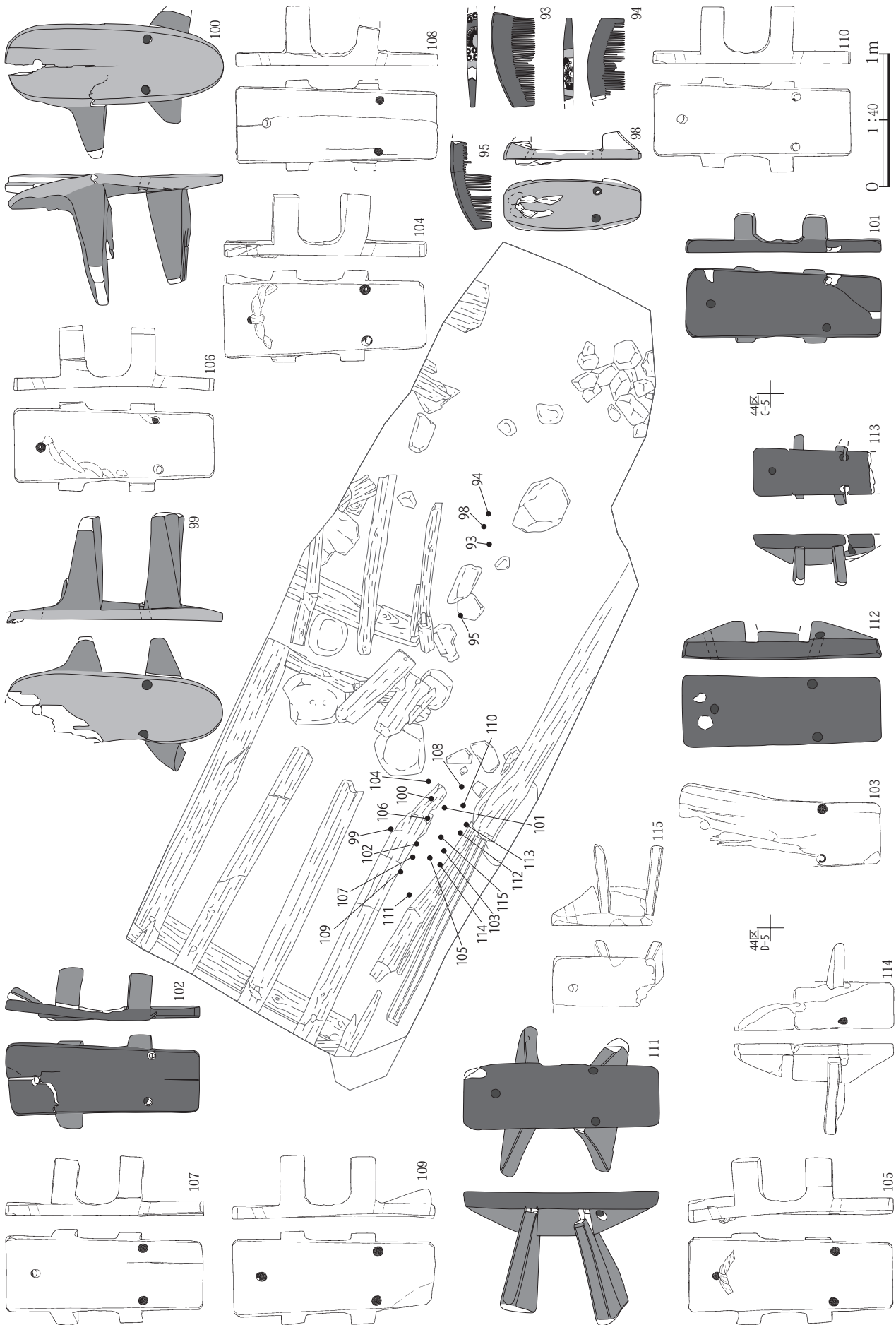
土人形 52の面子と、53の狛犬の2点が出土した。共に型作りで、53は表裏を合わせた作り。なお、53は床下1号土坑内から出土している。

2) 鹿角製品（第31図54、PL.24）

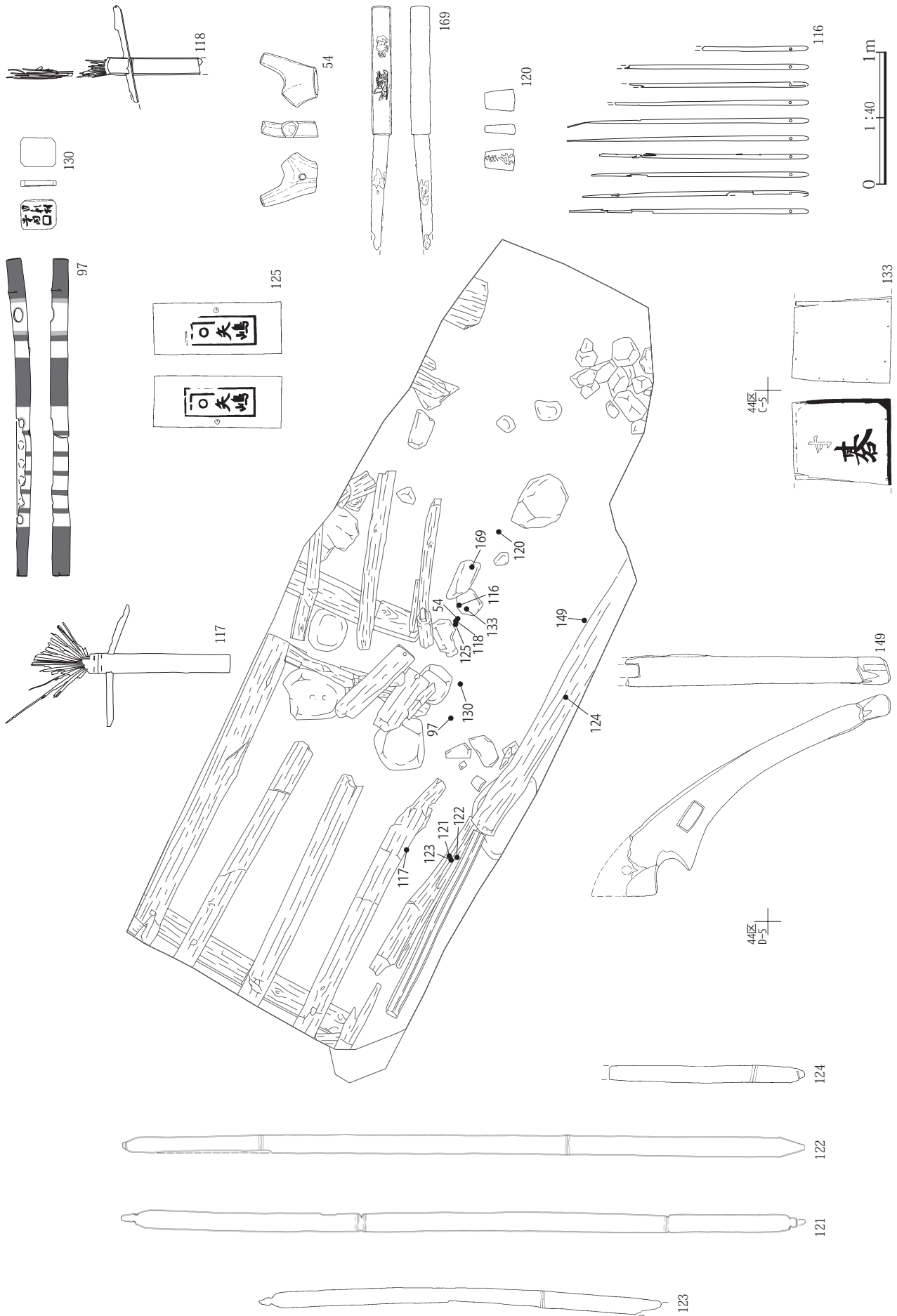
図示した1点のみの出土。鹿角の分岐部付近の上部と下



第17図 1号建物 遺物出土位置図(1)



第18図 1号建物 遺物出土位置図(2)



第19図 1号建物 遺物出土位置図(3)

部を切断した鹿角製品で、分岐部中央には、円形の孔が貫通している。用途は不明。詳細は、後述する第5章自然科学分析の第5節出土獣歯骨に掲載。

3) 木製品類 (第31～47図55～165、PL.24～32)

出土遺物の中で、最も量の多いのが木製品であり、漆塗椀や箸、杓文字・杓子、お膳、お櫃といった食器・台所用品、櫛、下駄・草履（草履は遺存状態が悪く凶化できなかつた）、笛、扇子・団扇、将棋（駒）、小型弓、さらには木札、箱類の板、木製家具・調度品類に関わる不明な部品、荷鞍等々と、その種類も多様である。

漆塗椀 図示できたのは7点で、他に細片がある。55～60は椀の蓋で、55は内面を赤色漆、外面を暗褐色の漆塗りとし、高台内および外面に金で花模様を描く。56は内面を赤色漆、外面を黒漆塗りとし、その上に赤色漆で花模様を描く。57・58は内面を赤色漆、外面を黒漆塗りとし、高台内に赤色漆で文字を書く。59は内外面を赤色漆塗りとし、高台内に黒漆で文字を書く。60は内外面に赤色漆塗り。これらの蓋の肩部には、稜をもつ。61は椀の身で、内外面に薄く黒漆を塗布し、その後に内面を赤色漆、外面を黒漆塗りとし、外面の黒漆の上に赤色漆で丸に抱茗荷の紋を3カ所描く。

箸 箸には62～65の竹製と、66～68の木製の2種類がある。62～64・65は丸箸で、62～64は全体に黒漆、65は下端に赤色漆、上部に黒漆を塗る。66・68は丸箸で、66は表裏面を僅かに面取りし、赤色漆を塗る。67は角箸で、断面は正方形となる。

杓文字・杓子 69の杓文字1点と、70・71の杓子2点が出土した。69はクリ製で、下端部を欠く。上部の柄部は細く、最大幅付近の表面は僅かに凹み薄くなる。70はブナ属製で、柄部は細長く、匙部は卵形を呈し、中央が湾曲するようにやや凹む。71は散孔材製で、柄を欠く杓子と思われる。匙部は卵形を呈し、中央がやや凹み、全体を赤色漆で仕上げている。

お膳 72はトウヒ属製のお膳の角片で、表裏・側面全体に暗褐色の塗りが施され、表面の縁には縁板痕と木釘があり、裏面には脚部の痕が残る。

お櫃 73はヒノキ属製で、複数枚で一体とするお櫃の蓋板。蓋板の外面の縁は緩やかな面取りが施され、内面の縁には側板が取り付け段をもち、接合部はのり付けと思

第2節 天明泥流下・浅間A軽石降下直前の遺構と遺物

われる（木釘痕はない）。内外面に薄く黒漆を塗布し、その後に内面を赤色漆、外面を黒漆を塗る。74はヒノキ属製で、2枚で一体とするお櫃の底板の半分。もう1枚との接合面に木釘痕が2カ所あり、側板と接合する周囲の側面にも木釘痕が多く残る。内外面に薄く黒漆を塗布し、その後に内面を赤色漆、外面を黒漆を塗る。75は74と全く同様で、もう1枚との接合面に残る木釘痕が74と同じ位置にあることから、両者が一体の底板をなしていたと考えられる。

曲げ物・桶 76～79は曲物の底板と思われる。80はヒノキ属製で、2枚で一体とする桶の底板の半分。もう1枚との接合面に木釘が2カ所あり、側板と接合する周囲の側面にも木釘痕が多く残る。81はスギ製の桶の蓋板であるが、割れた接合面に木釘が4カ所残る。蓋表は波状に段がつき、周縁は面取りされ、側縁は下方が僅かに内側に傾斜する。82の平面形は、上端に頂点をもち、下端が弧状となる形状（卵形？）ないし長楕円形となる桶状の底板と思われる、複数枚で一体となるように接合面に木釘を残す。表面の頂部左縁には直線的な細い刻線をもち、木釘や木釘孔が散在する。91はマツ属複維管束亜属製の桶の側板で、外面中央に逆位に墨書「南田」がある。また、内面には炭化痕が付き、墨書も含め側板単独で使用したものと考えられる。92は竹製で、竹籤を三重に絡めて円環状とする。桶ないし曲げ物のタガか。

栓 83～90に示した計8点の栓が出土した。大小様々あるが、下方が窄まる形状は共通し、83は上端を面取りし、86・87・89・90は削り痕を残す。

櫛 93～95の3点の櫛が出土した。93・94はツゲ製の櫛で、全体を黒漆で仕上げ、上面に花等の文様を描き、赤色漆を塗り分ける。95は全体を黒漆で仕上げた櫛。

笛 一部を欠くが、漆塗の横笛が出土している。97は竹製の横笛で、指孔が6孔、口・指孔の周囲を赤漆で縁取り、各孔を仕切るように黒漆で装飾する。

下駄 98～115の計18点の下駄を図示した。下駄の出土した位置は、1号床の南東角付近の床下で、根太の下に集中して出土している。これらの下駄は、台と歯が一体で成形された一木下駄（いわゆる「連歯下駄」）と、台と歯が個々に成形された差歯下駄（差歯の出柄が台表に確認されないいわゆる「陰卯下駄」）とに大別することができる。前者の一木下駄に98～110の13点が、後者の

差歯下駄に111～115の5点があたる。また、各下駄の台に穿たれた緒を通す前壺・横緒孔内に緒の一部が残存する例が多く、98・104～106には緒が残存している。なお、完形品であっても歪みの著しい下駄があり、特に差歯下駄では台が割れて、差歯が破損・脱落するものがほとんどである。

98はクリ製の小型の一木下駄で、台表の平面形は最大幅が台前部にある長楕円形となり、前後の歯は台から垂直に延び、歯の台側は前・後面から斜めに続いて下端は薄く、台表と前・後・両側面に赤色漆を塗布する塗り下駄である。99・100は規格・作りの同じクリ製の一木の高下駄で、台表の平面形は前後端が丸くなる長楕円形で、前後の歯は台から垂直に長く延び、下端幅が大きく台形状に広く、台の全面に薄く黒漆が塗布され、その上に台表と前・後・両側面に赤色漆を塗布する塗り下駄である。101はコナラ節製、102はクリ製と、素材の違いはあるが、作りの全く同じ一木下駄である。台表の平面形は四隅が面取りされた隅丸長方形で、前後の歯は台から垂直に延び、下端幅が僅かに広く、歯の間に横方向から削られた整形痕を残す。台の全面に薄く黒漆を塗布し、その上に台表と前・後・両側面に黒漆を塗布する塗り下駄である。103～110はほぼ同規格のクリ製の一木下駄で、103を除いて残存度は良い。台表の平面形は四隅が面取りされた隅丸長方形で、前後の歯は台から垂直に延び、下端幅が僅かに広く、歯の間に横方向から削られた整形痕を残す。

111・112は規格・作りの同じハンノキ属製の差歯高下駄であるが、111は前歯が脱落し、後歯が折れ、112は差歯を欠く。台表の平面形は四隅が面取りされた隅丸長方形で、台の裏面は船底状となり、裏面の前後の溝に台形状の高い各差歯が挿入されて前後にハ字状に取り付き、台の全面に薄く黒漆を塗布し、その上に台表と前・後・両側面に黒漆を塗布する塗り下駄である。111-1は差歯の脱落した台裏面の図で、前・後差歯溝の内面前寄り中央および底面に、地獄柄接ぎのための削り出しをもち楔が残る。111-2・3は台形状の各差歯で、前面の上端中央に楔が嵌る切り込みをもつ。113は小型のハンノキ属製の差歯下駄で、その作りは111と同様の、しかも黒漆を塗布する塗り下駄であるが、差歯は垂直に近い状態に嵌る。113-1は差歯の脱落した台裏面の図で、前・後差歯溝の内面前寄り中央および底面に、地獄柄接ぎの

ための削り出しをもつ。113-2・3は台形状の各差歯で、前面の上端中央に楔が嵌る切り込みをもち、113-2の前歯には楔が嵌っている。114はクリ製の差歯下駄で、111と同様の作り。114-1は差歯の脱落した台裏面の図で、前・後差歯溝の内面前寄り中央および底面に、地獄柄接ぎのための削り出しをもつ。114-2・3は台形状の各差歯で、前面の上端中央に楔が嵌る切り込みをもつ。115はクリ製の差歯下駄で、その作りは114と同様であり、差歯の規格もほぼ同じである。

以上、こられの下駄の中でも、98と113は小型であることから、子供用の下駄と考えられる。また、99と100、101と102、105と109、111と112は一对の下駄と思われ、114と115も対である可能性をもつ。

扇子・団扇 いずれも、竹製である。116は扇子で、骨10本が残存し、貼られた和紙は僅かに残存する。骨は先端部ほど薄く細くなるテーパ構造で細長く、根もと付近に要孔をもつ。一番外側となる親骨は厚く、根もと付近には要孔をもつ。

117と118は同じ作りの団扇で、柄の部分に「肩入れ」と称される一文字状の竹が取り付けられ、扇面となる骨部の先端は細く二つに割れている可能性をもつ。なお、同様の団扇は、東宮遺跡から出土している。

将棋(駒) 2点出土した。119はトチノキ製の桂馬駒で、120は散孔材製の歩兵駒。

弓 121・122の完形品2点と、123・124の欠損品2点の計4点を出土した。いずれも、竹製の小型弓で、両端の尖る三角部側縁に糸(弦)掛け用の抉りや、浅い溝をもつのが特徴である。

木札 長方形ないし方形の小型の板を、木札として纏めた。125はマツ属複雑管束東亜属製で、表裏面に焼印「□矢嶋」をもつ板で、焼印の脇に孔を有する。130はスギ製で、角を面取りし、表面に右側に「日影村」、左側に「寺□□」の墨書。128は左右にやや湾曲する板で、四隅は面取し、木釘が残ることから桶の補修板の可能性もある。

箱類 板の周囲ないし両端部に木釘痕を残し、表面に丁寧な面取りや墨書等をもつものを、箱類の面板として纏めた。133はスギ製の板で、表面中央に墨書「□碁」とあり、表面の周縁と各側面を黒塗りする。碁に関わる箱板と思われる。135はスギ製の薄身の板。136は表面の周縁およ

び角を丁寧に丸く面取りした板で、木製品の部品の可能性もある。

鞍(荷鞍) 149は荷鞍の前部左側となる部品。エノキ属製で、牛馬の背にあたる部分は、緩やかな弧状を呈し、下方は直線的となり、上部には前部右側とを繋ぐ渡し木用の溝をもち、その斜め下方に後部左側とを繋ぐ渡し木用の柄孔をもつ。

その他の竹製品類 142・143は上端の一部に切り込みをもつ竹製品で、142は水筒の可能性があり、143は花入れか。144は茶筌状の竹製品で、ササラか。145は欠損品で、竹籤状に薄く細長い。146～148は板状で、146・147は6孔を一行に、148は中央付近に1孔をもつ。

その他の木製品類 137～141は細い角材で、137～139は表面の両縁を面取りした断面六角で、両端に柄をもつ。障子の棧に似るが不明。140は裏面に組み合わせ溝をもち、障子の棧か。141は端部に木釘を残す。

150～153は不明な木製品で、150はカツラ製の二股枝を利用したV字状。151は丸木の輪切りで、芯を穿孔させる。152は丸木の表裏面を面取りし、中央に円孔をもつ。153は杵のミニチュア様の木製品。

154は藁縄による結び目部。

155～160は不明な板で、155は表面の左右両側に墨による縦・横に線を引くが、その中間には線はなく、線は細い刻線を施した後に引く。横線は左右共に11本で、縦線は左右共に中央寄りに1本ずつで、将棋・碁盤とは異なる。156は木製品の一部と思われる板材で、両端の切り込みと、上端中央に逆台形状の切り込みをもち、縁には木釘痕と木釘が残る。158は表面中央に溝状の切り込みをもち、7カ所の釘孔をもつ。159は出土時に藁縄が斜めに三巻残存していた板。160は表面に樹皮を残す薄い板で、側縁に釘孔列をもつ。

161・162は丸杭で、下端を削り出して尖らせる。163・164は断面が丸い棒で、表面に加工痕を残す。165は楔で、片面の中央下部を斜めに削り、下端を薄くする。

4) 金属製品類 (第48・49図166～196、PL.32・33)

出土した金属製品は、余り多くはない。数的には銭貨が最も多く、次いで煙管である。特徴的な製品としては、彫金細工の施された小柄がある。

鉄鍋 破片が3点出土している。166は口縁部片で、

167・168は胴部片である。

小柄・刀子 169はほぼ完形の小柄で、銅製の柄の表面に獅子と松・竹、さらに下地に彫金細工が施される。

170・171は刀子の刃部片である。

鍬先 172は鉄製の鍬先で、側縁部片である。

釘 鉄製の釘片が3点出土している。176は53の狛犬と共に、床下1号土坑内から出土している。

煙管 雁首5点、吸い口3点の計8点が出土しており、錆の進行が少ないものが多い。

銭貨 寛永通宝が11点出土している。186は表面に金箔を施すが、裏面にはない。

その他の金属製品 用途不明な金属製品である。173は薄いリング状を呈した鉄製品。177は楕円の管状を呈し、外側にゴム状の輪を付す。

5) 石製品類 (第49・50図197～203、PL.33)

出土した石製品は、砥石が多く、他に硯と磨石がある。また、石皿は縄文時代の遺物である。

硯 197の1点のみで、珪質粘板岩製であるが、剥落がひどく表面は欠く。

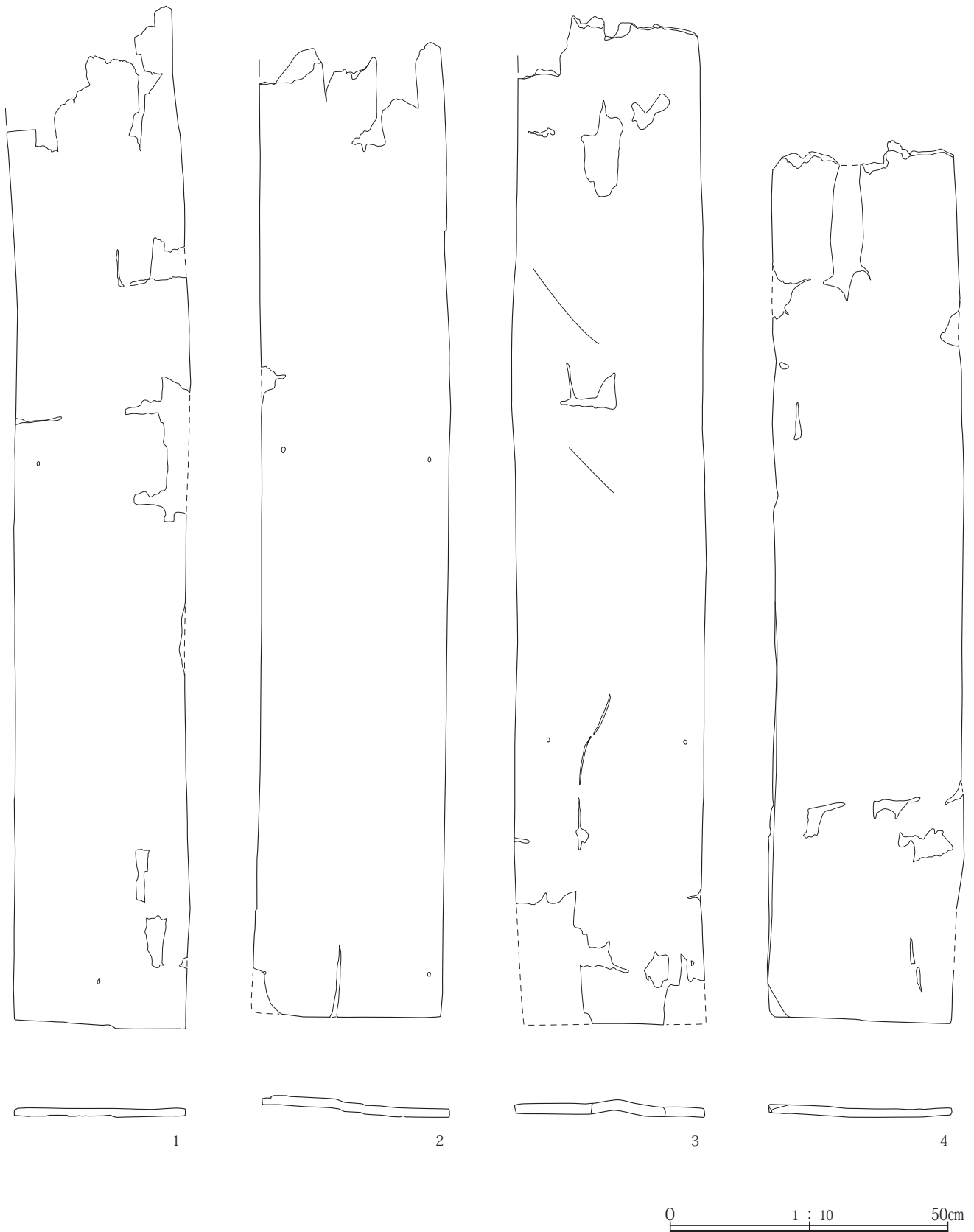
砥石 198～201の4点が出土し、108・201は砂岩製、109・200は砥沢石製で砥面に刃ならし傷がある。

磨石 202は粗粒輝石安山岩製の円礫を素材とし、研磨面をもつ。

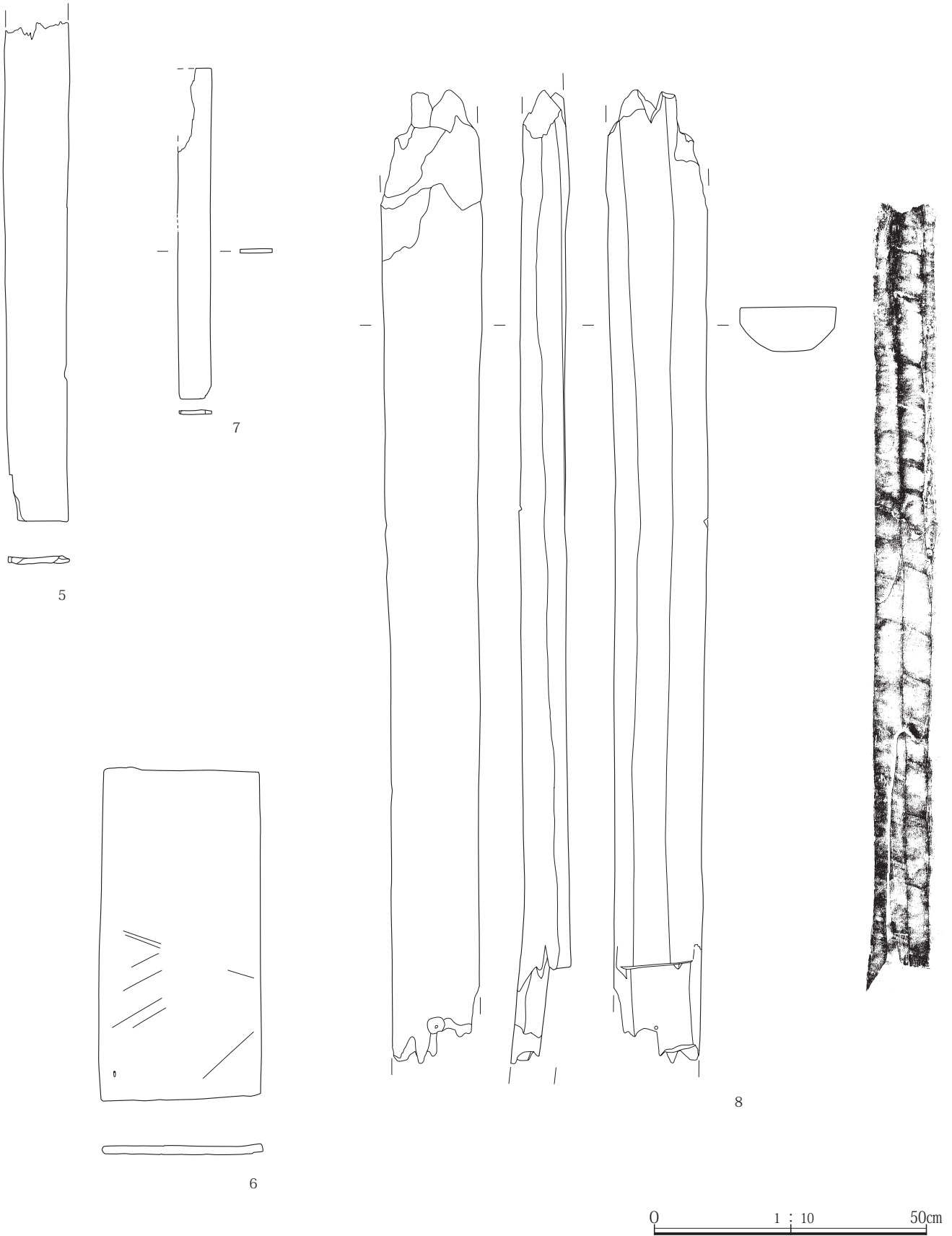
石皿 203は粗粒輝石安山岩製の石皿の欠損品で、裏面を多孔石としている。

6) サルノコシカケ (PL.33-204)

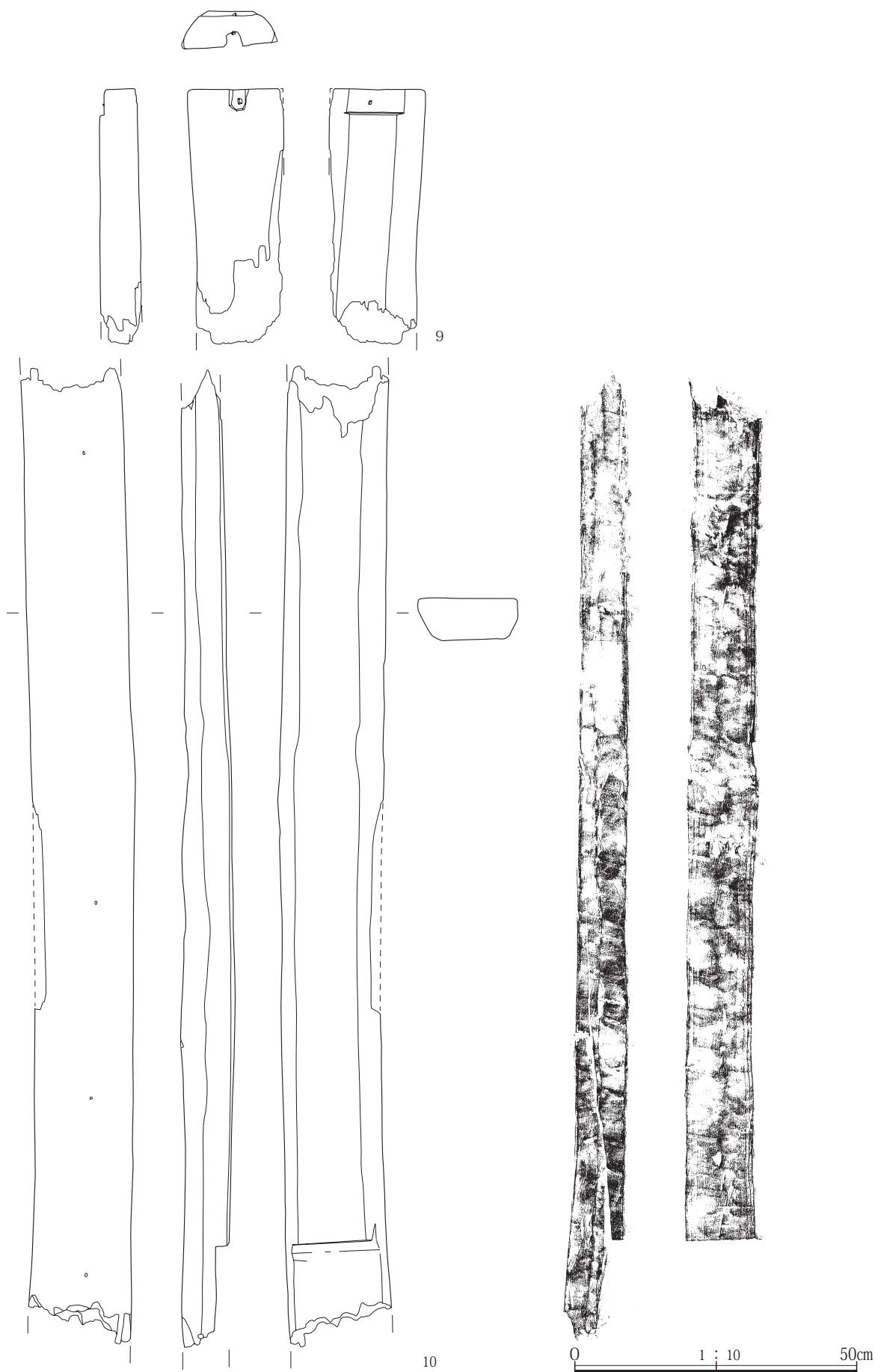
1点だけ出土しているが、葉として使用か。



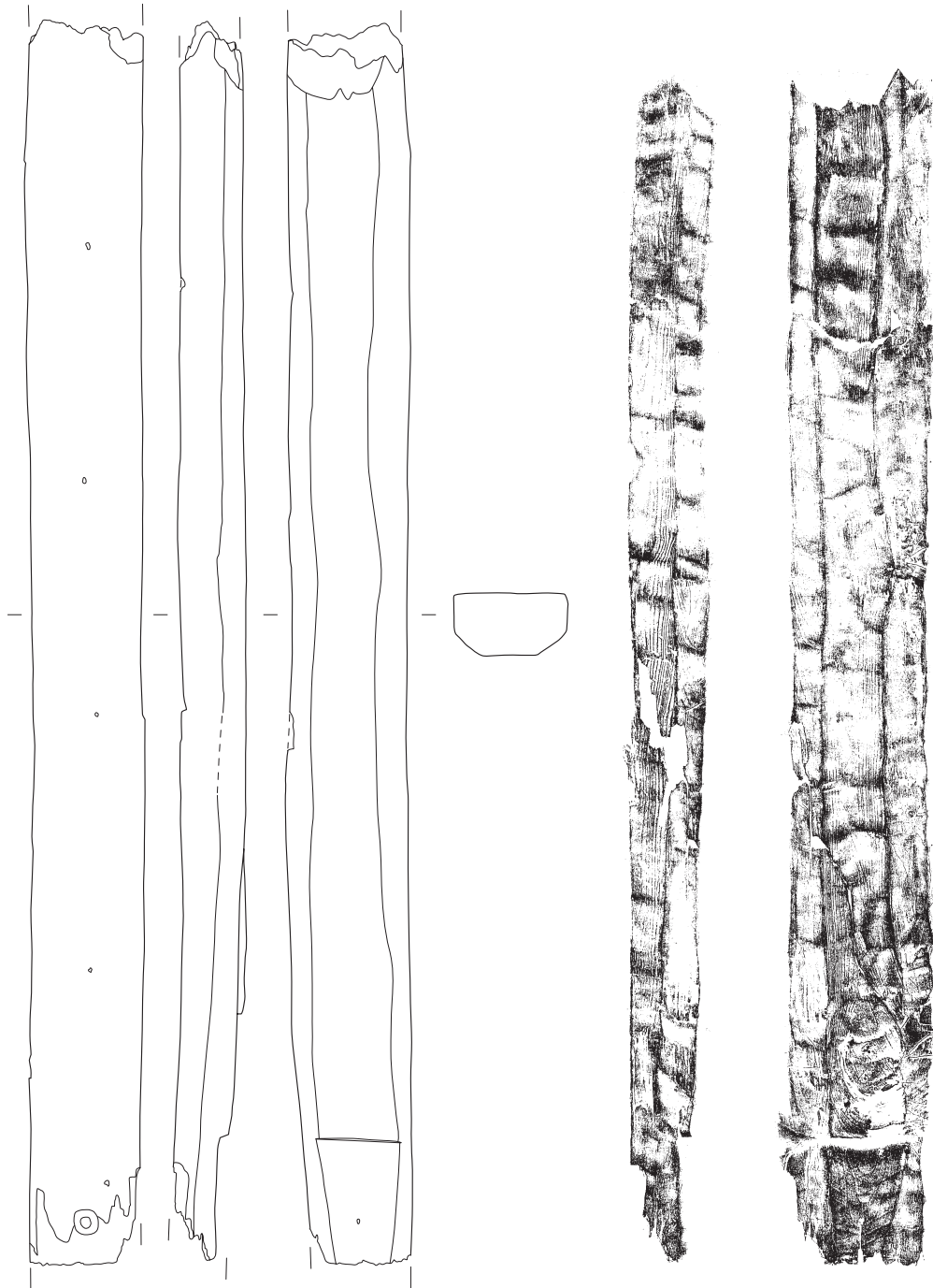
第20図 1号建物出土遺物(1) 建築材-床板



第21図 1号建物出土遺物(2) 建築材-床板・根太



第22図 1号建物出土遺物(3) 建築材—根太



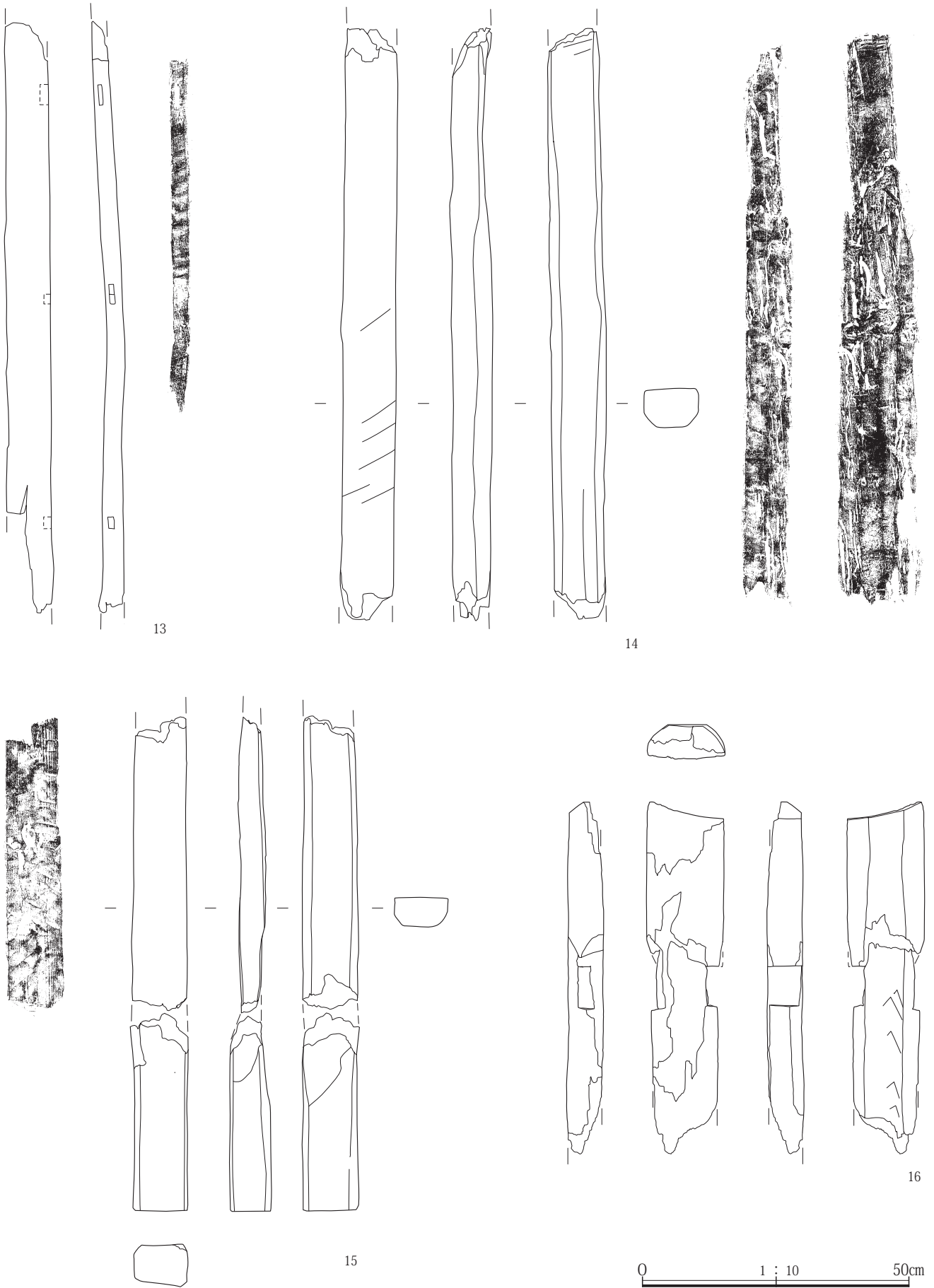
11

0 1 : 10 50cm

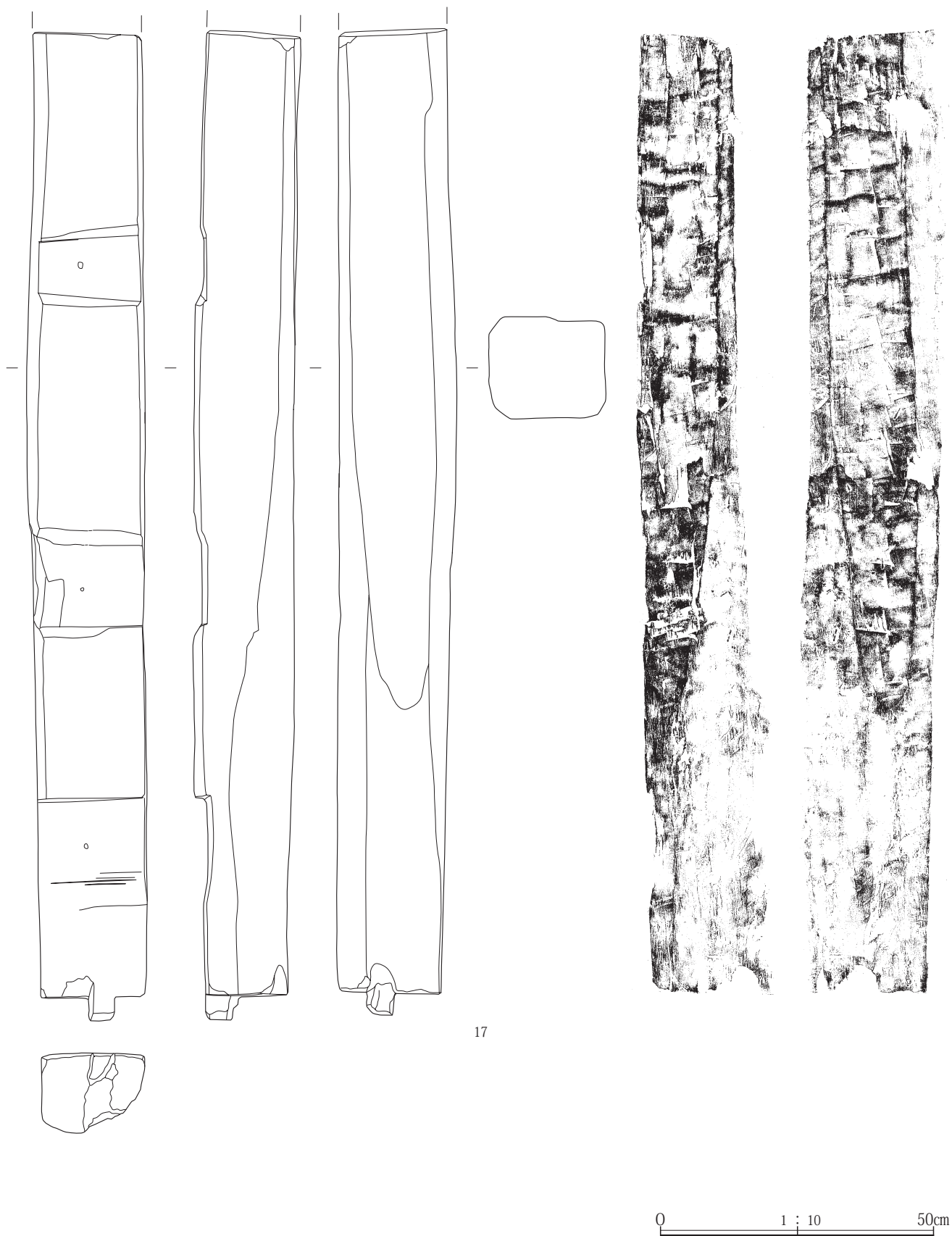
第23図 1号建物出土遺物(4) 建築材一根太



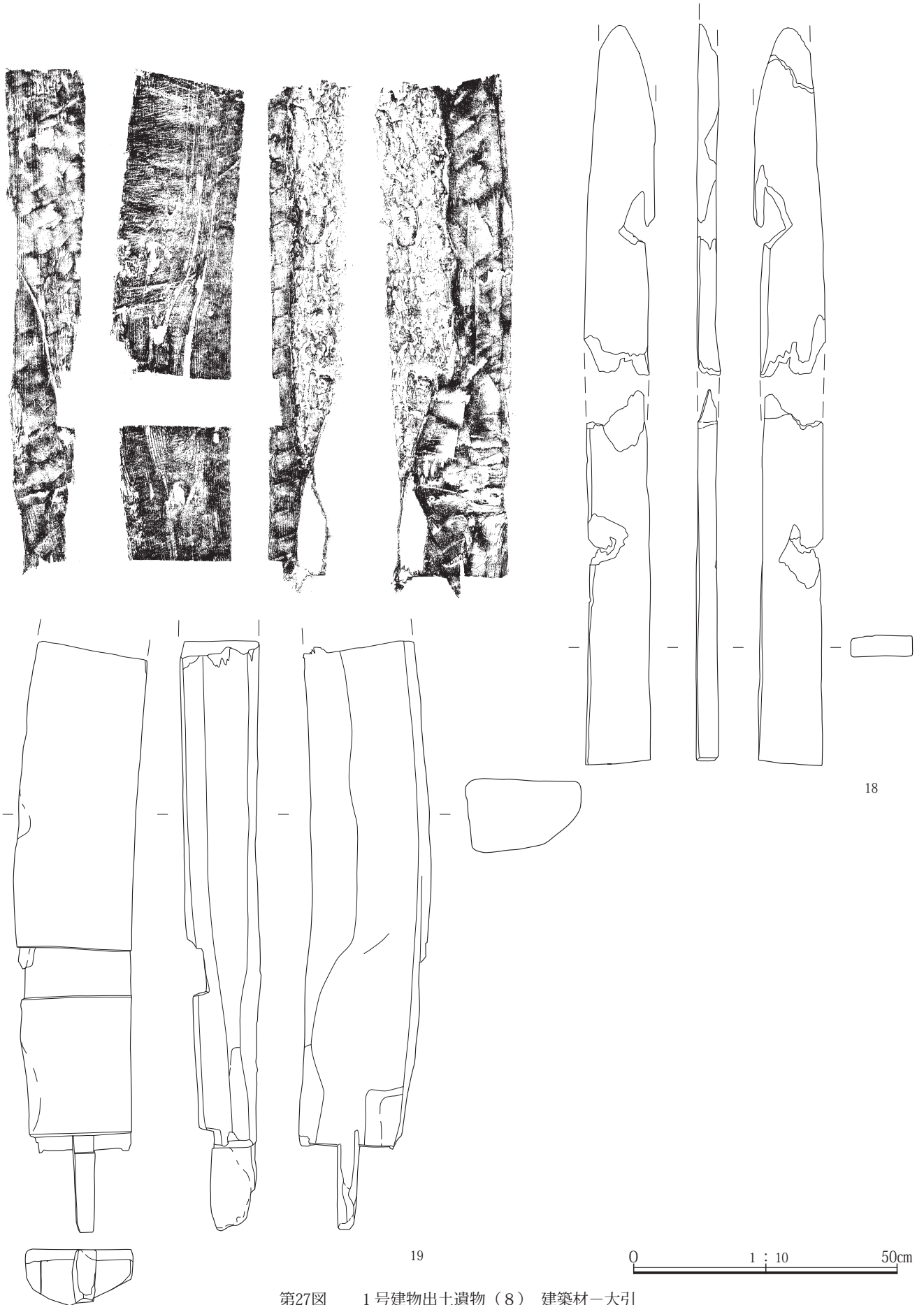
第24図 1号建物出土遺物(5) 建築材—根太



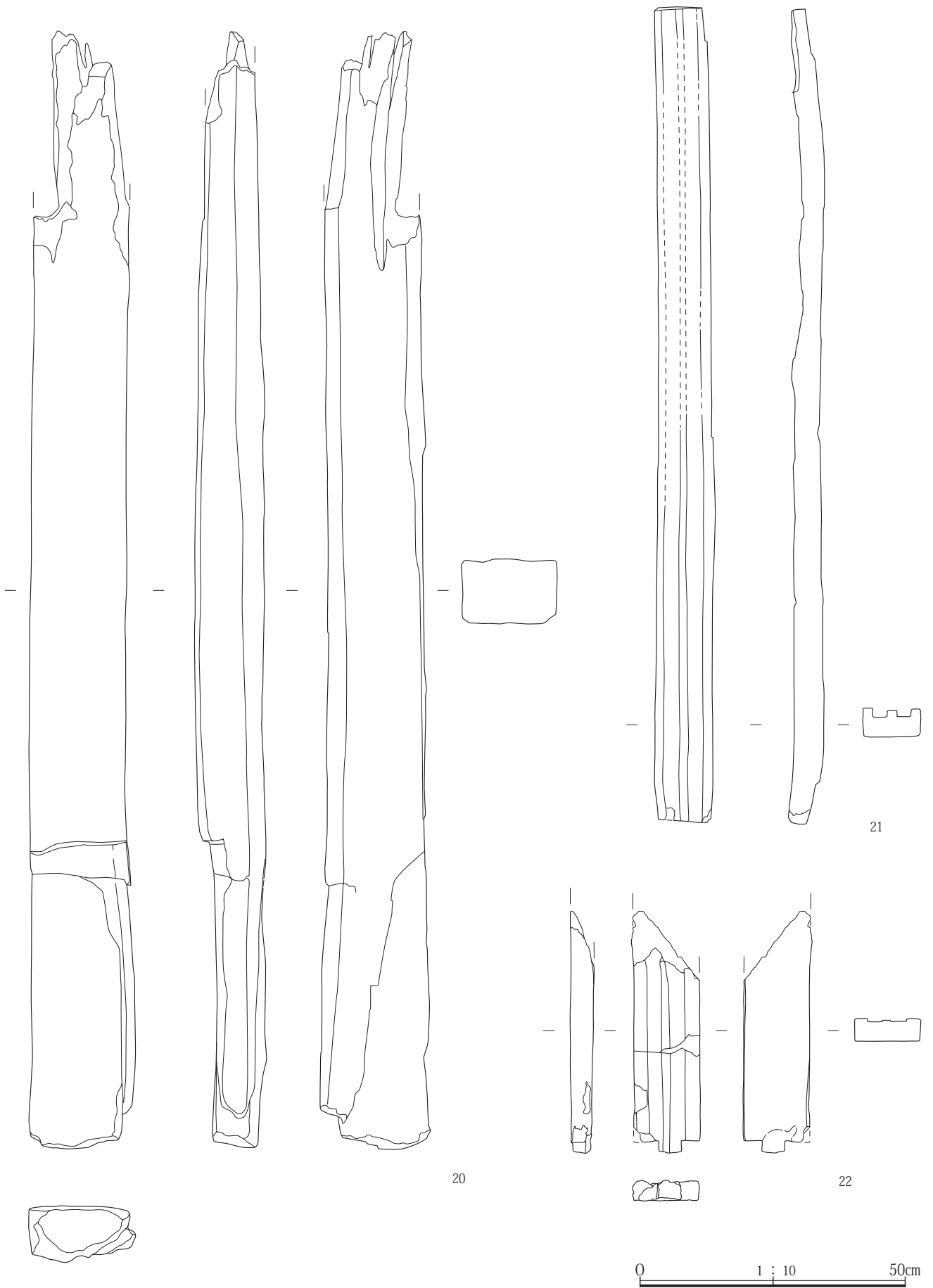
第25図 1号建物出土遺物(6) 建築材一根太



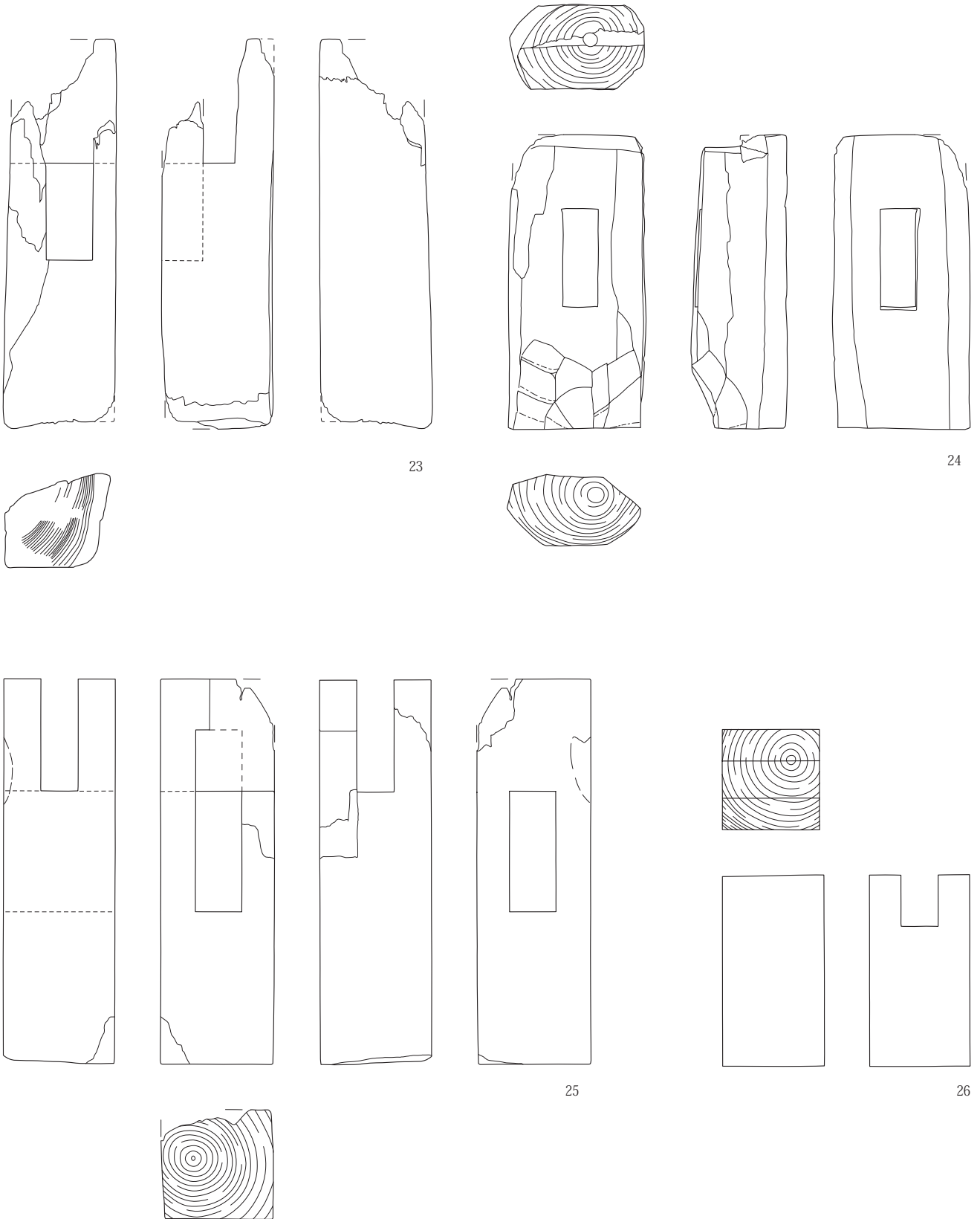
第26図 1号建物出土遺物(7) 建築材一大引



第27図 1号建物出土遺物(8) 建築材一大引

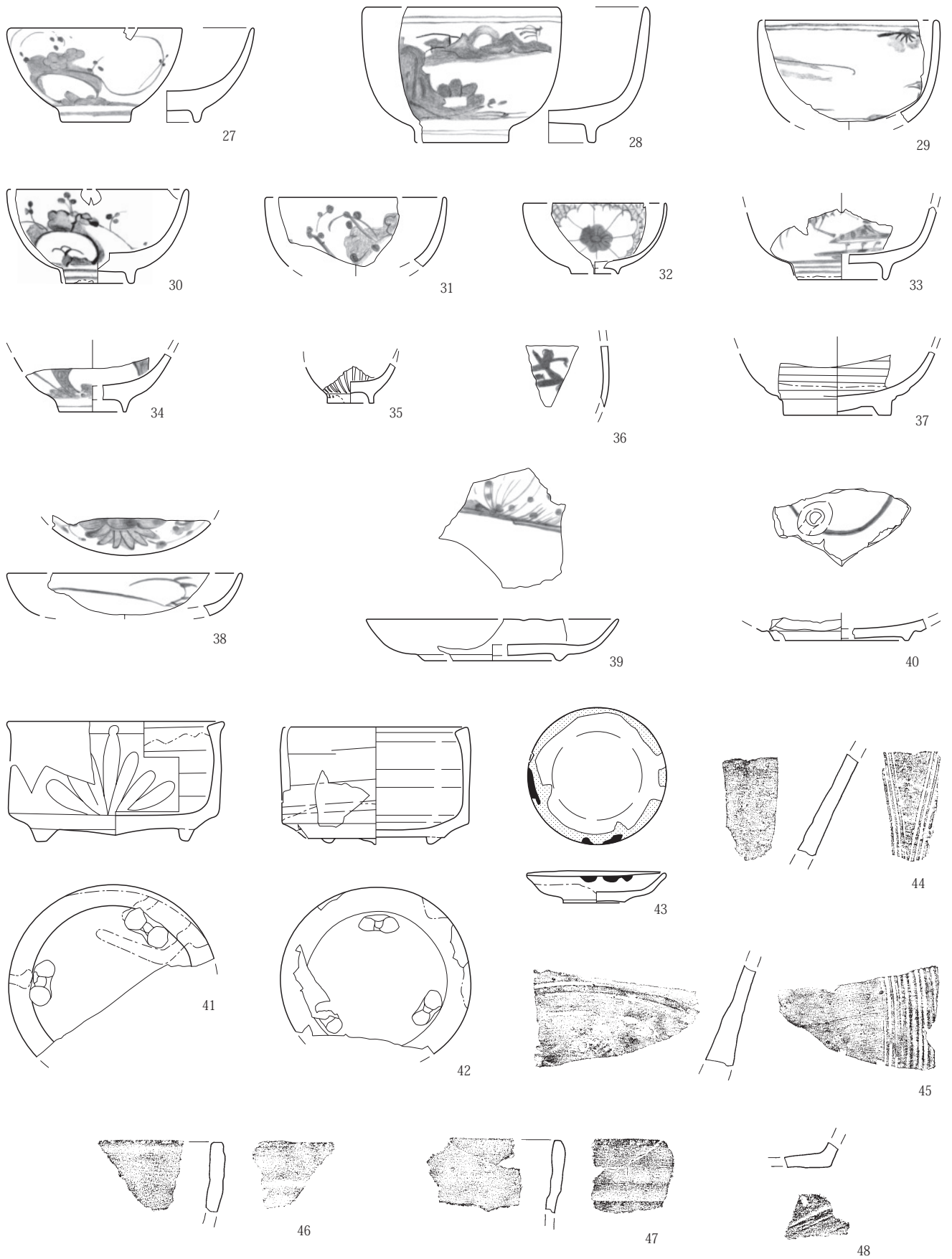


第28図 1号建物出土遺物(9) 建築材—大引・敷居



0 1 : 6 20cm

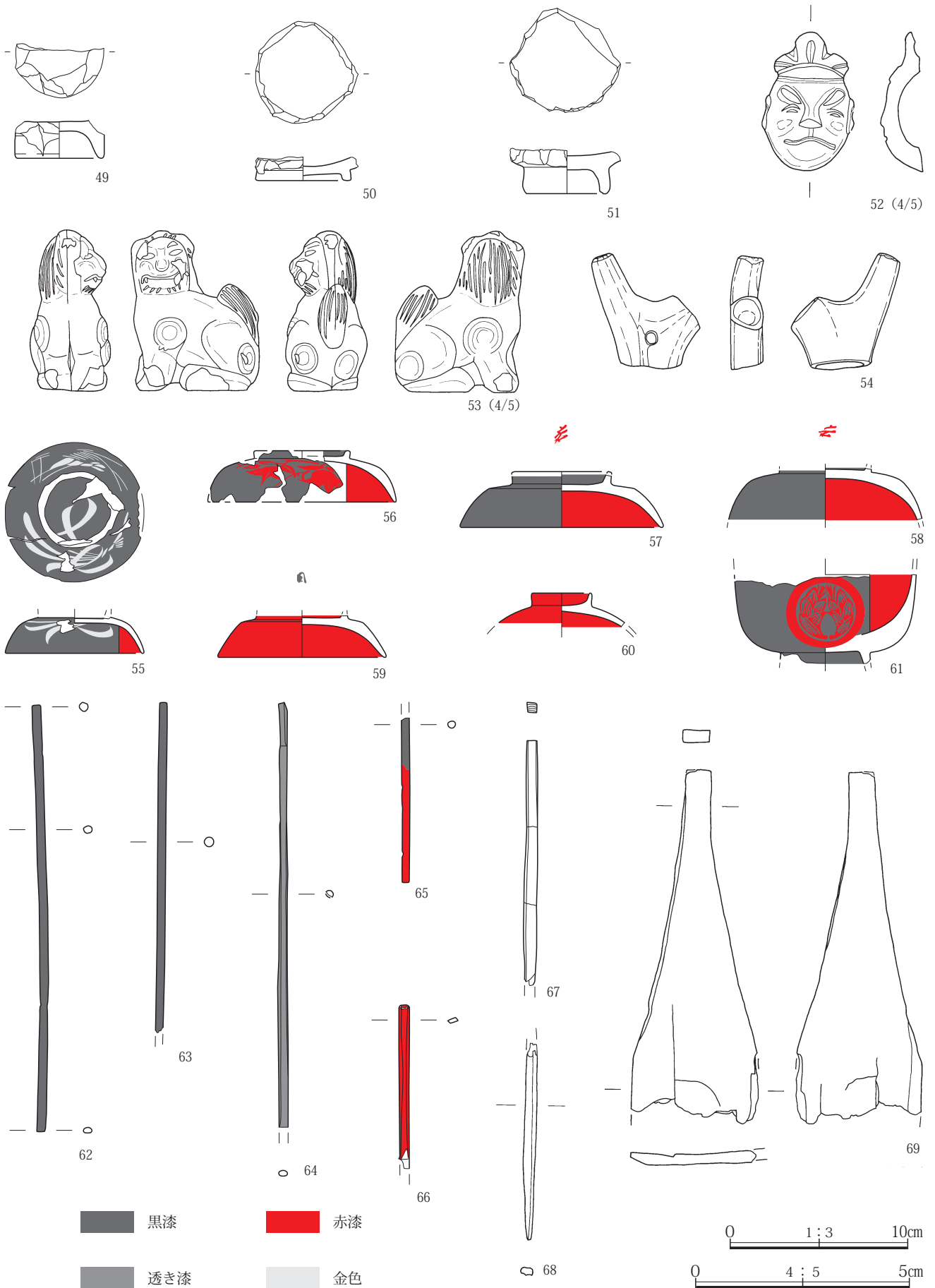
第29図 1号建物出土遺物(10) 建築材一束



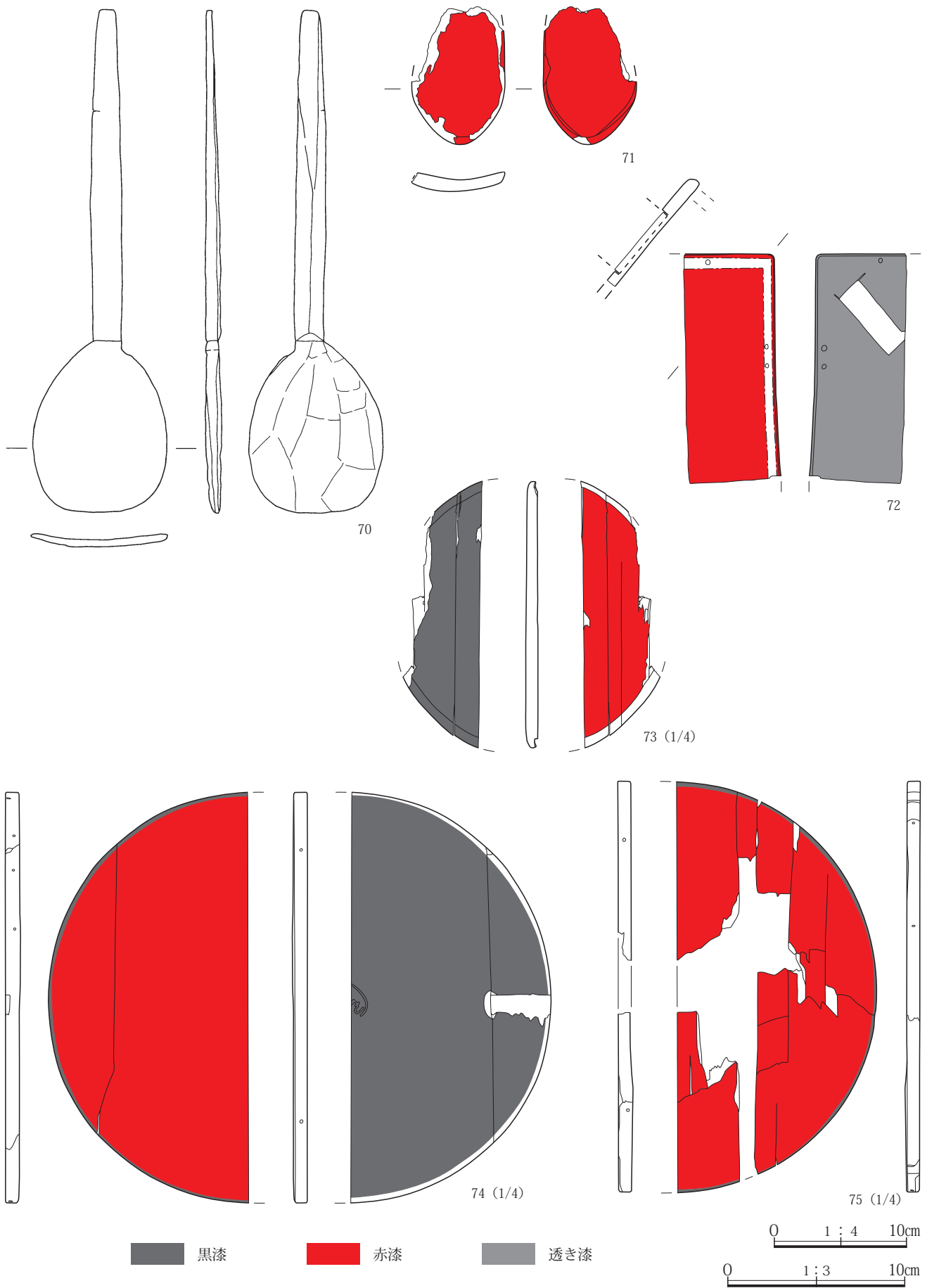
油煙 スス

0 1:3 10cm

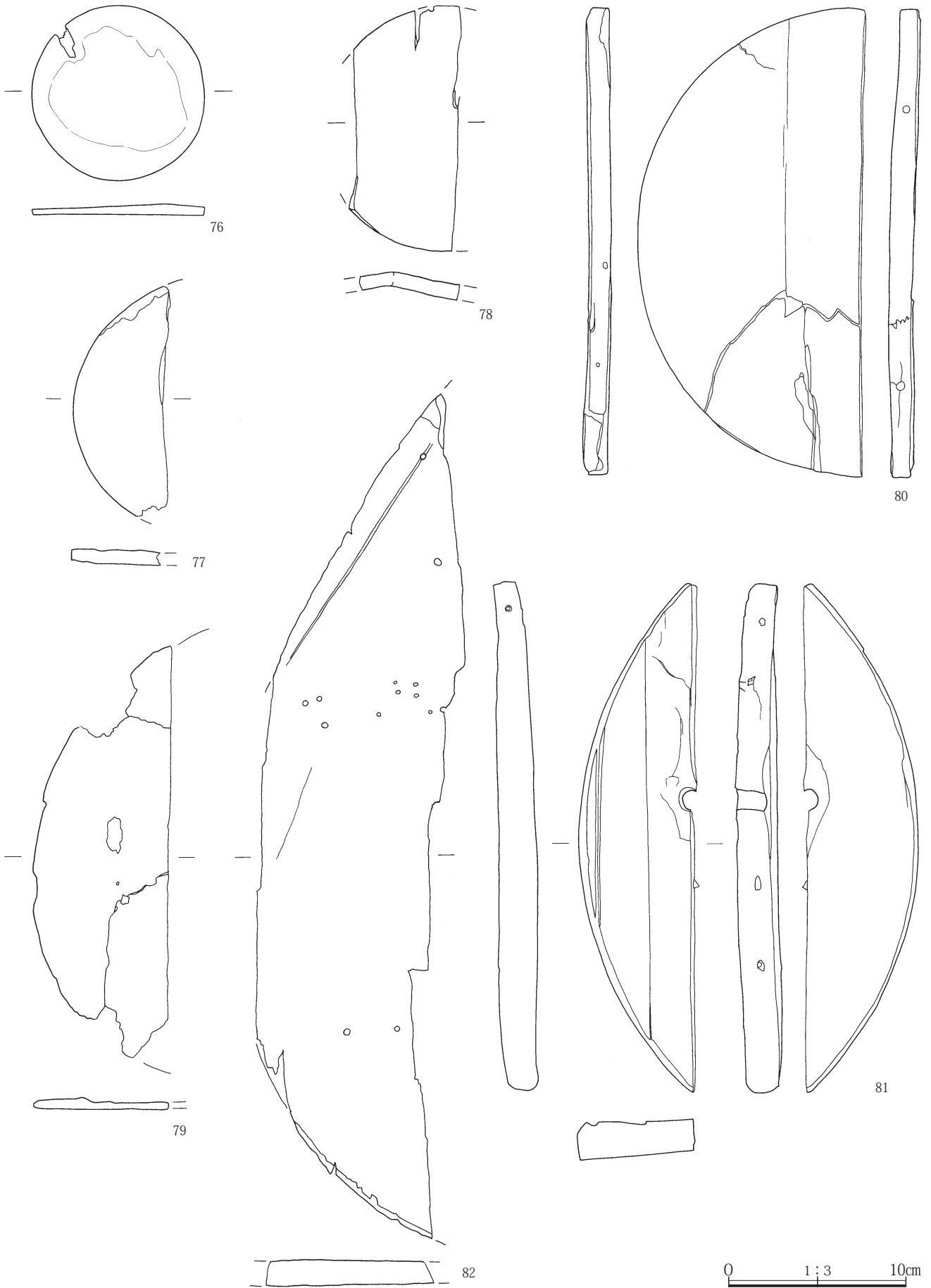
第30図 1号建物出土遺物(11) 陶磁器類



第31図 1号建物出土遺物(12) 陶磁器類・木製品類

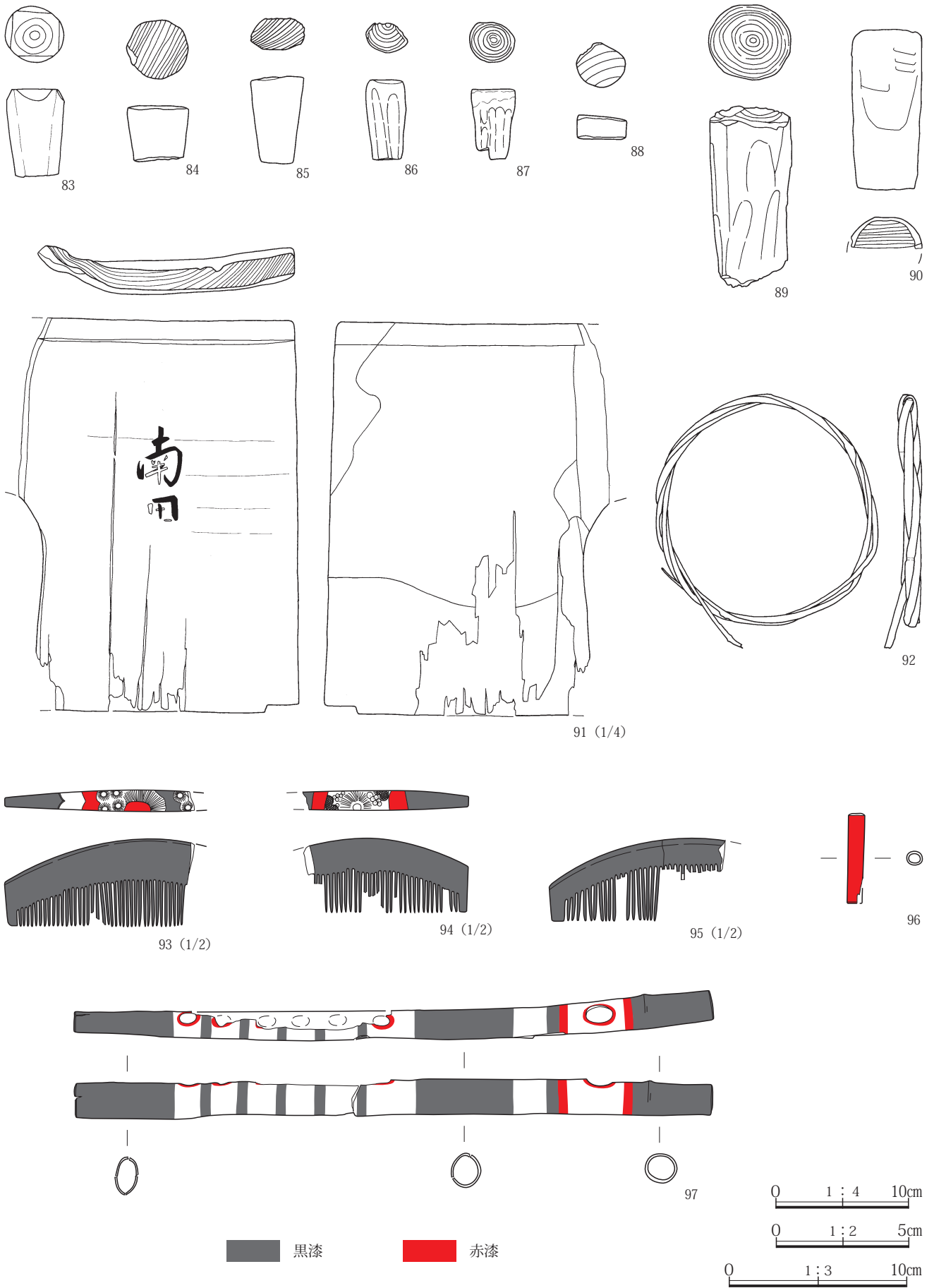


第32図 1号建物出土遺物(13) 木製品類

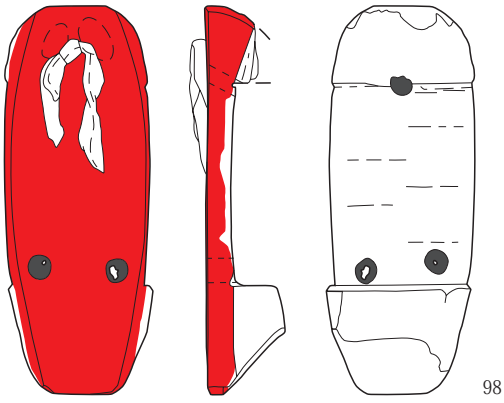


第33図 1号建物出土遺物(14) 木製品類

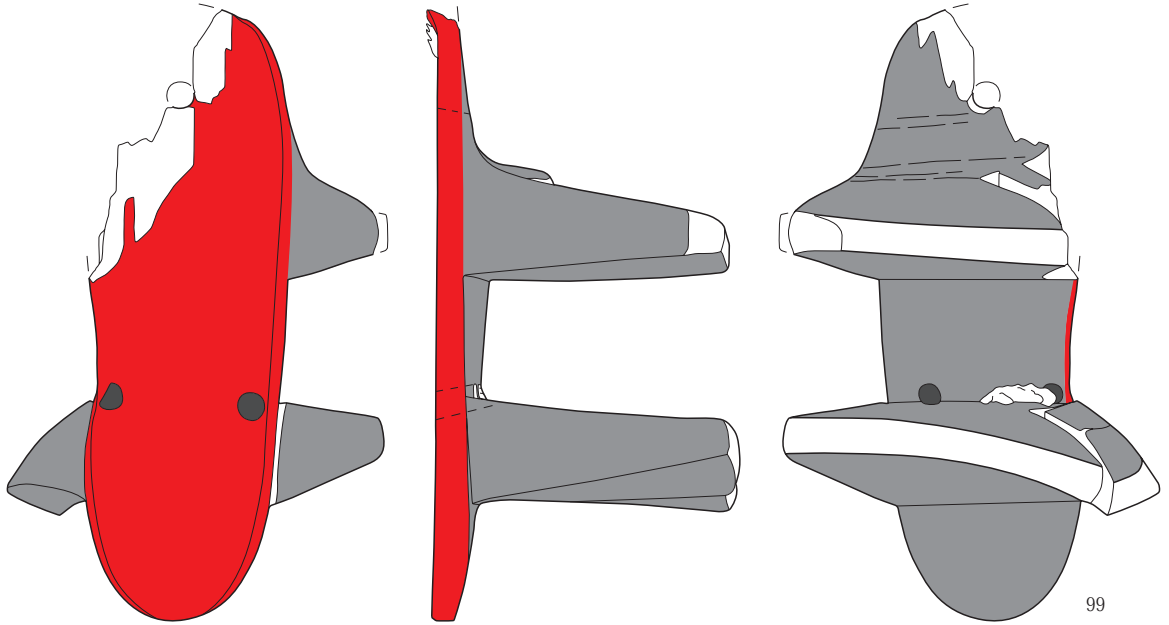
第3章 検出された遺構と遺物



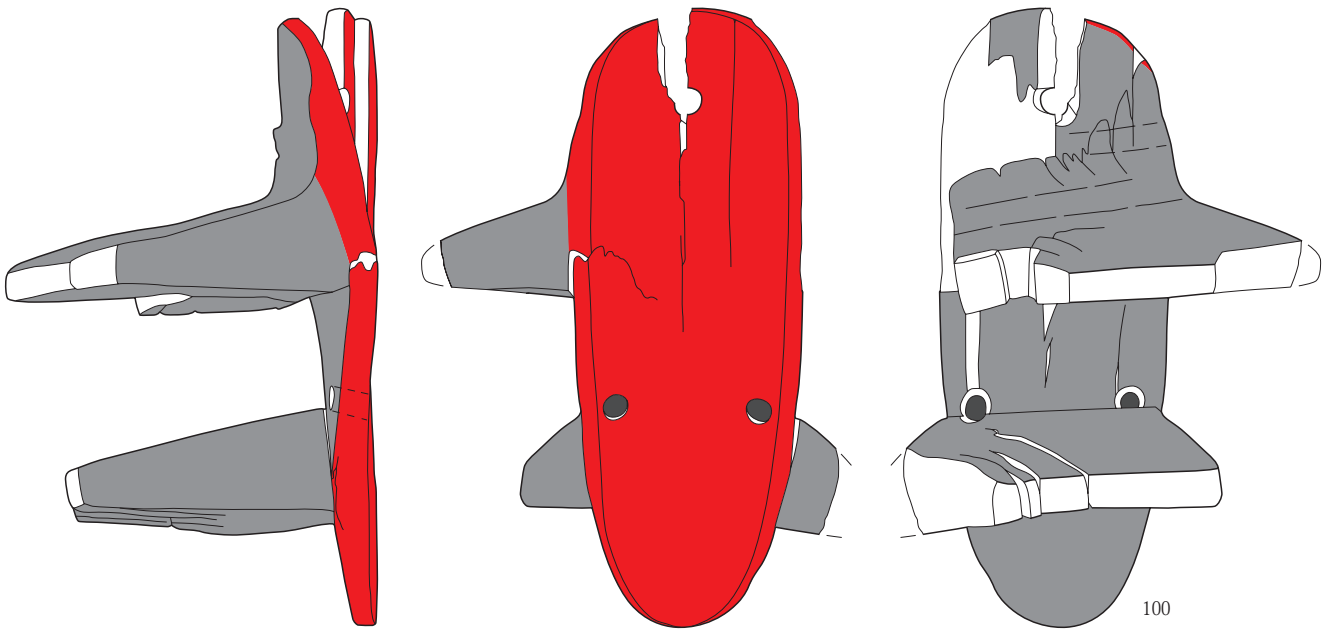
第34図 1号建物出土遺物(15) 木製品類



98



99



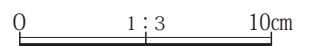
100



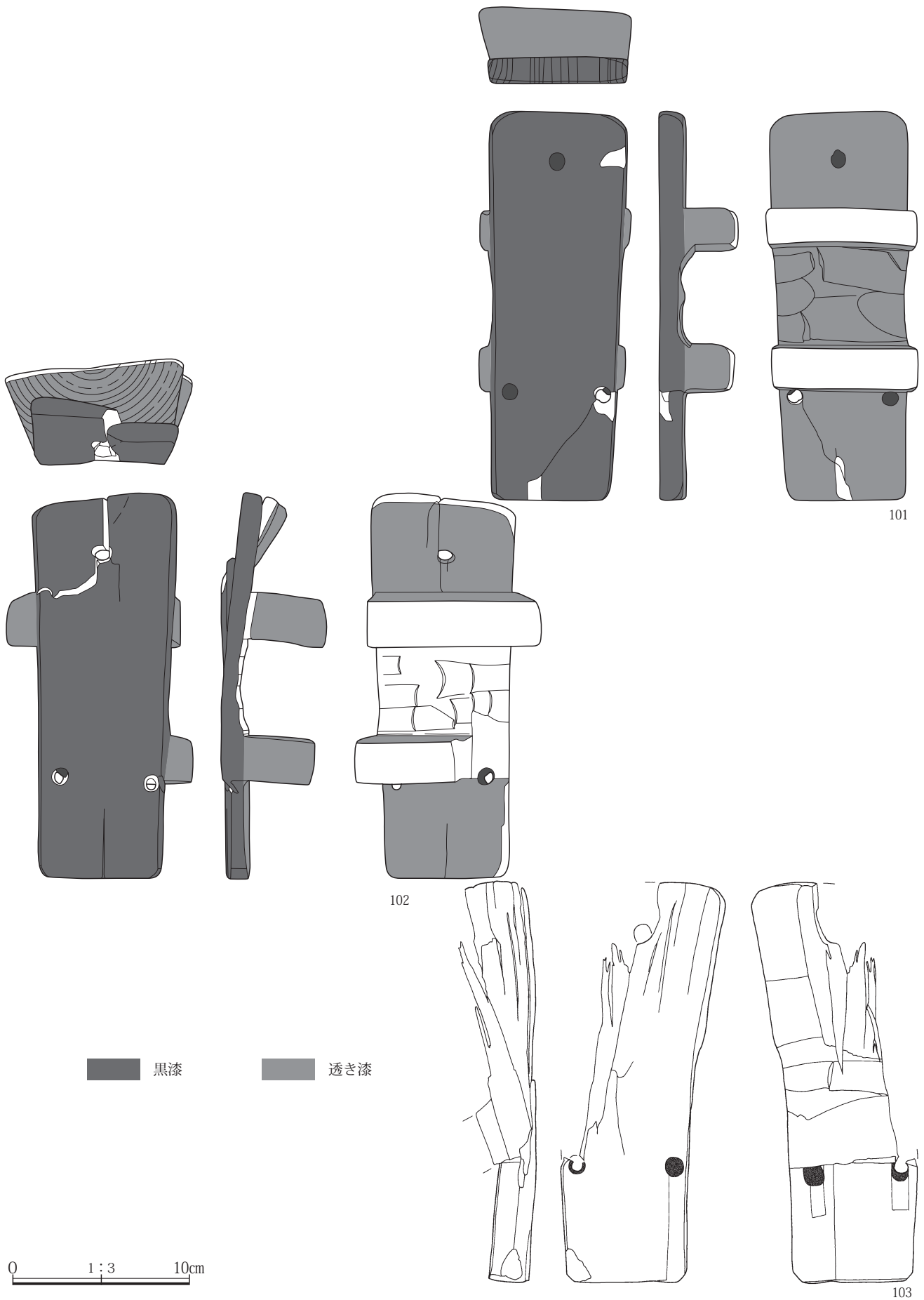
赤漆



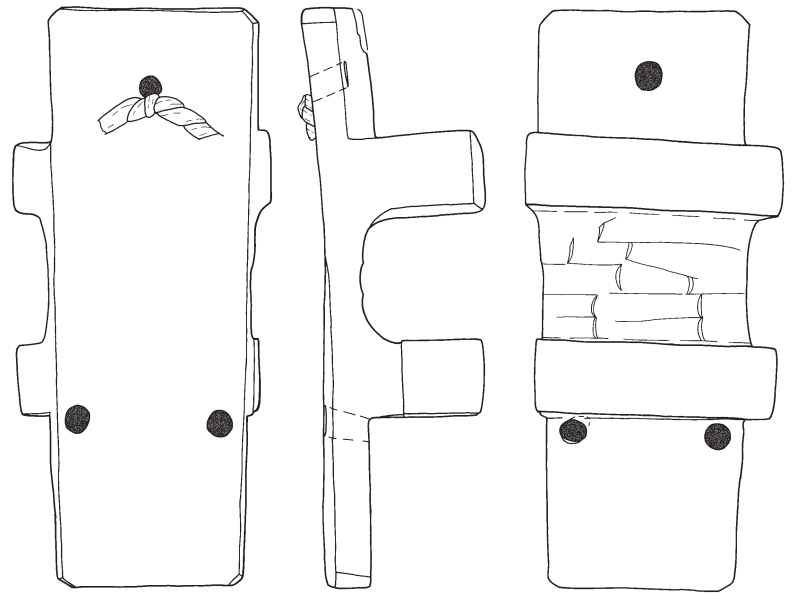
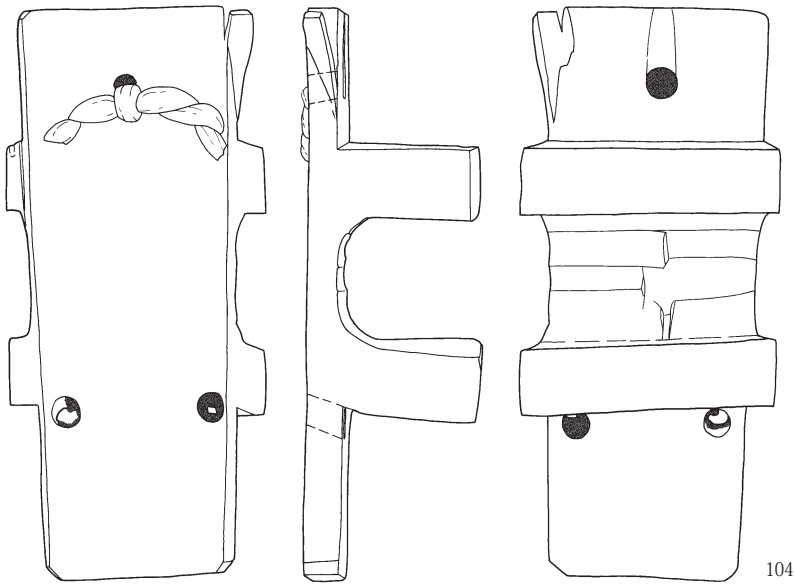
透き漆



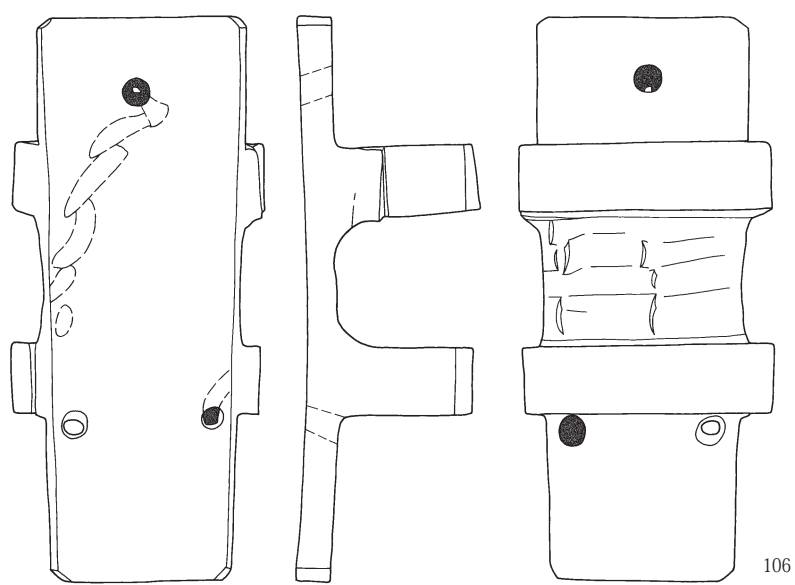
第35図 1号建物出土遺物(16) 木製品類



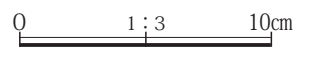
第36図 1号建物出土遺物(17) 木製品類



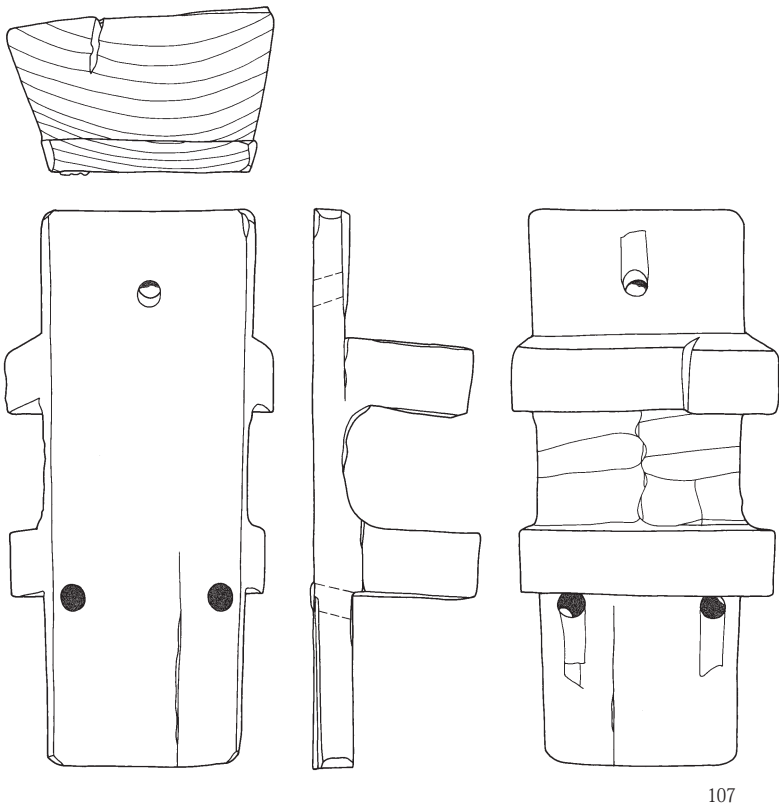
105



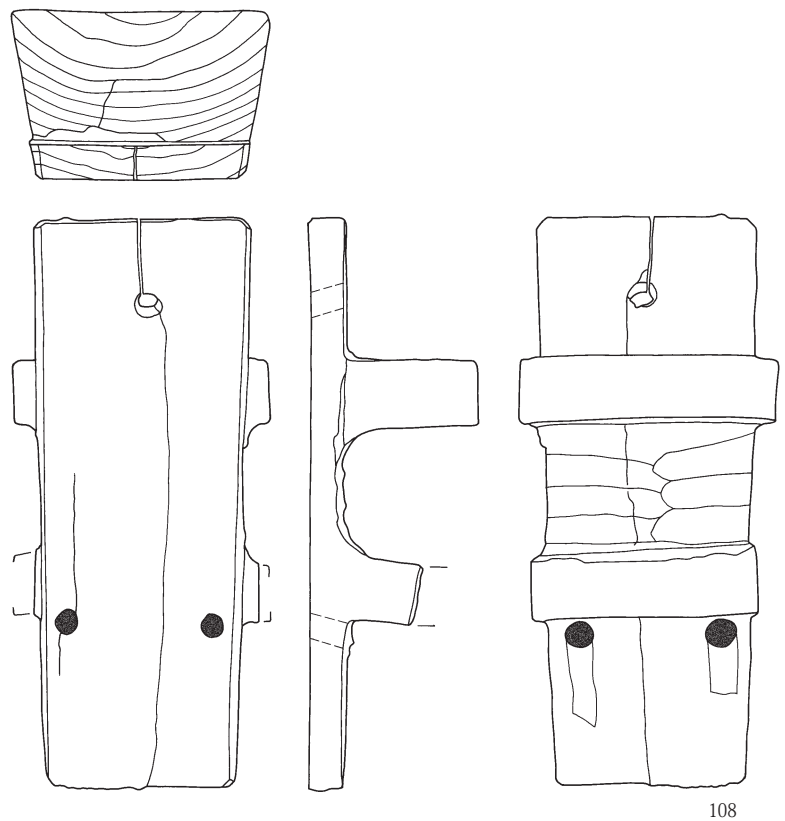
106



第37図 1号建物出土遺物(18) 木製品類



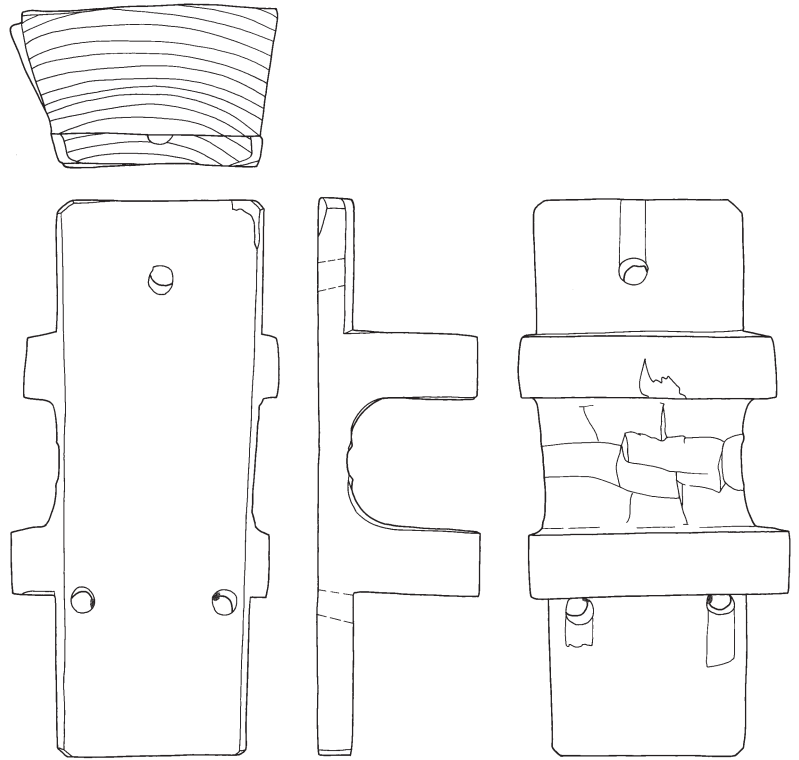
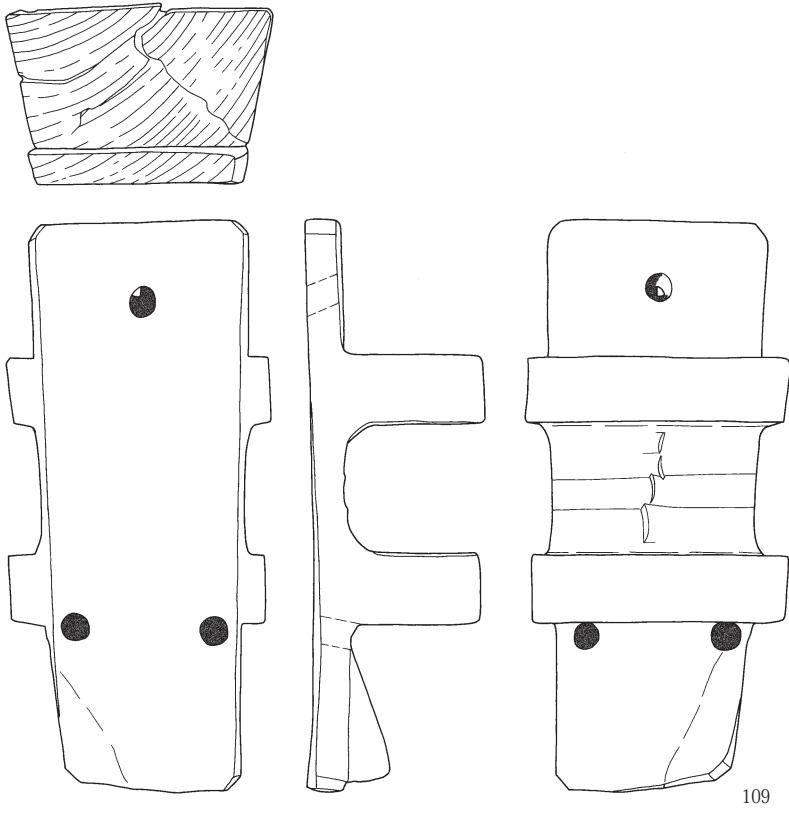
107



108

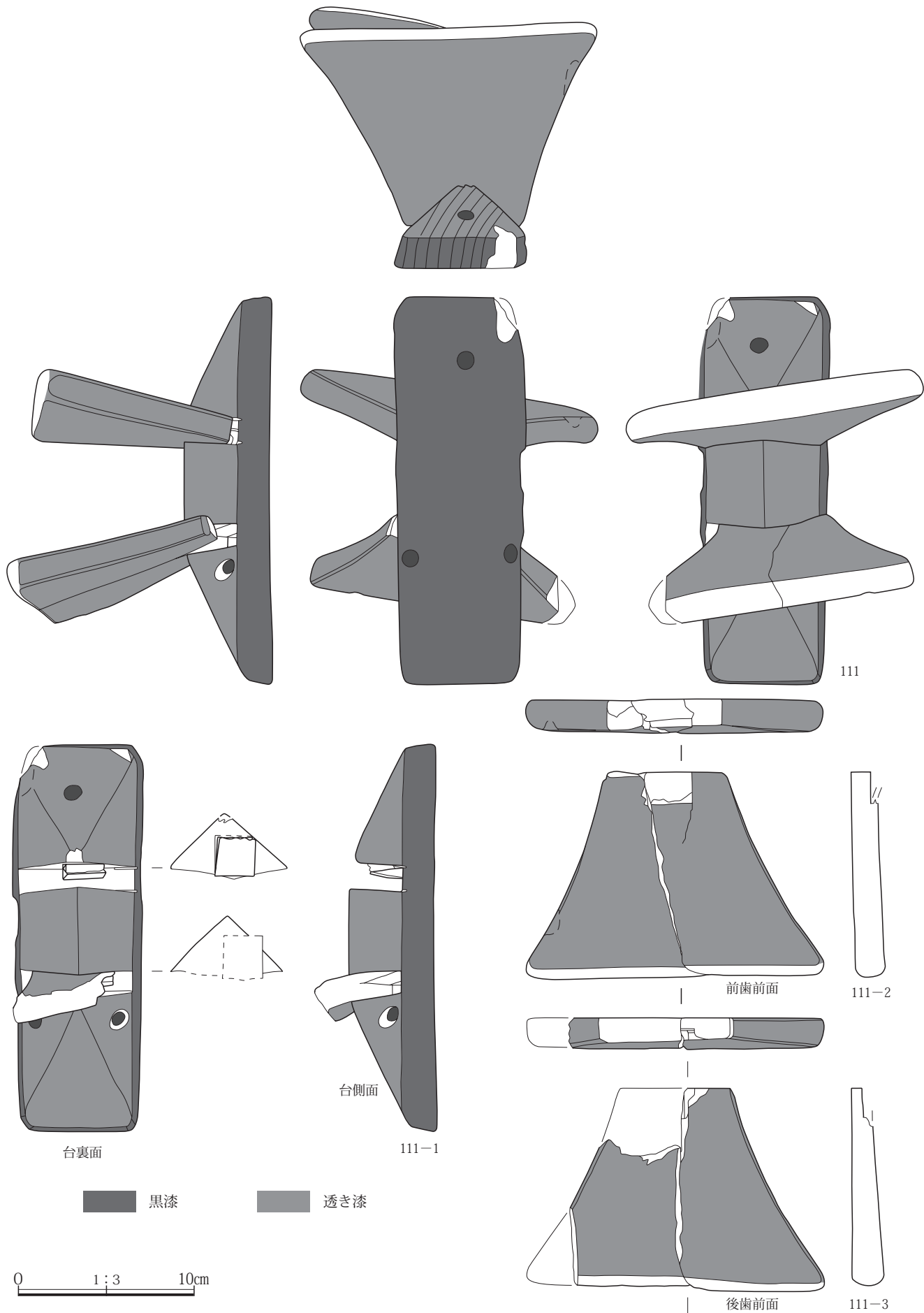
0 1:3 10cm

第38図 1号建物出土遺物(19) 木製品類

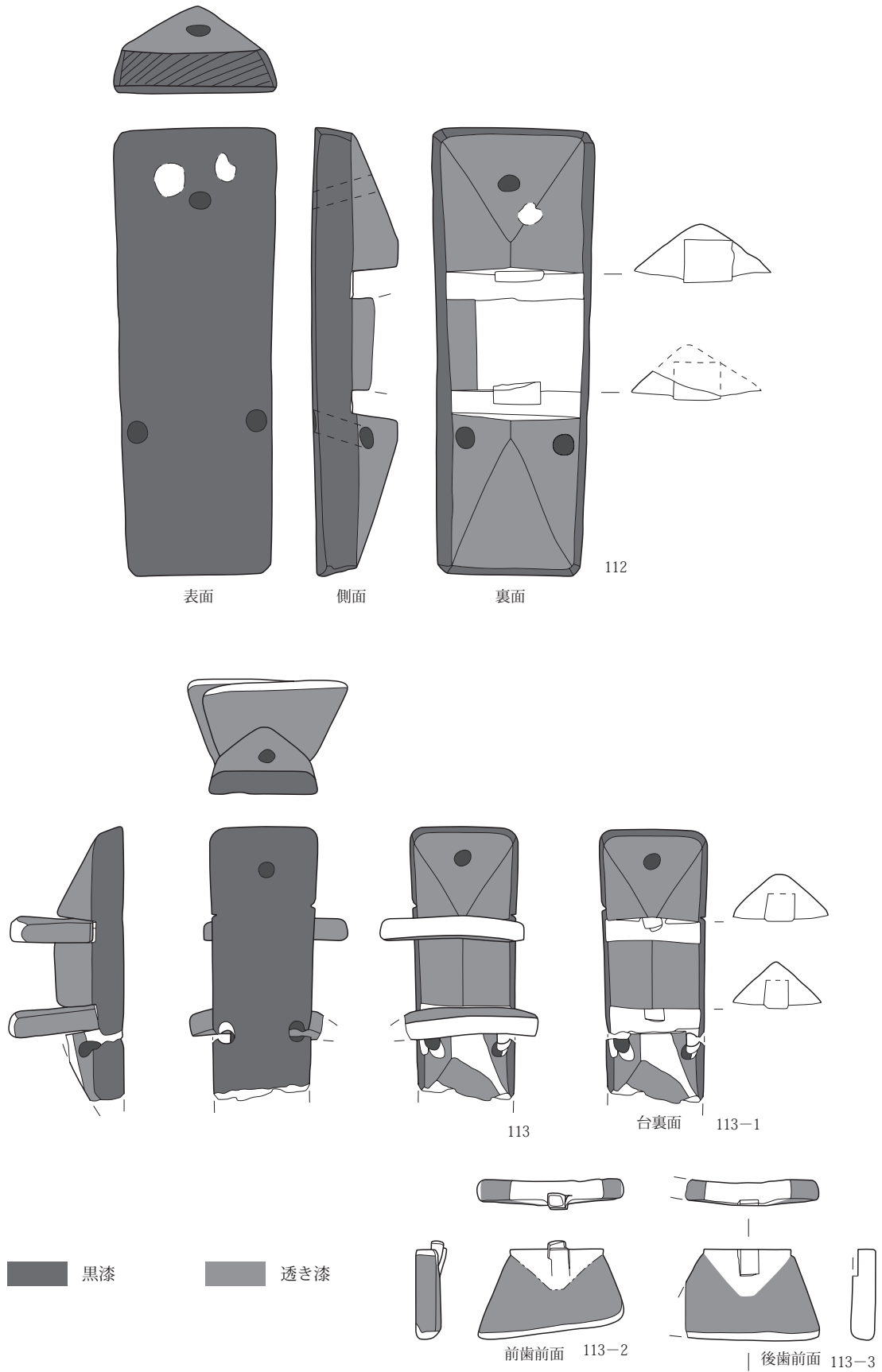


0 1:3 10cm

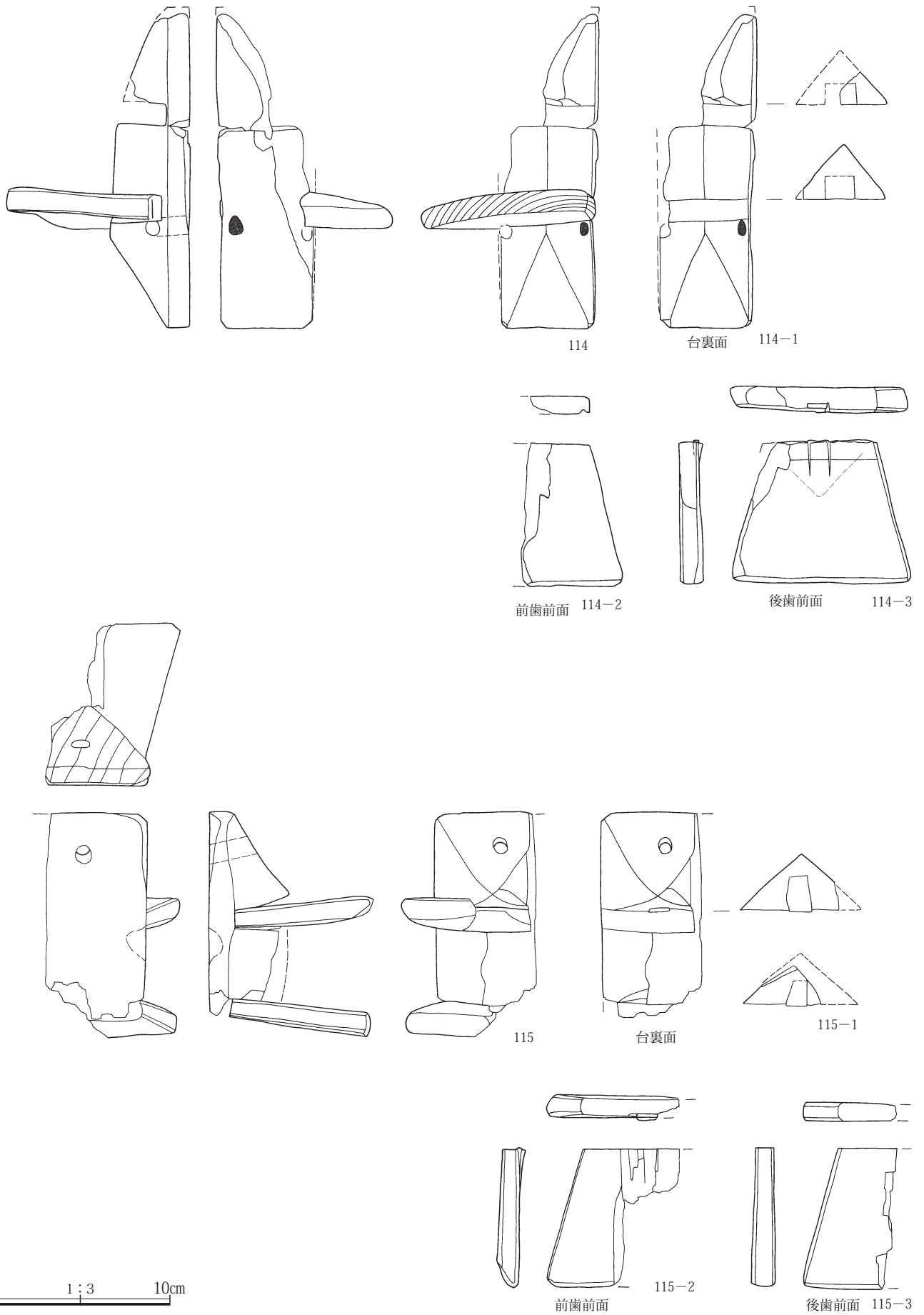
第39図 1号建物出土遺物(20) 木製品類



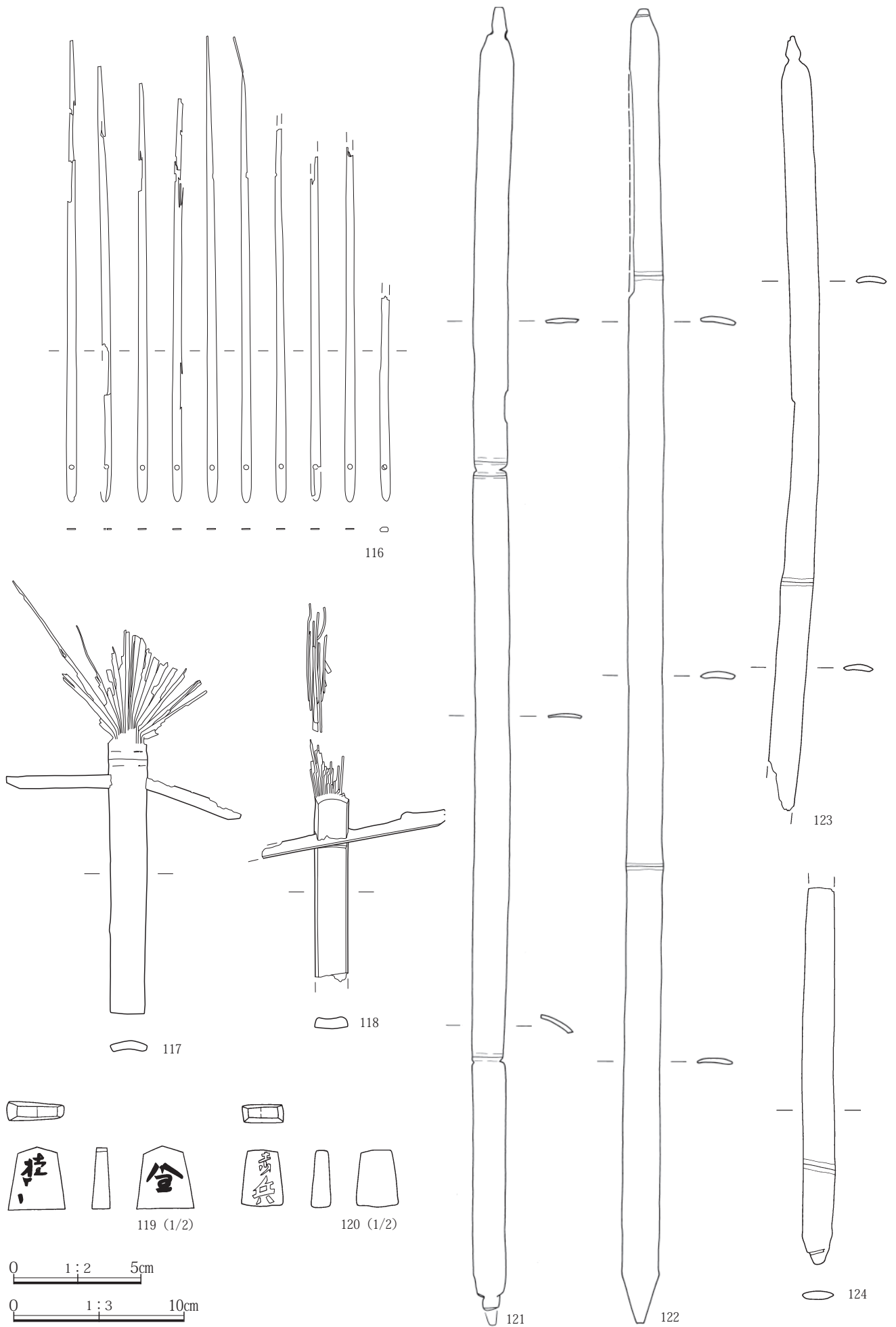
第40図 1号建物出土遺物(21) 木製品類



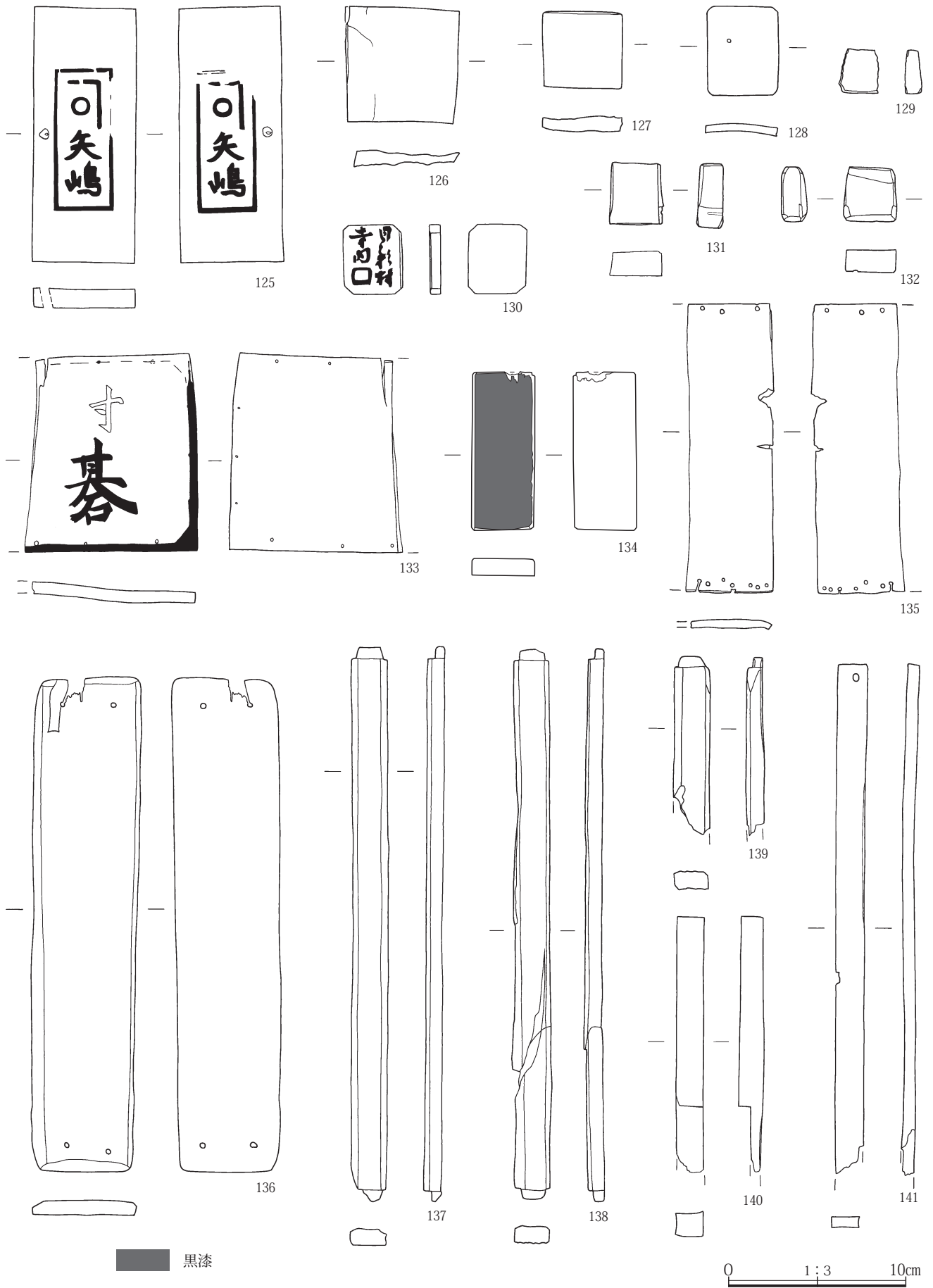
第41図 1号建物出土遺物(22) 木製品類



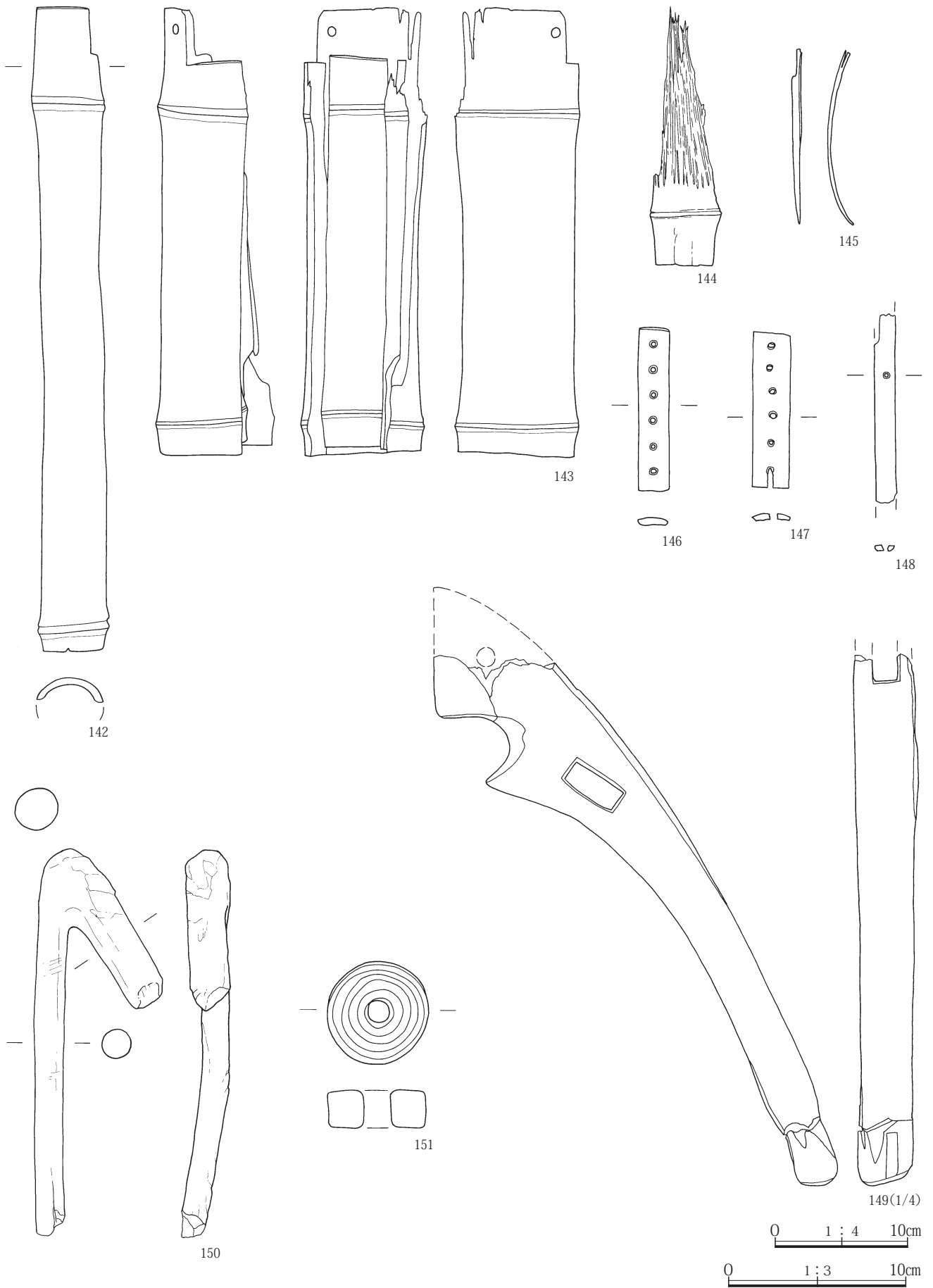
第42図 1号建物出土遺物(23) 木製品類



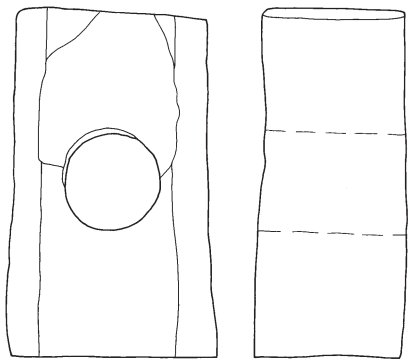
第43図 1号建物出土遺物(24) 木製品類



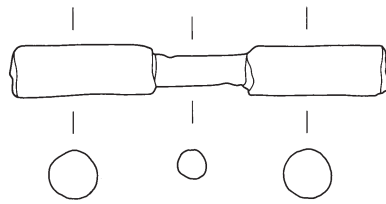
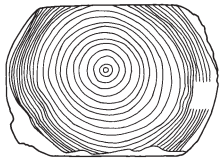
第44図 1号建物出土遺物(25) 木製品類



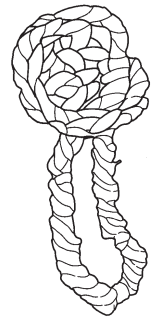
第45図 1号建物出土遺物(26) 木製品類



152(1/6)



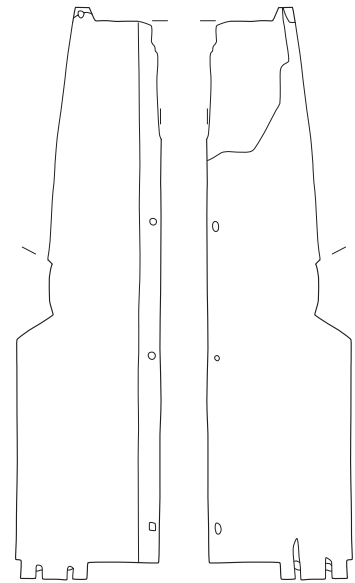
153



154



155



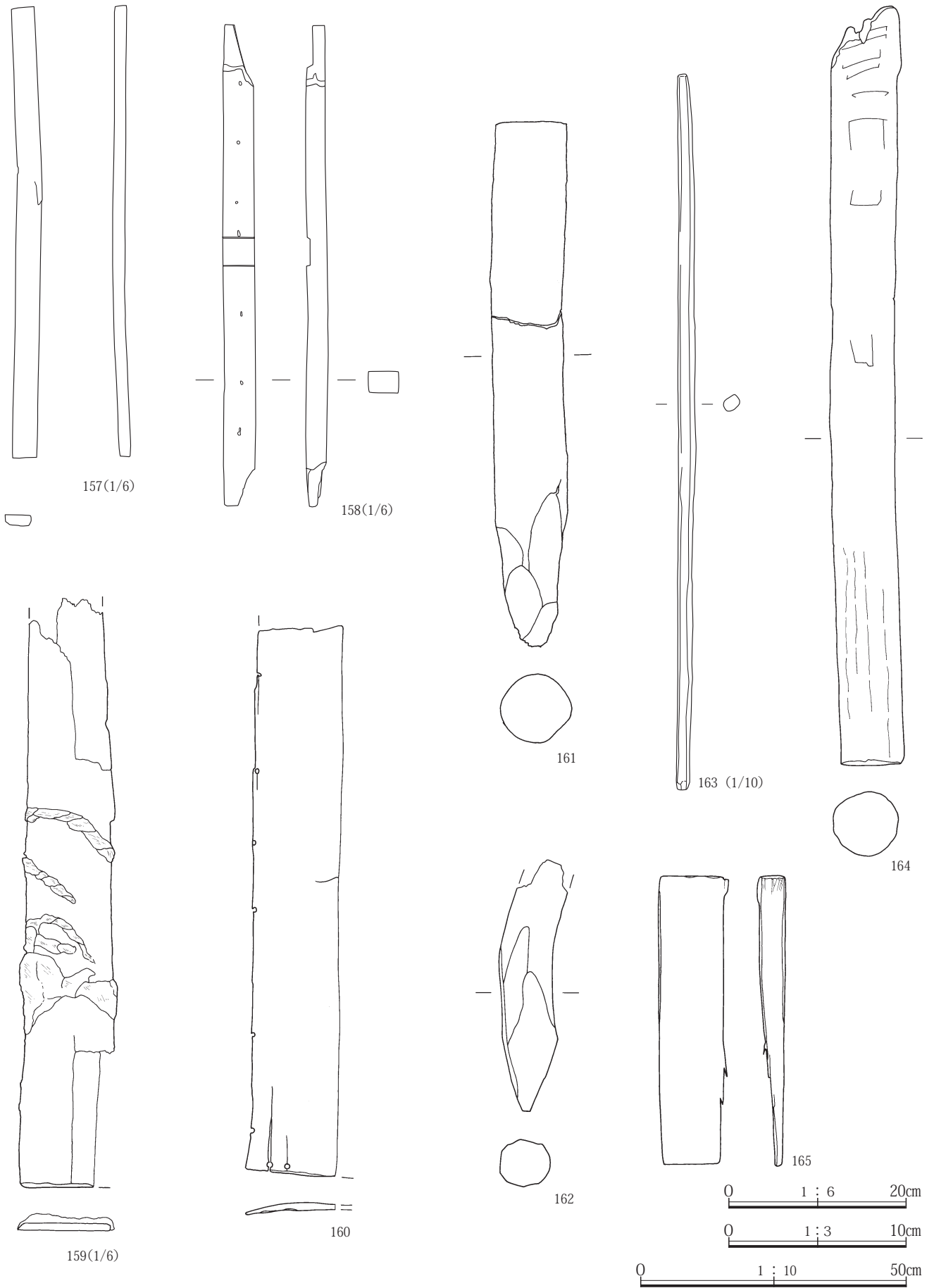
156(1/6)



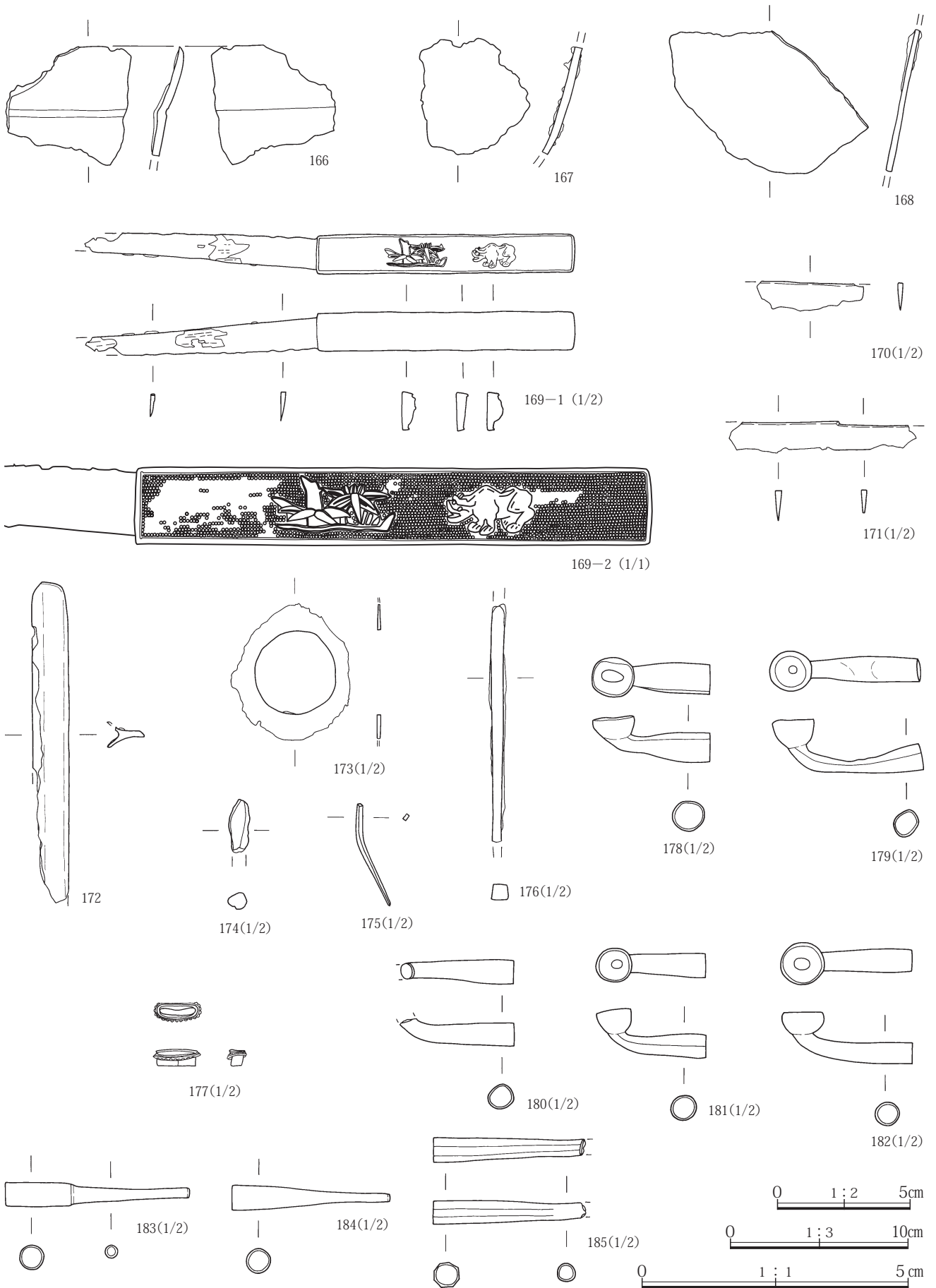
0 1 : 6 20cm

0 1 : 3 10cm

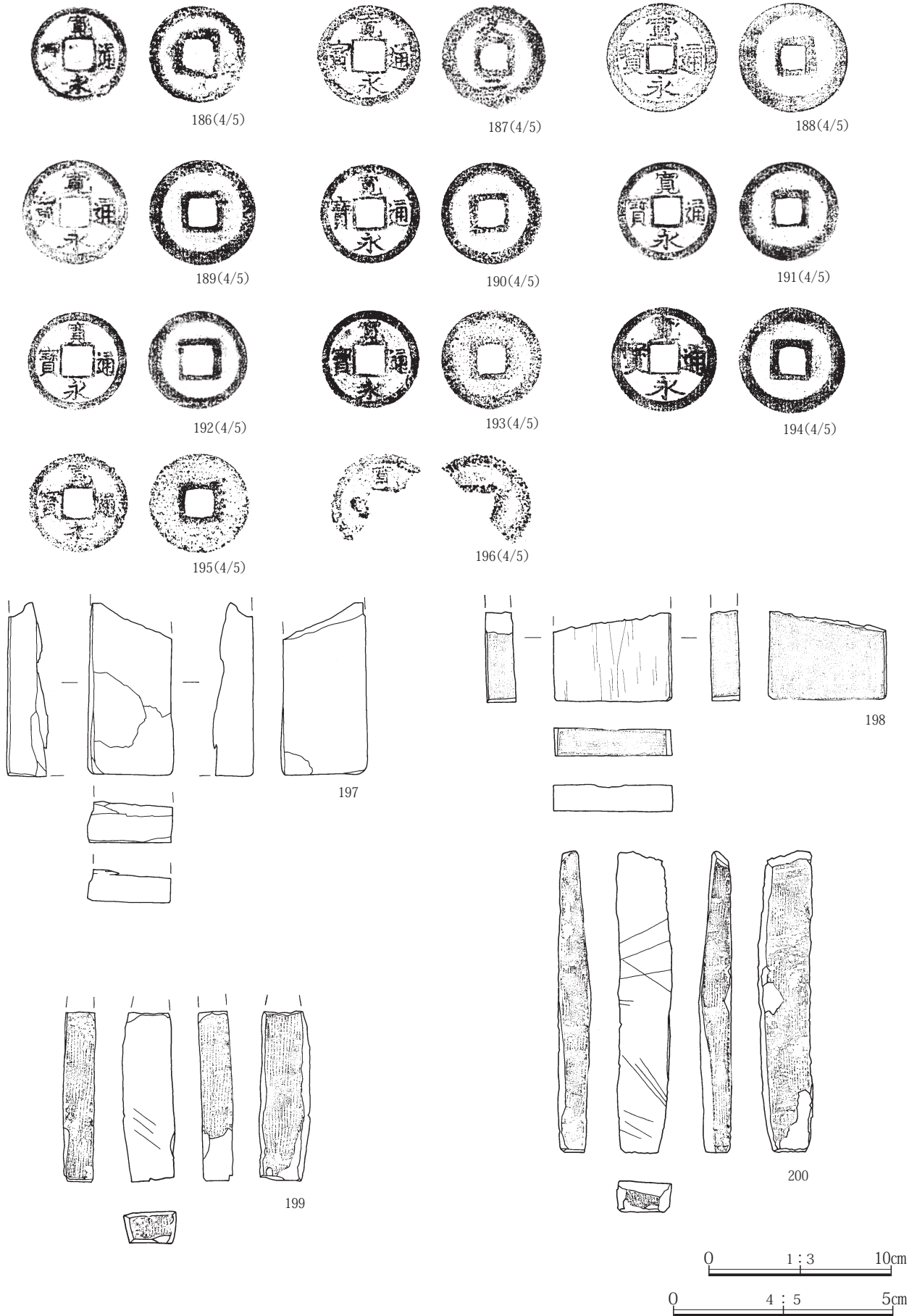
第46図 1号建物出土遺物(27) 木製品類



第47図 1号建物出土遺物(28) 木製品類

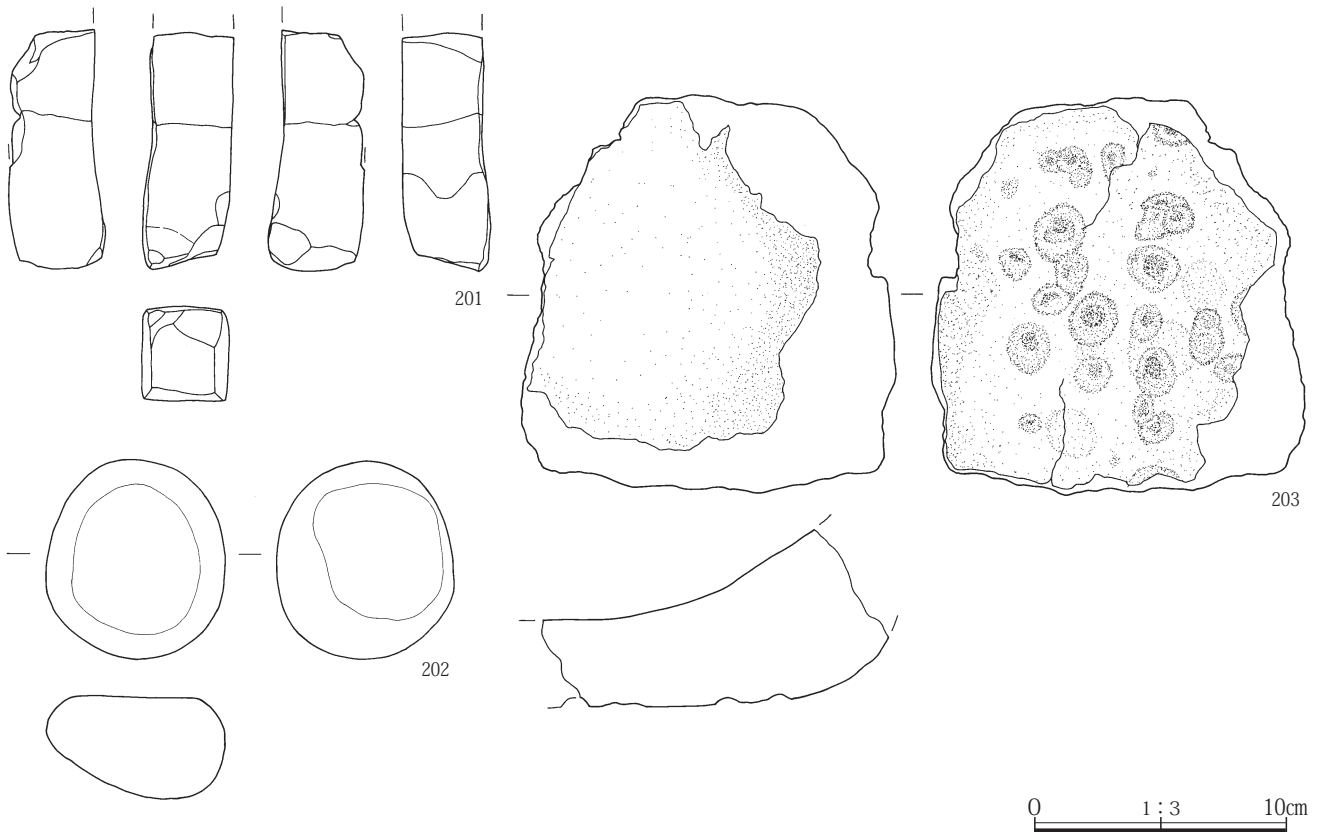


第48図 1号建物出土遺物(29) 金属製品類



第49図 1号建物出土遺物 (30) 金属製品類・石製品類

第3章 検出された遺構と遺物



第50図 1号建物出土遺物(31) 石製品類

第2表 畑計測表

	調査区	グリッド	座標		調査地点	畝間方向	長さ m	幅 m	畝間間隔 cm	検出面積 ㎡	畑面積 ㎡
			X =	Y =							
1号畑	33	S・T-24・25	61,393 ~ 61,400	-106,272 ~ -106,279	H24-33区西	N-50°-W	(3.3)	(7.0)	50.8	19.9	
2号畑	33	K~Q-16~22	61,360 ~ 61,388	-106,243 ~ -106,267	H24-33区	N-45°-W	(27.0)	(18.0)	41.5	341.7	
3号畑	33	E~H-17~20	61,366 ~ 61,378	-106,218 ~ -106,230	H24-33区	N-44°~48°-W	(14.6)	(5.0)	51.3	87.6	
4号畑	33	E~M-12~19	61,347 ~ 61,374	-106,219 ~ -106,250	H24-33区	N-54°-W	23.3	24.6	38.8	517.0	570.0
5号畑	33	I~M-10~13	61,336 ~ 61,352	-106,233 ~ -106,250	H24-33区	N-31°-E	(12.6)	(17.2)	45.0	144.9	
6号畑	32	W~Y-10~14	61,330 ~ 61,367	-106,188 ~ -106,233	H23・24-33区	N-54°-W	(37.2)	(34.4)	39.0	6号畑-1	
	33	A~I-8~17								6号畑-2	
7号畑	33	F~J-6~10	61,320 ~ 61,337	-106,220 ~ -106,239	H24-33区	N-35°-E	(13.0)	(18.5)	45.0	202.5	
8号畑	33	N・O-8・9	61,329 ~ 61,335	-106,254 ~ -106,259	H24-33区南①	N-62°-W	(5.1)	(3.6)	39.0	9.4	
9号畑	33	D~M-1~6	61,291 ~ 61,322	-106,215 ~ -106,252	H24-33区	N-58°~60°-W	(38.1)	(28.9)	42.0・47.0	9号畑-1	
					H24-33区南②					9号畑-3	
		H24-33区南③			9号畑-2					145.0	
10号畑	22	P~S-11~13	61,240 ~ 61,250	-106,163 ~ -106,174	H25	N-44°-E	(2.8)	(12.0)	82.3	34.0	

第3表 石垣・土手計測表

	調査区	グリッド	座標		調査地点	方向	長さ m	高さ m	石積み 段数	石積み長 m
			X =	Y =						
1号石垣	33	G・H-5	61,313 ~ 61,315	-106,227 ~ -106,230	H24-33区	N-71°-E	(6.4)	0.7	3	(6.4)
2号石垣	33	K-18・19	61,372 ~ 61,375	-106,241 ~ -106,243	H24-33区	N-33°-E	(9.6)	0.3	1	(3.1)
1号土手	33	E~H-16~20	61,362 ~ 61,377	-106,217 ~ -106,232	H24-33区	N-45°-W	(18.0)	1.3		
2号土手	33	G~I-10~14	61,337 ~ 61,354	-106,226 ~ -106,236	H24-33区	N-32°-E	(18.2)	0.4		

第4表 円形平坦面計測表

	調査区	グリッド	座標		調査地点	畑面	径 m	面積 ㎡
			X =	Y =				
1号平坦面	33	D-14	61,353 ~ 61,356	-106,212 ~ -106,214	H24-33区	6-1号畑	2.2	3.7
2号平坦面	33	O-19・20	61,375 ~ 61,377	-106,257 ~ -106,259	H24-33区	2号畑	1.3	1.2

(2) 畑

検出された畑は計10区画で、畑の畝間にはAs-Aが直接被覆し、その上に天明泥流が堆積する。各区画の畑は、北東側の山手側が高く、南西および南東方向に暖傾斜する地形を利用し、地形に即して段差を持ちつつ平坦面を造り出している。また、各畑面に残る畝間の方向は、等高線に併走するものと、直行するものとが存在する。

以下、各畑ごとに記述する。

1号畑 (第52・53図、第2表、PL.10)

平成24年度調査において、33区西とした調査地点で天明泥流下に検出した。

位置：国道145号の北東側で、中グリッド33区の北西端に位置し、本畑の北西側に1号建物が、南東側に2号畑がある。

グリッド：33区S・T-24・25

検出状況：天明泥流下に、畝間がAs-Aで埋没した状態で検出された。調査地点が狭いため、本畑の区画等の全容は不明。

畝間方向：N-50°-W

規模：長さ(3.3)m、幅(7.0)m、畝間間隔50.8cm。

面積：検出面積19.9m²。

畑面の状況：天明泥流下面には、大小の礫や自然木が散乱し、その下にAs-Aで埋没した畝間が確認され、狭い調査地点ではあるが13条の畝間を検出した。

その他：本畑の畝間方向と、本畑の南東側にある2号畑の畝間方向とがほぼ同一方向であることから、同一区画の畑である可能性をもつが、その間に13mの未調査部分があり、現状では異なる畑の区画として扱った。

2号畑 (第52・53図、第2表、PL.5・7)

平成24年度調査において、33区とした調査地点の北西端で天明泥流下に検出した。

位置：国道145号の北東側で、中グリッド33区の北西寄りに位置し、本畑の北西側に1号畑があり、南東側に4号畑が接する。

グリッド：33区K~Q-16~22

検出状況：天明泥流下に、畝間がAs-Aで埋没した状態で検出された。区画の南東辺は確認できたが、他の辺

は確認できず、畑の区画規模は不明。

畝間方向：N-45°-W

規模：長さ(27.0)m、幅(18.0)m、畝間間隔41.5cm。

面積：検出面積341.7m²。

畑面の状況：天明泥流下面には、大小の礫や自然木が散乱し、その下にAs-Aで埋没した畝間が確認された。しかし、天明泥流により畑面の荒れた箇所があり、As-Aの遺存状況の悪い場所では、畝間の検出は困難であった。特に、4号畑と接する南東辺の南側は大きく凹み、荒れている。畑面は緩い緩斜面で、畝間は37条を検出でき、概ね直線的。接する4号畑の畝間方向に比べ、本畑の畝間方向はやや北側に振れており、畝間間隔等のあり方も異なる。なお、部分的に畝間と畝間の間に同方向の畝間を確認できる箇所があり、その関係は不明。

その他：4号畑と接する南東辺は、北側に2号石垣が、その南側は2号石垣から続く僅かな段差によって区画され、本畑が4号畑よりも高い面にある。また、2号畑の中央付近には、2号円形平坦面が検出されている。

3号畑 (第54・55図、第2表、PL.6)

平成24年度調査において、33区とした調査地点の北東端で天明泥流下に検出した。

位置：国道145号の北東側で、中グリッド33区の北東寄りに位置し、本畑の南西側に4号畑が接する。

グリッド：33区E~H-17~20

検出状況：天明泥流下に、畝間がAs-Aで埋没した状態で検出された。区画の南西辺は確認できたが、他の辺は確認できず、畑の区画規模は不明。

畝間方向：N-44~48°-W

規模：長さ(14.6)m、幅(5.0)m、畝間間隔51.3cm。

面積：検出面積87.6m²。

畑面の状況：As-Aに埋没した畝間が確認された。しかし、天明泥流により畑面の荒れた箇所があり、部分的に検出の困難な場所もあった。畑面は山側から南西側への斜面で、畝間は9条を検出できたがやや蛇行ぎみで、畝間の脇にさらに畝間が併走し、2列単位の畝間の状況であり、確認面では幅広い畝間の様相を呈していた。

その他：4号畑と接する南西辺は、落差のある1号土手(段差)によって区画され、本畑が4号畑よりもかなり高い面にある。

4号畑（第54～56図、第2表、PL. 5～8）

平成24年度調査において、33区とした調査地点のほぼ中央で天明泥流下に検出した。

位置：国道145号の北東側で、中グリッド33区の中央北東寄りに位置し、本畑の北西側に2号畑、北東側に3号畑、南西側に5号畑、南東側に6号畑が接する。

グリッド：33区 E～M-12～19

検出状況：天明泥流下に、畝間がAs-Aで埋没した状態で検出された。四方を接する各畑との境はほぼ確認され、本畑の区画等の全容を明らかとすることができた。その結果、概ね正方形に近い区画をなす畑である。

畝間方向：N-54°—W

規模：長さ23.3m、幅24.6m、畝間間隔38.8cm。

面積：検出面積517.0㎡、区画面積570㎡と推定。

畑面の状況：天明泥流下面には、大小の礫や自然木が散乱し、その下にAs-Aで埋没した畝間が確認された。しかし、本畑の南東半には、天明泥流により畑面の荒れた箇所が多くあり、As-Aの遺存状況の悪い場所では、畝間の検出は困難であった。逆に、As-Aの遺存状況の良い場所では、As-Aが酸化している状況もあった。畑面は緩やかな斜面であるが、北東辺側は傾斜がややきつくなる。北東側に接する2号畑の畝間方向に比べ、本畑の畝間方向はやや西側に振れ、畝間間隔等のあり方も異なる。また、南西側に接する5号畑の畝間方向は、本畑の畝間方向とは90°異なる。なお、畝間は、畝間の脇にさらに畝間が併走した2列単位の畝間の状況（畝側の列はやや細く浅い傾向）で、かなり密に走行するが、確認面では幅広い畝間の様相を呈していた。

その他：2号畑と接する北西辺は、北側に2号石垣が、その南側は2号石垣から続く僅かな段差によって区画され、本畑が2号畑よりも低い面にある。また、3号畑と接する北東辺は、1号土手の段差によって区画され、本畑が3号畑よりもかなり低い面にある。5号畑と接する南西辺は、西側は段差で区画されて本畑が低く、南側は5号畑と同一面にある。さらに、6号畑と接する南東辺では、南側は2号土手の段差で本畑が高い面であり、北側は1号土手から回り込む斜面が続き、本畑が低い面となる。なお、1号土手および1号土手から回り込む斜面、2号石垣、2号石垣から続く段差の状況を考えると、それらの段差の内側は切り土造成による平坦面であること

がわかる。

5号畑（第60・61図、第2表、PL. 5）

平成24年度調査において、33区とした調査地点の中央南西寄りで天明泥流下に検出した。

位置：国道145号の北東側で、中グリッド33区の中央に位置し、本畑の北東側に4号畑、南東側に6号畑-2と7号畑が接する。

グリッド：33区 I～M-10～13

検出状況：天明泥流下に、畝間がAs-Aで埋没した状態で検出された。区画の北東辺と南東辺は確認できたが、他の辺は確認できず、畑の区画規模は不明。

畝間方向：N-31°—E

規模：長さ(12.6)m、幅(17.2)m、畝間間隔45.0cm。

面積：検出面積144.9㎡。

畑面の状況：天明泥流下面には、大小の礫が多く散乱し、その下にAs-Aで埋没した畝間が確認された。しかし、4号畑と接する北東片付近は、天明泥流により畑面の荒れた箇所が多く、畝間の検出は困難であった。畑面は4号畑から続く緩やかな斜面で、畝間は概ね直線的。4号畑と接する北東辺付近では、畝間の端部が確認されている。また、4号畑との畝間方向は90°異なり、南東側南寄りの7号畑とは同一方向である。なお、一部では畝間の脇にさらに畝間が併走した2列単位の状況で、確認面では幅広い畝間の様相を呈していた。

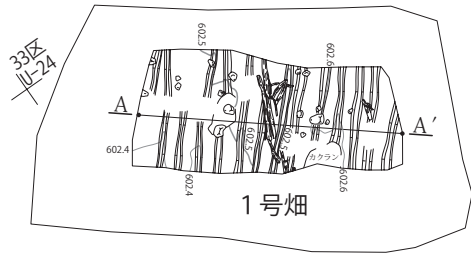
その他：本畑の西側は畑面より1段高くなり、4・7号畑とは同一面で、南東辺北寄りの6号畑-2と接する部分は2号土手の段差によって区画され、本畑が高い面にある。



33区畑(4・5号畑)調査風景 北西から



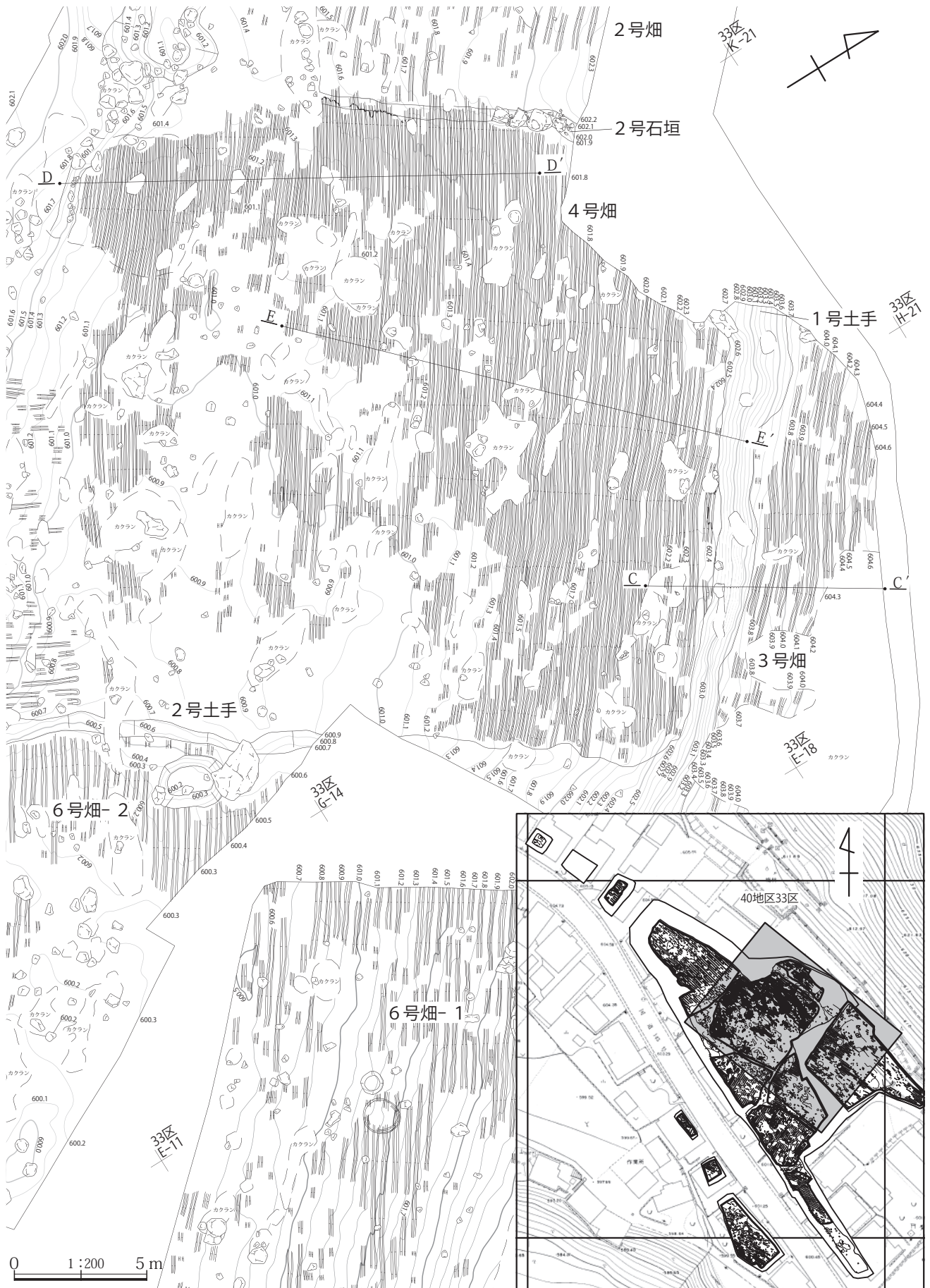
第51図 燧 区画図



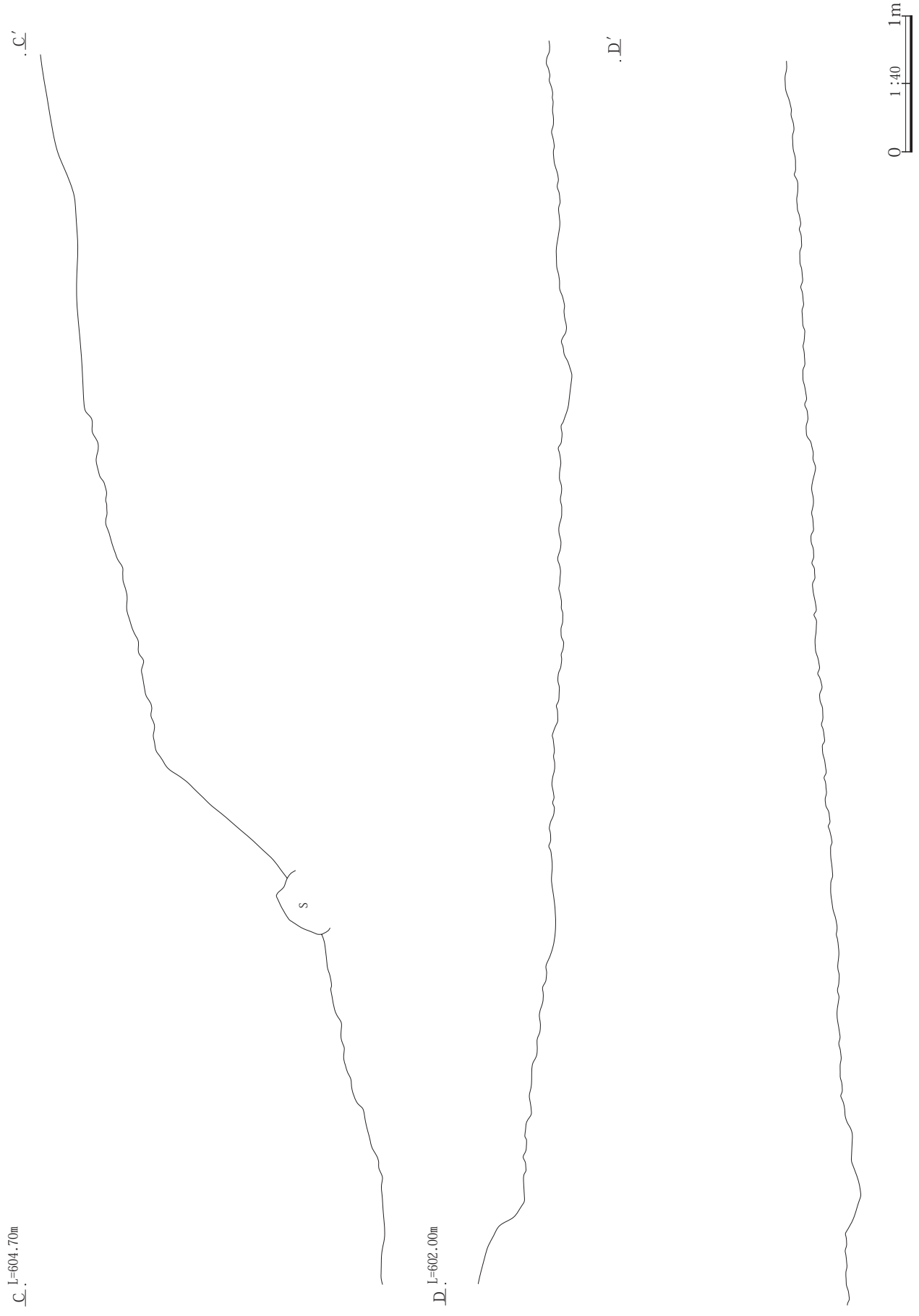
第52図 1・2号畑平面図



第53図 1・2号畑断面図

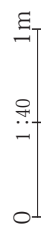
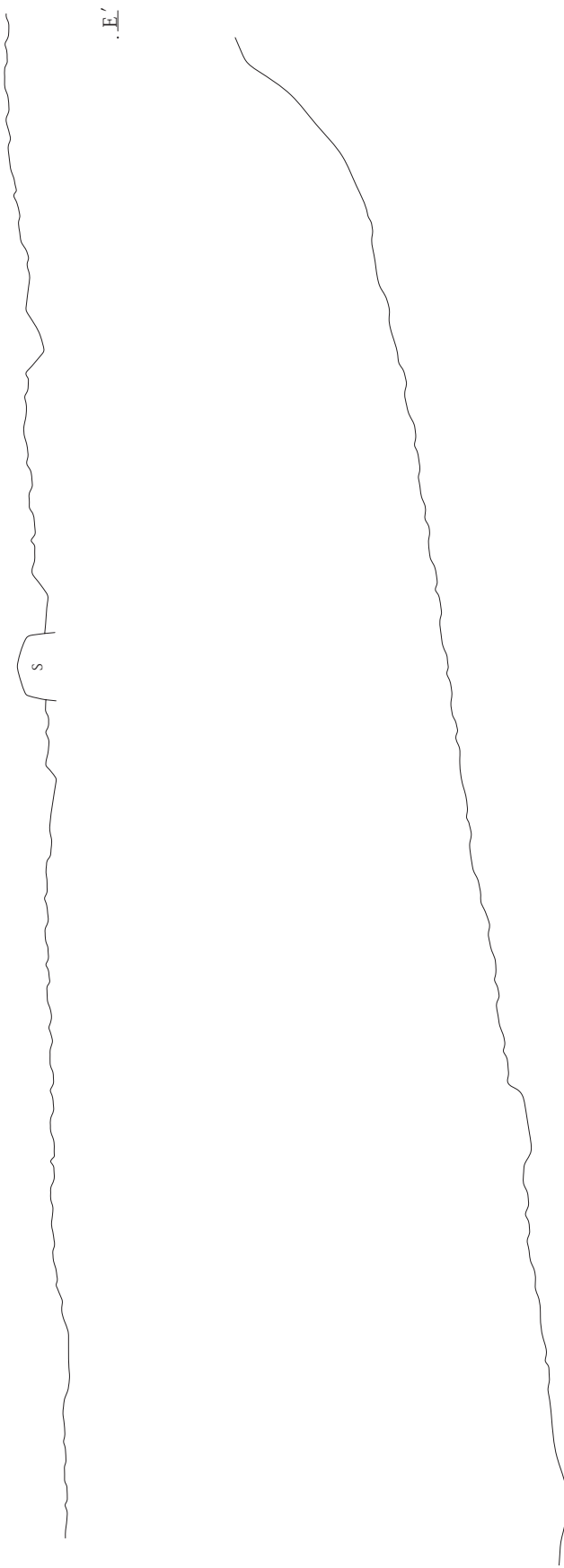


第54図 3・4号畑平面図

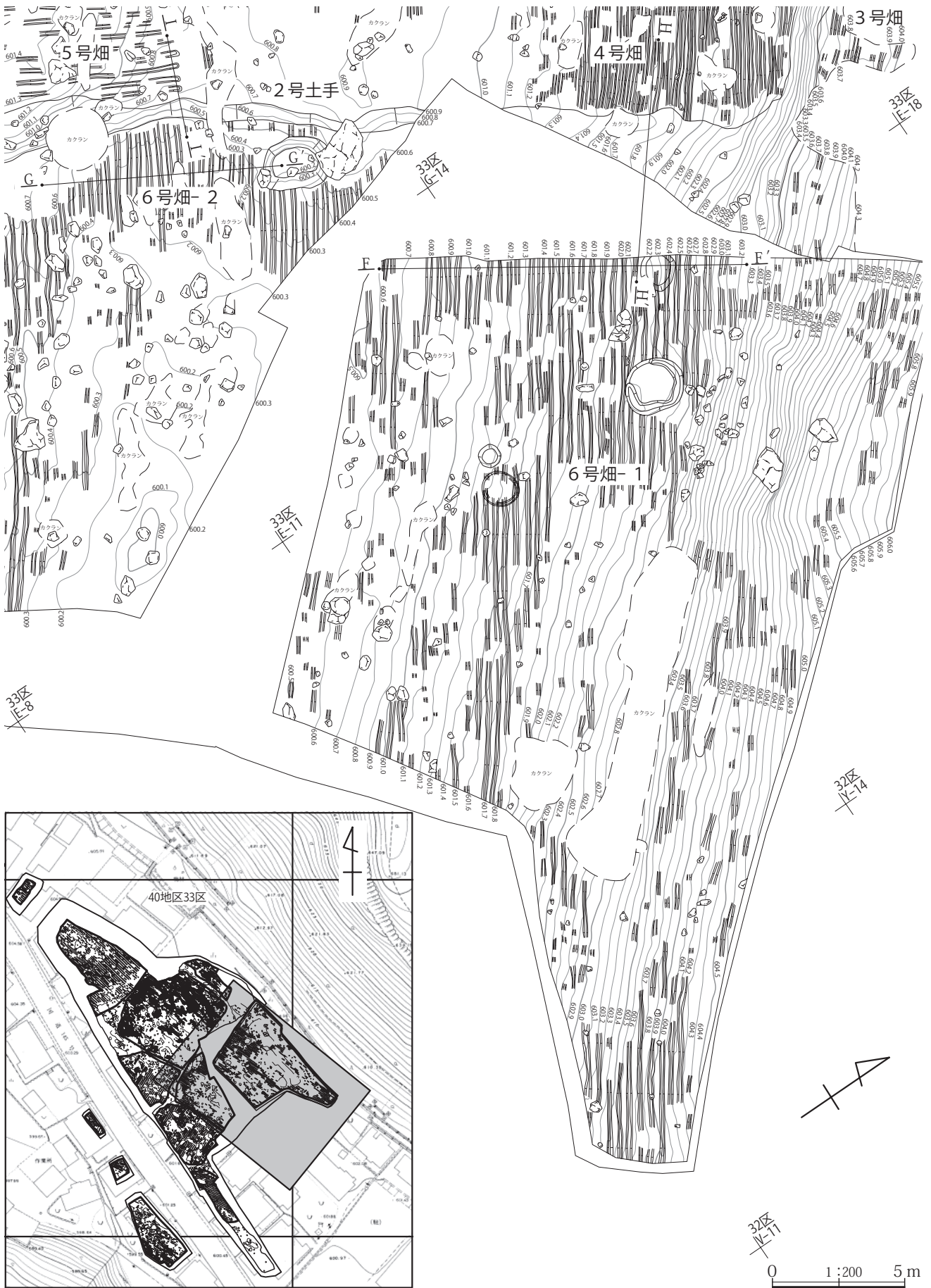


第55図 3・4号畑断面図(1)

E.
L=604.00m

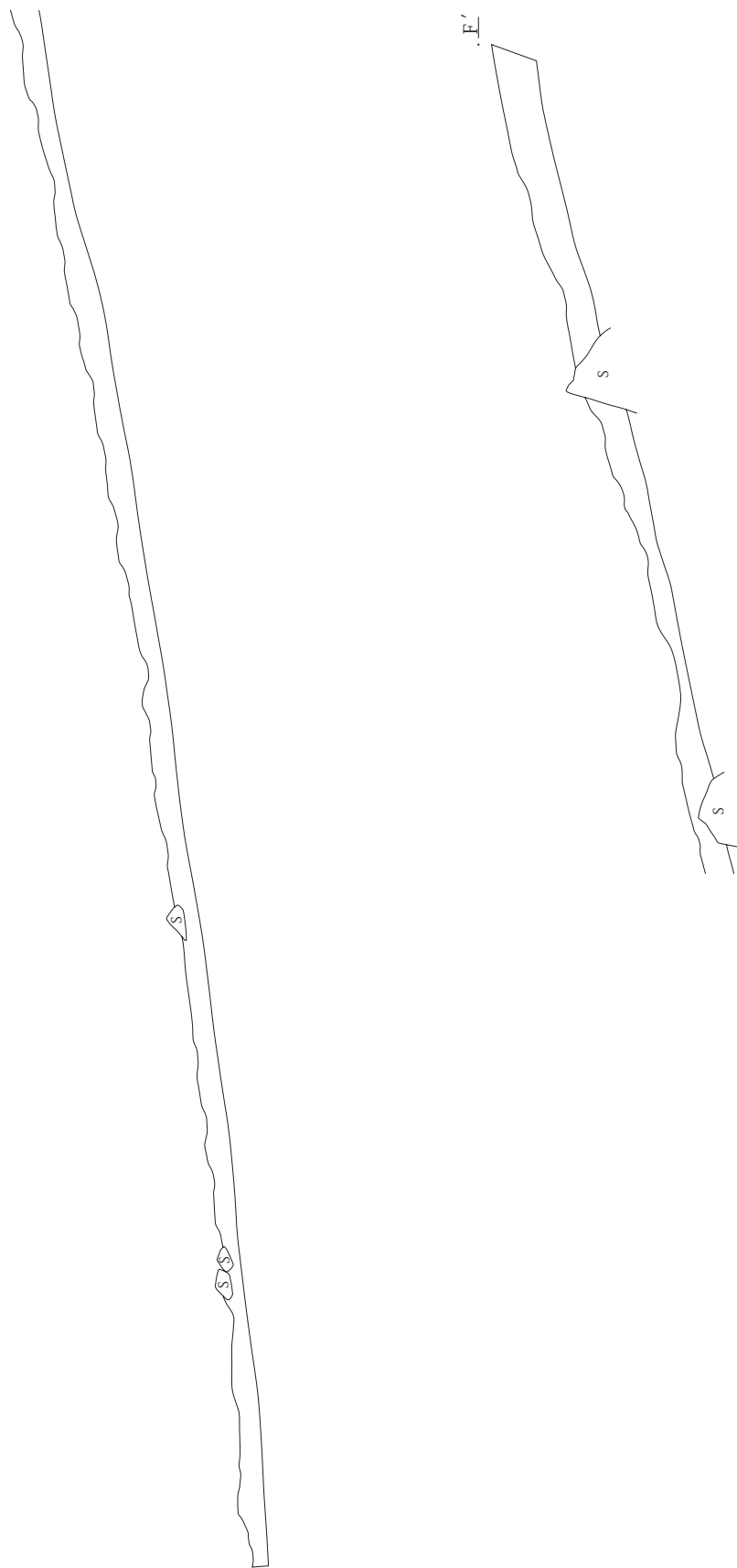


第56図 3・4号堀断面図(2)

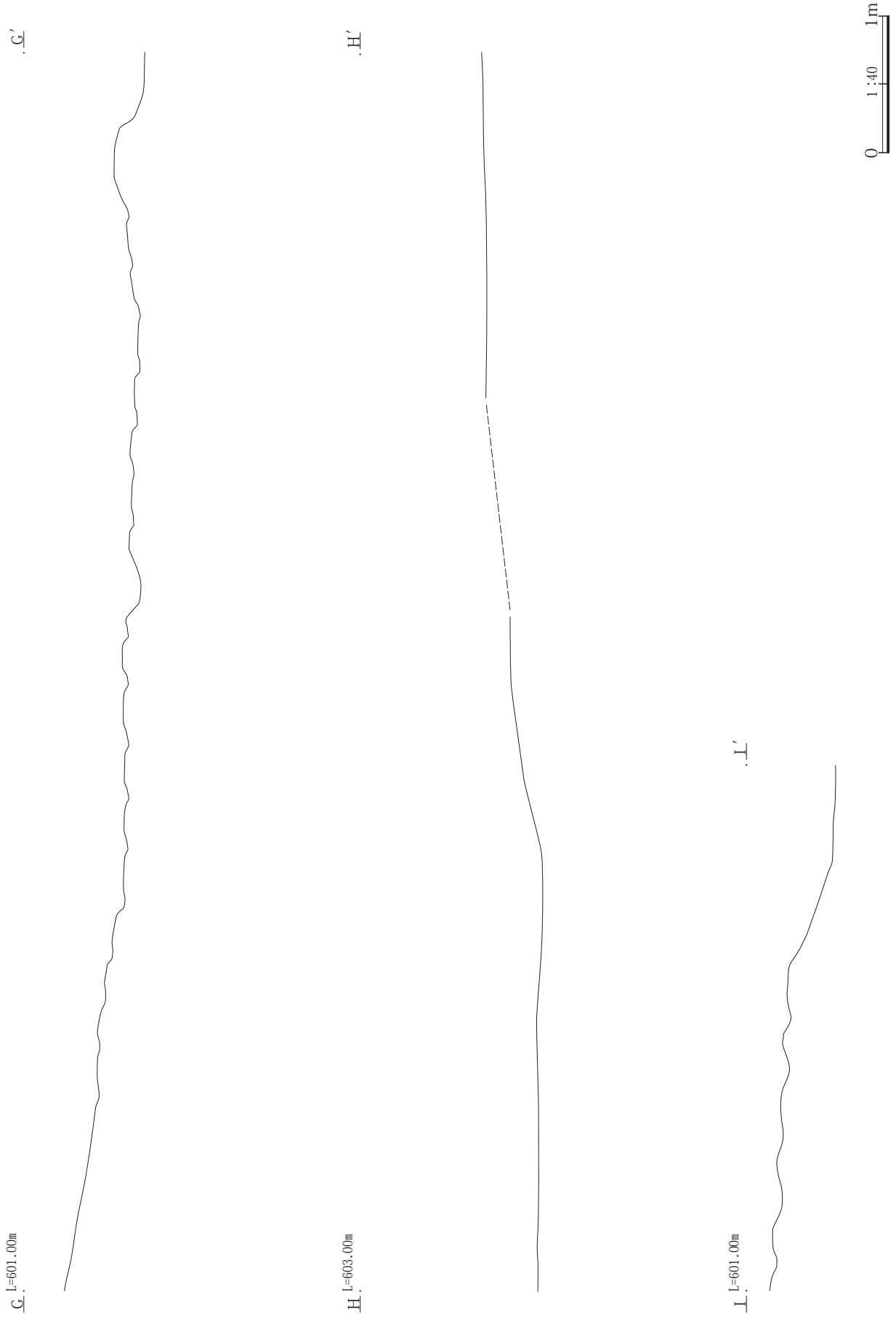


第57図 6号畑-1・2平面図

F.
I-603.30m



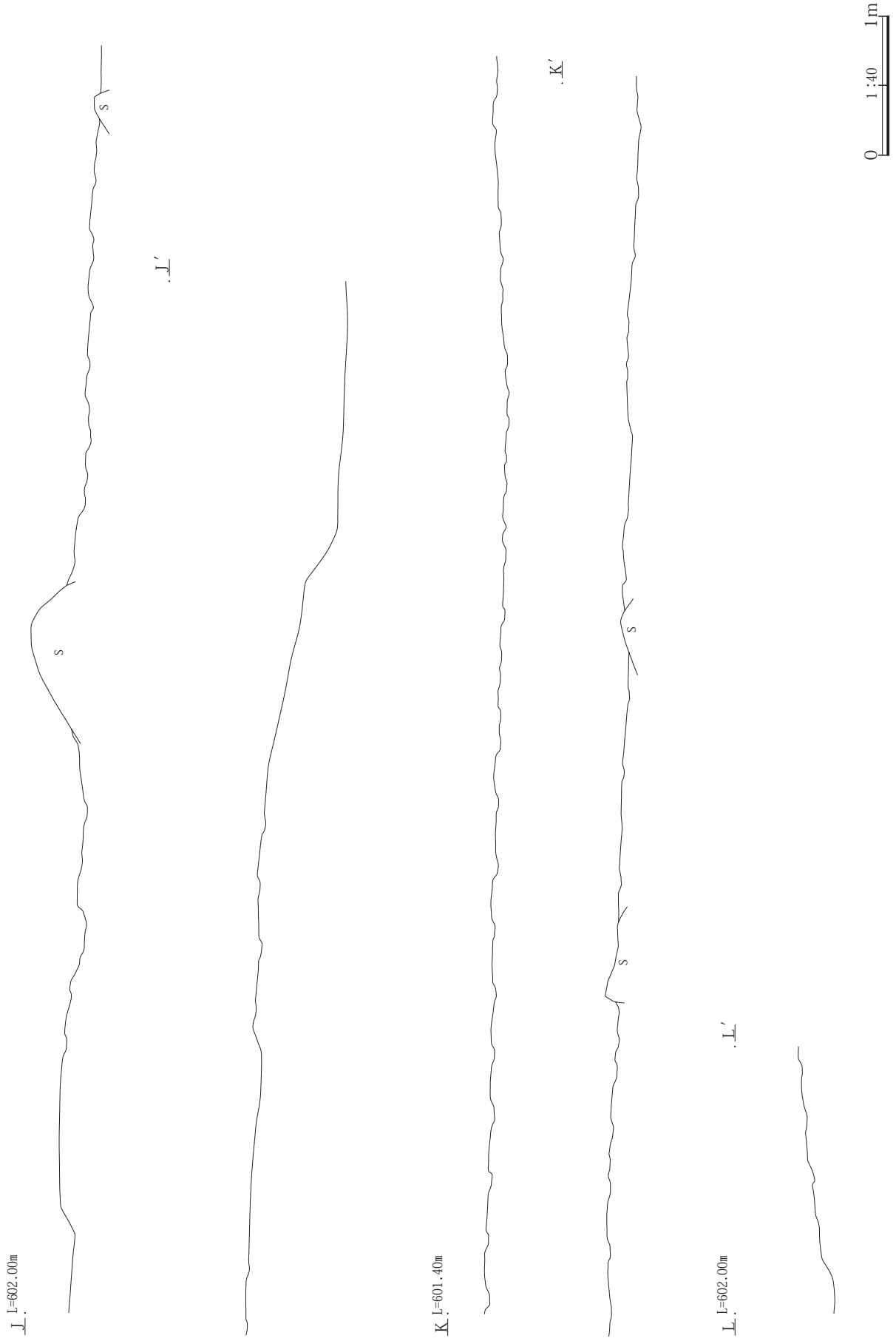
第58図 6号畑-1・2断面図(1)



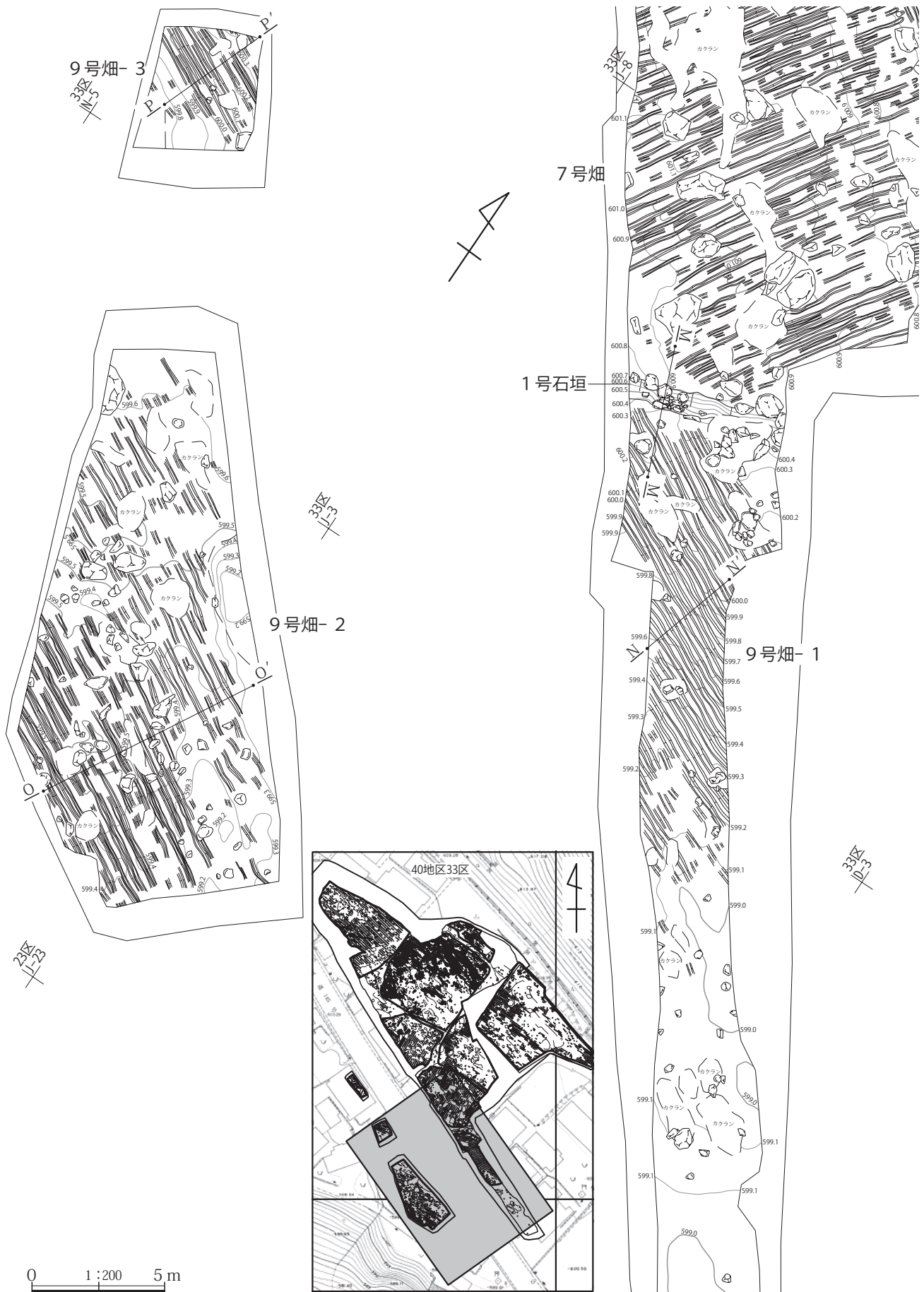
第59図 6号畑-1・2断面図(2)



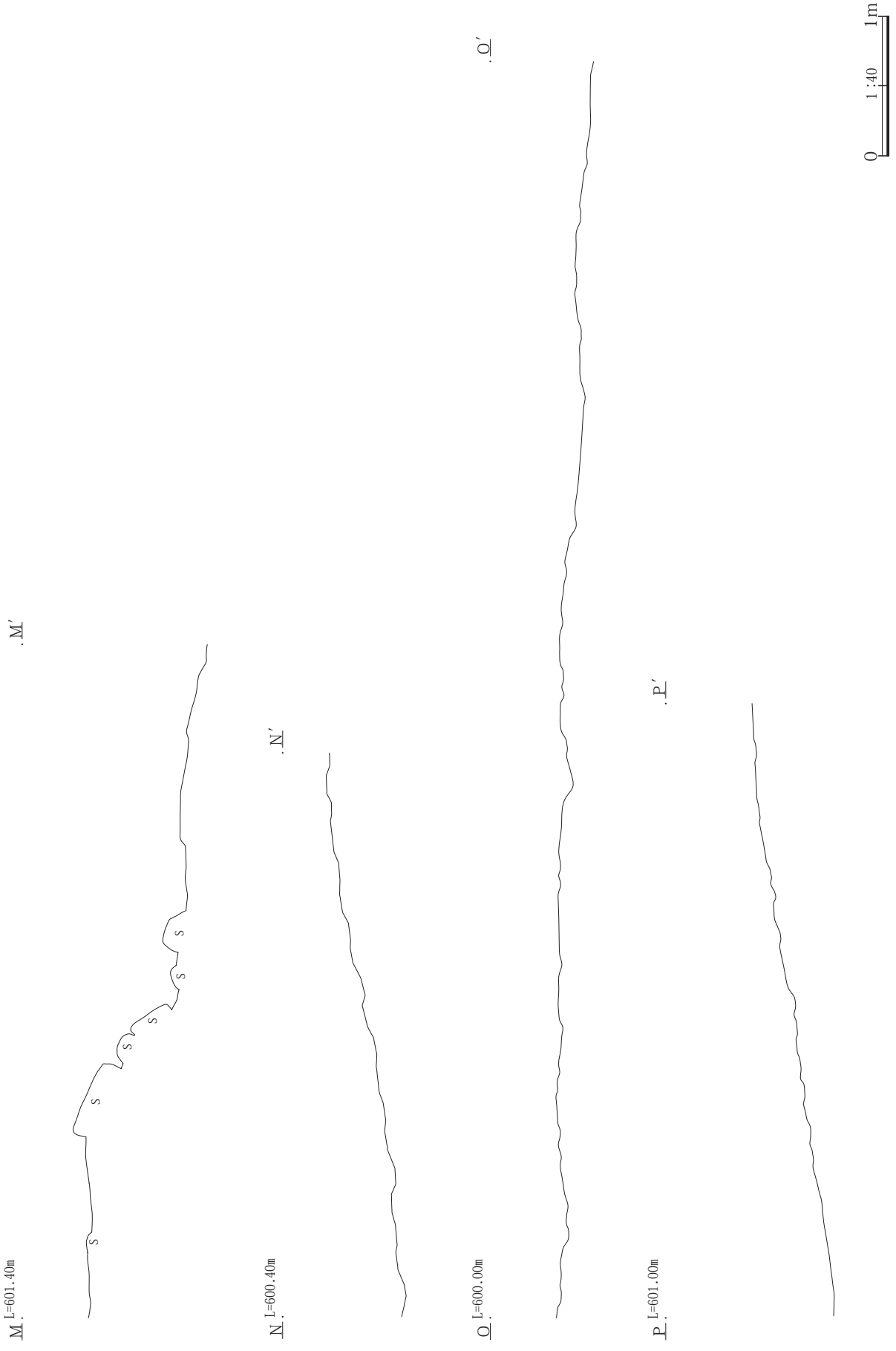
第60図 5・7・8号畑平面図



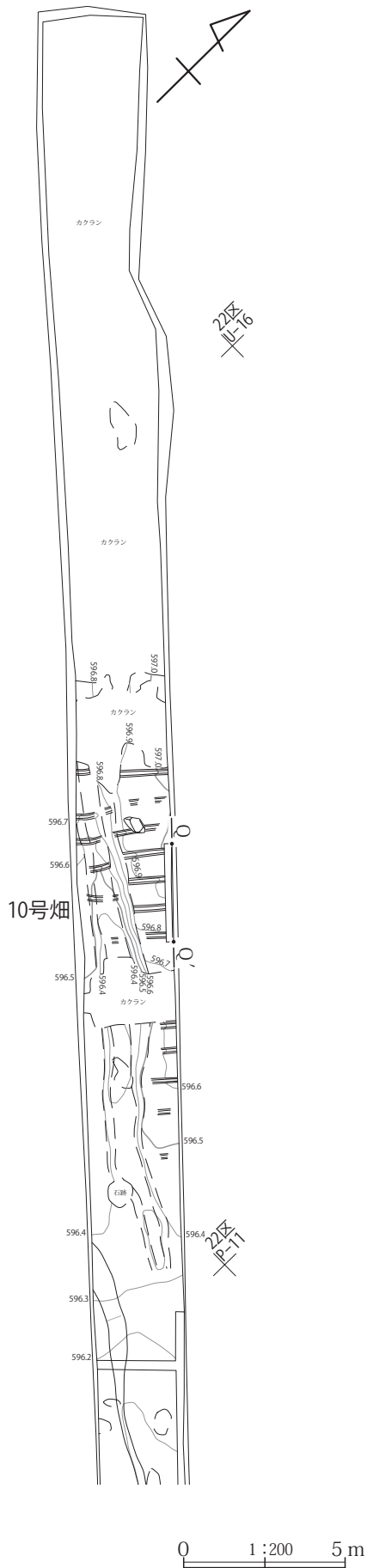
第61図 5・7・8号畑断面図



第62図 9号畑-1・2・3平面図



第63図 9号-1・2・3断面図



6号畑 (第57～59図、第2表、PL. 1～3・5～7)

平成23年度調査(6号畑-1)と、平成24年度調査の33区とした調査地点の中央南東寄り(6号畑-2)で、天明泥流下に検出した。

位置：国道145号の北東側で、中グリッド33区中央東端から中グリッド32区中央西端に跨り、本畑の北西側に4・5号畑、南西側に7号畑が接する。

グリッド：32区W～Y-10～14
33区A～I-8～17

検出状況：天明泥流下に、畝間がAs-Aで埋没した状態で検出された。区画の北西辺の一部と南西辺は確認できたが、他の辺は確認できず、畑の区画規模は不明。

畝間方向：N-54°-W

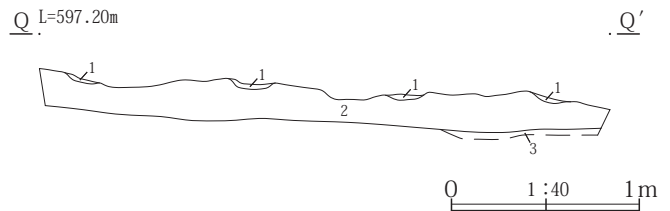
規模：長さ(37.2)m、幅(34.4)m、畝間間隔39.0cm。

面積：検出面積計668.1㎡。

(6号畑-1 489.4㎡、6号畑-2 178.7㎡)

畑面の状況：天明泥流下面には、大小の礫が多く散乱し、その下にAs-Aで埋没した畝間が確認された。また、大型礫には基盤礫が突出しているものもある。畑面には天明泥流で荒れた箇所が多く、As-Aの遺存状況が良好な場所での畝間の検出となった。6号畑-1での畑面は北東側の山際は急傾斜であるが、徐々に緩やかな斜面となり、南側に続く6号畑-2ではより斜面が緩やかとなるが、7号畑と接する南西片付近は高く逆斜面となる。畝間は山際の急傾斜にまで検出され、概ね直線的。本畑と4号畑の畝間方向は同一方向であるが、5・7号畑との畝間方向は90°異なる。

その他：6号畑-2の北西辺で接する4・5号畑とは、



- Q-Q'
- 1 白色軽石 As-A (浅間A軽石)
 - 2 黄褐色土 やや締り強く、不均質に鉄分凝集層を含む。白色・黄色軽石粒、3～5mm大の炭化粒を少量含む。
 - 3 黄褐色土 やや砂質味が強い。地山ローム。

第64図 10号畑平・断面図

2号土手の段差によって区画され、本畑が低い面にある。南西辺で接する7号畑とは、明確な段差がないものの、本6号畑-2の方が低い。また、4号畑と6号畑-1の畑面の状況を断面図Hラインで見ると、1号土手から回り込む斜面により、本6号畑-1の方が高い面にある。なお、6号畑-1の中央西寄りには、1号円形平坦面が検出されている。

7号畑（第60・61図、第2表、PL.5・7）

平成24年度調査において、33区とした調査地点の中央南東寄りで天明泥流下に検出した。

位置：国道145号の北東側で、中グリッド33区の中央南東寄りに位置し、本畑の北西側に5号畑、北東側に6号畑-2、南側に9号畑-1が接する。

グリッド：33区F～J-6～10

検出状況：天明泥流下に、畝間がAs-Aで埋没した状態で検出された。区画の北西辺と北東辺、南辺の3方を確認できたが、残る1辺は確認できず、畑の区画規模は不明。

畝間方向：N-35°-E

規模：長さ(13.0)m、幅(18.5)m、畝間間隔45.0cm。

面積：検出面積202.5㎡。

畑面の状況：天明泥流下面には、特に大型の礫が多く散乱し、その下にAs-Aで埋没した畝間が確認された。また、大型礫には基盤礫が突出しているものもある。畑面は5号畑から続く緩やかな斜面で、畝間は概ね直線的。6号畑-2と接する北東辺付近では、畝間の端部が確認されている。また、5号畑の畝間方向と同一方向にあるが、その区画境は2号土手の段差の延長上にあると思われる。6号畑-2の畝間方向とは90°異なる。なお、一部では畝間の脇にさらに畝間が併走した2列単位の状況（畝側の列はやや細く浅い傾向）で、確認面では幅広い畝間の様相を呈していた。

その他：本畑は5号畑と同一面で、北東辺で接する6号畑-2とは本畑が高い面にある。また、南辺で接する9号畑-1とは、1号石垣を伴う段差によって区画され、本畑が高い面にある。

8号畑（第60・61図、第2表、PL.10）

平成24年度調査において、33区南①とした調査地点で

天明泥流下に検出した。

位置：国道145号の南西側で、中グリッド33区の中央南寄りに位置し、本畑の北東側に5号畑が、南東側に9号畑-3がある。

グリッド：33区N・O-8・9

検出状況：天明泥流下に、畝間がAs-Aで埋没した状態で検出された。調査地点が狭く、区画の南東辺の一部を確認できたが、畑の区画規模は不明。

畝間方向：N-62°-W

規模：長さ(5.1)m、幅(3.6)m、畝間間隔39.0cm。

面積：検出面積9.4㎡

畑面の状況：天明泥流下面には、大小の礫が散乱し、その下にAs-Aで埋没した畝間が確認された。畑面は5号畑から続くと思われる緩やかな斜面で、畝間は概ね直線的。本畑の北東辺を区画する溝（北東から南西方向へ走向）付近には、畝間の端部が確認されている。国道145号を挟んだ5号畑の畝間方向とは90°異なり、南東側の9号畑-3とはほぼ同方向である。

9号畑（第62・63図、第2表、PL.7・11）

平成24年度調査において、33区とした調査地点の南東端（9号畑-1）と、33区南③とした調査地点（9号畑-2）、33区南②とした調査地点（9号畑-3）で、天明泥流下に検出した。

位置：国道145号の北東側で、中グリッド33区南東隅から23区北東隅に跨る9号畑-1と、国道145号南西側の33区中央南端から23区中央北端に跨る9号畑-2、国道145号南西側の33区中央南寄りに位置する9号畑-3に分かれ、本畑の北西側に7・8号畑がある。

グリッド：23区H～K-23～25

33区D～M-1～6

検出状況：天明泥流下に、畝間がAs-Aで埋没した状態で検出された。9号畑-1では区画の南辺の一部を確認できたが、他の調査地点は範囲が狭く、畑の区画規模は不明。

畝間方向：N-58～60°-W

規模：長さ(38.1)m、幅(28.9)m、畝間間隔42.0～49.0cm。

面積：検出面積計240.7㎡。（9号畑-1 77.8㎡、9号畑-2 145.0㎡、9号畑-3 17.9㎡）

畑面の状況：3地点共に、天明泥流下面には大小の礫が散乱し、その下にAs-Aで埋没した畝間が確認された。しかし、天明泥流により畑面の荒れた箇所では、畝間の検出は困難であった。特に、9号畑-1の南東側は、かなり荒れた状態にあり、遺構は検出されていない。畑面は緩やかな斜面で、畝間は概ね直線的。北側に接する7号畑の畝間方向とは90°異なり、北西側の8号畑とはほぼ同方向である。なお、9号畑-1・2の畝間は、畝間の脇にさらに畝間が併走した2列単位の畝間の状況（畝側の列はやや細く浅い傾向）で、確認面では幅広い畝間の様相を呈していた。

その他：9号畑-1の北辺で接する7号畑とは、1号石垣を伴う段差によって区画され、本畑が低い面にある。なお、畝間の走向方向から、9号畑-1～3を同区画として扱ったが、異なる区画である可能性は十分に考えられる。

10号畑（第64図、第2表、PL.17）

平成25年度調査において、22区とした調査地点のほぼ中央で天明泥流下に検出した。

位置：国道145号の北東側で、中グリッド22区の中央西寄りに位置し、本畑の北西側に大きく離れて9号畑-1がある。

グリッド：22区P～S-11～13

検出状況：天明泥流下に、畝間がAs-Aで埋没した状態で検出された。調査地点が細く狭いことと、北西側1/3が攪乱を受けていることから、本畑の区画等の全容は不明。

畝間方向：N-44°-E

規模：長さ(2.8)m、幅(12.0)m、畝間間隔82.3cm。

面積：検出面積34.0㎡。

畑面の状況：天明泥流下面には中小の礫が散乱し、その下にAs-Aで埋没した畝間が確認されたが、攪乱により残存状況は極めて悪い。畑面は緩やかな斜面で、畝間は直線的。畝間の間隔も、他の区画に比べ広い。

その他：本畑の南側には、後述する道状遺構が検出されており、その道状遺構に至らないまでの間に、本畑の南辺の区画境があるものと考えられる。

(3) 石垣・土手（段差）

検出された石垣および土手（段差）は、何れも畑の区画境に検出された。石垣は、段々になる畑面の段差補強として用いられており、高い段差ほど石垣を用いているわけではない。また、土手とした段差は、比較的に高さのあるものを扱った。但し、調査範囲の限界から、石垣・土手の全容を検出することはできなかった。天明泥流下の他遺跡においても、同様な石垣や段差は多数検出・報告されており、切り土等による平坦面の造成が斜面地の各所に見られ、地域的な土地利用のあり方が理解できる。

以下、各石垣・土手ごとに記述する。

1号石垣（第65図、第3表、PL.8）

平成24年度調査において、33区とした調査地点の天明泥流下に検出した。

位置：国道145号の北東側で、33区の南東隅付近に位置し、本石垣の北側に7号畑が、南側に9号畑-1が接する。

グリッド：33区G・H-5

検出状況：天明泥流下に、畝間がAs-Aで埋没した7号畑と9号畑-1の境に検出された。

石垣方向：N-71°-E

規模：長さ(6.4)m、高さ0.7m、3段積み。

石垣の状況：畑面の造成に伴う段差急斜面を補強する石垣で、60～20cm前後の大小の河原石（亜円礫）を積み上げる。泥流による崩落がひどく、比較的良好な箇所、3段の石積みを確認することができた。石積みは、野面積みである。



33区1号石垣 調査風景 南東から



第65図 1号石垣平・断面図

その他：本石垣の西側の直線的な延長上には9号畑—3が存在しており、8号畑と9号畑—3のレベル差からすれば、この間に石垣ないし段差が続いていることが想定される。

2号石垣 (第66図、第3表、PL. 8)

平成24年度調査において、33区とした調査地点の天明泥流下に検出した。

位置：国道145号の北東側で、中グリッド33区の中央北寄りに位置し、本石垣の北西側に2号畑が、南東側に4号畑が接する。

グリッド：33区K—18・19

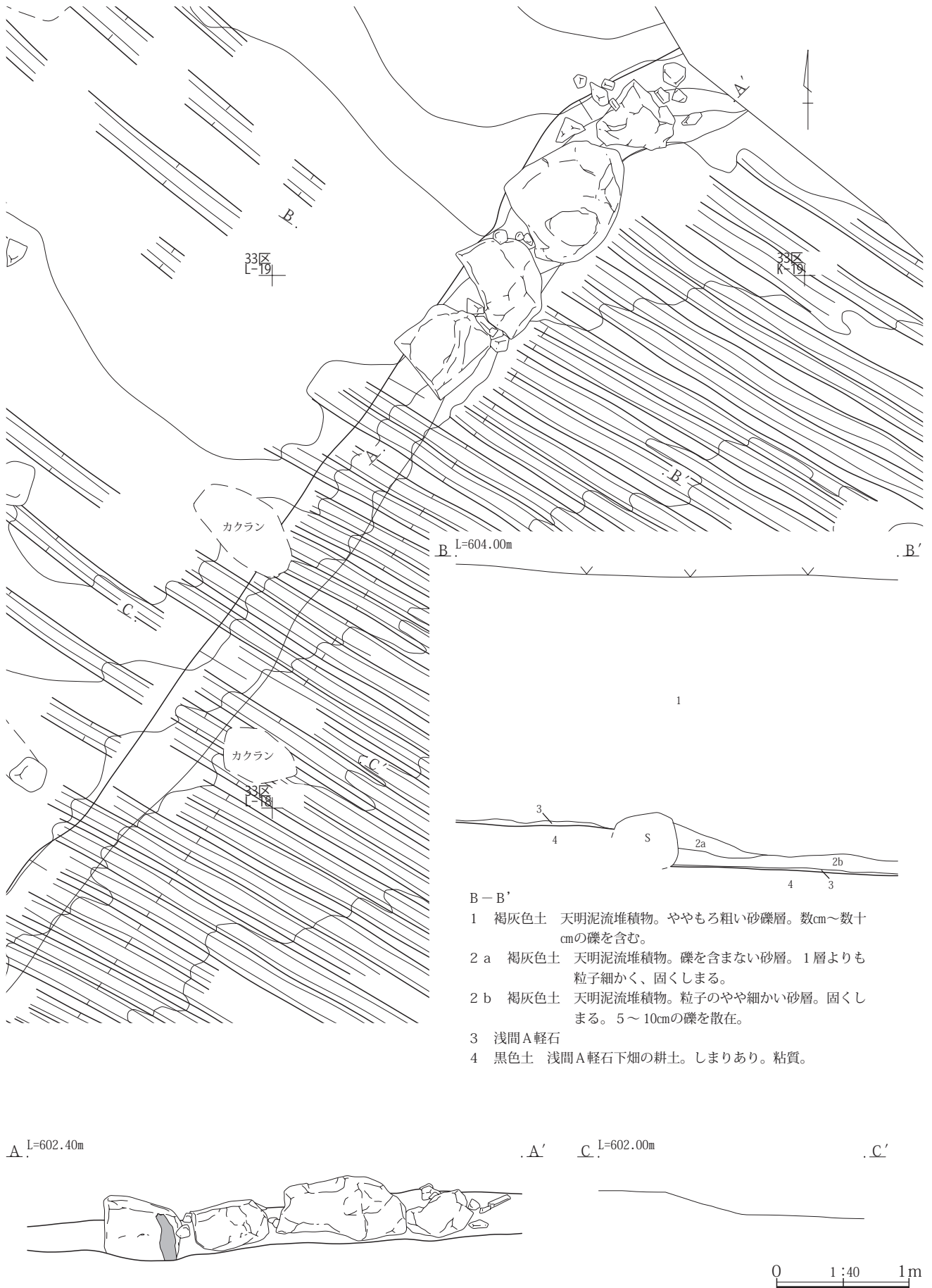
検出状況：天明泥流下に、畝間がAs-Aで埋没した2号畑と4号畑の境に検出された。

石垣方向：N—33°—E

規模：長さ(3.1)m、高さ0.3m、1段積み。

石垣の状況：畑面の造成に伴う段差を補強する石垣で、50～90cm前後の大型礫(亜角礫)を1段並べ、大型礫間に小石を詰める。検出されたのは4石のみで、野面積みである。

その他：本石垣の南西側の延長上には、石積みのない低い段差が直線的に延び(石垣を含めた全長 9.6m)、



- B-B'
- 1 褐灰色土 天明泥流堆積物。ややもろ粗い砂礫層。数cm~数十cmの礫を含む。
 - 2 a 褐灰色土 天明泥流堆積物。礫を含まない砂層。1層よりも粒子細かく、固くしまる。
 - 2 b 褐灰色土 天明泥流堆積物。粒子のやや細かい砂層。固くしまる。5~10cmの礫を散在。
 - 3 浅間A軽石
 - 4 黒色土 浅間A軽石下畑の耕土。しまりあり。粘質。

第66図 2号石垣平・断面図

その先は段差がなくなる。しかも、低い段差部分にまで畝間が検出されており、区画境であるにもかかわらず耕作が続く。一方、北東側の延長上には、3号畑と4号畑の区画境となる1号土手が存在しており、石垣の段差が徐々に高くなり1号土手に取り付くことが想定される。但し、石垣がどこまで続くかは不明。

1号土手（第54・55図、第3表）

平成24年度調査において、33区とした調査地点の天明泥流下に検出した。

位置：国道145号の北東側で、中グリッド33区の中央北東寄りに位置し、東側の山際斜面に併行する。本土手の北東側となる土手上面に3号畑が、南西側となる土手下面に4号畑がある。

グリッド：33区E～H-16～20

検出状況：天明泥流下に、畝間がAs-Aで埋没した3号畑と4号畑の境に検出された。検出時には、土手の法面にもAs-Aが部分的に確認され、下端部にはAs-Aが溜まっている状況があった。また、大型礫が列をなす状況や、周辺に礫が散乱する状況がなかったことから、石積みはなかったものと考えた。

段差方向：N-45°-W

規模：長さ(18.0)m、高さ1.3m。

段差の状況：北東側の山際から続く南西への斜面を、段状に切り土整地した際に生じたかなり段差のある土手で、土手の両側に平坦な3・4号畑面を造り出している。また、土手は南東側ほど低くなり、その端部は4号畑の南西辺を区画する斜面(4号畑と6号畑-1との間の段差)へと方向を直角に変え、さらに2号土手へと続く。



33区畑(1号土手)調査風景 南東から

その他：南西側の延長上には、2号畑と4号畑の区画境となる2号石垣があり、段差が徐々に低くなり2号石垣に取り付くことが想定される。

2号土手（第57・59図、第3表）

平成24年度調査において、33区とした調査地点の天明泥流下に検出した。

位置：国道145号の北東側で、中グリッド33区の中央付近に位置する。本土手の土手上面となる北西側北寄りに4号畑、同西寄りに5号畑が、南東側となる土手下面に6号畑-2がある。

グリッド：33区G～I-10～14

検出状況：天明泥流下に、畝間がAs-Aで埋没した4・5号畑と6号畑-2の境に検出された。検出時には、大型礫が列をなす状況や、石積みに関わる礫が散乱する状況はなく、石積みは伴わないと考えた。

段差方向：N-32°-E

規模：長さ(18.2)m、高さ0.4m。

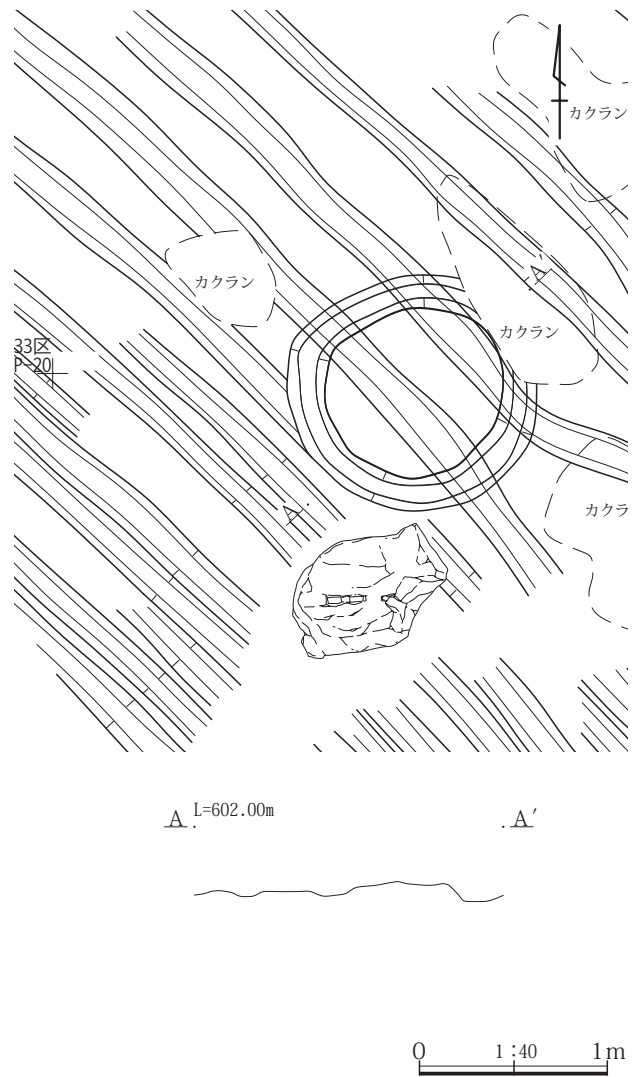
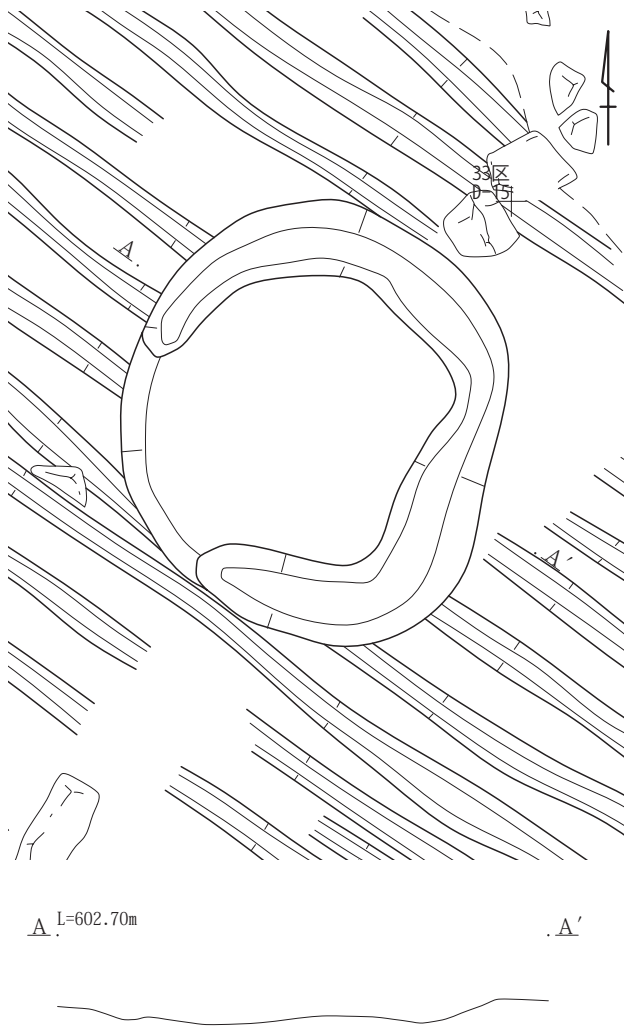
段差の状況：南西へ下る緩斜面を、段状に切り土整地した際に生じた段差で、土手の両側に平坦な4・5号畑と6号畑-2の畑面を造り出している。また、土手は北東側へ徐々に低くなり、延長上にある4号畑の南西辺を区画する斜面(1号土手から回り込む、4号畑と6号畑-1との間の段差)へと続くと考えられるが、その接点部の状況は不明。一方、南西端は攪乱により明確ではないが、6号畑-2と7号畑の状況からすると、段差はなくなっている。

(4) 円形平坦面

円形平坦面とは、円形を呈した平坦な箇所を称しており、畑の区画内に2基検出された。円形平坦面については、先に刊行された上郷岡原遺跡の報告書(『上郷岡原遺跡(1)』2007 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第410集)に詳しいが、上郷岡原遺跡での畑および円形平坦面の検出状況は極めて良好で、本遺跡例もこれに近似している。

1号円形平坦面（第67図、第4表）

平成23年度調査において、33区とした調査地点の天明



第67図 1・2号円形平坦面平・断面図

泥流下に検出した。

位置：国道145号の北東側で、中グリッド33区の中央東寄りに位置し、6号畑－1の中央北西寄りに検出され、山際斜面と平坦面の斜面変換点付近にあたる。

グリッド：33区D-14

規模：径2.2m。

平坦面の状況：畝および畝間が円形平坦面内に食い込まずに、平坦面の外縁にC字状の溝をもつタイプで、溝は畝間と同様にAs-Aで埋没していた。6号畑で検出されたのは、本平坦面1基のみである。

2号円形平坦面（第67図、第4表、PL. 8）

平成24年度調査において、33区とした調査地点の天明泥流下に検出した。

位置：国道145号の北東側で、中グリッド33区の中央

北寄りに位置し、2号畑の中央付近に検出され、畑面は緩斜面。

グリッド：33区O-19・20

規模：径1.3m。

平坦面の状況：小型な円形平坦面で、畝および畝間が平坦面内にまで食い込み、平坦面の外縁に円形の溝をもつタイプで、溝は畝間と同様にAs-Aで埋没していた。2号畑で検出されたのは、本平坦面1基のみである。

(5) 道状遺構

検出された道状遺構は1条で、平成25年度調査における調査地点22区の天明泥流下に検出された。泥流により表層部分は荒れているが、帯状の高まりと、その表層が硬く締まっていたことから、道状遺構として調査した。(第68図、PL.17)

位置：国道145号の北東側で、中グリッド22区の中央西側に位置し、細長い調査地点22区の南東端に検出された。本遺構の北西側には、10号畑が近接する。

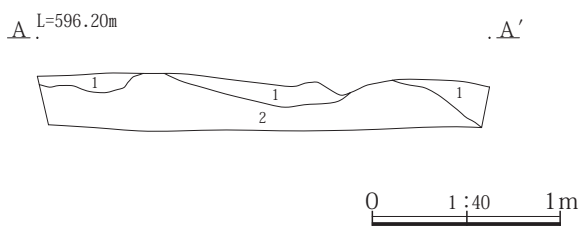
グリッド：22区M～P-7～10

走向方向：N-65°-W

規模：長さ(15.2)m、幅(2.5)m。

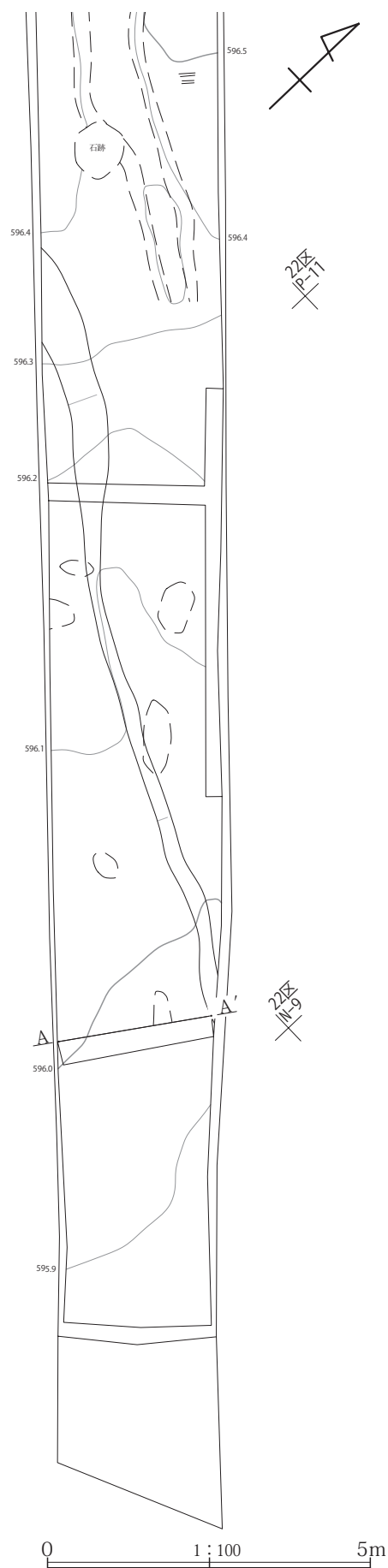
路面の状況：上面が平坦な帯状の高まりが、東南東から西北西へと直線的に延び、北側の縁は溝状に凹む。路面はやや凹凸気味に荒れるが、上面の黄褐色土は粘質をもち、硬く締まっている。

その他：検出された道状遺構は、蛇行して東流する吾妻川の段丘縁を併走するように走向しており、西北西方向には旧長野原村の集落が、東南東は白砂川(旧須川または酸川)に架かる須川橋を渡って旧林村方面へ、或いは吾妻川に架かる琴橋を渡って旧横壁村や、信州街道との分岐点である旧須賀尾村(須賀尾宿)方面へと通じる幹道であることが想定されよう。



A-A'

- 1 黄褐色土 粘性・締りの強い不均質な黄褐色ローム。5mm大の白色・黄色軽石粒を少量含む。下位に鉄分凝集層が形成される。
- 2 黄褐色土 1層より軽石を多く含み、ややバサバサで色調は暗い。



第68図 道状遺構平・断面図

(6) 遺構外出土遺物

遺構外出土の遺物は、主に調査地点33区に検出された畑上面から、自然木および竹類と共に出土している。また、後述する獣歯骨についても、同様に天明泥流下位から出土している。出土量は少ないが、遺物には陶磁器類、木製品類、金属製品類、石製品類がある。

以下、各遺物を大別して記述する。

1) 陶磁器類 (第69図1～15、PL.33・34)

出土した陶磁器類には、碗、片口鉢、すり鉢、炬形等といった各器種が出土しており、何れも残存度は悪く、細片が多い。

碗 図示できたのは4点で、1は肥前陶器の陶胎染付で、2は肥前磁器の染付碗。3・4は瀬戸・美濃陶器の碗である。

片口鉢 1点のみで、5は瀬戸・美濃陶器。

すり鉢 図示した6・7の2片は瀬戸陶器で、内面に掻き目をもつ。

内耳土器 図示したのは8・9の2片であるが、他に胴・底部片の細片が多い。

炬形 10は口縁部、11は胴部から底部であり、同一個体。共に、炬形の角部である。

円盤状高台部 碗の高台部の周囲を打ち欠き、円形状に成形したもので、図示した4点がある。12・15は肥前磁器で、13・14は瀬戸・美濃陶器の碗を利用している。

2) 木製品類 (第70図16～18、PL.34)

出土した木製品は少なく、図示できたのは椀、木札、桶の3種類3点である。

漆塗椀 16は椀の身で、内外面に薄く黒漆を塗布し、その後内面を赤色漆、外面を黒漆塗りとし、外面の黒漆の上に赤色漆で丸に棒剣片喰の紋を描く。

木札 17は方形の小型板。

桶 18は桶の把手付側板で、上部に孔をもつ。

3) 金属製品類 (第70・71図19～45、PL.34)

出土した金属製品は少なく、中でも銭貨が最も多く、次いで煙管である。他に鍋片や火打金、毛抜き、用途不明な金属製品がある。

鍋 19は小型の蓋片、20は銅製の鍋底片で、共に薄い作り。

火打金 21は両端が屈曲し、中央が山形状となる鉄製の火打金。

毛抜き 30は完形の毛抜きで、銅製。片側が、大きく歪む。

煙管 雁首3点、吸い口4点の計7点が出土しており、欠損あるいは潰れているものが多い。

銭貨 寛永通宝が11点出土している。45は一銭硬貨で、天明泥流上の表土中からである。

その他の金属製品 用途不明な金属製品である。22は長方形の鉄製品で、上部を欠く。31は小型な匙状を呈し、下半の匙部側面には細く銅を貼付ける。32は銀杏葉状を呈した小型の銅製品。33は薄い管状を呈した小型の銅製品。

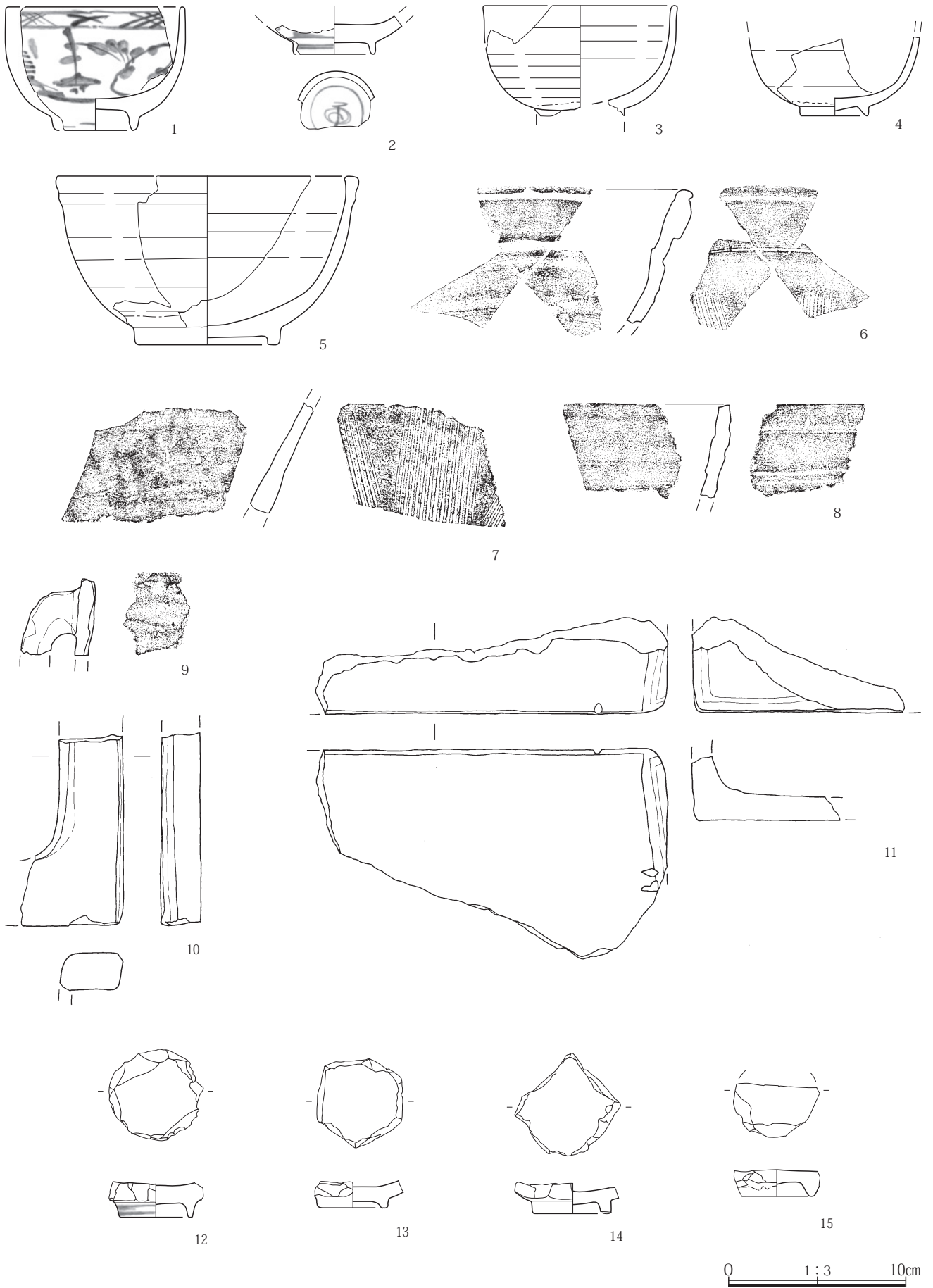
4) 石製品類 (第71図46～50、PL.34)

出土した石製品は少なく、砥石と、石臼がある。また、石斧は縄文時代の遺物である。

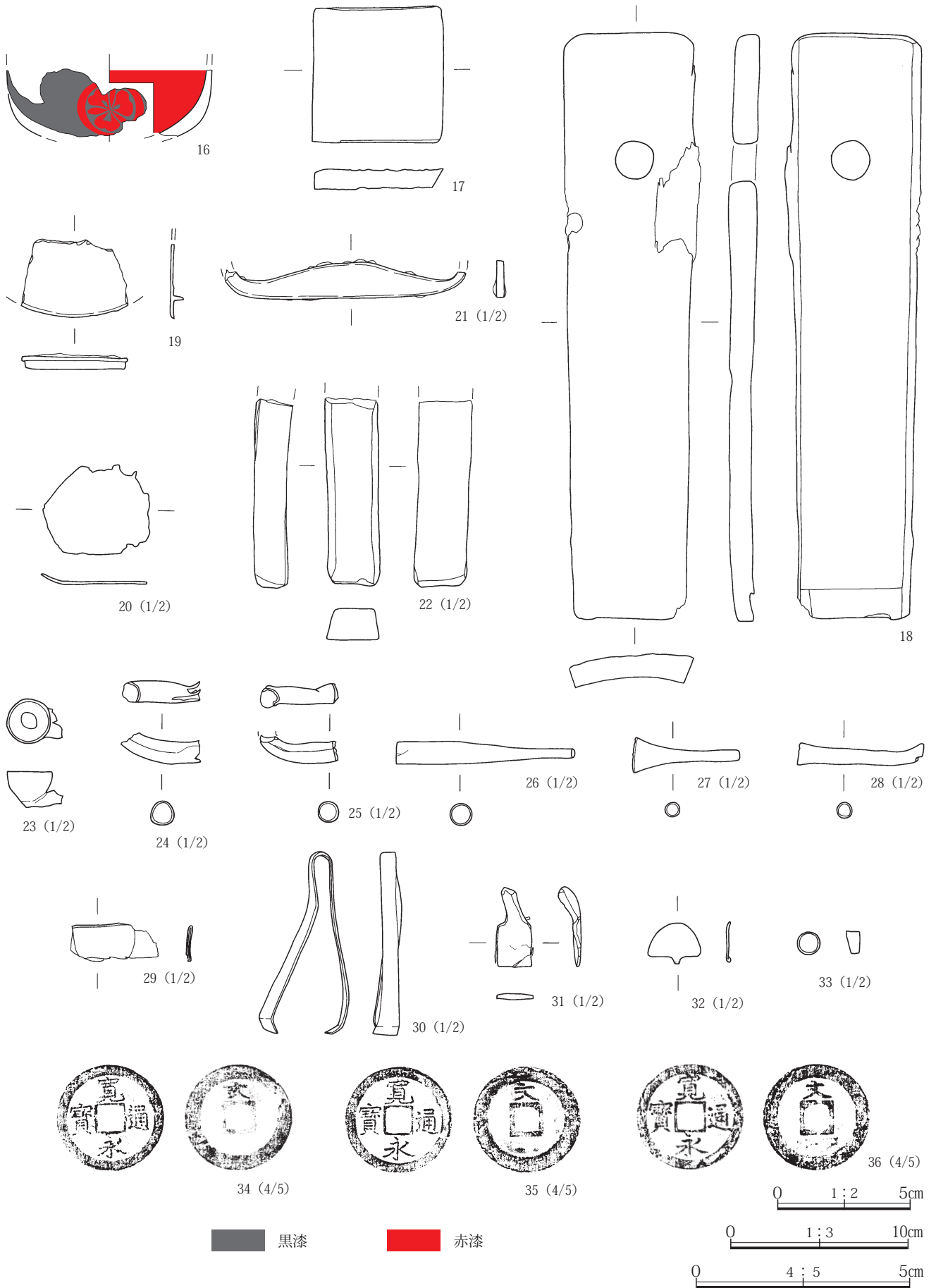
砥石 46～48の3点で、46は四面を砥面とする砂岩製、47・48は粗い縦位線条痕を残す砥沢石製である。

石臼 49は粗粒輝石安山岩製の穀臼の下臼で、上面は使い込まれて摩耗が著しい。

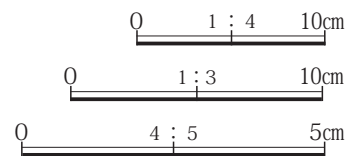
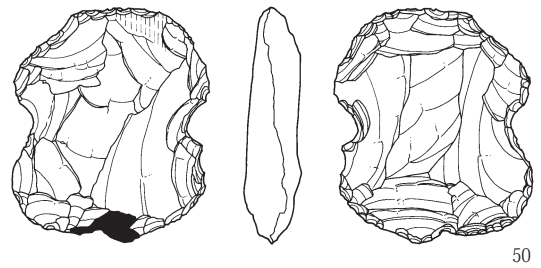
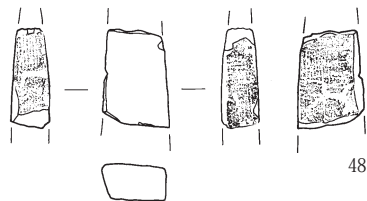
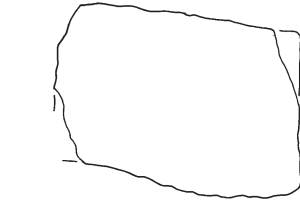
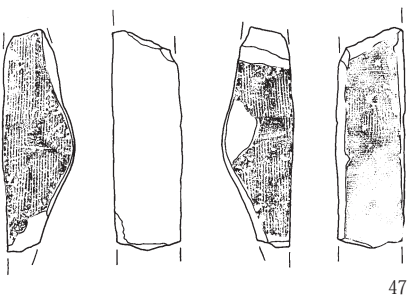
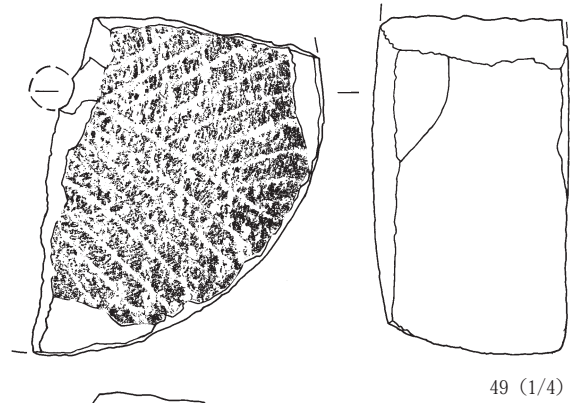
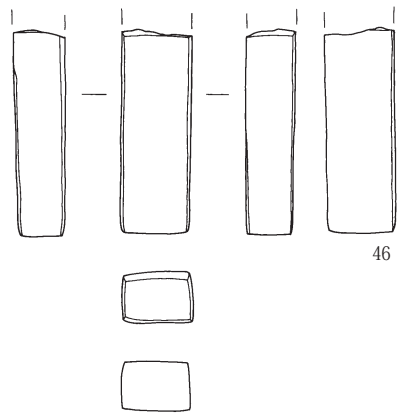
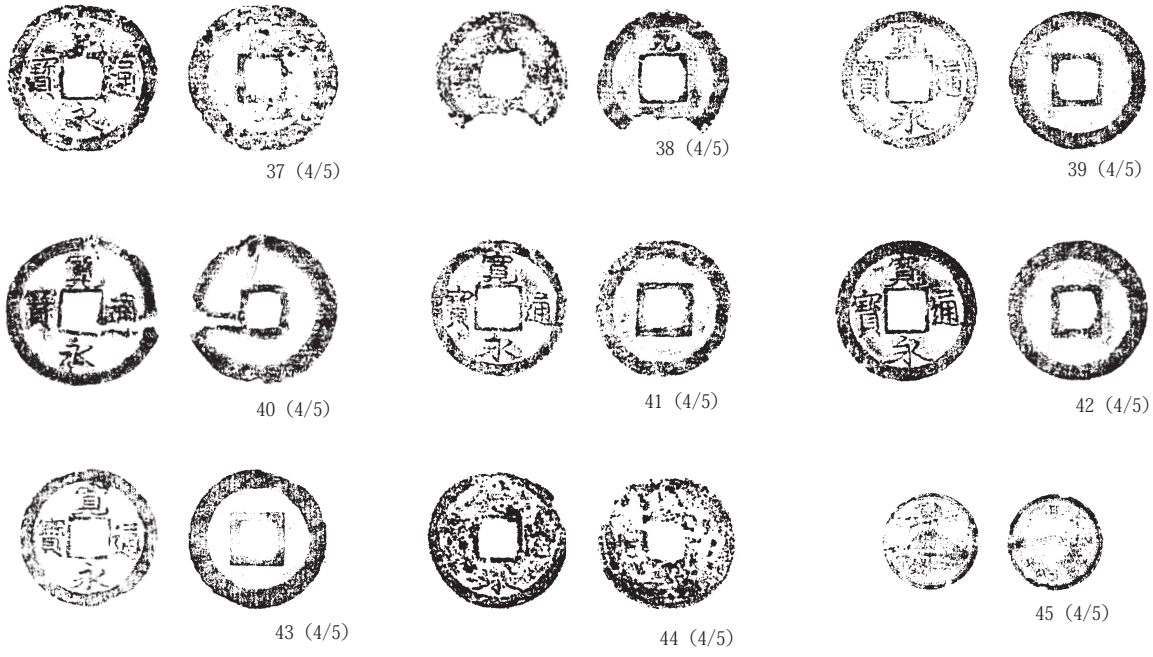
石斧 50は黒色頁岩製の打製石斧で、両側縁に抉りをもつ銅型を呈する。



第69図 遺構外出土遺物（1）陶磁器類



第70図 遺構外出土遺物(2) 木製品類・金属製品類



第71図 遺構外出土遺物(3) 金属製品類・石製品類

第3節 浅間A軽石降下以前の 遺構と遺物

平成24年度調査における調査地点33区で、天明泥流下に検出された4号畑の南西隅付近および5号畑の北西端の畑面の下に、鉄滓や羽口といった多量の鍛冶関連遺物が出土したことから、As-A降下以前の鍛冶関連遺構が存在することを想定し、畑下の調査を行った。

(1) 鍛冶関連遺構

遺構・遺物の検出状況 (第72図、PL. 9)

天明泥流下5号畑の北西端から北西側に、4号畑よりも1段高い平坦面が位置し、この平坦面は国道145号に面して国道下へと続く。平坦面上には、大小の川原石が多量に散乱し、ピット等の遺構は検出できなかった。また、鍛冶に関連する鍛冶炉ないし焼土といった遺構も検出されていない。平坦面上での鍛冶関連遺物の出土は極めて散漫で、むしろ遺物が集中するのは平坦面の北東側斜面であり、斜面に面する4号畑の耕作土中からである。

この北東側斜面は平坦面の北東辺にあたり、比較的直線的で、斜面には礫が集中し、石垣様をなしている。特に、鍛冶関連遺物が集中する箇所は、平坦面の北東辺を南東へ下る、長さ4.2m、幅0.8m前後の斜路状となっている斜路面である。斜路面の両側は、大小の川原石がそれぞれ列状に、さらに段差の高さに応じて石を積み上げていく状況がある。また、遺物の集中する状況は、斜路面をほぼ覆うように、厚さ3～5cmほどで敷き詰められたように出土した。

以上のことから、この平坦面に鍛冶関連遺構の存在が確実視でき、その本体は国道下にあるものと思われる。

(2) 鍛冶関連遺物

出土した鍛冶関連遺物には、鉄製品および鍛錬した鉄を切断した未製品類、鍛冶滓、椀形鍛冶滓、羽口、さらには鍛造剥片や粒状滓といった微細遺物も多量に出土している。

鉄製品・未製品類 (第73図1～54、第7表、PL.35)

図示したのは54点であるが、鎌や刀子、釘をはじめ、不明な鉄製品、さらには未製品類とした鉄を切断した痕を残すものが多数出土している。特に、切断痕を残すものには、34～38に代表される細長い棒状の鉄の端部に切断痕をもつ例、45～47に代表される幅長な切断痕をもつ例、50・51の弧状の切断痕をもつ例、さらには52の紡錘状を呈する例もある。また、54は板状の鉄を重ねるように折り曲げて棒状とし、鍛錬した後に切断した残部であり、作業工程を窺い知ることのできる良好な資料である。

鍛冶滓 (第74図55～58、第7表、PL.35)

多量に出土している鍛冶滓の中でも、含鉄の鍛冶滓を4点図示した。

椀形鍛冶滓 (第74・75図59～79、第7表、PL.35・36)

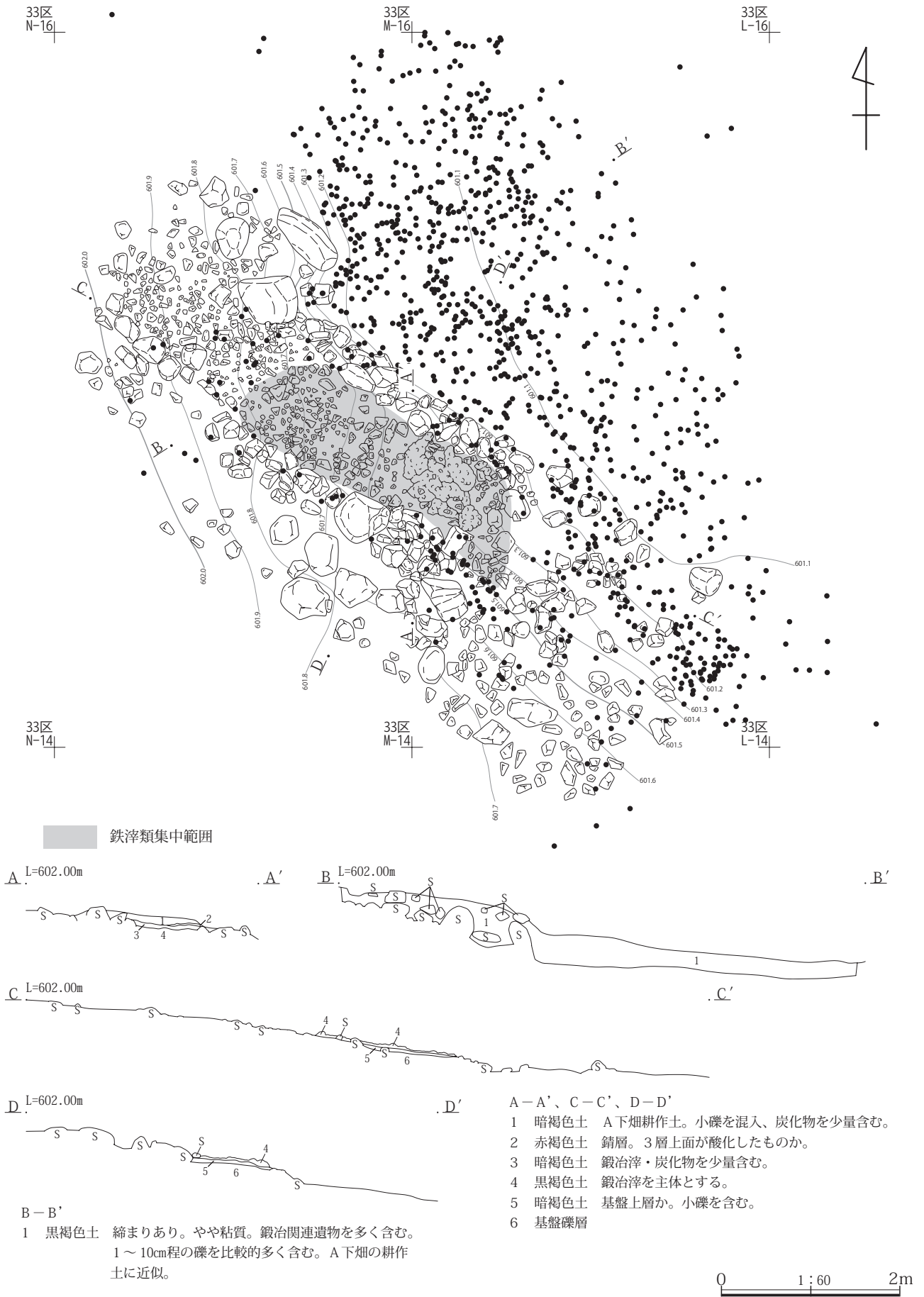
多量に出土した椀形鍛冶滓の中でも、代表的な21点を図示した。59が最も大きく、74～76が極小の椀形鍛冶滓である。

羽口 (第75図80～94、第7表、PL.36)

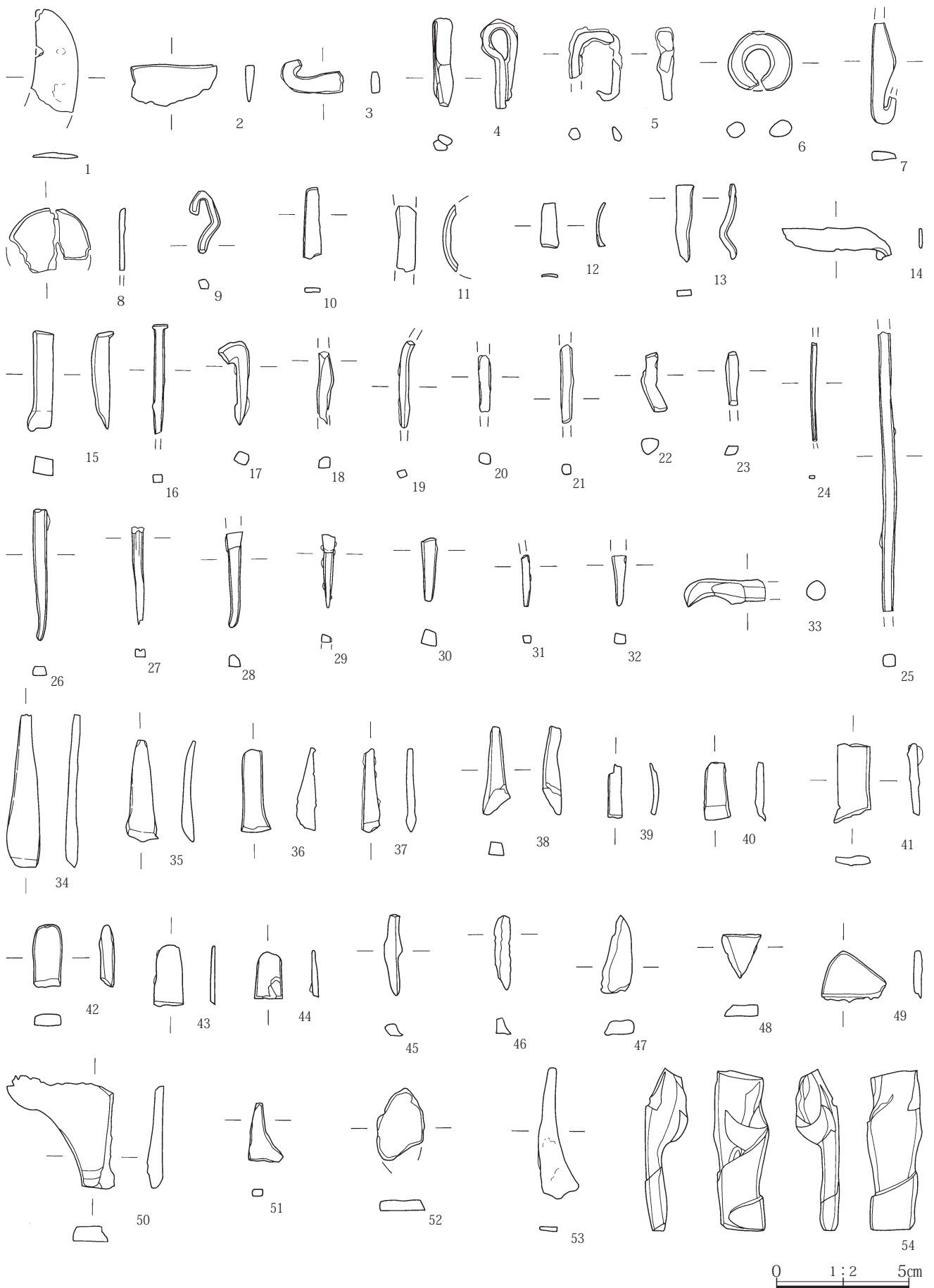
数多い羽口片の中でも、代表的な15点を図示した。80～84は断面形が円形となるタイプで、85～91は断面形が隅丸方形ないし方形になるタイプである。91の先端先には、極小の椀形鍛冶滓が固着している。また、羽口の端部付近には、炉壁との接合部の痕を残すものもあり、羽口の取り付く角度を知ることのできる良好な資料といえよう。93・94は羽口の基部で、断面形は円形となる。



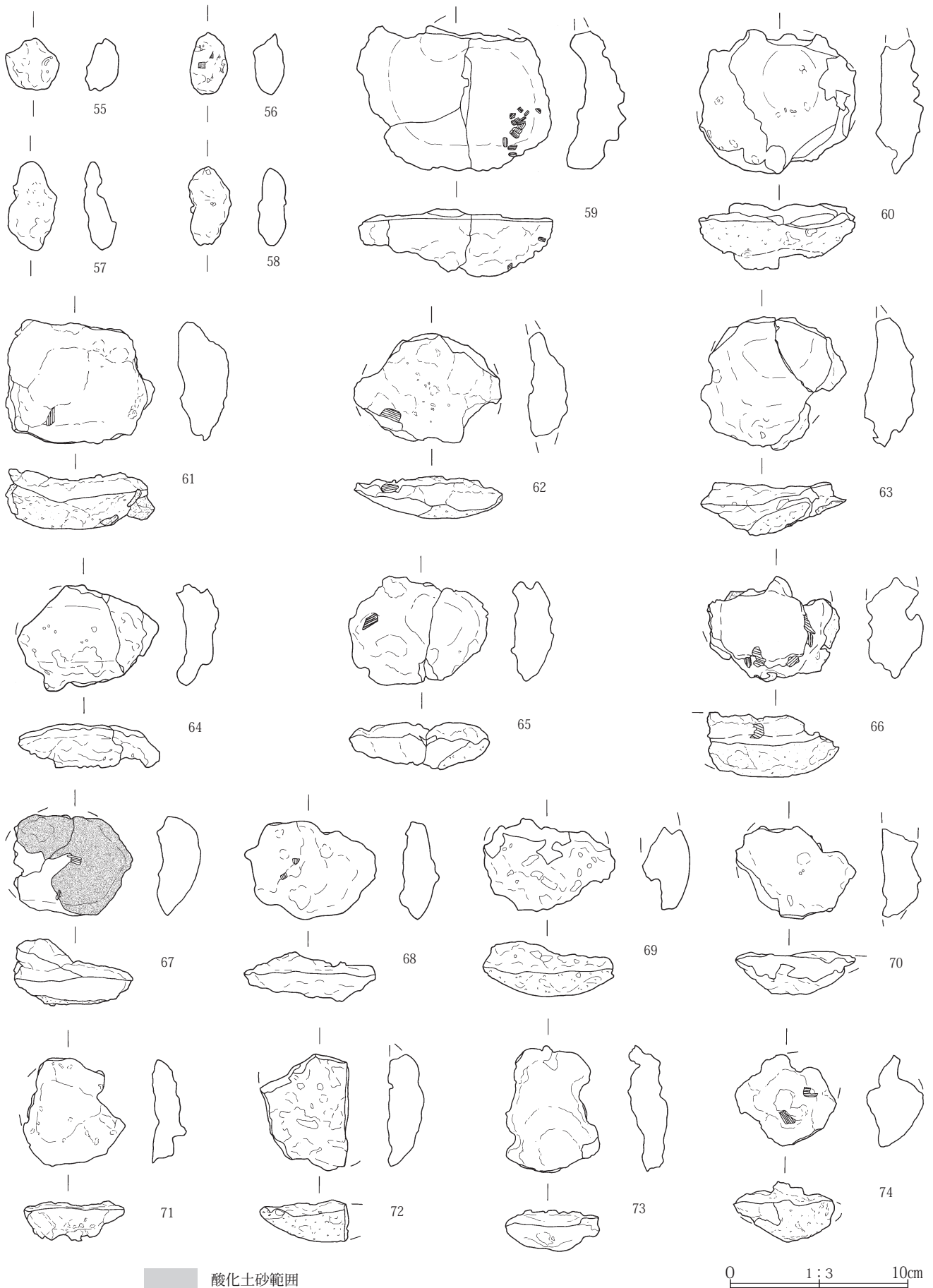
鍛冶関連遺構が想定される平坦面 (写真左下半) 北から



第72図 鍛冶関連遺物分布平面図



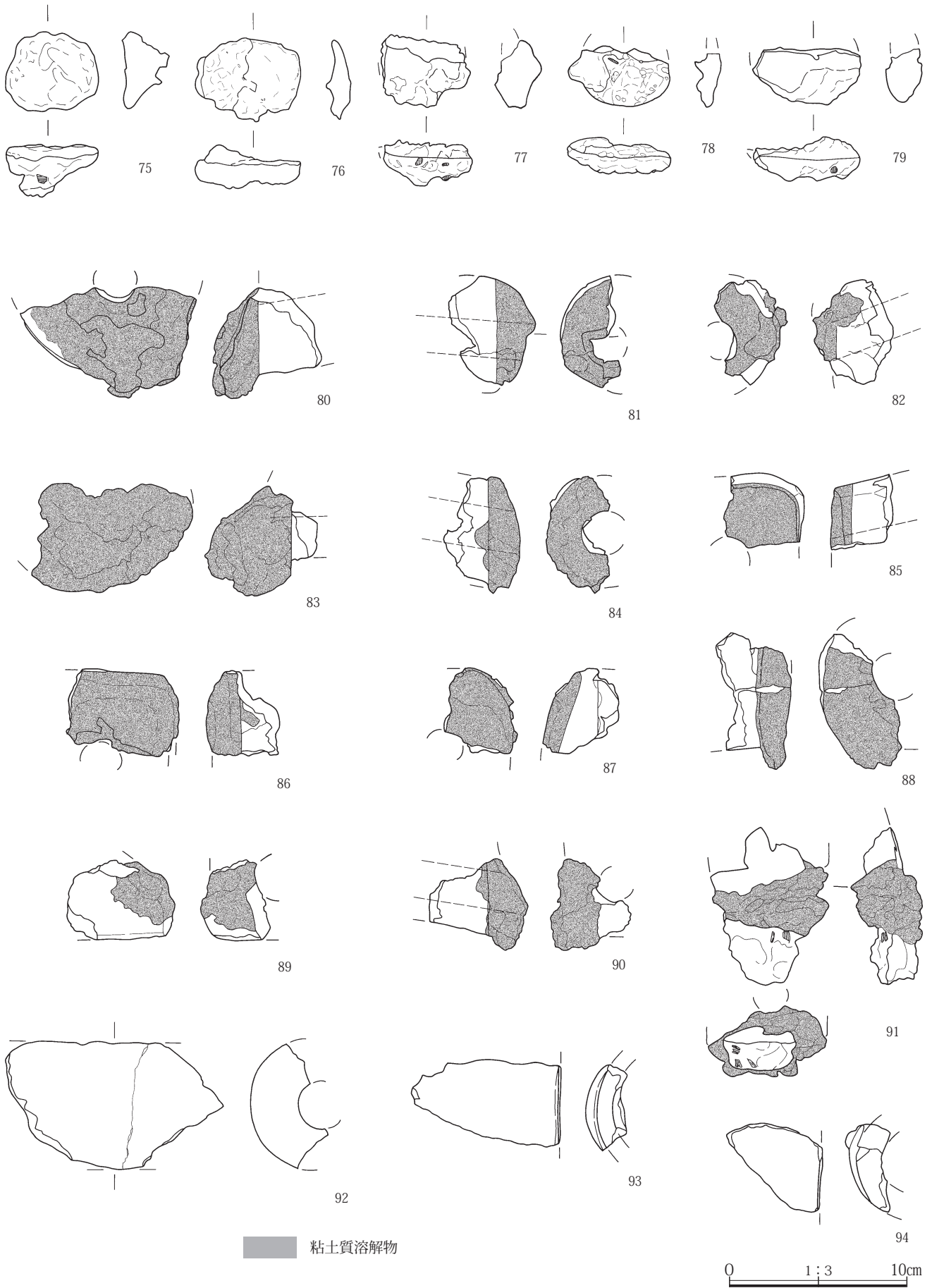
第73図 鍛冶関連遺物 (1)



酸化土砂範囲

0 1:3 10cm

第74図 鍛冶関連遺物 (2)



第75図 鍛冶関連遺物 (3)

第4章 自然科学分析

本遺跡の平成24年度調査において、44区に位置する調査地点から、天明泥流によって埋もれた1号建物が検出されたことは先述した通りである。この1号建物の調査を進める中で、多くの木製品や建築材をはじめとした各種出土遺物と共に、大型植物遺体、昆虫遺体等が確認されたことから、これらの分析が必要となった。また、花粉分析、出土材の樹種同定についても、併せて自然科学分析として株式会社パレオ・ラボに委託して実施した。

さらに、1号建物から出土した骨角製品、33区の畑上面（天明泥流下面）から出土した獣歯骨についても、分析を委託して実施した。

今回の花粉分析の結果からは、1号建物周辺には日のあたる場所が存在し、そこにニヨウマツ類を主体としたコナラ等を伴う二次林が発達していたことが樹木花粉から窺え、草本花粉での抽水植物（ハス属）等から周辺の一部には水分条件の良好な場所が存在していたことも想起させる。また、イネ科花粉の産出率が極めて高く、貯蔵穀物としてイネ類の可能性が示唆でき、プラント・オパール分析との結果からは、米粉のみではなくイネの葉も混じっていた可能性がある。一方、大型植物遺体分析からは、1号建物中央南側に貯蔵穀物の存在した可能性がある。同様に、昆虫分析では、多数の貯蔵性昆虫が産出しており、多量の貯蔵穀物の存在が指摘されている。依って、検出された1号建物の南側に想定される土間に、穀物を貯蔵していたと考えられよう。

大型植物遺体同定の結果では、種実のうち栽培植物にモモ、カキノキ、アサ、ソバ、メロン仲間、ヒョウタン仲間、エゴマ、ナス、ゴボウ、ヒエ、イネ、キビ、アワ、オオムギが得られ、特にヒエは突出して多い。さらに、ソバ、ヒエ、キビ、アワ、オオムギは殻付きで得られていることから、殻付き状態で保管（貯蔵穀物）されていた可能性がある。イネは籾殻のみが得られている。他に、食用可能な植物として、木本植物ではオニグルミ、クリ、クワ属、ブドウ属、トチノキ、草本植物ではシソ属などが得られた。なお、モモとオニグルミには打撃痕をもつ個体が含まれており、食されていたことを窺わせる。一

方、葉で産出しているスギ、アカマツ、ヒイラギは、1号建物の近くに生育していた可能性をもつ。特筆できる点として、水洗量に対する種実の含有率が非常に高く、食用可能な特定の種実が多い点を挙げることができ、貯蔵穀物の存在を裏付ける結果であった。

昆虫遺体同定の結果では、同定した計706点のうち73.5%(519)点が、貯蔵された穀類に由来する昆虫であった。最も多いのはゴミムシダマシで、次いでコクゾウムシ、ヒメカツオブシムシ、クロチビエンマムシの順であり、こうした穀類を加害する貯蔵性昆虫が多数認められたことは、そこに多量の貯蔵穀物が存在したことを裏付けることとなる。

樹種同定の結果では、針葉樹にモミ属、カラマツ、マツ属複雑維管束亜属、スギの4分類群、広葉樹にコナラ属コナラ節をはじめ、クリ、クスノキ科、サクラ属、カエデ属、ヌルデ等の22分類群、その他に樹皮が確認された。また、針葉樹の木取りと形状は、角材や多角形の芯無削出等の加工木もあるが、端材が比較的多く、広葉樹では枝材と思われる加工木が多い。クスノキ科とサクラ属の端が加工されたY字状の枝は、器具材の未成品の可能性をもつ。さらに、竹材には、大きさを統一した割竹や形状が丸の竹がみられる。

獣歯骨分析の結果では、44区1号建物から出土した骨角製品が鹿角製であり、東宮遺跡から出土した鹿角製品と共に、本地域における近世の民俗（民具）資料としてその使用法を含めて興味深い。33区の天明泥流下位から出土した獣歯骨は、全てがウマとシカで、ウマの右中手骨は日本の中型在来馬に相当し、シカの上顎臼歯と下顎臼歯からは、10才前後の成獣であることが推定された。また、シカの未成獣右上腕骨片や成獣右中手骨に、中型肉食動物による咬痕が観察されている。

以下、分析の報告を掲載する。

第1節 花粉分析

1. 試料と方法

分析試料は、1号建物の床板と土間の間に堆積した黒色(5YR1.7/1)有機質土壌1点である。この試料から、次の手順で花粉化石を抽出した。

試料(湿重量約3g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣よりプレパラートを作製して行った。プレパラートは樹木花粉が200を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良好な花粉および寄生虫卵を選んで、単体標本作製した。図版に載せた分類群ごとの単体標本(PLC.788~795)は、パレオ・ラボに保管されている。

2. 結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉18、草本花粉18、形態分類を含むシダ植物胞子2の総計38である。これらの花粉と胞子の一覧を表1に、花粉分布図を図1に示した。分布図において、樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を、草本花粉および胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。図および表においてハイフン(―)で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。また、クワ科とバラ科の花粉には樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

樹木花粉で最も多く産出しているのはマツ属複雑管束亜属で、56%の産出率である。次いでニレ属―ケヤキ属が8%、コナラ属コナラ亜属が7%、スギ属が6%、ハンノキ属が5%、クマシデ属―アサダ属とカバノキ属が各4%である。草本花粉ではイネ科が圧倒的に多く産出しており、80%の産出率を示す。その他ではアカザ科―

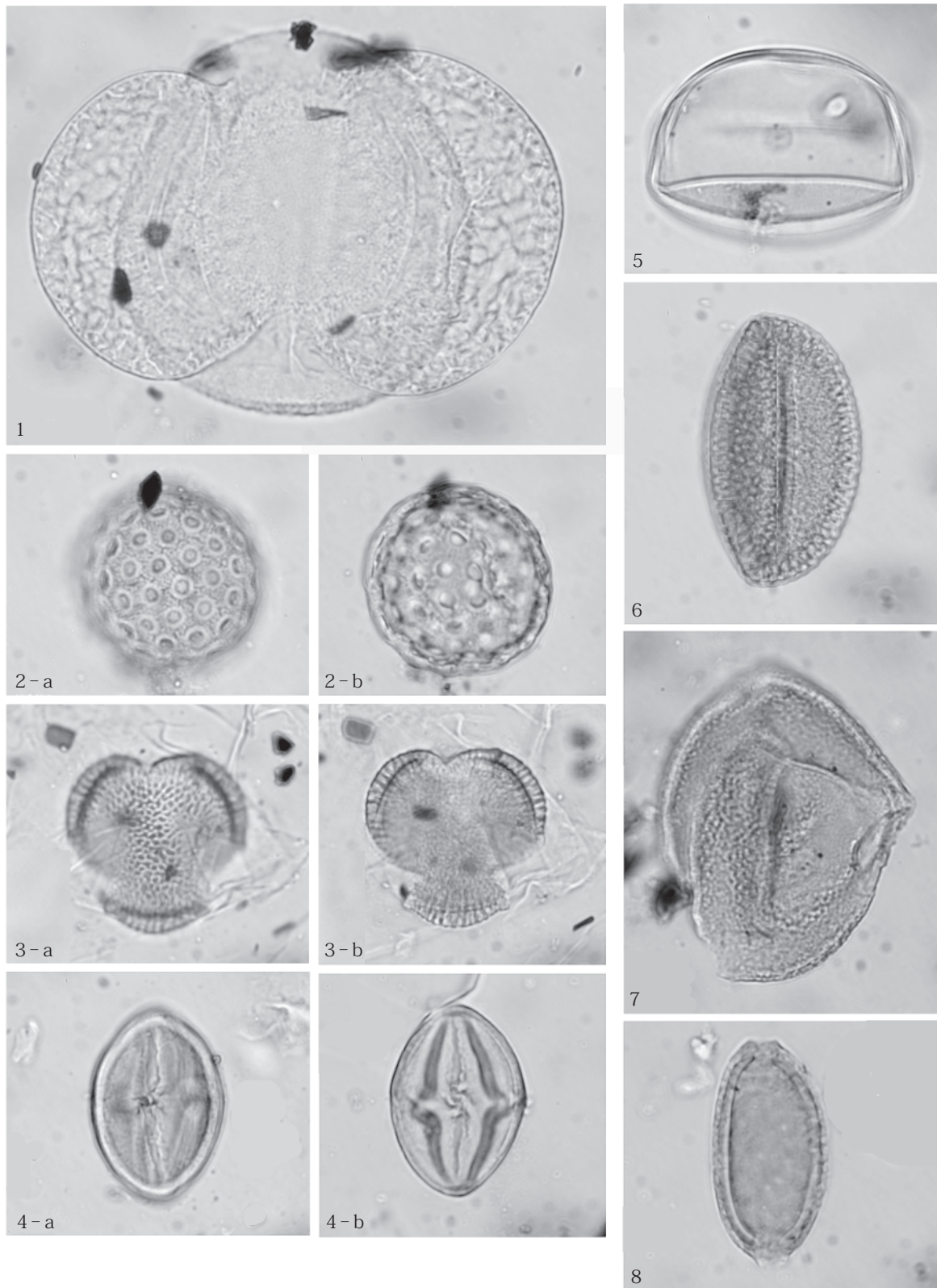
ヒユ科が3%、ソバ属とヨモギ属が各1%の産出率である。また、回虫卵と鞭虫卵が1個ずつ産出している。

3. 考察

樹木花粉で最も多く産出しているのはマツ属複雑管束亜属で、コナラ属コナラ亜属のある程度の産出を伴って

表1 産出花粉・寄生虫卵一覧

学名	和名	
樹木		
Abies	モミ属	1
Tsuga	ツガ属	1
Pinus subgen. Diploxyton	マツ属複雑管束亜属	127
Cryptomeria	スギ属	13
Myrica	ヤマモモ属	4
Pterocarya-Juglans	サワグルミ属―クルミ属	5
Carpinus-Ostrya	クマシデ属―アサダ属	9
Betula	カバノキ属	9
Alnus	ハンノキ属	11
Fagus	ブナ属	1
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	16
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	1
Castanea	クリ属	4
Ulmus-Zelkova	ニレ属―ケヤキ属	18
Rhus-Toxicodendron	ヌルデ属―ウルシ属	1
Aesculus	トチノキ属	1
Araliaceae	ウコギ科	2
Cornus	ミズキ属	1
草本		
Gramineae	イネ科	1507
Liliaceae	ユリ科	1
Moraceae	クワ科	6
Rumex	ギンギン属	1
Polygonum sect. Reynoutria	イタドリ節	1
Fagopyrum	ソバ属	28
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科―ヒユ科	60
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1
Nelumbo	ハス属	1
Thalictrum	カラマツソウ属	1
Ranunculaceae	キンボウゲ科	2
Brassicaceae	アブラナ科	5
Rosaceae	バラ科	3
Apiaceae	セリ科	1
Scabiosa	マツムシソウ属	1
Adenophora-Campanula	ツリガネニンジン属―ホタルブクロ属	1
Artemisia	ヨモギ属	17
Tubuliflorae	キク亜科	4
シダ植物		
monolate type spore	単条溝胞子	13
trilate type spore	三条溝胞子	7
Arboreal pollen	樹木花粉	225
Nonarboreal pollen	草本花粉	1641
Spores	シダ植物胞子	20
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	1886
Unknown pollen	不明花粉	9
寄生虫卵		
	回虫卵	1
	鞭虫卵	1



図版 町遺跡から産出した花粉・寄生虫卵

0.02mm

- | | |
|-----------------------|----------------------|
| 1. マツ属複維管束亜属(PLC.788) | 2. アカザ科-ヒユ科(PLC.789) |
| 3. アブラナ科(PLC.790) | 4. バラ科(PLC.791) |
| 5. イネ科(PLC.792) | 6. ソバ属(PLC.793) |
| 7. ハス属(PLC.794) | 8. 鞭虫卵(PLC.795) |

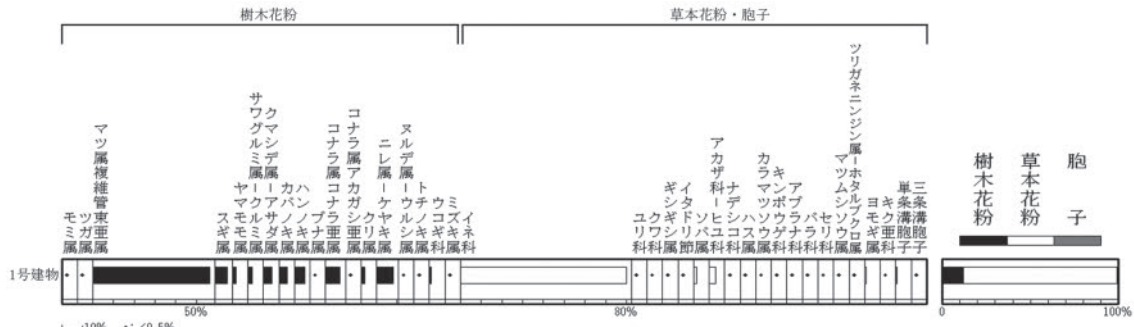


図1 町遺跡における花粉分布図
樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は産出花粉胞子総数を基数として百分率で算出した。

る。よって、遺跡周辺には日の当たる場所が存在し、そこにニヨウマツ類を主体として、コナラなどを伴う二次林が発達していたと思われる。この結果は、天明泥流によって埋没した東宮遺跡で推定されている古植生(上中, 2012)と同様である。なお大型植物遺体分析では、アカマツの産出がわずかに見られるものの、ナラ類の産出が見られなかった。おそらくこれらの分類群は、1号建物のごく近辺には生育しておらず、1号建物のやや離れた地域に分布を広げていたと思われる。その他の樹木花粉では、ニレ属-ケヤキ属やクマシデ属-アサダ属、カバノキ属、サワグルミ属-クルミ属などの産出があり、これらの分類群からなる落葉広葉樹林やスギ林が遺跡周辺の一部に存在していた可能性がある。また、草本花粉では抽水植物のハス属が、樹木花粉では湿地林要素のハンノキ属が産出しているため、1号建物周辺の一部には水分条件の良好な場所も存在していたと思われる。さらに、東宮遺跡では畑遺構の花分析結果から、アサやソバ、イネ、ムギ類といった作物の栽培が推定されている(上中, 2012)。東宮遺跡の分析結果を踏まえると、今回の町遺跡の1号建物の分析試料から産出したイネ科やソバ属の花分析結果は、1号建物周辺の耕作地で栽培されていたイネやソバからもたらされた可能性が考えられる。

一方、1号建物の昆虫分析によると、多数の貯穀性昆虫が産出しており、多量の貯穀穀物の存在が指摘されている(昆虫分析の項参照)。花粉分析結果では、イネ科花粉の産出率が極めて高い。イネは開花後すぐに籾殻を閉じ、籾殻内に多量の花分析結果が取り込まれるため、イネ科花粉の極めて高い産出率は、籾殻が貯蔵されていた可能性を示唆している。また、予察的にプラント・オパール分析を行ったところ、イネの葉身に形成される機動細胞珪酸体の産出が多かった。よって、貯蔵穀物としてイネの

籾が存在したとすれば、そこには籾のみではなくイネの葉も混じていた可能性がある。さらに、キビ族機動細胞珪酸体の産出も多く確認できたが、キビ族には野生種と栽培種が含まれており、機動細胞珪酸体の形態で両者を区別するのは難しい。しかしながら大型植物遺体分析では、1号建物中央南側からアワやキビ、ヒエといった栽培種のキビ族が多く産出しているため(大型植物遺体の項参照)、1号建物の貯蔵穀物には、アワやキビ、ヒエが存在していた可能性が高い。

また、昆虫分析では人糞や獣糞に集まる昆虫の産出が見られ、穀物貯蔵場所周辺の衛生状態を考察する上で興味深いとされている(昆虫分析の項参照)。花粉分析では、イネ科以外の草本花粉としてアカザ科-ヒユ科やソバ属が多く産出しており、わずかではあるが寄生虫卵の産出も確認された。イネ科やソバ属については食用となる植物を含むのは言うに及ばず、アカザ科-ヒユ科についても、薬用に用いられたとする指摘もあり(黒崎, 1997)、寄生虫卵とともにしばしばトイレ遺構で検出される例がある(例えば、金原正明・金原正子, 1992など)。よって、花粉分析においても寄生虫卵に汚染された人糞が試料に紛れ込んでいた可能性が指摘でき、この場所の衛生状態に関する手掛かりを提供できると考えられる。

引用文献

上中央子 2012「東宮遺跡24号畑遺構における花粉分析」『東宮遺跡(2)』p.472-474 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 金原正明・金原正子 1992「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の便所遺構右京七条一坊西北坪』p.12-15 奈良国立文化財研究所
 黒崎 直 1997「考古学の発掘現場におけるトイレ研究」『トイレの考古学-大田区立郷土博物館編一』p.183-196 東京美術。

第2節 大型植物遺体

1. 試料と方法

試料は、ほとんどが1号建物の床下と土間の間で採取された試料で、水洗試料と現場取り上げ試料（種実・葉）がある。

試料の採取および水洗は、群馬県埋蔵文化財調査事業団が行った。計数の方法は、完形または一部が破損しても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。計数しにくい分類群については、完形と破片数をあわせておおよその数または記号(+)で示した。オニグルミとモモで残存が良い個体は、形状を完形と、半割、自然の割れ、動物食痕、不明に分類した。葉遺体は、透明フィルム中にシーリングした。同定された試料は、群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

2. 結果

同定した結果、木本植物では針葉樹のイヌガヤ種子と、スギ葉・枝、モミ葉、アカマツ葉、クロマツ球果、マツ属複雑管束亜属球果の6分類群、広葉樹のオニグルミ核とハンノキ属ヤシャブシ亜属果実、クリ果実・未熟果、クワ属核、モモ核、ブドウ属種子、トチノキ種子、カキノキ種子、カキノキ属種子、エゴノキ属核、ヒイラギ葉の11分類群、草本植物ではアサ核とソバ果実、イヌタデ果実、サナエタデ-オオイヌタデ果実、タニソバ果実、アカザ属種子、ウシハコベ種子、エノキグサ属種子、オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属果実、メロン仲間種子、ヒョウタン仲間種子、エゴマ果実、シソ属果実、ナス種子、ナス属種子、ゴボウ果実、メナモミ属果実、メヒシバ属果実、ヒエ有ふ果、イヌビエ属有ふ果、イネ籾殻、キビ有ふ果、アワ有ふ果、エノコログサ属有ふ果、オオムギ炭化果実の25分類群、シダ植物ではワラビ裂片1分類群の、計43分類群が得られた。このほかに、科以下の同定ができなかった種実を不明種実とした。大型植物遺体以外には、昆虫遺体や骨片が混じていたが、同定の対象外とした。

以下、得られた大型植物遺体について記載する。

[水洗試料] (表1)

1号建物南側中央：全体的に草本植物が多い組成であった。ヒエが1222点と非常に多く、次いでソバとアワが200点以上と多かった。イネとアサは破片が多かった。

メヒシバ属とイヌビエ属、エノコログサ属が少量、そのほかは20点未満の産出数であった。これら以外に、栽培植物ではメロン仲間とヒョウタン仲間、エゴマ、ナス、ゴボウがわずかに得られた。

表1 水洗試料から出土した大型植物遺体 (括弧内は破片数)

分類群	遺構 採取位置 水洗量	1号建物
		中央南側 500cc
イヌガヤ	種子	(1)
スギ	葉	12
アカマツ	葉	1 (2)
オニグルミ	核	(3)
ハンノキ属ヤシャブシ亜属	果実	14
クリ	果実 未熟果	1 (49) 1
クワ属	核	18
ブドウ属	種子	3
エゴノキ属	核	(1)
アサ	核	9 (66)
ソバ	果実	200 ~ 300
サナエタデ-オオイヌタデ	果実	1
タニソバ	果実	1
アカザ属	種子	19
ウシハコベ	種子	1
エノキグサ属	種子	1
メロン仲間	種子	5
ヒョウタン仲間	種子	1
エゴマ	果実	1 (1)
シソ属	果実	5 (10)
ナス	種子	4 (2)
ナス属	種子	4
ゴボウ	果実	1
メナモミ属	果実	4
メヒシバ属	果実	30
ヒエ	有ふ果	1222
イヌビエ属	有ふ果	21
イネ	籾殻	8 (92)
アワ	有ふ果	307 (22)
エノコログサ属	有ふ果	29 (2)
不明	芽	5
ワラビ	裂片	(2)
	小計	1929 ~ 2029 (253)

[現地取り上げ試料：種実] (表2, 4, 5)

1号建物：全体的に草本植物が多い組成であった。水洗試料と同じくヒエが多く、ソバとアワがこれに次いで多かった。モモとイヌビエ属、エノコログサ属がやや多く、メヒシバ属とイネが少量得られた。そのほかは、20点未満の産出数であった。これら以外に、栽培植物では

第4章 自然科学分析

表2 現地取り上げ試料から出土した大型植物遺体（括弧内は破片数）

分類群	採取位置	遺構										合計
		中央付近	1号建物									
		No.31	No.56下	No.58下	No.60	No.265	その他16	No.470下の土	No.525の下の覆土中	M-15鍛冶関連		
イヌガヤ	種子		(1)								(1)	
スギ	葉	(+)						3			3 (+)	
モミ	葉			(2)							(2)	
アカマツ	葉							2 (1)			2 (1)	
クロマツ	球果					1					1	
マツ属複雑管束亜属	球果									1		
オニグルミ	核									(1)	(1)	
ハンノキ属ヤシャブシ亜属	果実							1	1		2	
クリ	果実	(4)	(11)		1 (8)		(6)		(3)	5 (60)	6 (92)	
クワ属	核							4	6	1	11	
トチノキ	種子									(2)	(2)	
カキノキ	種子									1 (1)	1 (1)	
カキノキ属	種子			1							1	
アサ	核		1	(2)				4 (30)	3 (1)		8 (33)	
ソバ	果実	2 (23)	207 (36)	1 (45)				11 (118)	(1)	1 (9)	222 (232)	
イヌタデ	果実			1							1 1	
サナエタデ-オオイヌタデ	果実			1							1	
アカザ属	種子			1				7	1		9	
オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属	果実							1			1	
メロン仲間	種子		2					1			3	
ナス	種子		1							1	2	
メナモミ属	果実			4				1			5	
メヒシバ属	果実		1	1				17		2	21	
ヒエ	有ふ果	27 (15)	13 (6)	114 (12)	1 (1)			349 (18)	4	62 (7)	570 (59)	
イヌビエ属	有ふ果	2 (1)		10 (2)				39 (8)			51 (11)	
イネ	籾殻	(4)		(10)				(16)	(1)	(1)	(32)	
キビ	有ふ果			1				1			2	
アワ	有ふ果	2	3	40 (8)				142 (22)	1	9 (2)	197 (32)	
エノコログサ属	有ふ果	2 (13)	2 (2)	14 (5)				49 (5)		8 (10)	75 (35)	
オオムギ	炭化果実		1								1	

表3 現地取り上げ試料から出土した葉遺体

分類群	採取位置	遺構	
		1号建物	
		建物南	
		No.686付近	No.476
スギ	枝		++
アカマツ	葉	++	
ヒイラギ	葉	++	

++:10-49

カキノキとメロン仲間、エゴマ、ナス、キビ、オオムギがわずかに得られた。

L-14, L-15, M-15:モモが少量、オニグルミがわずかに得られた。

[現地取り上げ試料:葉] (表3)

1号建物:スギとアカマツ、ヒイラギがそれぞれ少量得られた。

次に、各分類群の記載を行い、写真を示して同定の根拠とする。同時期の遺跡である東宮遺跡で産出している分類群(おもに野生種)の記載については、佐々木・バンダリ(2012)を参照されたい。

(1) イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight ex Forbes) K.Koch 種子 イヌガヤ科

赤褐色で、完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は長楕円形。先端部がわずかに突出する。表面は硬く、

顆粒状の浅い隆起が全面にある。残存長6.6mm、残存幅5.3mm。

(2) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don 枝 ヒノキ科

暗褐色で、針葉は鎌状の針形。断面は三角形に近い。基部は細くなる。長さ89.0mm。

(3) モミ *Abies firma* Siebold et Zucc 葉 マツ科

茶褐色で、扁平な針形。背面の中央部には縦方向の溝があり、腹面には幅の広い二列の気孔条がある。基部は残存していない。先端は二裂に分岐してわずかにへこむ。最大で、残存長18.3mm、幅2.2mm。

(4) アカマツ *Pinus densiflora* Siebold et Zucc. 葉 マツ科

赤褐色で、側面観は針形、断面形は半円形。先端および基部は残存していない。残存長2.9mm、幅0.8mm。完形ならば長さ7~12cmになる。光学顕微鏡による横断面の観察では、葉の中央に維管束があり、表皮に接した樹脂道がみられる。アカマツは樹脂道が表皮に接するが、クロマツは樹脂道が表皮に接さないため、アカマツの葉と同定した。長さ60.0mm、幅2.0mm。

(5) クロマツ *Pinus thunbergii* Parl. 球果 マツ科

暗褐色で、上面観は円形、側面観は狭卵形。種鱗はく

さび形で、木質化しており、硬い。露出部は菱形状。高さ41.5mm、幅25.3mm、厚さ21.6mm。

表4 モモ・オニグルミの計測・形状分類(1)(括弧内は破片数)

No.	遺構	分類群	部位	産出数	形状	長さ	幅	厚さ
4	1号建物	オニグルミ	核	(1)	打撃痕			
50	1号建物	モモ	核	1	完形	32.3	23.8	16.1
51	1号建物	オニグルミ	核	(1)	半割	25.2	22.8	-
62-1	1号建物	モモ	核	1	完形	24.7	19.2	15.8
62-2	1号建物	モモ	核	1	完形	22.6	18.4	15.0
117	1号建物	オニグルミ	核	(1)	動物食痕			-
180	1号建物	モモ	核	1	完形	31.6	24.3	16.1
181	1号建物	モモ	核	1	完形	31.0	24.0	16.2
182	1号建物	モモ	核	1	完形	21.0	18.3	15.3
183	1号建物	モモ	核	1	完形	30.6	21.5	15.3
266	1号建物	モモ	核	1	完形	24.3	16.5	13.9
267	1号建物	モモ	核	1	完形	26.7	20.2	15.6
269	1号建物	モモ	核	(1)	半割	22.4	17.9	-
341	1号建物	モモ	核	1	完形	32.7	23.5	16.7
439-2	1号建物	オニグルミ	核	(1)	半割	31.7	25.0	-
538	1号建物	モモ	核	1	完形	34.2	26.4	16.9
540	1号建物	モモ	核	1	完形	30.7	20.9	13.9
541	1号建物	モモ	核	1	完形	31.0	22.7	15.6
554	1号建物	モモ	核	1	完形	28.4	22.9	18.9
566	1号建物	モモ	核	1	完形	35.9	25.7	17.0
576	1号建物	モモ	核	1	完形	34.3	23.4	16.9
577	1号建物	オニグルミ	核	(1)	不明			
578	1号建物	モモ	核	1	完形	29.0	19.3	13.5
579	1号建物	モモ	核	1	完形	28.6	19.0	13.3
580-1	1号建物	モモ	核	1	完形	22.9	16.0	12.4
580-2	1号建物	モモ	核	1	完形	23.9	16.5	13.8
588	1号建物	不明	種実	(1)		15.4	15.2	15.1
596	1号建物	モモ	核	1	完形	28.1	20.8	14.6
598	1号建物	オニグルミ	核	(1)	半割	25.8	22.2	-
614	1号建物	モモ	核	1	完形	31.0	23.8	16.8
615	1号建物	モモ	核	1	完形	32.6	23.1	14.7
616	1号建物	モモ	核	1	完形	19.9	16.0	13.1
617	1号建物	モモ	核	1	完形	25.7	17.5	13.7
618	1号建物	モモ	核	(1)	自然の割れ			
625	1号建物	オニグルミ	核	(1)	半割	28.7	25.0	-
626	1号建物	オニグルミ	核	1	完形	31.1	23.6	21.7
627	1号建物	オニグルミ	核	1	完形	27.3	24.4	20.5
628	1号建物	モモ	核	1	完形	29.5	21.6	16.1
630	1号建物	モモ	核	1	完形	23.3	19.2	15.6
634	1号建物	オニグルミ	核	(1)	自然の割れ	27.3	23.5	-
635	1号建物	オニグルミ	核	(1)	自然の割れ			
636	1号建物	オニグルミ	核	(1)	自然の割れ			
647	1号建物	モモ	核	1	完形	22.8	15.2	11.8
648	1号建物	モモ	核	1	完形	24.1	17.6	15.6
678	1号建物	オニグルミ	核	(1)	自然の割れ			
その他15-1	1号建物	オニグルミ	核	1	完形	26.3	25.3	26.2
その他15-2	1号建物	モモ	核	1	完形	32.2	24.9	17.2
フク土-1	1号建物	オニグルミ	核	(1)	半割	32.1	26.7	-
フク土-2	1号建物	モモ	核	(1)	半割			
フク土-3	1号建物	モモ	核	(1)	半割			
フク土	1号建物	オニグルミ	核	(1)	半割			
フク土	1号建物	オニグルミ	核	(1)	不明			
フク土①	1号建物	モモ	核	1	完形	33.9	24.8	16.9
フク土②	1号建物	モモ	核	1	完形	31.0	20.4	14.6
フク土③	1号建物	モモ	核	1	完形	25.9	19.7	15.9
フク土④	1号建物	モモ	核	1	完形	26.0	16.9	12.7
フク土⑤	1号建物	モモ	核	1	完形	22.8	16.2	13.9
鍛冶関連フク土	L-15	モモ	核	1	完形	25.1	18.8	12.5
鍛冶関連フク土	L-15	モモ	核	(5)	打撃痕			

(6) ハンノキ属ヤシヤブシ亜属 *Alnus sieboldiana* Matsum. 果実 カバノキ科

果実部分は明褐色で、上面観は扁平、側面観は狭倒卵形。高さは幅の3倍以上。表面は平滑。先端には柱頭がある。両側に透明感のある薄黄白色の翼部分がある。長さ3.2mm、幅1.5mm。

(7) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. 果実・未熟果 ブナ科

黒褐色で、側面は広卵形。表面は平滑で、細く浅い縦筋がみられる。殻斗着痕はざらつく。長さ18.5mm、幅18.4mm、厚さ7.5mm。未熟果の大きさは、長さ6.2mm、幅4.3mm。

(8) カキノキ *Diospyros kaki* Thunb. 種子 カキノキ科

黒褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形で基部がやや曲がり突出する。表面にはちりめん状のしわが見られる。明らかに大型の果実であったと想定される種子をカキノキとした。長さ17.0mm、幅9.4mm。小型の種子をカキノキ属とした。長さ8.1mm、幅5.4mm。

(9) ヒイラギ *Osmanthus heterophyllus* (G. Don) P. S. Green 葉 モクセイ科

明茶褐色で、楕円形。厚い革質で、光沢がある。先端が刺状になった大型の歯牙が3対ほどある。写真に示した2点の葉の大きさは、残存長32.9mm、幅16.2mmと、残存長40.4mm、幅18.2mm。

(10) アサ *Cannabis sativa* L. 核 クワ科

明褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形で側面に稜がある。下端には突出した大きな楕円形の着点がある。表面には脈状の模様がある。長さ5.2mm、幅4.1mm、厚さ3.7mm。

(11) ソバ *Fagopyrum sagittatum* Gilib. 果実 タデ科

暗褐色で、完形の果実は三稜形にわかれ、端部は翼状に突き出る。長さ7.0mm、

表5 モモ・オニグルミの計測・形状分類(2)(括弧内は破片数)

No.	グリッド	分類群	部位	産出数	形状	長さ	幅	厚さ
33	L-14	モモ	核	(1)	半割			
鉄滓含土壤	L-14	モモ	核	(5)	半割			
①	L-15	モモ	核	1	完形	31.2	20.2	13.5
②	L-15	モモ	核	1	完形	29.4	22.3	14.4
③	L-15	モモ	核	1	完形	24.8	18.4	12.5
④	L-15	モモ	核	1	完形	24.6	17.6	14.6
⑤	L-15	モモ	核	1	完形	26.1	17.6	14.2
-	L-15	モモ	核	(13)	自然の割れ			
-	L-15	モモ	炭化核	(1)	不明			
67	L-15	モモ	核	(2)	自然の割れ			
188	L-15	モモ	核	(1)	自然の割れ			
209	L-15	モモ	核	(1)	打撃痕			
-	M-15	モモ	核	(1)	打撃痕			
-	M-14	モモ	核	(1)	打撃痕			
①	M-15	モモ	核	1	完形	26.8	17.8	14.1
②	M-15	モモ	核	1	完形	28.5	18.8	13.1
12	M-15	モモ	核	(1)	半割			
13	M-15	モモ	核	(1)	打撃痕			
53	M-15	モモ	核	1	完形	28.0	23.1	15.5
54	M-15	モモ	核	(1)	半割			
55	M-15	モモ	核	1	完形	29.0	22.6	15.8
77	M-15	モモ	核	1	完形	34.7	25.8	17.5
鍛冶関連	M-15	モモ	核	(30)	自然の割れ			
鍛冶関連	M-15	オニグルミ	核	(2)	不明			
鍛冶関連-1	M-15	モモ	核	1	完形	34.3	25.6	16.5
鍛冶関連-2	M-15	モモ	核	1	完形	32.8	24.4	16.3
鍛冶関連-3	M-15	モモ	核	1	完形	29.7	24.3	16.6
鍛冶関連-4	M-15	モモ	核	1	完形	35.0	23.0	15.7
鍛冶関連-5	M-15	モモ	核	1	完形	26.8	20.7	16.5
鍛冶関連-6	M-15	モモ	核	1	完形	30.8	22.9	16.7
鍛冶関連-7	M-15	モモ	核	1	完形	29.5	22.7	18.0
鍛冶関連-8	M-15	モモ	核	1	完形	28.9	23.1	17.2
鍛冶関連-9	M-15	モモ	核	1	完形	28.2	22.7	16.8
2	N-16	モモ	核	(1)	打撃痕			
	フク土	モモ	核	1	完形	22.7	17.3	13.9
	フク土	モモ	核	(9)	自然の割れ			
	フク土	モモ	核	(1)	半割			

合計	オニグルミ	核	3	(16)
	モモ	核	56	(79)
	不明	種実		(1)

幅4.0mm。

(12) メロン仲間 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科

赤褐色で、上面観は扁平、側面観は狭卵形で頂部が尖る。幅狭でやや厚みがある。藤下(1984)は、種子の大きさからおおむね次の3群に分けられるとしている。長さ6.0mm以下の雑草メロン型、長さ6.1~8.0mmのマクワウリ・シロウリ型、長さ8.1mm以上のモモルディカメロン型である。今回の試料ではマクワウリ・シロウリ型が中心である。写真に示した種子は、長さ7.2mm、幅3.7mm程度で、マクワウリ・シロウリ型の大きさである。

(13) ヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* (Molina) Standl. 種子 ウリ科

黄褐色で、上面観は扁平、側面観は逆三角形。やや

湾曲して左右は非対象、先端はW字状で、基部から先端まで、浅く広い溝が2本走る。壁はややスポンジ質。長さ15.8mm、幅9.0mm。

(14) エゴマ *Perilla frutescens* (L.)

Britton var. *frutescens* 果実 シソ科

褐色で、いびつな球形。下端部にやや突出する着点がある。表面には、低い隆起で不定多角形の網目模様がある。長さ2.3mm、幅2.0mm。長さ2.0mm以下の大きさの果実はシソ属とした。

(15) シソ属 *Perilla* spp. 果実 シソ科

褐色で、いびつな球形。下端部に着点がある。表面には、低い隆起で多角形の網目状隆線がある。エゴマ以外のシソ属である。長さ1.9mm、幅1.6mm。

(16) ナス *Solanum melongena* L. 種子 ナス科

赤褐色で、上面観は長楕円形、側面観は楕円形。着点は明瞭に窪む。表面には畝状突起が覆瓦状となる細かい網目状隆線がある。長さ3.2mm、幅3.8mm。ナス以外をナス属とした。

(17) ヒエ *Echinochloa esculenta*

(A. Braun) H. Scholz 有ふ果 イネ科

赤褐色で、楕円形。先端と基部はやや尖り、内穎は膨らまない。微細な縦筋がある。壁は薄く、光沢がある。長さ2.9mm、幅2.1mm。

(18) イヌビエ属 *Echinochloa* spp. 有ふ果 イネ科

茶褐色で、紡錘形。基部と先端はやや尖る。縦方向に細かい顆粒状の模様がある。壁は薄く弾力がある。内穎は膨らまない。長さ2.7mm、幅1.4mm。全体の形状は、栽培種であるヒエよりも細長く、野生のイヌビエに近い。

(19) イネ *Oryza sativa* L. 籾殻 イネ科

赤褐色で、側面観が長楕円形。縦方向に明瞭な稜線があり、基部は突出する。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。長さ7.1mm、幅3.4mm。

(20) キビ *Panicum miliaceum* L. 有ふ果 イネ科

光沢のある黄褐色で、上面観は円形、側面観は紡錘形。長さ2.8mm、幅2.2mm。

(21) アワ *Setaria italica* P.Beauv. 有ふ果 イネ科

赤褐色で、紡錘形。内穎と外穎に独立した微細な乳頭突起がある。長さ2.3mm、幅1.6mm。

(22) エノコログサ属 *Setaria* spp. 有ふ果 イネ科

赤褐色で、上面観は楕円形、側面観は長楕円形。アワよりも細長く、乳頭突起が畝状を呈する。長さ2.3mm、幅1.3mm。

(23) オオムギ *Hordeum vulgare* L. 炭化果実 イネ科

上面観は円形、側面観は紡錘形。下端は残存していない。縦方向に筋がある。残存長5.3mm、幅2.7mm、厚さ3.4mm。

3. 考察

天明の泥流で埋没した1号建物などの大型植物遺体を検討した結果、生の状態で遺存していた多量の穀類に混じって野生種の葉や種実が得られた。栽培植物では、モモとカキノキ、アサ、ソバ、メロン仲間、ヒョウタン仲間、エゴマ、ナス、ゴボウ、ヒエ、イネ、キビ、アワ、オオムギが得られた。このうちモモについて、計測可能な57点の大きさを計測したところ、長さ19.9～35.9mm（平均28.3mm）、幅15.2～26.4mm（平均20.8mm）、厚さ11.8～18.9mm（平均15.2mm）と、大きさの変異幅が大きかった。また、打撃痕のある個体が4点確認されており、モモの核の内部の子葉が食されたと考えられる。ヒエは、水洗試料と現地採取試料共に突出して多かった。ソバやヒエ、キビ、アワ、オオムギは殻付きで得られており、殻が付いた状態で保管されていた可能性がある。イネは籾殻のみが得られており、籾摺後の籾殻のみが堆積したと考えられる。メロン仲間の種子は、マクワウリ・シロウリ型の大きさの種子であった。ほかに食用可能な植物として、木本植物ではオニグルミとクリ、クワ属、ブドウ属、トチノキ、草本植物ではシソ属などが得られた。これら野生植物は、建物の周囲に植栽されていた可能性もある。オニグルミには打撃痕をもつ個体が1点含まれており、食用にされていたようである。オニグルミについて、計測可能な10点の大きさを計測したところ、長さ25.2～32.1mm（平均28.4mm）、幅22.2～26.7mm（平均

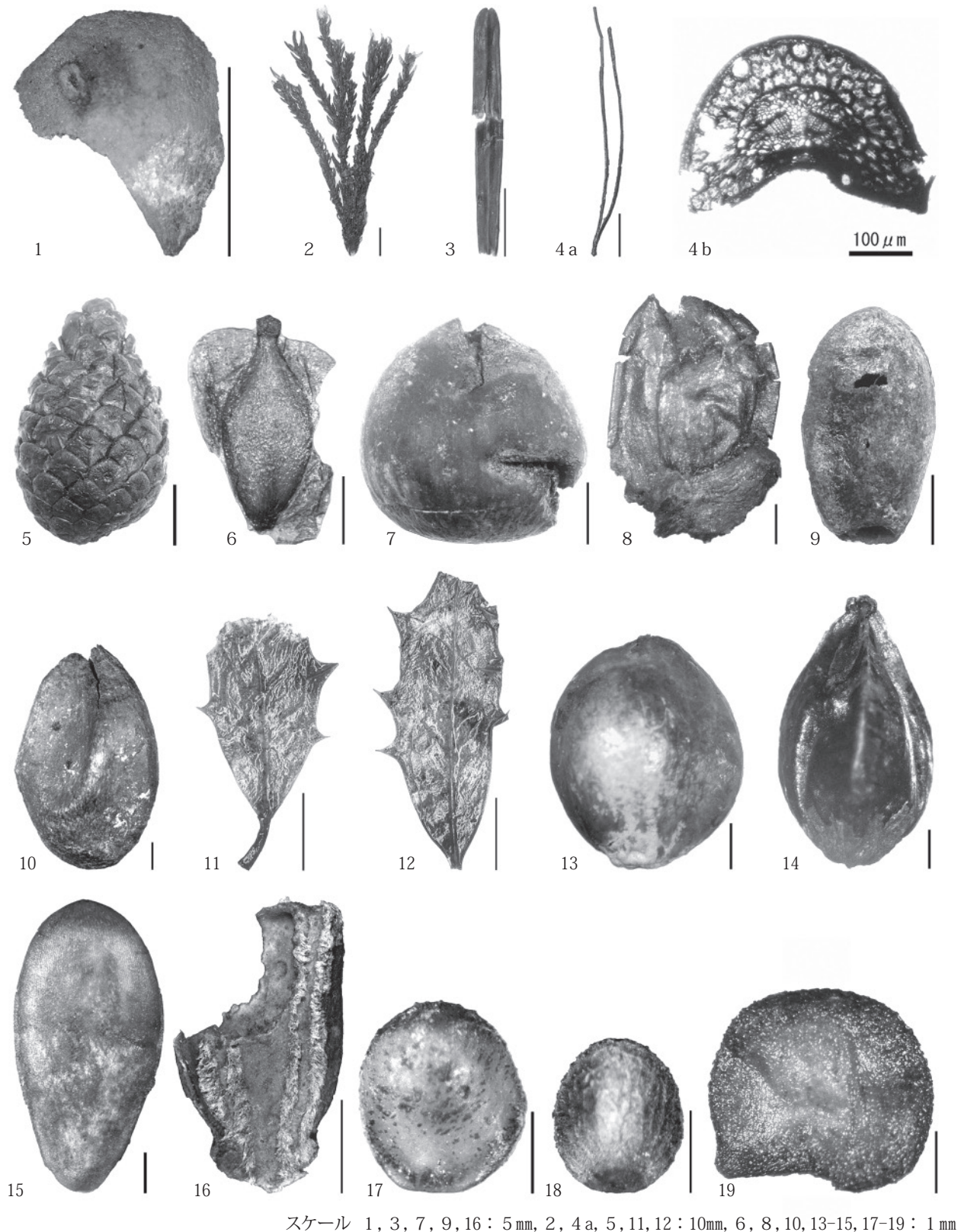
24.3mm）、厚さ20.5～26.2mm（平均22.8mm）であり、大きさの変異幅が大きかった。

針葉樹のイヌガヤやカヤ、スギ、アカマツ、クロマツと広葉樹のハンノキ属やシャブシ亜属やエゴノキ属は、1号建物の周囲または1号建物があった街道筋に生育していたと考えられる。特に葉で産出しているスギとアカマツ、ヒイラギは1号建物のごく近くに生育していた可能性が高い。ヒイラギは、建物の周囲の垣根に利用するために植栽されていたかもしれない。草本植物は量も少量であり、偶発的に堆積したと考えられる。比較的多く産出した、荒地や道端などに生育するアカザ属やメナモミ属、メヒシバ属などは、1号建物周辺に生育しており、遺構の廃絶後に流れ込んで堆積したと考えられる。ただし、アカザ属は種類によっては、食用にされた可能性もある。

今回の試料は、水洗量に対する種実の含有率が非常に高く、食用可能な特定の種実が多い点が特徴的であった。台地上の遺跡では通常生の種実は分解されてしまうため、町遺跡は泥流により生の種実が良好に残存し、当時の建物内における植物の利用状況の検討が可能な例として非常に重要である。また、1号建物内では寄生虫卵や人糞や獣糞に集まる昆虫も検出されており（花粉分析と昆虫遺体分析の項参照）、食用にされた種実の中には、排泄物に含まれていた種実も存在した可能性がある。

引用文献

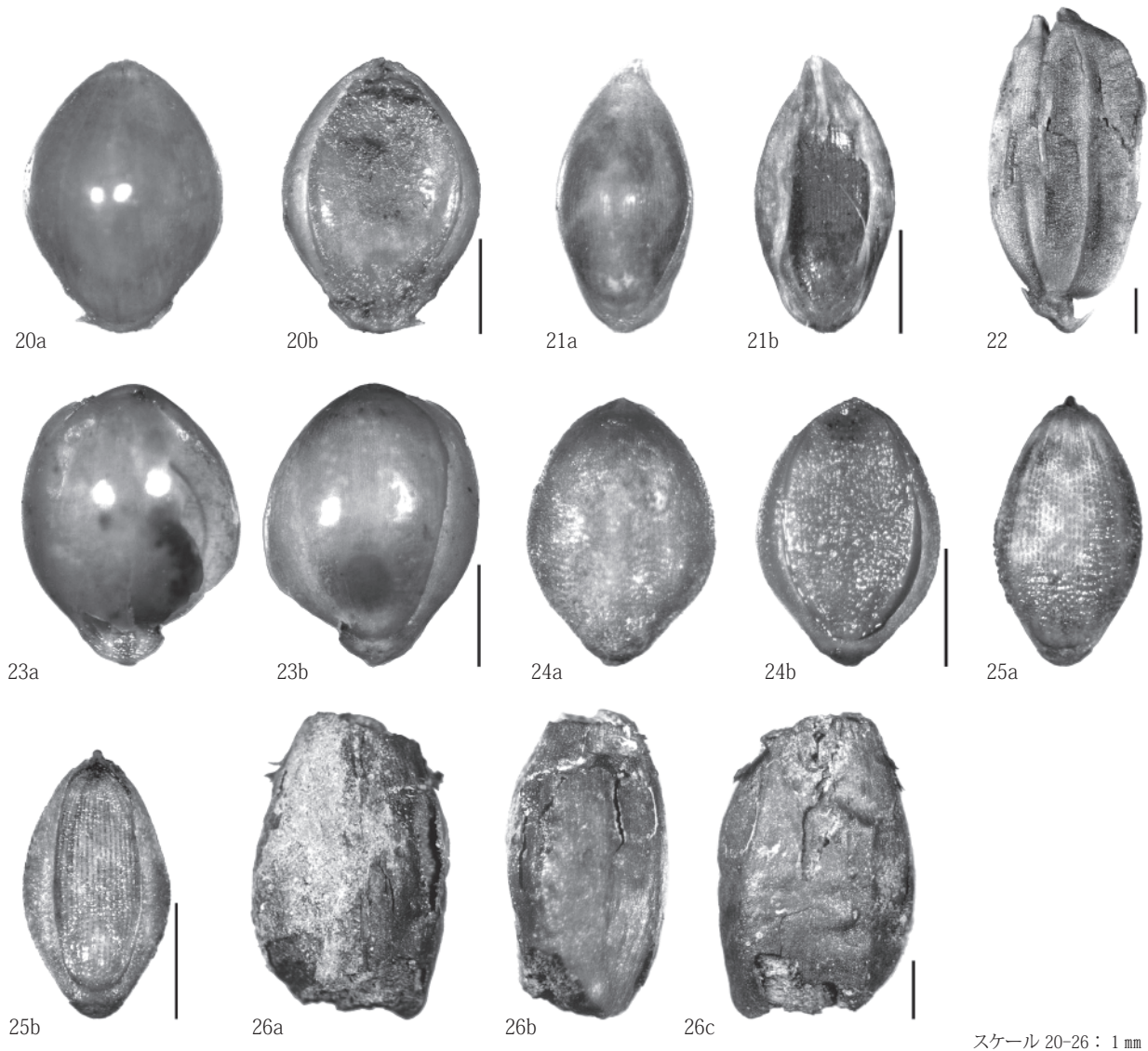
- 藤下典之（1984）出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法。渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学—総括報告書」：638-654, 同朋舎出版。
- Jacomet, S. and collaborators Archaeobotany Lab. (2006) Identification of cereal remains from archaeological sites. 2nd edition, IPAS, Basel Univ.
- 佐々木由香・バンドリ スダルシャン（2012）東宮遺跡から出土した大型植物遺体。群馬県埋蔵文化財調査事業団編「東宮遺跡（2）—遺物編—」：437-461, 群馬県埋蔵文化財調査事業団。



スケール 1, 3, 7, 9, 16 : 5mm, 2, 4a, 5, 11, 12 : 10mm, 6, 8, 10, 13-15, 17-19 : 1mm

図版 1 町遺跡から出土した大型植物遺体 (1)

1. イヌガヤ種子 (中央南側)、2. スギ枝 (No.476)、3. モミ葉 (No.58 下)、4. アカマツ葉 (No.686 付近)、5. クロマツ球果 (No.265)、6. ハンノキ属ヤシャブシ亜属果実 (中央南側)、7. クリ果実 (覆土中)、8. クリ未熟果 (中央南側)、9. カキノキ種子 (覆土中)、10. カキノキ属種子 (No.58 下)、11・12. ヒイラギ葉 (No.686 付近)、13. アサ核 (中央南側)、14. ソバ果実 (No.470 の下の土)、15. メロン仲間種子 (中央南側)、16. ヒョウタン仲間種子 (中央南側)、17. エゴマ果実 (中央南側)、18. シソ属果実 (中央南側)、19. ナス種子 (中央南側)



スケール 20-26 : 1 mm

図版 2 町遺跡から出土した大型植物遺体 (2)

20. ヒエ有ふ果 (中央南側)、21. イヌビエ属有ふ果 (中央南側)、22. イネ籾殻 (中央南側)、23. キビ有ふ果 (No. 58 下)、24. アワ有ふ果 (中央南側)、25. エノコログサ属有ふ果 (中央南側)、26. オオムギ炭化果実 (No. 56 下)

第3節 昆虫遺体

1. 試料と方法

昆虫分析試料は2種類あり、発掘調査現場で目視により採取されて土とともにプラスチックケースに納められた10サンプル (試料1～10;以下現場取り上げ試料) と、水洗選別後の1サンプル (試料11;以下水洗試料) の計11サンプルであった。なお、試料番号は任意に付した。

以下に、各分析試料の内訳を簡単に述べる。現場取り上げ試料の試料1は1号建物の種実中、試料2は1号建物南側下駄付近、試料3は1号建物虫サンプル、試料4は町遺跡33区J-13G、試料5は1号建物虫サンプル、試料6は1号建物虫、試料7は1号建物の種実中、試料8は1号建物南側中央虫サンプル、試料9および10は、1号建物の種実中から得られたものである。

試料11は、1号建物中央南側の土壌試料を500cc水洗選別して得られた残渣から大型植物遺体分析の過程で昆

虫遺体のみを抽出したものである。

現場取り上げ試料には、一部に昆虫のみが入った試料もあったが、大部分は昆虫が発見されたままの状態です。土壌ごとケースに収められており、中には内ばねや腹部など通常は遺跡から検出されることのない軟体部が保存された標本や、一体分すべてが揃った昆虫遺体も多数認められた。

昆虫の同定作業にあたっては、現場取り上げ試料のすべての表面について実体顕微鏡下で検鏡し昆虫の発見に努めたが、ブロック状の土はほぐしていないため、土壌の内部に含まれる昆虫は検出できていない。なお、昆虫は一体分と記載した試料以外は、すべて体節に分離した状態で発見されており、計数点数は個体数を示したものではない。

2. 結果

現場取り上げ試料の試料1～10からは計261点、水洗試料の試料11からは計570点の昆虫が発見されたが、このうち125点は未同定である。ここでは、同定した計706点の昆虫の分析結果について述べる（表1）。

試料1～10のうち、試料4のみが町遺跡33調査区内から得られており、他はいずれも1号建物と関連した試料である。試料11についても、1号建物の南側の土壌を水洗選別して得られた試料である。

試料4からは、大型の地表性歩行虫であるアオオサムシ *Carabus insulicola* の上翅や頭部・胸部などのほか、アオオサムシかこの近縁種に同定される可能性が高いオサムシ科 Carabidae の腿脛節が発見された。アオオサムシは畑作地や森林内に生息し、ミミズや鱗翅目の幼虫などを捕食する夜行性の食肉性甲虫である。本種の出現は、遺跡周辺の自然環境や植生などを推定するのに有効であるが、アオオサムシ以外の昆虫が見つからないため、出現昆虫からの情報は不完全である。

1号建物やこれと関連して取りあげられた試料からは、従来先史～歴史時代の遺跡から発見された昆虫とは、かなり異なった昆虫組成が得られた。昆虫分析試料が建物跡とされる場所から採取されたため当然と言えるが、水生昆虫はまったく検出されず、植生に由来する昆虫もごくわずかであった。

明確に周辺植生に關与している可能性のある食植性昆

表1 町遺跡から産出した昆虫組成

和名	学名	食性	生態/試料No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計
オサムシ科	Carabidae gen. et sp. indet.	地表性	雑食性	1	1			2	1					12	17
アオオサムシ	<i>Carabus insulicola</i> Chaudoir	食肉性	地表性				6								6
センチコガネ	<i>Geotrupes laevistriatus</i> Motschulsky	食糞性	地表性											1	1
エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.	食糞性	地表性					1							1
マグソコガネ	<i>Aphodius rectus</i> (Motschulsky)	食糞性	地表性											7	7
マグソガムシ	<i>Pachysternum haemorrhoum</i> Motschulsky	食糞性	地表性						1						1
エンマムシ科	Histeridae gen. et sp. indet.	食屍性	地表性						2						2
エンマムシ	<i>Merohister jekeli</i> (Marseul)	食屍性	地表性											1	1
クロチビエンマムシ	<i>Carcinopus pumilio</i> (Erichson)	食屍性・貯穀性	屋内性		1			2						20	23
ハネカクシ科	Staphylinidae gen. et sp. indet.	雑食性	地表性		1			3						20	24
ゴミムシダマシ	<i>Neatus picipes</i> (Herbst)	貯穀性	屋内性	2	9	9		58	70	7	8	1	3	162	329
ヒメカツオブシムシ	<i>Attagenus unicolor</i> Brahm	食屍性・貯穀性	屋内性					2	2					50	54
ノコギリヒラタムシ	<i>Oryzaephilus surinamensis</i> (Linne)	貯穀性	屋内性					1							1
コガネムシ科	Scarabaeidae gen. et sp. indet.	食植性	陸生	1											1
サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	食植性	陸生					1							1
ドウガネブイブイ	<i>Anomala cuprea</i> Hope	食植性	陸生					3							3
ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	食植性	陸生								1				1
ハムシ科	Chrysomelidae gen. et sp. indet.	食植性	陸生	1	1										2
イネネクイハムシ	<i>Donacia provosti</i> Fairmaire	食植性	陸生					1							1
ヨモギハムシ	<i>Chrysolina aurichalcea</i> (Mainerheim)	食植性	陸生	1											1
ゾウムシ科	Curculionidae gen. et sp. indet.	食植性	陸生											11	11
コクゾウムシ	<i>Sitophilus zeamais</i> Motschulsky	貯穀性	屋内性	2				12	17					81	112
コメツキムシ科	Elateridae gen. et sp. indet.	雑食性	陸生											2	2
クシコメツキ	<i>Melanotus legatus</i> Candeze	雑食性	陸生											1	1
カメムシ目	Hemiptera fam., gen. et sp. indet.	雑食性	陸生											4	4
ハエ目	Diptera fam., gen. et sp. indet.	雑食性	地表性											4	4
クロバエ科	Calliphoridae gen. et sp. indet.	食糞性	地表性											3	3
オオクロバエ	<i>Calliphora lata</i> Coquillett	食糞性	地表性											16	16
アリ科	Formicidae gen. et sp. indet.	地表性	雑食性	1				1	1					31	34
トビイロシワアリ	<i>Tetranorium tsushimae</i> (Emery)	地表性	雑食性						2						2
不明甲虫	non identified beetle	不明	不明	3	5	1		4	7		1			19	40
未同定の昆虫		不明	不明											125	125
			計	12	18	10	8	90	102	7	10	1	3	570	831

虫は、わずか8点(1.1%)出現したのみであった。試料1および2からは、乾燥した農耕地などに多いヨモギを加害するヨモギハムシ *Chrysolina aurichalcea* (1点)が発見された。これ以外に属や種が特定できないコガネムシ科 Scarabaeidae (1点)とハムシ科 Chrysomelidae (計2点)が確認された。このほかには、稲作害虫として知られるイネネクイハムシ *Donacia provosti* (1点)と、畑作物や果樹などの葉を食べるドウガネブイブイ *Anomala cuprea* (計3点)が試料5より、同じく畑作物や植栽された庭木などの葉を加害するヒメコガネ *A. rufocuprea* (1点)やサクラコガネ属 *Anomala* sp. (1点)が試料8から産出したのみである。

最も多産した昆虫は、試料4以外のすべての分析試料に含有されたゴミムシダマシ *Neatus picipes* (計329点)である。本種は、ゴミムシダマシ科 Tenebrionidae に属する体長13.0~17.0mmの黒褐色甲虫である。上翅の条溝が深く、条溝内に点刻が密に配列される特徴や前胸背板表面の形状などから近似種と識別される。ゴミムシダマシ科は日本国内に90属305種、全世界では1,400属約16,000種を含む甲虫目の大群であり、朽ち木や腐朽菌、海岸砂地などに生息する一方、その一部は家屋内に生活し貯穀性昆虫として世界的に知られている。ゴミムシダマシは、近似種でヨーロッパ原産とされる(安富・梅谷, 1983) コメノゴミムシダマシ *Tenebrio obscurus* やチャイロコメノゴミムシダマシ *T. molitor*、やはり同じ科に属しオーストラリア原産とされる(安富・梅谷, 1983) コクヌストモドキ *Tribolium cutaneum* などとともに、穀類を加害する貯穀性昆虫である。

次に多く発見された昆虫は、同じく貯穀性昆虫として名高いコクゾウムシ *Sitophilus zeamais* (計112点)であった。コクゾウムシは、遺跡から産出した例では、穀物倉庫があったとされる戦国時代の愛知県清洲城下町遺跡(森, 2000)、同様に貯蔵施設との関連が指摘される江戸時代の愛知県名古屋城三の丸遺跡(森・上田, 2005)や宮城県沼向遺跡(森, 2010)などから発見されている。このほか、明らかに穀類との関連が疑われる昆虫では、主に貯蔵された穀粉を食べ貯穀害虫として著名なノコギリヒラタムシ *Oryzaephilus surinamensis* が試料5より1点見いだされている。

貯蔵穀物に関連して同じような生態を示す昆虫では、

主に動物質食品の食品害虫として名高いヒメカツオブシムシ *Attagenus unicolor* (計54点)が確認された。本種はカツオブシムシ科 Dermestidae に属し、体長4.5~5.5mmの紡錘形、光沢のある黒色の甲虫である。上翅表面に黄白色の短毛、前胸背板上に黄褐色のやや長い毛が覆う特徴などより同定される。カツオブシムシ類は、毛織物や絹製品、魚類の干物や穀物などを加害する昆虫であるが、ヒメカツオブシムシは幼虫が各種の種子・豆・穀粒・穀粉・貯蔵タバコなどを食べ(日本家屋害虫学会編, 1995)、より小型のヒメマルカツオブシムシ *Anthrenus verbasci* とともに、植物質食品や乾燥魚・毛織物・昆虫の死骸などを食べる家屋害虫である(松崎・武衛, 1993)。

また、試料2から1点、試料5から2点、試料11から20点の計23点確認されたクロチビエンマムシ *Carcinops pumilio* は、エンマムシ科 Histeridae に所属する体長2.2~2.7mmの小型の食屍性甲虫である。本種は腐敗動植物質に集まる習性があり、とくに穀類など貯蔵食品中で採集されることが多い(上野ほか, 1985)。エンマムシ科は、成虫・幼虫ともに捕食性があり、主としてハエのウジを捕食する。クロチビエンマムシは、マルマメエンマムシ *Gnathoncus nanus* やオオマルマメエンマムシ *G. nannetensis* とともに貯穀類から見いだされる(日本家屋害虫学会編, 1995)が、これらは貯蔵穀物を食べただけでなく、穀類に集まる貯穀性昆虫の幼虫や蛹などを捕食していた可能性も考えられる。

これ以外には、食性のうえでは主として雑食性であるが、チビエンマムシと同様食屍性昆虫を多数含むハネカクシ科 Staphylinidae (計24点)や、大型の食屍性昆虫であるエンマムシ *Merohister jekeli* (1点)が確認された。

このほか、人糞や獣糞などに集まる食糞性甲虫のマグソコガネ *Aphodius rectus* (計7点)やマグソガムシ *Pachysternum haemorrhoum* (1点)に加え、汚物食のオオクロバエ *Calliphora lata* (計16点)やクロバエ科 Calliphoridae (計3点)などが発見されている。雑食性の地表性昆虫であるトビイロシワアリ *Tetramorium tsushimae* (計2点)をはじめ、アリ科 Formicidae も計36点見いだされた。

3. 考察

江戸時代後期の浅間山の泥流に覆われたとされる町遺跡からは計706点の昆虫が発見された。その73.5%にあたる519点が発見された穀類に由来する昆虫であった。

こうした昆虫組成は、いったい何を示しているのだろうか。より正しい解釈は、同時に見つかった種類や他の自然遺物などとともに考察すべきであろう。あるいは、何より発掘調査により得られた考古学的成果や、この時期なら十分残っているような古文書史料などを加え、総合的に判断しなければならない。

最も多く発見されたゴミムシダマシは、ゴミムシダマシ科に属する体長約15mmのやや大型の甲虫である。計329点発見された。一体分丸ごと発見されたものも多い。

分析試料として採りあげられなかったものを含めれば、町遺跡の1号建物内には少なくとも見積もっても100頭前後のゴミムシダマシが生息していたと推定される。

次に多かった昆虫は、ゾウムシ科に所属する体長約3mmのククゾウムシである。発見された標本は、そのほとんどが生きたまま土に埋もれたが、検出の過程で体節が分離したと考えられる。ククゾウムシは計112点発見された。

3番目の出現数だった昆虫は、カツオブシムシ科に属するヒメカツオブシムシであった。体長約5mm、やや華奢な体つきの平べったい甲虫である。体中に毛がびっしり生えているのが特徴である。計54点発見された。

4番目に多かった昆虫は、エンマムシ科に分類される体長約2.5mmの黒色光沢の強いクロチビエンマムシである。エンマムシ科の多くは、ハエ類のウジや蛹などを捕食する食屍性甲虫として重要な位置を占めている。同じ分類群に属するエンマムシ科の小型種の一部が、貯穀性となって家屋内に進出したと考えられる。

このように見ると、面白い事実気づく。互いにまったく異なる分類群に属する昆虫が、共通のエサ資源を求めて群がっているという構図である。体長や体の造りなど、それぞれほとんど競合していないことにも驚かされる。見事なすみ分け、食べ分けといわざるを得ない。ただし、分析試料の堆積物は泥流堆積物のため、複数箇所

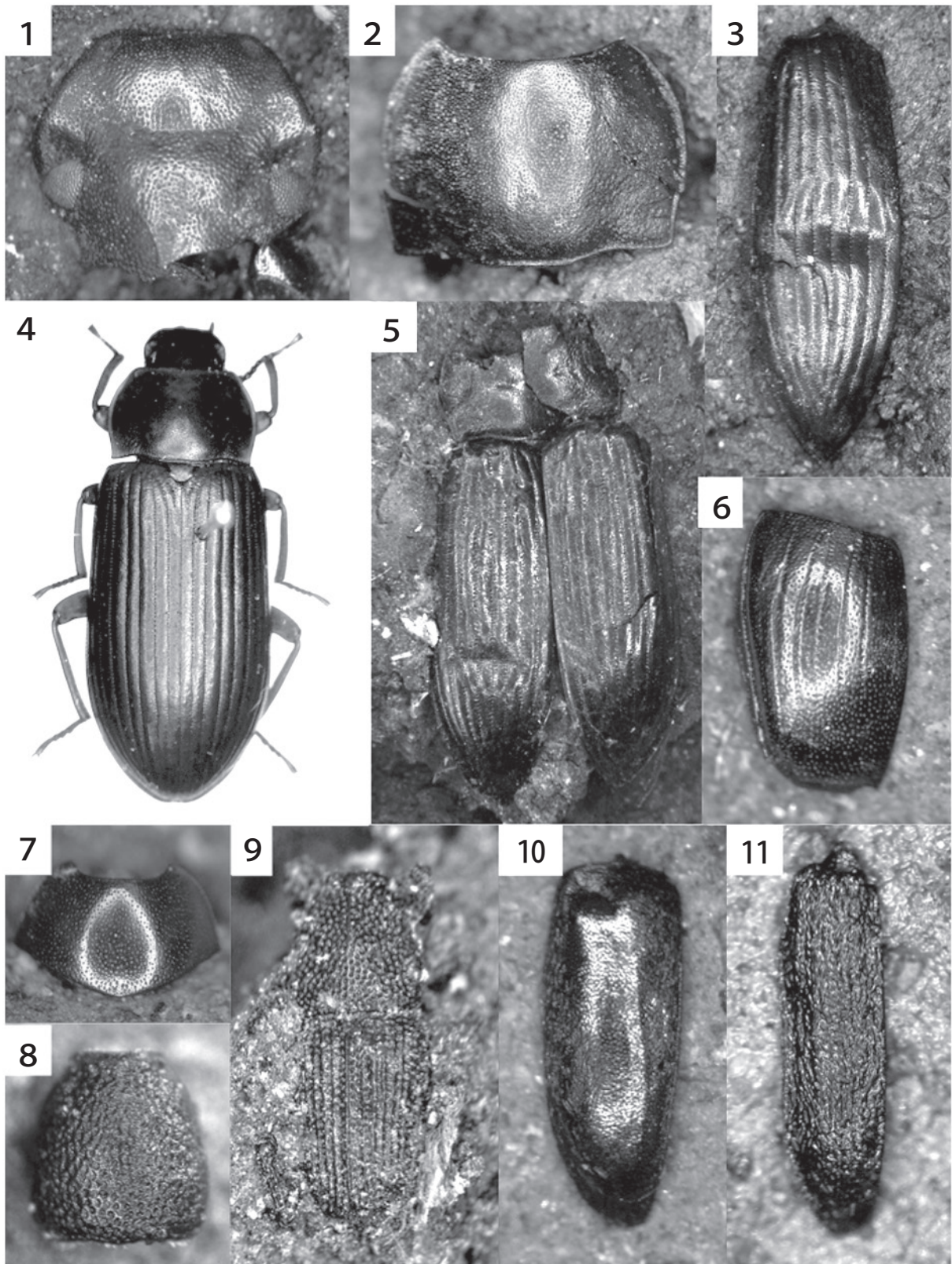
に生息していた昆虫が1カ所に溜まった可能性もある。火山堆積物に被覆された状態で発見された生々しいムシの姿は、噴火の恐ろしさで一瞬にして途絶えた人々の

暮らしのありさまを示す直接資料として大変価値が高い。この中に、ゴミムシダマシやククゾウムシ、ノコギリヒラタムシはじめ、人々が貯蔵した穀類を加害する貯穀性昆虫が多数認められた事実は、何よりそこに多量の貯蔵穀物が存在したことをもの言わず語りかけている。

人糞や獣糞に集まるマグソコガネやセンチコガネ、オオクロバエ、クロバエ科など汚物食の昆虫が同じ場所から発見されており、同じ場所に生息していたものならば、穀物貯蔵場所周辺の衛生状態を考察するうえで興味深い。

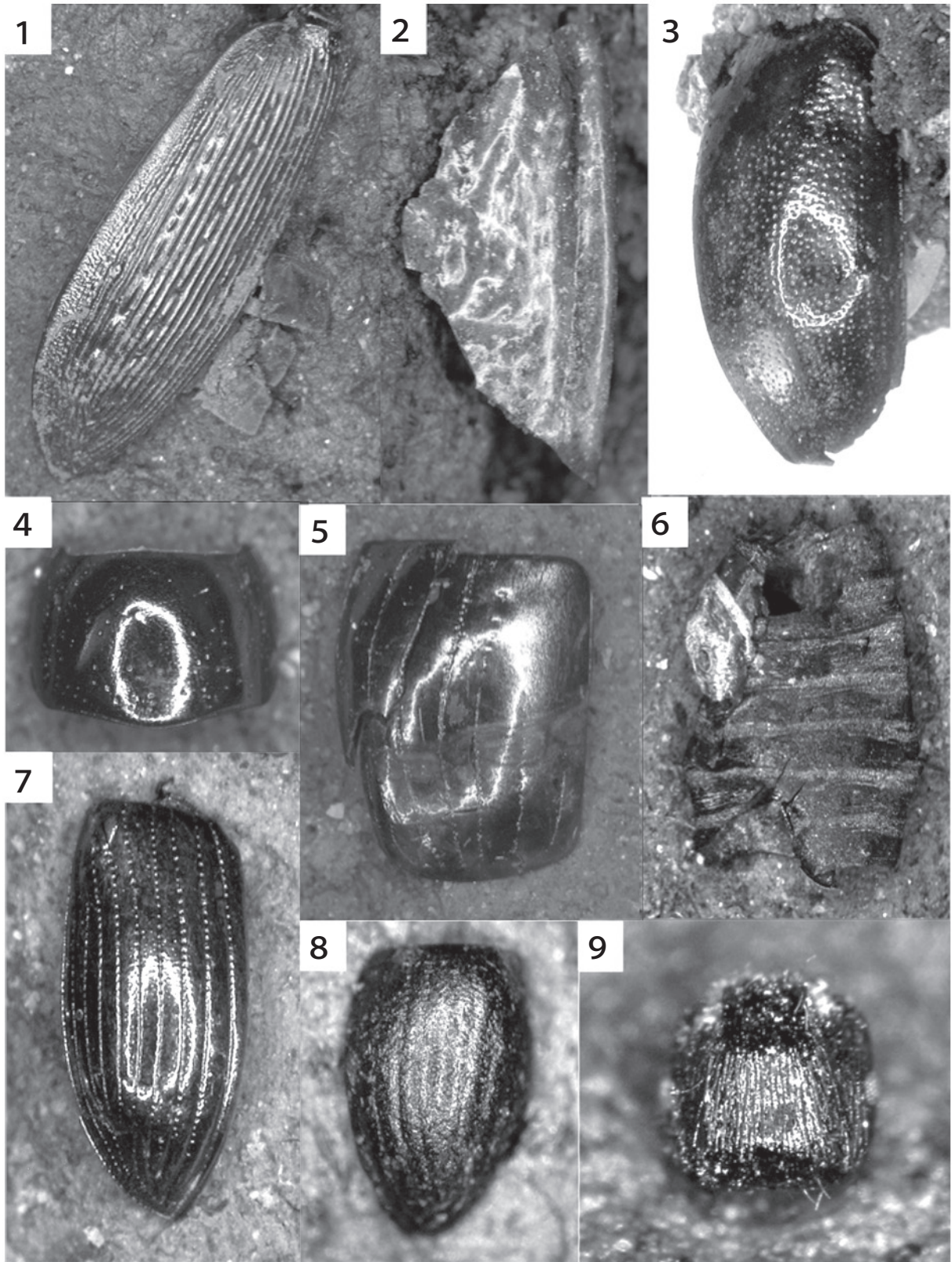
引用文献

- 日本家屋害虫学会編(1995)家屋害虫事典. 468p, 井上書院.
- 松崎沙和子・武衛和雄(1993)都市害虫百科. 236p, 朝倉書店.
- 森 勇一(2000)愛知県清洲城下町遺跡(中世)から産出した貯穀性昆虫について. 家屋害虫(日本家屋害虫学会誌), 22, 61-67.
- 森 勇一・上田恭子(2005)三の丸遺跡の埋桶の埋土より産出した双翅目のサナギについて. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書(第127集)愛知県埋蔵文化財センター編「名古屋城三の丸遺跡(VII)」: 242-246, 愛知県埋蔵文化財センター.
- 森 勇一(2009)遺跡産昆虫から探る人々の暮らし. 特集・考古学の中の生き物たち一, BIOSTORY(生き物文化誌学会誌), 11, 16-26, 誠文堂新光社.
- 森 勇一(2010)仙台市沼向遺跡から産出した昆虫化石について. 仙台市文化財調査報告書(第360集)仙台市教育委員会編「沼向遺跡第4~34次調査-宮城県仙台港背後土地区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ(第9分冊)」: 217-224, 仙台市教育委員会.
- 森 勇一(2012)ムシの考古学. 237p, 雄山閣.
- 上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝(1985)原色日本甲虫図鑑(Ⅱ). 514p, 保育社.
- 安富和男・梅谷献二(1983)衛生害虫と衣食住の害虫. 310p, 全国農村教育協会.



図版1 町遺跡から出土した昆虫遺体 (1)

1. ゴミムシダマシ *Neatus picipes* (Herbst) 頭部 幅2.8mm (試料8標本8)
2. ゴミムシダマシ *Neatus picipes* (Herbst) 前胸背板 幅4.7mm (試料6標本4-2)
3. ゴミムシダマシ *Neatus picipes* (Herbst) 左上翅 長さ11.0mm (試料5標本8-2)
4. ゴミムシダマシ *Neatus picipes* (Herbst) 現生標本 (静岡県井川1991.9.22採集)
5. ゴミムシダマシ *Neatus picipes* (Herbst) 胸部および右上翅 14.0mm (試料9標本1)
6. クロチビエンマムシ *Carcinopus pumilio* (Erichson) 左上翅 長さ1.8mm (試料11標本11)
7. クロチビエンマムシ *Carcinopus pumilio* (Erichson) 前胸背板 幅1.7mm (試料11標本12)
8. コクゾウムシ *Sitophilus zeamais* Motschulsky 前胸背板 長さ1.5mm (試料5標本5-4)
9. コクゾウムシ *Sitophilus zeamais* Motschulsky 胸部および右上翅 長さ3.0mm (試料5標本7-1)
10. ヒメカツオブシムシ *Attagenus unicolor* Brahm 左上翅 長さ3.1mm (試料11標本2)
11. ノコギリヒラタムシ *Oryzaephilus surinamensis* (Linne) 左上翅 長さ1.8mm (試料5標本7-2)



図版2 町遺跡から出土した昆虫遺体(2)

1. アオオサムシ *Carabus insulicola* Chaudoir 左上翅 長さ31.5mm (試料4 標本2-1)
2. ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* Motschulsky 上翅片 長さ4.5mm (試料8 標本1-8)
3. ヨモギハムシ *Chrysolina aurichalcea* (Mainerheim) 右上翅 長さ7.2mm (試料1 標本1-1)
4. マグソコガネ *Aphodius rectus* (Motschulsky) 前胸背板幅2.4mm (試料11 標本6)
5. エンマムシ *Merohister jekeli* (Marseul) 左上翅 長さ5.2mm (試料11 標本10)
6. オオクワバエ *Calliphora lata* Coquillett 開蛹 長さ7.8mm (試料11 標本8)
7. マグソコガネ *Aphodius rectus* (Motschulsky) 左上翅 長さ4.1mm (試料11 標本9)
8. マグソガムシ *Pachysternum haemorrhoum* Motschulsky 右上翅 長さ1.5mm (試料6 標本3-5)
9. トビイロシワアリ *Tetramorium tsushimae* (Emery) 頭部 長さ0.5mm (試料6 標本1-10)

第4節 出土材の樹種同定

1. 試料と方法

試料は、1号建物の覆土から出土した木材および竹材である。大量に出土した中から、目視で樹種が異なると考えられる試料を抽出し、そこからさらに目視と実体顕微鏡を用いて同定用に丸木もしくは加工木を各150点程抽出した。

各試料について、形状と径、および加工の有無を調査した。樹種同定は、剃刀を用いて3断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、プレパラートにのせて光学顕微鏡で観察および同定を行った。また、各分類群につき1試料、切片をガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。竹材は、節が残存している試料は形状から同定を行った。

2. 結果

木材の樹種同定の結果、針葉樹はモミ属と、カラマツ、マツ属複維管束亜属、スギの4分類群、広葉樹はハンノキ属ハンノキ亜属と、ハンノキ属ヤシャブシ亜属、ハシバミ属、クリ、コナラ属コナラ節、エノキ属、クワ属、クスノキ科、ウツギ属、ナシ亜科、サクラ属、バラ属、ネムノキ属、シラキ、ヌルデ、カエデ属、ケンボナシ属、キブシ、クマノミズキ類、ツツジ属、エゴノキ属、ハイノキ属サワフタギ節の22分類群、その他に樹皮が確認された（表1）。

木材の木取りと形状は、丸木では加工木と加工なし、加工の有無不明、半割では加工木と加工の有無不明、加工木では角材、芯無削出、割材（割材、端材、薄片状）、その他に加工の有無および木取りと形状不明に分類した（表3）。丸木の加工木は、両端もしくは片端が鋭角に削られた痕がみられた。また、丸木の加工木の一部には片側もしくは全面が炭化した材がみられた。

竹材は、形状から丸と、割竹、削出、端材に分類した（表2）。丸は直径0.5～1.5cm程で、すべて節の環が一重であるため、メダケ属やヤダケ属、ササ属が考えられる。割竹は幅0.5～2.0cm程で、厚さが0.5～1.0cmの試料（割竹a）と、0.1～0.2cm程の薄板状の試料（割竹b）が確認された。割竹で節が残存していた試料は、環が二

重であるため、マダケ-ハチクと考えられる。また、割竹の中には片端が炭化した試料、墨書がある試料、刻みや削り跡などの明瞭な加工痕が残存する試料も確認できた。削出は直径0.5cm未満の多角形をしており、端材は径が0.5～1.0cm程度であった。

以下に、木材の同定根拠となった組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を図版に示す。

(1) モミ属 *Abies* マツ科 図版1 1a-1c

仮道管および放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射組織で数珠状末端壁がみられる。分野壁孔はスギ型で、1分野に1～4個存在する。

モミ属は暖帯から温帯の山地に生育する常緑高木で、ウラジロモミ・シラベ・

トドマツなど約5種がある。材は柔軟で加工容易であるが、割れや狂いが出やすく、保存性が低い。

(2) カラマツ *Larix*

kaempferi (Lamb.)

Carrière マツ科 図版1 2a-2c

仮道管、垂直・水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は急である。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は小型のヒノキ型で、1分野に4～5個みられる。

また、放射組織は数珠状末端壁を有し、放射組織の上下には放射仮道管がある。

温帯に分布する落葉高木で、自生では宮城県・新潟県以南から中部山岳地帯の日当たりの良い山

表1 木材の樹皮構成

分類群
モミ属
カラマツ
マツ属複維管束亜属
スギ
ハンノキ属ハンノキ亜属
ハンノキ属ヤシャブシ亜属
ハシバミ属
クリ
クリ（根材）
コナラ属コナラ節
エノキ属
クワ属
クスノキ科
ウツギ属
ナシ亜科
サクラ属
バラ属
ネムノキ属
シラキ
ヌルデ
カエデ属
ケンボナシ属
キブシ
クマノミズキ類
ツツジ属
エゴノキ属
ハイノキ属サワフタギ節
樹皮

地に生育する。材は水湿に強い。

(3) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon*
マツ科 図版1 3a-3c

仮道管、垂直・水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側向きに鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、韌性は大である。

(4) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don スギ科 図版1 4a-4c

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に通常2個並ぶ。

スギは暖帯・温帯下部に生育する常緑高木である。材は比較的軽軟で切削加工は容易、割裂性は大きい。

(5) ハンノキ属ハンノキ亜属 *Alnus* subgen. *Alnus*
カバノキ科 図版1 5a-5c

小型の道管が放射方向に数個複合して分布する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状もしくは散在状となる。

道管の穿孔は10～20段程度の階段状である。放射組織は単列同性で、集合放射組織が存在する。

ハンノキ亜属は主に温帯に分布する落葉高木または低木で、ハンノキ・ケヤマハンノキなど7種がある。材は、一般に硬さ・重さ中庸である。

(6) ハンノキ属ヤシャブシ亜属 *Alnus* subgen. *Alnaster* カバノキ科 図版1・2 6a-6c

小型の道管が放射方向に数個複合して分布する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状もしくは散在状となる。

道管の穿孔は10～20段程度の階段状である。放射組織は単列同性である。

ヤシャブシ亜属は主に温帯に分布する落葉高木または低木で、ミヤマハンノキ、ヤシャブシなど4種がある。材は、一般に硬さと重さは中庸である。

(7) ハシバミ属 *Corylus* カバノキ科 図版2 7a-7c

径が中型の道管が単独あるいは2～5個放射方向に複

合して、放射方向に配列する傾向がある散孔材である。軸方向柔組織は短接線状に配列する。道管の穿孔は単一である。放射組織は1～2列幅のほぼ同性であるが、上下端に方形細胞がみられる。

ハシバミ属は温帯に生育する落葉低木で、ハシバミとツノハシバミがある。材は堅硬で強靱である。

(8) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 図版2 8a-8c (幹材)、9a-9c (根材)

幹材:大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、主に単列である。

根材:大型の道管が散在する。道管の穿孔は単一で、道管放射組織間壁孔は水平となる。放射組織は単列の同性である。

クリは温帯下部から暖帯に分布する落葉高木で、材は、耐朽性と耐湿性に優れ、保存性が高い。

(9) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版2 10a-10c

大型の道管が年輪のはじめに1列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性、単列と広放射組織の2種類がある。

コナラ節は温帯下部および暖帯に分布する落葉高木で、カシワ、ミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。材は、全体的に重硬で加工困難である。

(10) エノキ属 *Celtis* ニレ科 図版2・3 11a-11c

大型の道管が年輪のはじめに配列し、晩材部では径を減じた薄壁の小道管が集団をなして接線から斜めに配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状～翼状となる。

道管の穿孔は単一である。小道管の内壁にらせん肥厚がみられる。放射組織は3～8列幅の異性で、鞘細胞がある。上下縁辺の膨らんだ細胞中に結晶を含む。

エノキ属は温帯から熱帯分布する落葉性の小高木から高木で、エゾエノキやエノキなど4種がある。材は、やや硬いが強度や耐朽性は比較的low、狂いが出やすい。

(11) クワ属 *Morus* クワ科 図版3 12a-12c

大型で丸い道管が年輪のはじめに配列し、晩材では徐々に径を減じた小道管が単独もしくは数個複合して斜

線方向に配列する半環孔材である。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織は周囲状から翼状となる。放射組織は3～5列幅で、上下端の1～2細胞が直立もしくは方形細胞の異性である。

クワ属は温帯から暖帯、亜熱帯に分布する落葉高木で、ケグワ・マグワ・ヤマグワなどがある。材は、堅硬で韌性に富む。

(12) クスノキ科 Lauraceae 図版3 13a(加工木)、14a-14c(加工なし)

中型の道管が単独ないし2～4個複合してまばらに分布する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状。道管の穿孔は単一。道管の内壁にらせん肥厚。放射組織は1～3列幅の異性で、油細胞がある。

クスノキ科は熱帯から温帯に分布する常緑または落葉の高木もしくは低木である。クスノキを含むニッケイ属、タブノキ属、クロモジ属など8属がある。

(13) ウツギ属 Deutzia ユキノシタ科 図版3 15a-15c

小型で丸い道管がほぼ単独で密に分布する散孔材である。道管の穿孔は階段状で、40段以上である。放射組織は異性で明瞭な鞘細胞を持ち、細胞幅は1～5列幅、高さは1mm以上である。

ウツギ属は温帯に分布する落葉低木である。ヒメウツギ、マルバウツギ、ツクシウツギ、ウメウツギ、ウツギ、ウラジロウツギがある。

(14) ナシ亜科 Subfam. Maloideae バラ科 図版3 16a-16c

小径の道管がおおむね単独で均等に分布する散孔材である。軸方向柔組織が短線状となる。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織および放射組織中に大型の結晶が連なる。放射組織は異性で、1～3列幅となる。

ナシ亜科にはサンザシ属、ビワ属、カナメモチ属、ナカカマド属、リング属など12の属が存在する。

(15) サクラ属(広義) Prunus s.l. バラ科 図版3・4 17a-17c

やや小型の道管が、単独あるいは斜め方向に数個複合する散孔材である。道管に着色物質を含む場合もある。

道管の穿孔は単一である。放射組織は1～5列幅の異性である。

サクラ属は温帯に生育する落葉または常緑の高木また

は低木である。サクラ属はさらにサクラ亜属、スモモ亜属、モモ亜属、ウワズミザクラ亜属などに分類され、25種がある。木材組織からはモモとバクチノキ以外は識別困難なため、この2種を除いたサクラ属とする。材は、比較的重硬で緻密であり、加工性がよい。

(16) バラ属 Rosa バラ科 図版4 18a-18c

やや大型の道管が年輪のはじめに配列する環孔材で、晩材部の小道管はほぼ単独で散在する。道管の穿孔は単一で、小道管にはらせん肥厚がみられる。木部繊維は厚壁で、放射組織は異性で高さが1mmを超える場合もある。

バラ属は亜熱帯から亜寒帯に分布する落葉の低木である。ノイバラ節、ハマナシ節、サンショウバラ節などに分かれ約15種があるが、変種や園芸種も多い。

(17) ネムノキ属 Albizia マメ科 図版4 19a-19c

大型で丸い道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部に移行するに従って徐々に径を減ずる半環孔材である。軸方向柔組織は周囲状、晩材部では翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は1～3列幅で、すべて平伏細胞からなる同性である。

ネムノキ属は暖帯から熱帯に分布する落葉高木ある。材はやや軽軟で割裂性は大きく、切削加工は容易であるが、耐朽性や保存性は低い。

(18) シラキ Sapium japonicum Pax et K. Hoffm トウダイグサ科 図版4 20a-20c

散孔材で、径が中型でやや厚壁の道管が単独もしくは放射方向に数個複合して分布する。軸方向柔組織は短接線状もしくは線状で、道管の穿孔は単一である。放射組織はほぼ単列で、平伏細胞・方形細胞・直立細胞が混在する異性である。

シラキは温帯下部から暖帯に分布する落葉小高木で、日当たりの良い山腹に生育する。材はやや重硬であるが、切削加工は困難ではない。

(19) ヌルデ Rhus chinensis Mill. ウルシ科 図版4 21a-21c

大型の道管が年輪のはじめに単独もしくは数個複合して配列する半環孔材である。晩材部では道管の大きさは徐々に減じ、年輪の終わりでは小道管が集団をなして接線状～斜線状に配列する。道管の穿孔は単一である。放射組織は平伏細胞と直立細胞が混在する異性で、1～3列幅である。

第4章 自然科学分析

ヌルデは温帯から熱帯に分布する落葉高木である。材は耐朽性や保存性があまり高くないが、切削・加工が容易である。

(20) カエデ属 *Acer* カエデ科 図版4・5 22a(加工な)、23a-23c(加工あり)

中型の道管が単独もしくは放射方向に数個複合して分布する散孔材である。横断面において木部繊維の壁厚の違いによる雲紋状の様子がみられる。道管の穿孔は単一で、道管壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織はほぼ同性で、1~5列幅である。

カエデ属は主に温帯に分布する落葉高木で、オオモミジ、ハウチワカエデ、イタヤカエデなど26種がある。材は緻密で韌性がある。

(21) ケンポナシ属 *Hovenia* クロウメモドキ科 図版5 24a-24c

やや大型の道管が年輪はじめに配列し、晩材部では厚壁で小型の道管が単独もしくは2~3複合して散在する環孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は1~3列幅で、異性である。

ケンポナシ属は温帯から暖帯に分布する落葉高木で、ケンポナシとケケンポナシの2種がある。材の重さと堅さは中庸、切削加工は容易で、狂いや割れは少ない。

(22) キブシ *Stachyurus praecox* Siebold et Zucc. キブシ科 図版5 25a-25c

小型で角張った道管が、単独で均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は40段以上の階段状である。放射組織は1~3列幅で、単列部の方形細胞もしくは直立細胞が長く連なる異性である。

キブシは温帯から暖帯にかけて分布する落葉小高木である。材はやや硬く、均質である。

(23) クマノミズキ類 *Swida* cf. *macrophylla* (Wall.) Soják ミズキ科 図版5 26a-26c

円形でやや小型の道管が単独で分布する散孔材である。道管の穿孔は20段程度の階段状である。放射組織は3~4列幅で、縁辺部に方形もしくは直立細胞が2-4細胞ある異性である。以上の特徴からクマノミズキかヤマボウシと思われるが、これ以上の同定は困難であるため、クマノミズキ類とした。

クマノミズキおよびヤマボウシは温帯から暖帯に分布する落葉中高木である。材はやや硬いが、一般に加工は

容易である。

(24) ツツジ属 *Rhododendron* ツツジ科 図版5 27a-27c

小型で角張った道管がほぼ単独で分布する散孔材である。道管の穿孔は20段程度の階段状である。道管相互穿孔は階段状となる。放射組織は単列と5~10列幅の2種類からなる異性で、単列部は接線断面においてレンズ状を呈する。

ツツジ属は熱帯から寒帯まで幅広く分布し、樹形も低木から高木までである常緑もしくは落葉の広葉樹である。ツツジ亜属やシャクナゲ亜属などを含む約50種がある。

(25) エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 図版5 28a-28c

小型の道管が放射方向に数個複合して分布する散孔材で、晩材部で道管が小型になり、数も減る。軸方向柔組織は短接線状となる。道管の穿孔は10段程度の階段状である。放射組織は1~4列幅で、異性である。

エゴノキ属は温帯から熱帯にかけて分布する落葉小高木で、エゴノキ、ハクウンボク、コハクウンボクの3種がある。材はやや重硬で緻密である。

(26) ハイノキ属サワフタギ節 *Symplocos* sect. *Lodhra* 図版6 29a-29c

小型の道管がほぼ単独で分布する散孔材である。道管の穿孔は30段程度の階段状である。軸方向柔組織は散在~短接線状である。放射組織は1~3列幅程度で、上下2~4直立細胞の異性、単列部と多列部の幅はほぼ同じである。

サワフタギ節は、温帯から暖帯に分布する落葉低木である。タンナサワフタギ、サワフタギ、クロミノサワフタギなど4種がある。サワフタギの材は重硬で、韌性や弾性がある。

(27) 樹皮 Bark 図版6 30a

師細胞および師部放射組織からなる二次細胞および周皮で構成される樹皮である。樹皮は対象標本が少なく、同定には至っていない。

(28) マダケ-ハチク *Phyllostachys reticulata* (Rupr.) K. Koch - *Phyllostachys nigra* (Lodd. ex Loud.) Munro var. *henonis* (Bean ex Mitford) Stapf ex Rendle イネ科 図版6 31

程は木質で太く、節は2環状である。マダケは径5~

15cm、ハチクは3～10cmである。二次肥大成長を行わないため木本とはいえないが、高木化するために木材のように用いられる。

(29) タケ亜科 Gramineae Subfam. Bambusoideae イネ科 図版6 32

径が2cm以下の丸木である。程の節があまり隆起していないため、メダケ属、ヤダケ属、ササ属が考えられる。また、節が確認できなかった小径の丸木は、枝の可能性もある。

3. 考察

竹材の形状による分類を表2に示す。形状が丸の個体は直径0.5～1.5cm程で、メダケ属、

ヤダケ属、ササ属などが考えられる。したがって、ササ属を含むタケ亜科であるが、木材との比較ではまとめて竹材とする。割竹はマ

ダケ-ハチクで、形状を2種類に分類できた。割竹aは、幅1.0～2.0cm程、厚さが0.5～1.0cm程であり、一部に炭化や墨書、溝などの加工痕がみられた(図版6, 34・35)。割竹bは、厚さ0.5～1.5cm程、厚さが0.5cm以下の薄板であった。この他に、直径0.5cm以下の多角形の削出や、端材のような削りかすが確認された(図版6, 33)。大きさを統一した割竹や形状が丸の竹がみられるため、土壁の下地の構築材などに利用されていた可能性がある。

木材の形状別の樹種構成を表3に示す。大量に出土したうちの一部を抽出しているため、試料数は参考に留める。

形状/残存径	0.5cm未満	0.5～1.0cm	1.0～2.0cm	備考(加工痕、形状ほか)
丸木		○	○	加工痕なし
加工	割竹 a		○	厚さ0.5～1.0cm、炭化、墨書、刻み等
	割竹 b		○	厚さ0.1～0.3cm
	削出	○		多角形
	端材	○	○	-

表3 木材の形状と樹種構成

分類群	木取り 形状	丸木			半割		角材	芯無削出	割材			不明	計
		加工なし	加工木	不明	加工木	不明			割材	端材	薄片状		
モミ属									1				1
カラマツ							2	1	2				5
マツ属複雑管束亜属		2	1					2	12				17
スギ		1							4				5
ハンノキ属ハンノキ亜属		5										1	6
ハンノキ属ヤシャブシ亜属			1										1
ハシバミ属		5											5
クリ		9	1								1		11
クリ(根材)		1											1
コナラ属コナラ節		12	1		1			1					15
エノキ属									1				1
クワ属		2	1	2					1				6
クスノキ科		6	4					1					11
ウツギ属		4	1										5
ナシ亜科		1	1										2
サクラ属		6	2		1	1	1						11
バラ属		2	1	1									4
ネムノキ属		1											1
シラキ		1					1						2
ヌルデ		2		1				4	1				8
カエデ属		5	1					3					9
ケンボナシ属		1											1
キブシ			2										2
クマノミズキ類		1						1					2
ツツジ属		1	1						1		1		4
エゴノキ属					1								1
ハイノキ属サワフタギ節		1											1
樹皮											11	1	12
計		69	18	4	3	1	4	13	2	21	11	4	150

第4章 自然科学分析

針葉樹の木取りと形状は、芯持丸木の枝状の材や、角材や多角形の芯無削出などの加工木があるが、削りかす状の端材が比較的多くみられた。広葉樹は、直径0.5～2.0cm程の枝材と思われる加工木と加工なしの芯持丸木が多くみられた。芯持丸木の加工木では、両端もしくは片端に片側が斜めに切り落とされた加工痕がある試料、炭化した試料が確認された（図版6, 37・39）。芯無削出の加工木では円形や多角形の形状が確認された。芯無削出や角材、割材はいずれも直径0.5～1.0cm程度であった（図版6, 38・40）。割材のうち幅2.0cm、厚さ0.5cm以下の削り落としたような薄片状の形状はすべて樹皮で、加工痕がみられた（図版6, 36）。

加工痕のない枝材は自然木と考えられる。一方、端材や加工痕のある丸木は、木材を加工する際に出た残材とも考えられるが、クスノキ科とサクラ属では端が加工されたY字状の枝も出土しているため、器具材の未成品の可能性もある。器具材や建築部材等に利用されたと考えられる。また、一部もしくは全体が炭化している試料は、燃料材や着火材として利用された可能性がある。

樹皮は、使用目的で加工されたのではなく、木材を加工する際に削り取られたと推測される。

木材試料全体では、端材や加工痕のある枝材が多くみられた。これは、抽出時に加工痕があるものを優先して抽出したためであるが、1号建物の近辺で木材の加工が行われていた可能性もある。

今回の分析で確認された樹種のうち、針葉樹のカラマツ属は温帯から亜寒帯、その他の針葉樹や広葉樹は温帯から暖帯に分布する。本遺跡周辺は夏緑広葉樹林帯に属しており（宮脇,1977）、いずれの樹種も遺跡周辺に生育していたと推測される。花粉分析の結果では、マツ属複雑維管束亜属が優占し、コナラ属コナラ節などが多く産出している（花粉分析の項参照）。樹種同定結果でも比較的多く確認されたマツ属複雑維管束亜属やクリ、コナラ属コナラ節は、二次林的要素が強い樹種である。したがって、自然植生である夏緑樹林とともに、遺跡周辺には二次林が成立していたと推測される。

また、最終形成年輪が残存している数点の試料について、伐採または枯死季節を推定するために形成層の活動終了時期を確認した。クリとコナラ節は、早材部の径の大きな道管が形成されたところで止まっている（図版

2, 8a・10a）。クスノキ科とカエデ属は、加工材と加工痕のない丸木で比較したが、いずれも晩材の手前で止まっていると思われるが（図版3, 13a・14a；図版4, 22a・23a）、散孔材で早材と晩材の区別がつきにくいため不明確である。クリやコナラ属などの環孔材は早材の道管形成直後の春期、クスノキ科やカエデ属は春期～秋期に伐採もしくは枯死したと考えられる。自然木と考えられる丸木と、加工痕のある木材では、活動終了の時期に差はみられなかった。自然木らしき丸木と加工木が同じ時期に活動を終了したとも考えられるが、最終形成年輪の確認を行った点数が少ないため、点数を増やせば異なる傾向が得られる可能性もある。

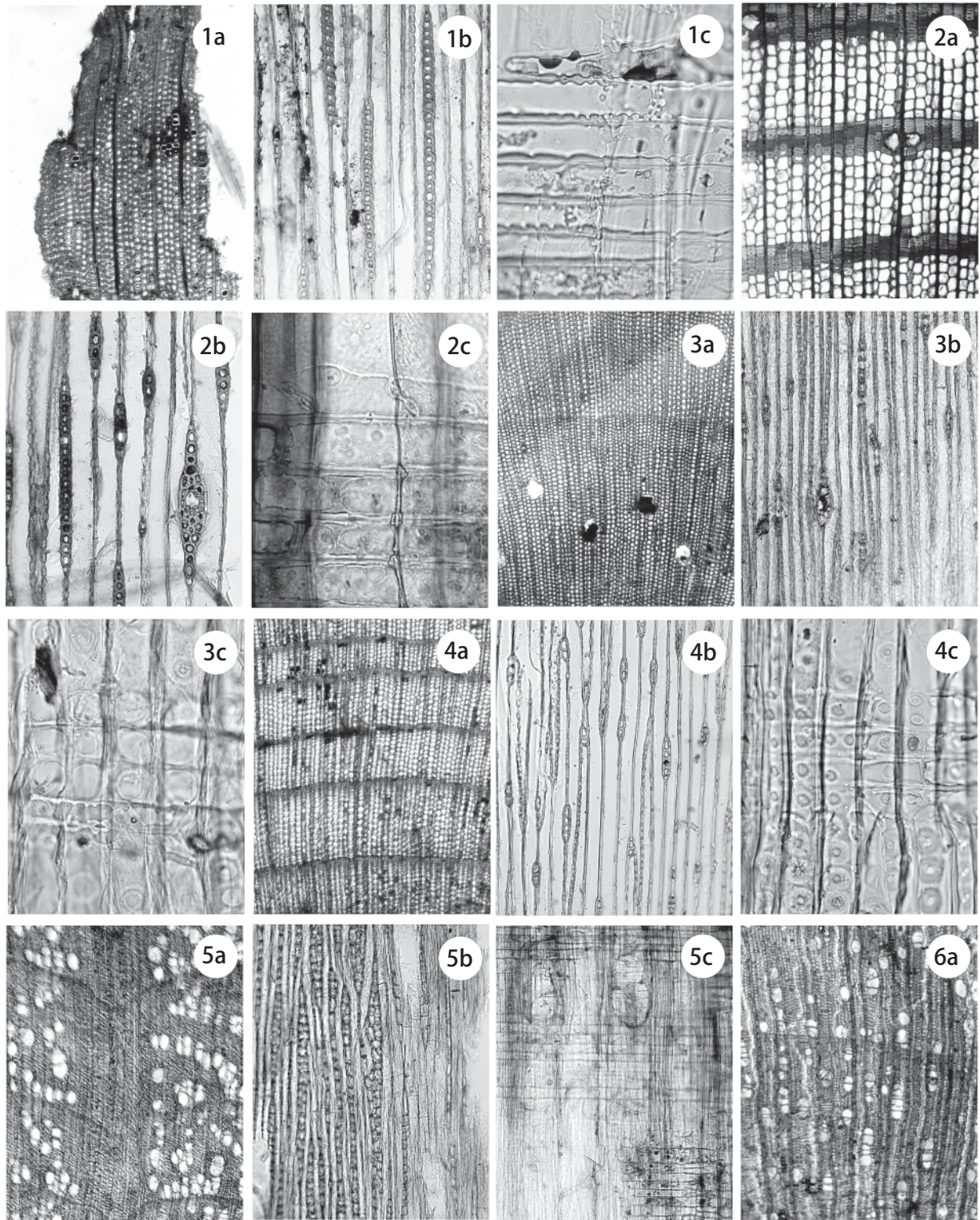
引用文献

宮脇 昭 (1977) 日本の植生.535p,学研.

付表1 木材の樹種同定結果

樹種	木取り、形状	備考	径 (cm)
モミ属	端材	柾目	0.8×0.2
カラマツ	角材 (板目)	片端鋭角、刻みあり?	0.5×0.1
カラマツ	角材 (板目)	刻みあり	0.6×0.2
カラマツ	芯無削出	多角形	直径0.6
カラマツ	端材	板目	1.2×0.2
カラマツ	端材	柾目	0.1×0.7
マツ属複雑管束亜属	芯無削出	多角形	0.5×0.6
マツ属複雑管束亜属	芯無削出	みかん割り状 (芯無)	0.8×0.5
マツ属複雑管束亜属	端材		0.3×0.6
マツ属複雑管束亜属	端材		0.5×0.3
マツ属複雑管束亜属	端材	加工痕	0.5×0.3
マツ属複雑管束亜属	端材		1.8×0.05
マツ属複雑管束亜属	端材		0.5×0.3
マツ属複雑管束亜属	端材		0.1×1.0
マツ属複雑管束亜属	端材		0.9×0.2
マツ属複雑管束亜属	端材		0.9×0.3
マツ属複雑管束亜属	端材		1.0×0.1
マツ属複雑管束亜属	端材		1.1×0.1
マツ属複雑管束亜属	端材		1.2×0.1
マツ属複雑管束亜属	端材		1.5×0.1
マツ属複雑管束亜属	丸木		直径0.5
マツ属複雑管束亜属	丸木	片端鋭角	直径1.0
マツ属複雑管束亜属	丸木		直径1.8
スギ	端材	削出	0.3×0.2
スギ	端材	削出	0.4×0.2
スギ	端材		0.1×0.7
スギ	端材		1.2×0.05
スギ	丸木		直径1.5
ハンノキ属ハンノキ亜属	不明		1.0×1.0
ハンノキ属ハンノキ亜属	丸木		直径0.8
ハンノキ属ハンノキ亜属	丸木		直径1.6
ハンノキ属ハンノキ亜属	丸木		直径1.8
ハンノキ属ハンノキ亜属	丸木		直径1.9
ハンノキ属ハンノキ亜属	丸木		直径2.0
ハンノキ属ヤシャブシ亜属	丸木	片端鋭角+炭化	直径2.2
ハシバミ属	丸木		直径0.9
ハシバミ属	丸木		直径1.1
ハシバミ属	丸木		直径1.2
ハシバミ属	丸木		直径1.2
ハシバミ属	丸木		直径1.4
クリ	不明		2.0×2.8
クリ	丸木		直径0.6
クリ	丸木		直径0.8
クリ	丸木		直径0.8
クリ	丸木		直径0.5
クリ	丸木	片側鋭角?	直径0.8
クリ	丸木		直径1.2
クリ	丸木		直径1.2
クリ	丸木		直径1.3
クリ	丸木		直径1.4
クリ	丸木		直径1.4
クリ (根材)	丸木		直径2.3
コナラ属コナラ節	芯無削出	丸材	2.2×1.8
コナラ属コナラ節	半割		直径0.8
コナラ属コナラ節	丸木		直径0.7
コナラ属コナラ節	丸木		直径0.9
コナラ属コナラ節	丸木		直径1.0
コナラ属コナラ節	丸木		直径1.0
コナラ属コナラ節	丸木	片側円錐形	直径2.7
コナラ属コナラ節	丸木		直径1.5
コナラ属コナラ節	丸木		直径1.5
コナラ属コナラ節	丸木		直径1.5
コナラ属コナラ節	丸木		直径1.5
コナラ属コナラ節	丸木		直径1.6
コナラ属コナラ節	丸木		直径1.6
エノキ属	端材	加工痕	0.4×0.5
クワ属	丸木		直径1.0
クワ属	丸木	片側円錐形	直径1.0
クワ属	丸木	片側炭化	直径0.4
クワ属	丸木		直径1.1
クワ属	丸木		直径1.8
クワ属	端材		半径0.5

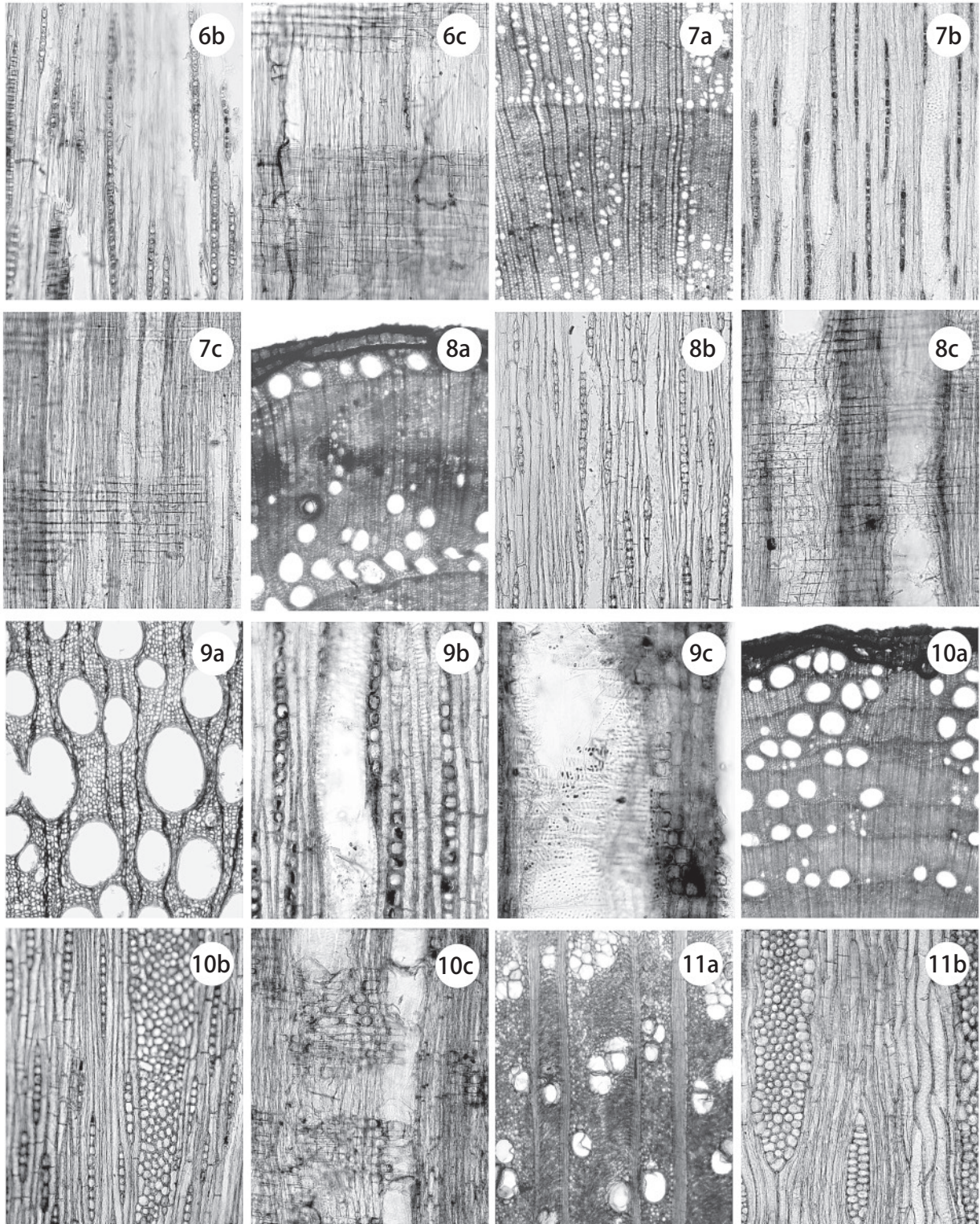
樹種	木取り、形状	備考	径 (cm)
クスノキ科	芯無削出	みかん割り状	半径0.7
クスノキ科	丸木		直径0.8
クスノキ科	丸木	片端鋭角	直径0.8
クスノキ科	丸木		直径2.1
クスノキ科	丸木		直径1.4
クスノキ科	丸木		直径1.7
クスノキ科	丸木		直径1.8
クスノキ科	丸木		直径2.0
クスノキ科	丸木	片端水平	直径1.1
クスノキ科	丸木	片端鋭角	直径1.3
クスノキ科	丸木	Y字枝: Y右(鋭角)、Y左(水平)	直径1.3
ウツギ	丸木		直径0.5
ウツギ	丸木		直径0.7
ウツギ	丸木		直径1.0
ウツギ	丸木	片端鋭角	直径0.3
ウツギ	丸木	欠損	直径1.1
ナシ亜科	丸木	片端炭化	直径1.0
ナシ亜科	丸木	片側鈍角?+炭化	直径1.1
サクラ属	半割	不明	直径0.9
サクラ属	半割		直径0.8
サクラ属	丸木	Y字枝: 下枝(鋭角)、Y右(水平)	直径2.1
サクラ属	丸木		直径1.1
サクラ属	丸木		直径1.2
サクラ属	丸木		直径1.2
サクラ属	丸木		直径1.5
サクラ属	丸木		直径1.6
サクラ属	丸木		直径1.6
サクラ属	丸木		直径1.7
サクラ属	丸木	片端加工痕	直径1.6
サクラ属	角材 (板目)	柾目	1.0×0.2
バラ属	丸木	片側円錐形	直径0.9
バラ属	丸木	欠損	半径0.5
バラ属	丸木		半径0.5
バラ属	丸木		直径1.2
ネムノキ属	丸木	中空	直径2.8
シラキ	角材	角	0.5×0.3
シラキ	丸木		直径0.8
ヌルデ	芯無削出	多角形	0.3×0.8
ヌルデ	芯無削出	多角形	0.5×0.5
ヌルデ	芯無削出	多角形	直径0.7
ヌルデ	芯無削出	丸材	直径0.7
ヌルデ	丸木		半径0.4
ヌルデ	丸木		直径1.6
ヌルデ	丸木		直径1.5
ヌルデ	割材		0.8×0.3
カエデ属	芯無削出	丸材	直径0.5
カエデ属	芯無削出	丸材	直径0.5
カエデ属	芯無削出	丸材、刻みあり	0.5×0.6
カエデ属	丸木		直径1.2
カエデ属	丸木		直径1.2
カエデ属	丸木	片側炭化	直径1.2
カエデ属	丸木		直径1.3
カエデ属	丸木		直径1.3
カエデ属	丸木	片端鋭角? (風化)	直径1.7
ケンボナシ属	丸木		直径1.2
キブシ	丸木	片側鋭角	直径0.9
キブシ	丸木	両端鋭角	直径0.7
クマノミズキ類	芯無削出	多角形	直径0.5
クマノミズキ類	丸木	一部欠損、中空	直径2.3
ツツジ属	不明	半割状	1.7×0.6
ツツジ属	丸木		直径0.7
ツツジ属	丸木	片側円錐形	直径0.6
ツツジ属	割材	片側円錐形	半径0.6
エゴノキ属	半割		1.5×0.7
ハイノキ属サワフタギ節	丸木		直径1.0
樹皮	薄片状	加工痕	1.0×0.3
樹皮	薄片状	小穴 (虫食い?)	1.5×0.1
樹皮	薄片状	加工痕	1.7×0.3
樹皮	薄片状	加工痕	1.0×0.3
樹皮	薄片状	加工痕	1.0×0.3
樹皮	薄片状	加工痕	1.0×0.3
樹皮	薄片状		0.4×0.2
樹皮	薄片状		0.3×0.3
樹皮	薄片状		0.8×0.4
樹皮	薄片状		0.4×0.2
樹皮	薄片状		0.7×0.6
樹皮	不明		1.5×0.3
炭化材	不明		半径1.0
炭化材	丸木		直径0.5
炭化材	丸木		直径0.7




スケール： 

図版1 町遺跡出土材の光学顕微鏡写真(1)

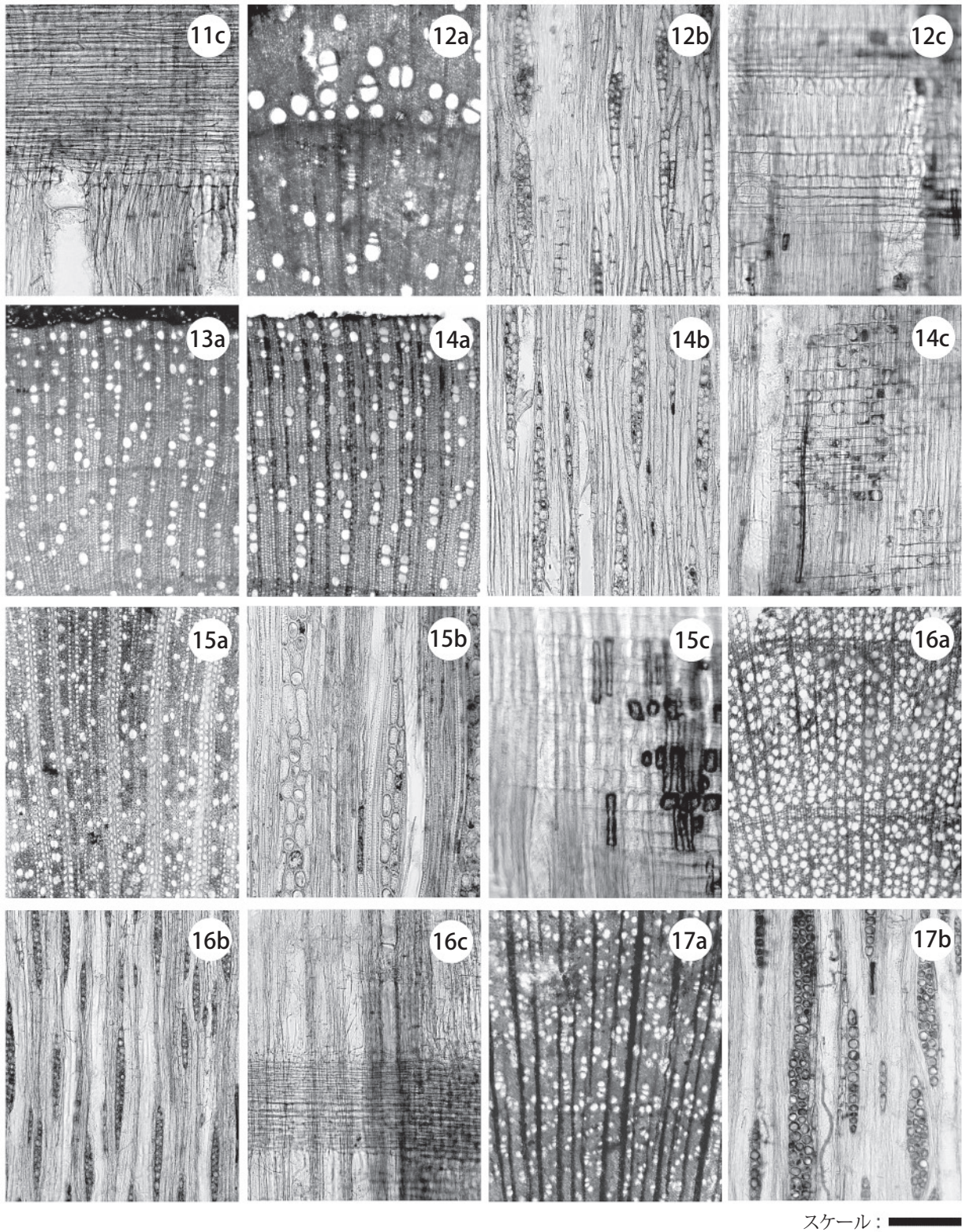
1 a-1 c. モミ属、2 a-2 c. カラマツ、3 a-3 c. マツ属複雑管束亜属、4 a-4 c. スギ、5 a-5 c. ハンノキ属
 ハンノキ亜属、6 a. ハンノキ属ヤシャブシ亜属
 a: 横断面(スケール=250 μm)、b: 接線断面(スケール=100 μm)、c: 放射断面(スケール=1 c-4 c: 25 μm 、
 5 c: 100 μm)



スケール： 

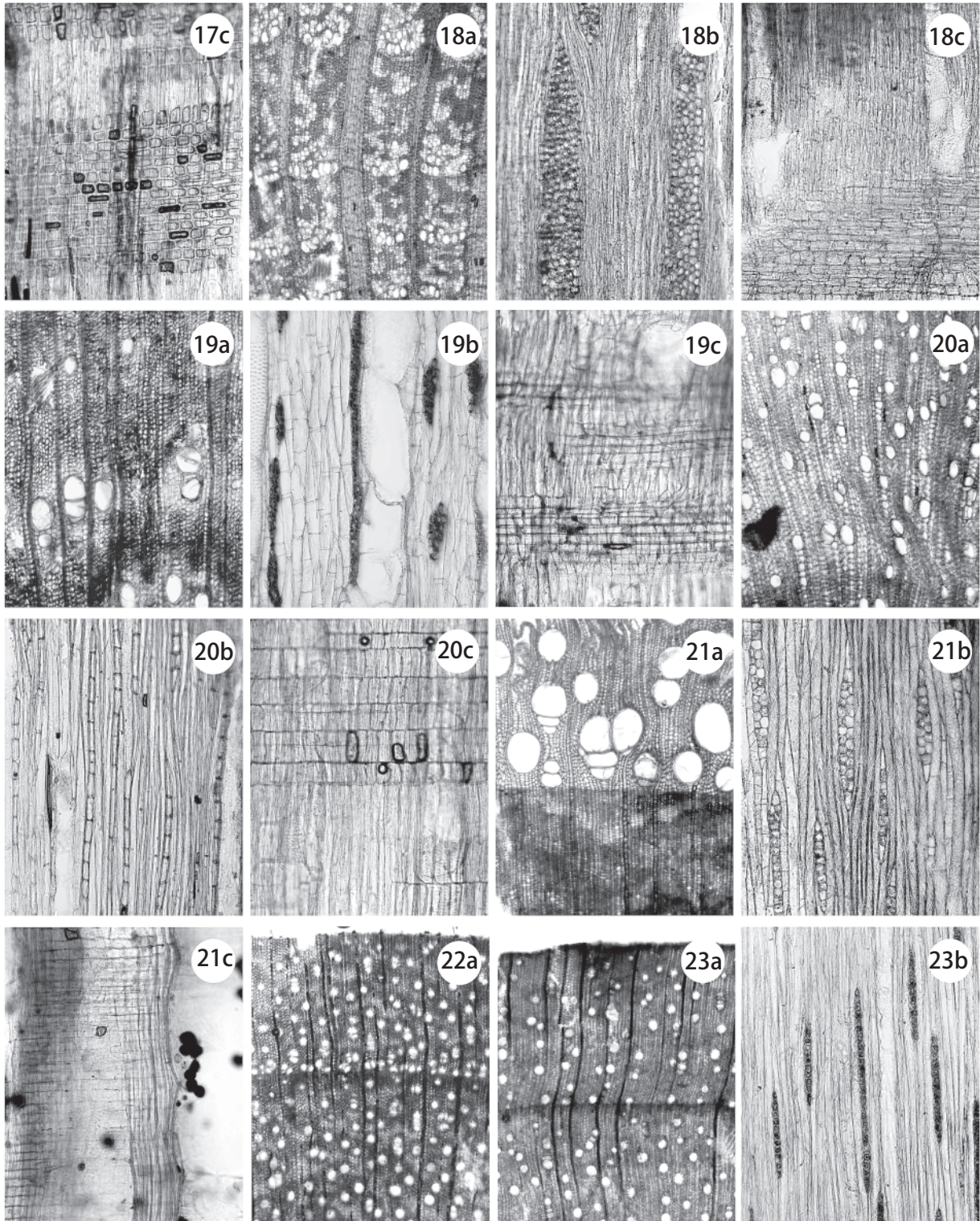
図版2 町遺跡出土材の光学顕微鏡写真(2)


6 b-6 c. ハンノキ属ヤシャブシ亜属、7 a-7 c. ハシバミ属、8 a-8 c. クリ、9 a-9 c. クリ(根材)、10 a-10 c. コナラ属コナラ節、11 a-11 b. エノキ属
 a: 横断面(スケール=250 μ m)、b: 接線断面(スケール=100 μ m)、c: 放射断面(スケール=100 μ m)



図版3 町遺跡出土材の光学顕微鏡写真(3)

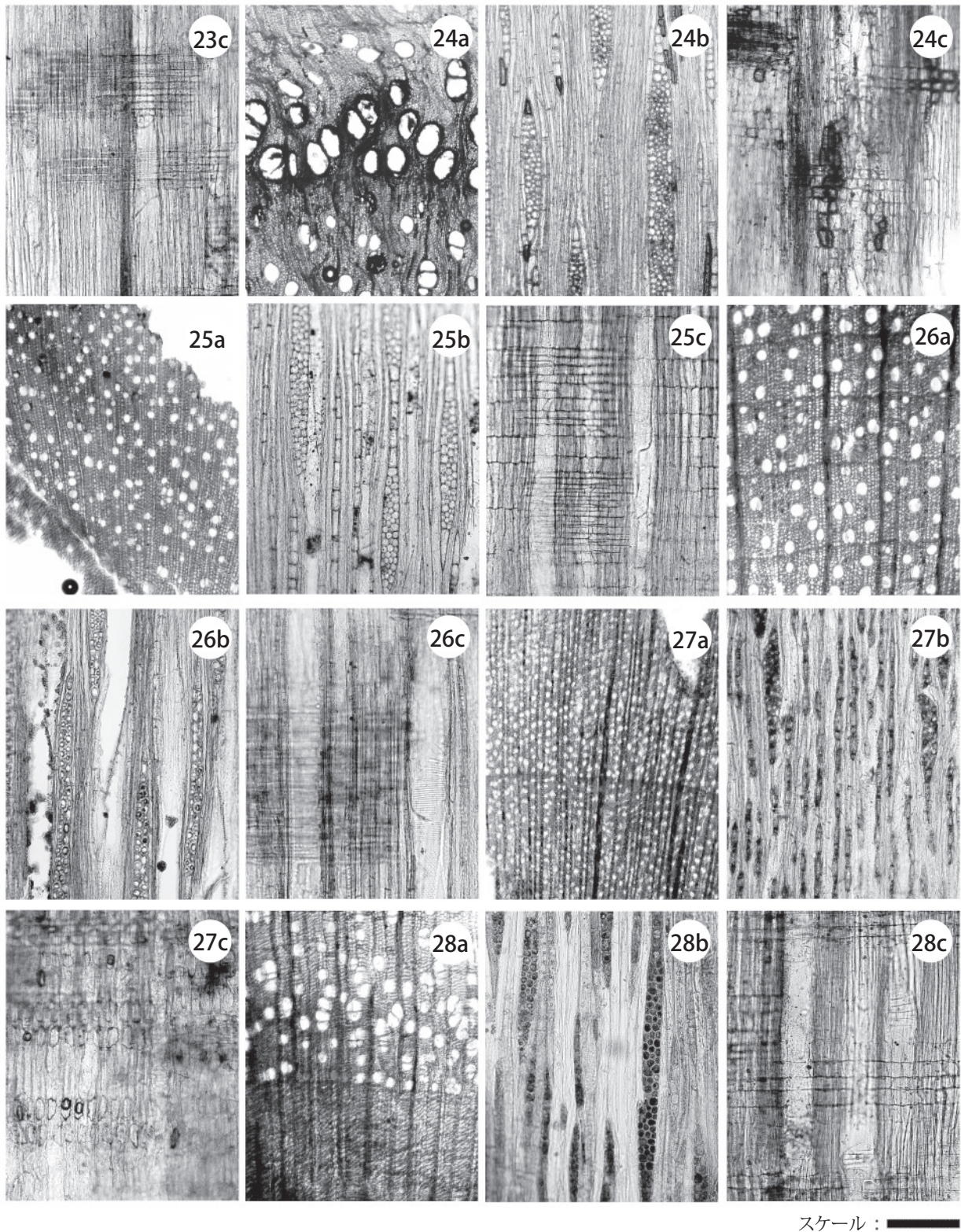
11c. エノキ属、12a-12c. クワ属、13a. クスノキ科(加工木)、14a-14c. クスノキ科(加工なし)、
15a-15c. ウツギ属、16a-16c. ナシ亜科、17a-17b. サクラ属
a: 横断面(スケール=250 μm)、b: 接線断面(スケール=100 μm)、c: 放射断面(スケール=100 μm)



スケール : 

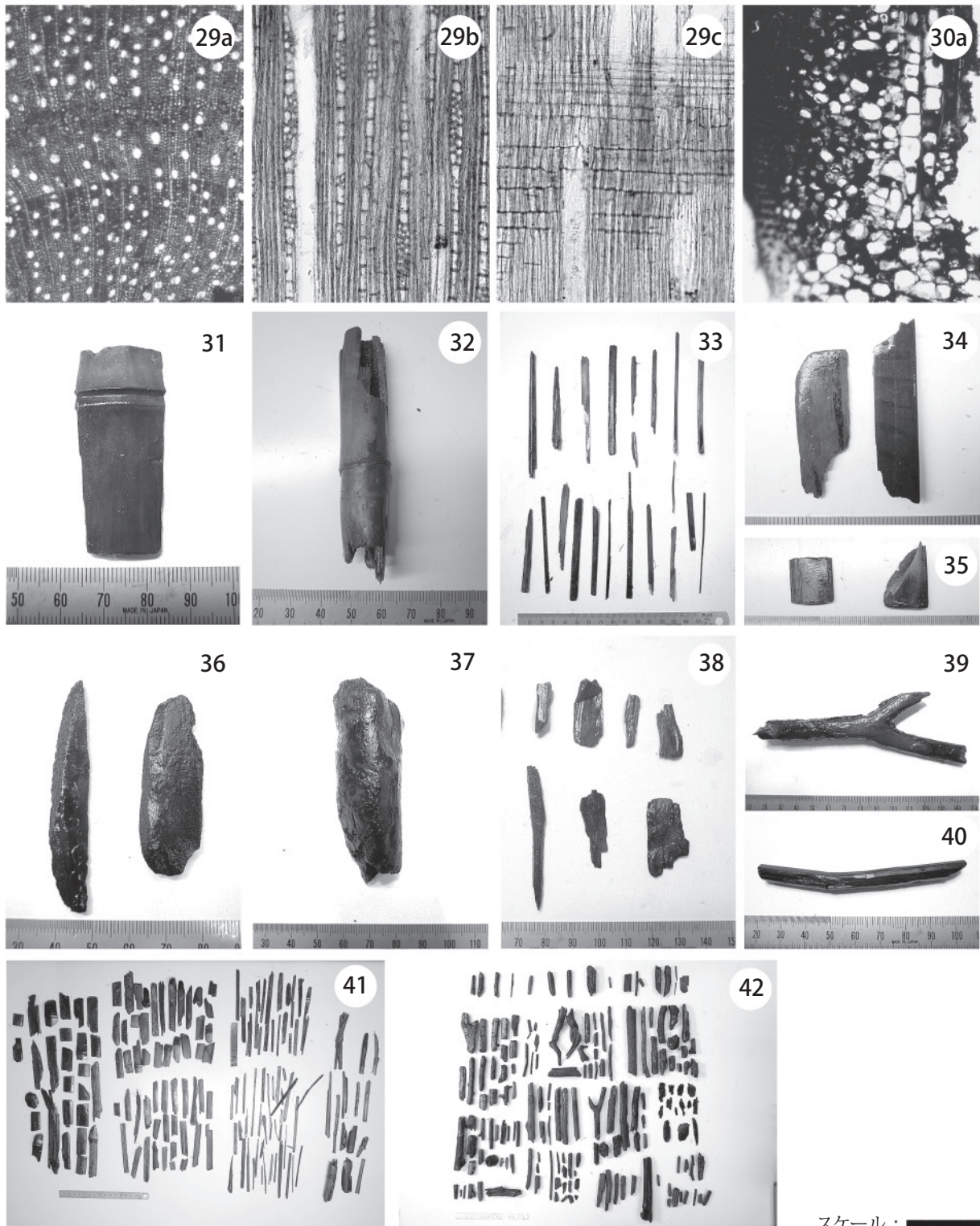
図版4 町遺跡出土材の光学顕微鏡写真(4)

17c. サクラ属、18a-18c. バラ属、19a-19c. ネムノキ属、20a-20c. シラキ、21a-21c. ヌルデ、
 22a. カエデ属(加工なし)、23a-23b. カエデ属(加工材)
 a:横断面(スケール=250 μ m)、b:接線断面(スケール=100 μ m)、c:放射断面(スケール=100 μ m)



図版5 町遺跡出土材の光学顕微鏡写真(5)

23c. カエデ属(加工材)、24a-24c. ケンボナシ属、25a-25c. キブシ、26a-26c. クマノミズキ類、
 27a-27b. ツツジ属、28a-28c. エゴノキ属
 a:横断面(スケール=250 μ m)、b:接線断面(スケール=100 μ m)、c:放射断面(スケール=100 μ m)



図版6 町遺跡出土材の光学顕微鏡写真と試料写真

29 a-29 c. ハイノキ属サワフタギ節、30 a. 樹皮、31. マダケ-ハチク(割竹)、32. タケ亜科(竹材丸木)、33. 竹材(端材)、34. 竹材(墨書)、35. 竹材(加工痕あり)、36. 樹皮(加工痕あり)、37. 木材:加工痕、炭化(ハンノキ属ヤシャブシ亜属)、38. 木材:端材(マツ属複維管束亜属)、39. 木材:Y字枝、加工痕(クスノキ科)、40. 木材:芯無削出(カラマツ)、41. 竹材試料、42. 木材試料
 a:横断面(スケール=29-30 a:250 μ m)、b:接線断面(スケール=29 b:100 μ m)、c:放射断面(スケール=29 c:100 μ m)

第5節 出土獣歯骨

I. ウマ

1. 右中手骨 (33区出土) 写真1

2片に分離して埋存していたが、接合によりほぼ完存状態に復元できた。最大長は217.0mmあり、他の計測値とその比較表に示されている通り、日本の中型在来馬のうち御崎馬の雌馬にほぼ匹敵し、小型在来馬のトカラ馬より大きい値を示す。

林田・山内(1957)の提唱した骨長より体高の推定法を用いて、体高を求めてみると、I式では129.1cm、II式では130.4cm、III式では132.8cmが得られる。このこと

ウマ中手骨計測値・比較表

	町遺跡	トカラ馬♀※	御崎馬♀※
最大長	217.0	199.4	215.1
外側最大長	211.0		
近位端幅	43.6	43.6	50.3
近位端径	33.7	29.2	33.5
骨体中央幅	▲	29.0	32.2
骨体最小幅	31.0		
骨体中央径	▲	20.6	24.0
骨体最小径	21.8		
骨体最小周	87.0		
遠位端幅	45.3	42.6	46.6
遠位端径	▲	32.1	34.7

単位：mm

※：西中川・松元(1991)より引用



写真1.

から、この馬の体高は130cm前後の日本の中型在来馬相当ということができよう。

2. 左上腕骨 (33区出土) 写真2

骨体遠位部外側半の外上顆付近が残存する。保存最大長は106.1mm、保存最大幅は35.0mmである。中型在来馬相当の馬格と思わせる。加工痕や咬み跡は見当たらない。



写真2.

3. 中手骨又は中足骨片 (33区出土) 写真3

最大保存長87.6mm、幅26.0mmの棒状の骨で、遠位半を欠く。第2又は第3中手骨あるいは第2又は第3中足骨であるが、このいずれかの判定は困難である。



写真3.

4. 肢骨片 (33区出土) 写真4

骨片の厚さが7.6mmあり、ウマかウシと判断される。付近から上記のようにウマの部位が出土していることから、ウマの骨である可能性が高い。保存最大長87.6mm、保存最大幅26.0mmである。



写真4.



写真5.

II ニホンシカ

1. シカ角（1号建物） 写真5・6

左角の第2分岐部とその付近で、角幹は分岐部の上部と下部で切断され、長さ35.4mmである。第2枝は角幹下部から60.5mmの先端に至った所で切断されている。角幹下部切断面は径32.9×16.8mm、角幹上部切断面は6.9×6.8mm、第1枝切断面は14.0×12.6mmである。シカ角内部の海绵質はきれいに削出され、筒状となっている。角の外側面（表側）は滑らかに磨かれ、角表面の突起も角畦も完全に消失している。第2分岐部中心部には径6.9×6.8mmの左右に貫通した円形の孔が穿たれている。用途については興味を持たれるが、あきらかでない。

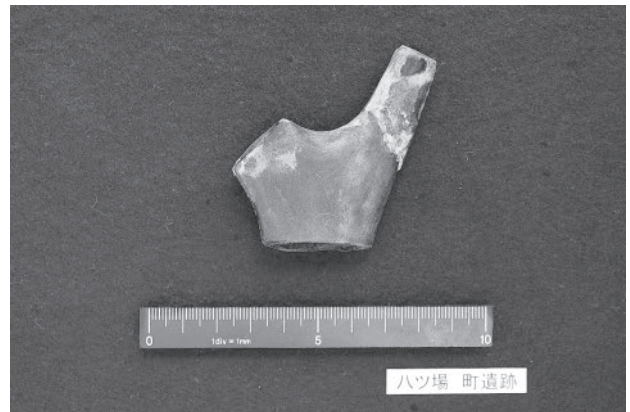


写真6.

2. 上顎臼歯（33区出土） 写真7

左上顎の第2前臼歯から第3後臼歯までの6本の歯が

ニホンシカ臼歯計測値

左上顎臼歯

	第2前臼歯	第3前臼歯	第4前臼歯	第1後臼歯	第2後臼歯	第3後臼歯
歯冠長	12.6	12.3	11.8	17.7	21.4	19.5
歯冠幅	12.6	13.5	14.2	15.7	16.4	18.0
舌側歯冠高	6.5	10.9	13.7	11.0	13.4	16.6

全臼歯列長：92.3（現生♂76.2、♀89.）

前臼歯列長：39.3

後臼歯列長：56.3（現生♂43.5、♀53.9）

下顎臼歯計測値

	左（33区G1b）				右（33No11）
	第4前臼歯	第1後臼歯	第2後臼歯	第3後臼歯	第3後臼歯
歯冠長	15.0	14.5	18.3	23.2	21.6+
歯冠幅	9.1	10.5	11.8	11.7	11.7
舌側歯冠高	8.8	6.8	10.1	10.0	9.9

左下顎後臼歯列長：53.0（現生♂54.0）

単位：mm

上顎骨口蓋突起に植立した状態で残存する。全臼歯列長は92.3mm、前臼歯列長39.3mm、後臼歯列長は56.3mmである。計測値は大きめで、雄鹿をおもわせるが、筆者所有の雌鹿の標本の中に、本遺跡の計測値を上回るものがあり、雌・雄の決定は困難である。



写真7.

3. 下顎臼歯 (33区出土) 写真8

左下顎の第4前臼歯から第3後臼歯までの4本の臼歯が下顎骨歯槽縁に植立して残存したものである。

大泰司 (1980) の下顎臼歯の磨滅指数を用いた年齢推定法によれば、第2後臼歯、第3後臼歯は共に指数2、第3大白歯は3の段階で10才前後の成獣であることが推定される。

左下顎後臼歯列長は53.0mmである。上記の上顎臼歯とは計測値・咬耗度などから、同一個体と思われる。

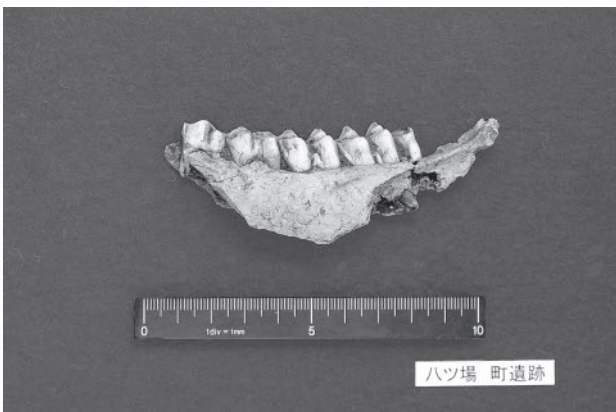


写真8.

4. 下顎臼歯 (33区出土) 写真9

右下顎第3大白歯で、歯冠遠心部を欠損する。歯冠長は21.6+mm、歯冠幅11.4mm、舌側歯冠高9.9mmで、上記の左下顎第3後臼歯と大きさ (計測値) も近く、咬合面の磨滅指数も3の段階で両者は同一個体と思われる。



写真9.

5. 上腕骨 (33区出土) 写真10

右上腕骨片で、骨体遠位部内側半が残存したものである。遠位部は骨端部の離脱痕が観察され、未成獣であることを示している。骨体遠位部表面には10個内外の小さな凹みがあり、骨端・骨体表面に数本の細い溝が観察される。いずれも中型肉食動物による咬み跡と思われる。

肉食動物は骨を咬む場合、海綿質の多い比較的やわらかな骨端部を好む。骨体部表面の条痕も咬痕であろう。人工的な刃物によるものであれば、その断面がV字形となるはずであるが、溝の部が概して丸っこく、肉食動物の犬歯の咬痕と思われる。溝の幅は中型肉食獣によるものであることを示唆している。



写真10.

6. 中手骨 (33区出土) 写真11

右中手骨で、成獣のものである。最大長は212.6mm、近位端幅28.8+mm、近位端径28.5+mm、骨体中央幅19.4mm、骨体中央径20.1mm、骨体最小幅19.1mmを計測する。上記の上腕骨同様に中型肉食動物による咬痕と思われる凹みや浅い溝が観察される。骨体前面には径数cmの楕円形の膨隆部分があるが、病的なものであろう。

先にみたように、上腕骨と中手骨に動物の咬み跡が観察されるということは、このニホンシカの直接の死因が浅間の泥流によるものでなく、それ以前にすでに死に至っていたということができる。



写真11.

7. 踵骨 (33区出土) 写真12

左踵骨で、踵骨隆起部を欠く。最大長は78.4mm、最大幅は25.4mmである。



写真12.

8. 距骨 (33区出土) 写真13

左距骨で、外側最大長は44.0mm、内側最大長は40.7mmである。上記踵骨とは同一個体と思われる。



写真13.

9. 中足骨 (33区出土) 写真14

右踵骨で遠位骨端部を欠く。最大長220.8mm、近位端幅28.6mm、中央幅18.4mm、中央前後幅23.1mmである。

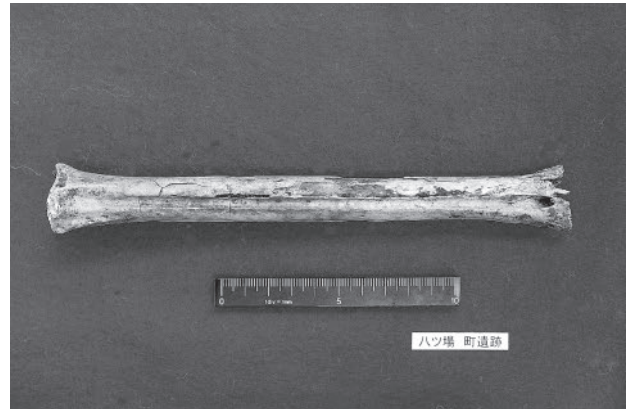


写真14.

上記のニホンシカは少なくとも2個体からなり、1頭目は上顎臼歯と下顎臼歯で、10才前後であり、2頭目は上腕骨に代表され、まだ遠位骨端の癒合してない未成年である。その他の四肢骨がこのいずれの個体に属するか、あるいは別の個体に属するのかの確定は困難である。

主な引用・参考文献

Driess, A. von den. (1976) A Guide to the Measurement of Animal Bone from Archaeological Sites. Peabody Museum Bulletin 1. Harvard: Peabody Museum.

林田重幸・山内忠平 (1957) 馬における骨長より体高の推定法「鹿児島大学農学部学術報告」6号、122 - 126

西中川駿・松元光春 (1991) 遺跡出土骨同定のための基礎研究一特に在来種および現代種の骨、歯の計測値の比較「古代遺跡から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究」平成2年度文部省科学研究費補助金 (一般研究B) 研究成果報告書、164-188.

野村晋一 (1977)「概説馬学」西川書店。

大泰司紀之 (1980) 遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節査定法「考古学と自然科学」13号、51-73

第5章 調査の成果（総括）

第1節 天明泥流の様相

本調査における調査地点44区で検出された1号建物の調査において、西壁土層断面の観察から、被覆された天明泥流には、床下と床上の天明泥流に差があることが明らかとなった（口絵2-1）。それは、第12・15図に示した土層断面Gラインの観察で、切断した根太上および根太間に土圧により変形した床板を境として、その上位に1層とした天明泥流堆積物である礫を多く含む砂礫層（褐灰色土）が層厚75cmほどと厚く堆積し、下位に3・4層とした粗い砂層（褐灰色土）および水分を多く含む泥のような層（黒褐色土）が層厚8cm前後と薄く堆積している。これは明らかに質の異なる堆積土であり、最初に4層を主とした水分の多い泥流が床下に流れ込み、その後1層の礫を多く含む多量の泥流が建物の上部を押し流すように堆積したことを示している。視点を変えて遺物の出土状況を見ると、第17～19図に示したように、遺物の多くは床下の4層中からの出土が主体を占める。特に下駄が集中して出土したのは、1号床の床板下ないし根太下からであり、原位置を保っている状況ではなく、水分の多い泥流により床下に流れ込んだ状況が推測できる。

同様な状況は、東宮遺跡の報告書においても指摘されている。報告によると、被覆する天明泥流の様相として、1号屋敷跡の建物および遺物の出土状況から、異なる様相の泥流が少なくとも2回以上到達したものとし、当初到達した泥流は、多数の繭の痕跡が確認されていることを挙げ、水分を多く含んだ比較的浅い緩やかな流れと推測している。併せて、下駄や草履が床下から出土したことも、泥流によって土間から押し流された結果であろうとしており、本遺跡での下駄の出土状況と同じ状況にあることが解る。

本遺跡と東宮遺跡とは、直線距離にして5km以上離れているが、両遺跡に共通する遺物出土のあり方からすれば、両遺跡共に水分を多く含んだ泥流が最初に到達し、

後に礫を多く含む大量の泥流が建物の上部を押し流すように厚く一帯を被覆したことが理解できる。つまり、吾妻川に流れ込んだ鎌原火砕流は、勢いを増して天明泥流となり、流れの速い水分を多く含んだ泥流と、礫を多く含む大量の泥流とが、相前後して流れ下る様は想像に固い。まさに、津波のように流れ下る泥流は、瞬時に被覆した均質なものではないということを示している。（但し、吾妻溪谷を挟んだ下流や、さらに利根川に合流した下流とでは、各流域によって泥流の様相が異なっていると考えられる。）

そして、天明泥流の到達の様相を示している本遺跡における先の土層断面は、天明泥流の到達状況を裏付ける、極めて重要な資料といえよう。

第2節 旧長野原村における 町遺跡の位置と草津路

天保六年（1835年）に江戸幕府から命じられた、全国規模での国ごとの地図作成は、天保国絵図として同九年（1838年）に完成した。この天保国絵図（上野国）に、本遺跡のある吾妻郡内の街道筋をつぶさに見ることができる。

中山道を高崎の豊岡で分かれた信州街道は、榛名山の西側をめぐるように室田宿、三ノ倉宿、大戸宿・関所、そして須賀尾宿、万騎峠を越えて狩宿・関所を通り、鎌原宿、大笹宿・関所へ、そして鳥居峠を越えて、信州の須坂に至る街道で、北国街道や善光寺へも通じ、中山道の脇往還となる主要な街道として知られている。また、この信州街道を須賀尾宿から分かれ、旧横壁村の脇を経て、吾妻川右岸から吾妻川に架かる琴橋（橋長拾壱間、幅六尺）を渡り、旧長野原村の宿場を通過して草津に至る草津路がある。さらに、この草津路の琴橋付近で、中之条方面から吾妻川左岸を西進して白砂川（草津川とあるが、旧須川または酸川）に架かる須川橋（橋長八間、幅九尺）を渡る道とが合流する（第76図参照）。天保国絵

図では、両道の合流するあたりに長野原村が位置し、村標記の東側付近に合流点が記されている。

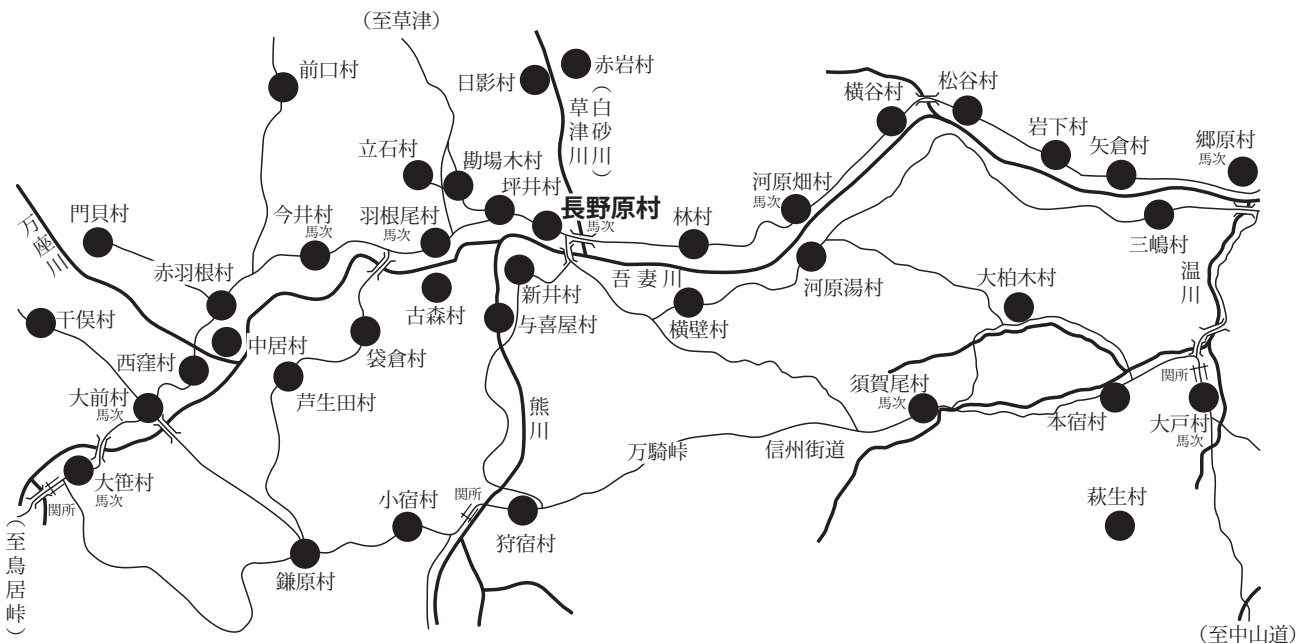
町遺跡は、その遺跡範囲が現在の長野原町市街地東側に位置し、吾妻川と白砂川（旧須川または酸川）が合流する吾妻川左岸・白砂川右岸の中位段丘上にある。今回の調査の結果、調査範囲の西端にあたる箇所には1号建物が検出され、1号建物の東側には畑が段丘面幅いっぱい広がっていることが確認された。また、平成25年度調査においては、調査地点22区となる調査範囲の東端で南東方向から北西方向へと走行する幅2.5mほどの道状遺構が確認された。なお、この調査地点22区にかかる北側には諏訪神社があり、天明三年時とほぼ同位置に鎮座している可能性は高い。そして、天保国絵図にも記されているように、旧長野原村を通る草津路が存在するはずであり、調査地点22区での道状遺構にその可能性をもたせることができよう。

草津路である可能性としては、調査対象地のある40地区32・33・22・23区の段丘面上における道状遺構は、調査地点22区での道状遺構しか確認されていない点が挙げられる。特に、33区には大きく畑が広がり、諏訪神社の位置からしても（神社付近の段丘面の幅は65m前後と最も狭く、西側に向かって徐々に広がる）、他に道状遺構が存在する可能性は極めて低い状況にある（第51図参照）。

つまり、この道状遺構が草津路であり、道の南東先に琴橋からと須川橋からの道の合流点が推測され、合流点から長野原の宿場の町並みに至る間に、町遺跡の調査範囲が位置することになる。

一方、現在（平成26年度）、発掘調査が進められている東宮遺跡では、旧川原畑村内を通る幅1間ほどの道が検出されており、道の両側には整地された各屋敷の石垣が並ぶ。この道は、旧河原畑村の東隣の旧横谷村、さらに旧郷原村を経て中之条町方面へと東進し、逆に西隣の旧林村、本遺跡のある旧長野原村を経て草津や、鳥居峠方面へと西進する道と考えられており、本遺跡での道状遺構の延長上にある道ということになる。

さらに、整理作業が進められている尾坂遺跡においても、両側に側溝をもつ幅1間ほどの道が検出されている。尾坂遺跡の位置からして、本遺跡から須川橋を渡り、同段丘面上を東進し、旧林村や旧川原畑村へと通じる道と考えられる。



第76図 旧長野原村周辺の道と村（天保国絵図「上野国」より作図）

第3節 総括

今回の調査は、平成23～25年度までの3ヶ年度に渡り、40地区22・23・32・33・43・44区に跨る計10カ所の調査地点を断続的に進め、天明泥流下に建物1棟、畝間がAs-A（浅間A軽石）に埋もれた畑10区画、畑境の土手（段差）・石垣、円形平坦面2基、道状遺構が検出された。また、天明三年以前の遺構として、天明泥流下5号畑の北西側で、4号畑よりも1段高い平坦面に鍛冶関連遺構の存在が推測され、平坦面の北東辺に斜路が付き、段差に石積みを擁していた。

出土した遺構・遺物の中でも、特徴的な1号建物について、注目すべき点を挙げ総括とする。

1. 建物の特徴・構造

建物上部は流失しているものの、床以下は遺存し、その状態は比較的に良好である。調査地点の範囲が狭く、建物の全容は明らかとはならないが、床板上に敷物を敷いた母屋的な大型建物と考えられる。同様な遺構・遺物を出土させた先の東宮遺跡（群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第514・536集）と比較すると、建物の遺存状況はほぼ同じ状況にあり、建物全体が東側へややずれた状態にある。また、構造についても、束と礎石の両者が共存して建物を支えるという、複雑な構造の建物である可能性が高く、この点についても東宮遺跡での建物構造と同様である。

2. 遺物の特徴

出土遺物も多量であった。報告書が刊行されている東宮遺跡と比較すると、下駄の多さに加え、一木下駄と差歯下駄の種類および製作法も共通する。特に、差歯下駄における台と差歯の装着は、特異な仕掛けがなされた装着方法で、地獄柄接ぎ（「隠し楔柄接ぎ」）による装着である点が挙げられる。団扇についても同様で、柄の部分に「肩入れ」と称される一文字状の竹が取り付けられる越生団扇であることも共通する（骨の先端が、途中まで二つ割れであることも共通）。他に、椀類を始めとする、漆塗り製品が多い点も共通する。こうした両遺跡での遺物の共通性は、地域的共通性を示すものであり、天明三年時における物流等を含めた地域史を研究する上でも重

要な点で、さらなる資料の増加によって明らかとされよう。

一方、横笛や扇子、将棋の駒、小型弓といった調度品や遊戯具は、東宮遺跡および周辺遺跡に例はなく、本1号建物を特徴づける遺物と思われる。

3. 建物と草津路

本調査で検出された調査地点22区での道状遺構が、草津路の一部であることは先述した通りであり、旧長野原村内における本調査範囲の位置が明らかとなった。このことから、検出された1号建物は、旧長野原村の宿場集落の東端に位置する建物であり、草津路に極めて近い位置にある建物であると推察できよう。また現在、発掘調査中の東宮遺跡や、整理作業中の尾坂遺跡で検出されている道は、共に幅1間（1.8m前後）と路面幅が同規模であることから、企画性のある道幅と言える。しかし、本遺跡の調査地点22区での道幅は幅2.5mと広く、路面幅に違いがある。天保国絵図の須川橋には、「橋長八間、幅九尺」と記されていることから幅約2.7mと推測でき、本遺跡の道幅に近い。このことは、須川橋よりも西側となる旧長野原村の集落内では、道幅約2.5m前後の広い道が通じていたと考えることができよう。

以上、天明三年の浅間山噴火時における、旧長野原村の宿場集落東端の様子が、今回の調査で明らかとなった。1号建物の全容は明らかとはならないが、周辺遺跡に例のない調度品や遊戯具といった遺物から、やや特異な建物であった可能性も推測される。こうした点も含め、今後の調査の進展によって、宿場集落全体が解明されていくことを期待したい。

最後に、今回の調査対象地となった40地区33区は、以前に尋常小学校があった場所であり、南辺の石垣の一部が残されていた。PL.18に記録として、その写真を掲載した。

遺物観察表

挿 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
				長 幅	厚	高				
第28図 PL.23	21	建具 敷居	1号床 ほぼ完形	長 幅	153.0 10.8	厚	5.5		断面が長方形の角材を用いた敷居で、1号床に伴う。表面には、幅3.0cmの浅い溝を2列併走させる。	
第28図 PL.22	22	建具 敷居	端部	長 幅	(45.3) 12.2	厚	4.1		断面長方形の角材を用いた敷居の端部で、端部中央に長さ2.0cmほどの柄をもつ。表面には幅3.0cmの浅い溝を2列併走させる。	
第29図 PL.23	23	建築材 束	ほぼ完形	長 幅	42.0 12.0	厚	11.6		四つ割りした角材を利用した上端を一部欠く東で、上端に左右に抜ける柄溝（深さ13.5cm、幅3.7cm）を有し、裏面上位には柄穴（長さ？、幅4.2cm）をもつ。また、下面は凹み、表面には加工痕が僅かに残る。	
第29図 PL.23	24	建築材 束	2号床下 完形	長 幅	32.0 14.5	厚	10.0		芯を残す角材利用の東で、四隅を面取りし、断面形は六角。上端表側には13の根太を受ける浅い切り込みを有し、中央表面から裏面に抜ける柄孔（長さ10.5cm、幅3.8cm）をもつ。裏面と両側面には加工痕が残り、表面の下端は大きく削られて薄くなる。なお、出土時には、この柄孔に19の大引き端部に接合する柄が嵌っていた。	
第29図 PL.23	25	建築材 束	1号床下 ほぼ完形	長 幅	41.0 12.5	厚	12.0		芯を残す断面が正方形の角材を利用した東で、上端側面に左右に抜ける柄溝（深さ12.0cm、幅4.0cm）を有し、中央表面から裏面に抜ける長さの異なる柄孔（表面長さ20.0cm、裏面長さ13.2cm、幅4.2cm）をもつ。表裏両側面には加工痕が残る。	
第29図 PL.23	26	建築材 束	床下 完形	長 幅	20.3 11.0	厚	11.0		芯を残した断面が正方形の角材による東で、上端に左右に抜ける柄溝（深さ5.5cm、幅4.2cm）をもつ。上下端以外の各面には、加工痕が僅かに残る。なお、出土時には、この柄溝に18の大引きを受けていた。	
第30図 PL.23	27	染付 碗	ほぼ完形	口 底	9.6 3.8	高	5.2	良好/灰白色		肥前磁器
第30図 PL.23	28	陶胎染付 碗	口縁～高台部 1/2	口 底	(11.2) 5.0	高	7.5	良好/灰色	釉に貫入が入る。	肥前陶器
第30図 PL.23	29	陶胎染付 碗	口縁～体部 1/4	口	(10.0)	高	(5.6)	良好/灰色	釉に貫入が入る。	肥前陶器
第30図 PL.23	30	染付 碗	口縁～高台部 1/3	口 底	(10.0) (4.0)	高	5.4	良好/灰白色	高台内に染付あり。	肥前磁器
第30図 PL.23	31	染付 碗	口縁部片	口	(10.0)	高	(3.8)	良好/灰白色		肥前磁器
第30図 PL.23	32	染付 碗	口縁～高台部 1/5	口 底	(8.0) (2.6)	高	3.9	良好/灰白色		肥前磁器
第30図 PL.23	33	陶胎染付 碗	体部～高台部 1/4	底	(5.0)	高	(3.9)	良好/灰白色	釉に貫入が入る。	肥前陶器
第30図 PL.23	34	染付 碗	体部～高台部 1/3	底	3.7	高	(3.0)	良好/灰白色		肥前磁器
第30図 PL.23	35	白磁 猪口か	体部～高台部 1/4	底	2.6	高	(2.0)	良好/灰白色		肥前磁器
第30図 PL.23	36	色絵 碗	体部片					良好/白色	染付後に赤彩。	不詳
第30図 PL.23	37	陶器 碗	高台部片	底	6.0	高	(3.4)	良好/淡黄色		瀬戸・美濃 陶器
第30図 PL.23	38	染付 皿	口縁部片	口	(13.0)	高	(2.4)	良好/灰白色	外内面に染付。	肥前磁器
第30図 PL.23	39	染付 皿	口縁～高台部 1/4	口 底	(14.0) (7.5)	高	2.3	良好/灰白色	内面に染付。	肥前磁器
第30図 PL.24	40	陶器 皿	底部片	底	(7.0)	高	(1.2)	良好/灰色	内面に重ね焼き痕を残す。	瀬戸・美濃 陶器
第30図 PL.24	41	陶器 香炉	口縁～高台部 1/2	口 底	12.0 9.0	高	6.6	良好/灰白色	筒形香炉。	美濃陶器
第30図 PL.24	42	陶器 香炉	口縁～高台部 2/3	口 底	10.3 7.7	高	6.5	良好/灰白色	筒形香炉。	美濃陶器
第30図 PL.24	43	陶器 灯火皿	完形	口 底	7.6 3.2	高	1.6	良好/灰褐色	外面および内面口縁部に油煙を顕著に残す。	志戸呂陶器
第30図 PL.24	44	陶器 すり鉢	体部片					良好/灰色	内面には縦方向に掻き目。	瀬戸・美濃 系陶器
第30図 PL.24	45	陶器 すり鉢	胴部片					良好/灰褐色	内面の縦方向に掻き目。9歯以上。	瀬戸陶器
第30図 PL.24	46	在地土器 内耳土器	口縁部片					細砂粒/良好/黄褐色	口端は平坦で、外内面共に横撫で。外面器表は暗褐色。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第30図 PL.24	47	在土器 内耳土器	口縁部片				細砂粒/良好/黄褐色	口端は僅かに平坦で、外内面共に横撫で。外面器表は暗褐色。		
第30図 PL.24	48	在土器 内耳土器	底部片				細砂粒/良好/暗褐色	底部からやや外側に胴部が立ち上がる。外内面は撫で。外面器表は暗褐色。底面は砂目が顕著。		
第31図 PL.24	49	陶器 呉器手腕	高台部片	底	5.0	高 (2.1)	良好/灰白色	釉に貫入が入る。碗高台部の周囲を打ち欠き、円形状に成形。	肥前陶器	
第31図 PL.24	50	陶器 碗	高台部片	底	5.3	高 (1.8)	良好/灰白色	外面は鉄化粧で、内面は灰釉。釉に貫入が入る。碗高台部の周囲を打ち欠き、円形状に成形。	瀬戸・美濃陶器	
第31図 PL.24	51	陶器 呉器手腕	高台部片	底	4.6	高 (2.5)	良好	釉に貫入が入る。碗高台部の周囲を細かく打ち欠き、円形状に成形。	肥前陶器	
第31図 PL.24	52	土人形 面子	完形	長幅	3.2 2.1	厚重	1.0 3.8	微砂/良好/黄褐色	型作り。	
第31図 PL.24	53	土人形 狛犬	1号土坑 ほぼ完形	高幅	3.7 3.0	厚重	1.9 14.4	輝石・石英粒/良好/灰褐色	表裏の型作り。	
第31図 PL.24	54	骨角器 鹿角加工品	完形	長幅	6.5 6.0	厚	1.9	鹿角	鹿角の分岐部付近の上部と下部を切断した鹿角製品。角の外面は滑らかに磨かれ、角内部の海綿体は削出されて筒状となる。また、分岐部中央には、円形の孔が貫通している。用途は不明。	
第31図 PL.24	55	木製品 漆塗碗	高台欠	径	7.6	高 (2.1)	ブナ属	碗の蓋で、高台を欠く。内面を赤色の漆塗り。外面を暗褐色の漆塗りとする。さらに、高台内および外面に金で模様を描くが、詳細は不明。高台径 (4.1) cm。		
第31図 PL.24	56	木製品 漆塗碗	口縁~高台 1/4	径	(10.6)	高 (2.9)	トチノキ	碗の蓋。内面を赤色の漆塗り。外面を黒漆塗りとするが、その上に赤色漆で花の模様を描く。高台径 (5.4) cm。		
第31図 PL.24	57	木製品 漆塗碗	3/4	径	11.4	高 (2.9)	ブナ属	碗の蓋。内面を赤色の漆塗り。外面を黒漆塗りとするが、高台内に赤色漆で文字を書くが判読困難。高台径 (6.0) cm。		
第31図 PL.24	58	木製品 漆塗碗	1/2			高 (2.9)	ブナ属	碗の蓋。内面を赤色の漆塗り。外面を黒漆塗りとするが、高台内に赤色漆で文字を書くが判読困難。高台径 (5.1) cm。		
第31図 PL.24	59	木製品 漆塗碗	高台欠	径	9.5	高 (2.4)	ブナ属	碗の蓋。内外面を赤色の漆塗り。高台内に黒漆で文字を書くが判読困難。高台径 (5.1) cm。		
第31図 PL.24	60	木製品 漆塗碗	体部~高台 1/5			高 (1.5)	散孔材	碗の蓋。内外面を赤色の漆塗り。高台径 (3.4) cm。		
第31図 PL.24	61	木製品 漆塗碗	2/3	径	(10.2)	高 (5.0)	ブナ属	碗の身で、口縁部と高台部を欠く。内外面に薄く黒漆を塗布し、その後に内面を赤色の漆塗り、外面を黒漆塗り。さらに、外面には黒漆の上に赤色漆で丸に抱荷苧の紋を3カ所描く。高台径 (4.9) cm。		
第31図 PL.24	62	竹製品 漆塗箸	ほぼ完形	長径	23.4 0.5			タケ垂科か	竹製の丸箸で、一部欠。全体に黒漆を塗布する。	
第31図 PL.24	63	竹製品 漆塗箸	端部欠	長径	(17.3) 0.4				竹製の丸箸で、端部を欠。全体に黒漆を塗布する。	
第31図 PL.24	64	竹製品 漆塗箸	一部欠	長径	(21.0) 0.5			タケ垂科	竹製の丸箸で、一部欠。全体に塗りを施す。	
第31図 PL.24	65	竹製品 漆塗箸	下半部 1/2	長径	(9.0) 0.4			タケ垂科	竹製の丸箸の下半部で、下端に赤色の漆塗り、上部に黒漆塗りを施す。	
第31図 PL.24	66	木製品 漆塗箸	先端部	長幅	(9.0) 0.6	厚	0.4	スギ	木製の丸箸の先端部で、表裏面を僅かに面取りした断面形が楕円状。赤色の漆塗りを施す。	
第31図 PL.24	67	木製品 箸	1/2	長幅	(13.4) 0.6	厚	0.6	ヒノキ属	木製の角箸で、断面は正方形。先端が僅かに細目となる。	
第31図 PL.24	68	木製品 箸	先端部	長径	(11.0) 0.7				木製の丸箸の先端部。断面は円形。先端がやや細身となる。	
第31図 PL.24	69	木製品 杓文字	下端部欠	長幅	(19.5) 6.9	厚	0.7	クリ	下端部を欠く杓文字。上部の柄部は細く、最大幅は下半にあり、最大幅付近の表面は僅かに凹み薄くなる。	
第32図 PL.24	70	木製品 杓子	完形	長幅	28.0 7.3	厚	0.9	ブナ属	柄部は長さ18.5cm、幅1.7cmと細長く、上端がやや幅狭で薄くなる。匙部は卵形を呈し、中央が湾曲するようにやや凹む。	
第32図 PL.25	71	木製品 杓子か	匙部	長幅	(7.7) (5.1)	厚	1.0	散孔材	柄を欠く杓子と思われる。匙部は卵形を呈し、中央が湾曲するようにやや凹む。下地に薄く黒漆を塗布し、その後に全体を赤色漆で仕上げる。	
第32図 PL.25	72	木製品 塗膳	角片	長幅	(12.3) (4.9)	高	(0.7)	トウヒ属	お膳の角片で、縁および脚部は欠。表裏・側面全体に暗褐色の塗りが施される。お膳の表面の縁には縁板が廻っていた痕が残り、裏面には脚部の取り付け痕がある。また、表裏面の縁には、木釘が残る。	
第32図 PL.25	73	木製品 お櫃	蓋 1/4	径幅	(22.0) 8.7	厚	0.9	ヒノキ属	複数枚で一体とするお櫃の蓋板。蓋板の外面の縁は緩やかな面取りが施され、内面の縁には段をもち側板が取り付け付く。各接合部に木釘痕がないことから、接合はのり付けと思われる。内外面に薄く黒漆を塗布し、その後に内面を赤色の漆塗り、外面を黒漆塗り。	

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				径	厚				
第32図 PL.25	74	木製品 お櫃	底板 1/2	径 30.5	厚 1.0		ヒノキ属	2枚で一体とするお櫃の底板の半分。もう1枚との接合面に木釘痕が2カ所残り、側板と接合する垂直な周囲の側面にも木釘痕が多く残る。内外面に薄く黒漆を塗布し、その後に内面を赤色の漆塗り、外面を黒漆塗り。内面の周縁は幅0.2cmほどで下地の薄い黒漆が残り、側板との接合部であることを示している。	75と一体
第32図 PL.25	75	木製品 お櫃	底板 1/2	径 30.5	厚 1.0		ヒノキ属	2枚で一体とするお櫃の底板の半分であるが、多くの破片との接合による。もう1枚との接合面に木釘痕が2カ所残り、側板と接合する垂直な周囲の側面にも木釘痕が多く残る。内外面に薄く黒漆を塗布し、その後に内面を赤色の漆塗り、外面を黒漆塗り。内面の周縁は幅0.2cmほどで下地の薄い黒漆が残り、側板との接合部であることを示している。	74と一体
第33図 PL.25	76	木製品 曲物(曲物)	底板	径 9.6	厚 0.7			曲物の底板と思われる。	
第33図 PL.25	77	木製品 桶(曲物)	底板 1/2	径 (14.0)	厚 0.8			曲物の底板と思われる。	
第33図 PL.25	78	木製品 桶(曲物)	底板 1/2	径 14.0	厚 0.8			曲物の底板と思われる。	
第33図 PL.25	79	木製品 桶(曲物)	底板 1/3	径 (29.0)	厚 0.5			曲物の底板と思われる。	
第33図 PL.25	80	木製品 桶	底板 1/2	径 26.1	厚 1.1		ヒノキ属	2枚で一体とする桶の底板の半分。もう1枚との接合面に木釘が2カ所残り、側板と接合する垂直な周囲の側面にも木釘痕が多く残る。	
第33図 PL.25	81	木製品 桶	蓋板 1/4	径 (39.0)	厚 1.8		スギ	桶の蓋板であるが、板面にある節により割れたためか、割れた接合面に木釘が4カ所残る。蓋表は波状に段がつき、周縁は面取りされ、側縁は下方が僅かに内側に傾斜する。	
第33図 PL.25	82	木製品 桶か	底板か	長幅 (48.0) (11.0)	厚 1.3			平面形は上端に頂点をもち、下端が弧状となる形状、あるいは長楕円形となる桶状の底板と思われる、複数枚で一体となるように接合面に木釘を残す。表面の頂部左縁には直線的な細い刻みをもち、木釘や木釘孔が散在する。	
第34図 PL.26	83	木製品 栓	完形	長径 4.8 3.2			マツ属複雑管束 亜属	木の芯を残す栓で、上端縁には4カ所の面取りがある。上端径3.2cm、下端径2.4cm。	
第34図 PL.26	84	木製品 栓	完形	長径 3.0 3.3			スギ	上下端共に円形の栓。下端径2.8cm。	
第34図 PL.26	85	木製品 栓	完形	長幅 4.8 2.9	厚 2.0			上端は楕円形であるが、下端は円形に近い。上端幅2.9cm、下端幅1.8cm、厚さ1.6cm。	
第34図 PL.26	86	木製品 栓	1/2	長幅 4.5 2.2	厚 (1.6)		マツ属複雑管束 亜属	木の芯を残す栓で、上面形は楕円形。下端は細く窄まり、削り痕を残す。	
第34図 PL.26	87	木製品 栓	ほぼ完形	長幅 3.9 2.5	厚 2.1		マツ属複雑管束 亜属	木の芯を用いた栓で、上面形は楕円形。下端は細く窄まり、削り痕を残す。	
第34図 PL.26	88	木製品 栓	完形	長幅 1.3 2.7	厚 2.4			上面形は楕円で、栓の上部を切断したものと思われる。	
第34図 PL.26	89	木製品 栓	完形	長径 10.0 4.5				木の芯を残した栓。上下端はやや凸状となり、側面に削り痕を残す。下端径3.8cm。	
第34図 PL.26	90	木製品 栓	1/2	長幅 8.9 4.0	厚 (1.7)			上端は長楕円形に削り出し、下端は円形。下端径3.3cm。	
第34図 PL.26	91	木製品 桶	側板	長幅 29.0 20.6	厚 2.3		マツ属複雑管束 亜属	桶の側板で、外面中央に逆位に墨書「南田」。内面には炭化痕がつくが、側板単独で使用か。	
第34図 PL.26	92	竹製品 不明		径 12.5			タケ亜科	幅0.4cm、厚さ0.15cmの竹ひごを三重に絡げて円環状とする。桶ないし曲げ物のタガカ。	
第34図 PL.26	93	木製品 櫛	1/2	長幅 (6.8) 3.2	厚 0.7		ツゲ	黒漆で仕上げた後、赤色漆で花等の文様を描く。	
第34図 PL.26	94	木製品 櫛	1/2	長幅 (5.9) 2.2	厚 0.7		ツゲ	黒漆で仕上げた後、赤色漆で花等の文様を描く。	
第34図 PL.26	95	木製品 櫛	1/2	長幅 (6.5) 3.2	厚 0.7			全体を黒漆で仕上げる。	
第34図 PL.26	96	竹製品 漆塗製品	ほぼ完形	長径 5.0 0.8				竹製品で管状となり、表面には赤色漆を塗布する。	
第34図 PL.26	97	竹製品 横笛	一部欠	長径 35.7 1.8				漆塗の横笛で、一部を欠くが、指孔が6孔の竹製。口・指孔の周囲を朱漆で縁取り、各孔を仕切るように黒漆で装飾する。	
第35図 PL.26	98	木製品 一木下駄	歯欠	長幅 15.0 (5.6)	高 (2.8)		クリ	台と歯が一体の一木下駄で、前後の歯の下端を欠く。台表の平面形は、前後端が僅かに平らとなる長楕円形で、最大幅は台前部にあり、台後部にかけて幅が僅かに減少する。前後の歯はほぼ平行で、台から垂直に下に延び、下端幅が広くなると共に、台側面も外開きとなる。しかし、台の前・後面は垂直。また、歯の台側は前・後面から斜めに続いて厚く、下端は薄くなる。前・後歯の間は広く、横方向から削られた整形痕を僅かに残す。台表と前・後・両側面に赤色漆を塗布する。3孔の前歯は傾斜をもって、横緒孔は垂直に穿かれ、孔内には鼻緒・横緒の一部が残存する。	

挿 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
				長 幅	高	高				
第35図 PL.26	99	木製品 一木高下駄	前半半欠	長 幅	23.6 (11.4)	高	11.6	クリ	台と歯が一体の一木下駄で、台の前半と前歯の左一部を欠く。台表の平面形は、前後端が丸くなる長楕円形で、最大幅は台前部にあり、台後部にかけて幅が僅かに減少する。前後の歯はほぼ平行で、台から垂直に下に長く伸び、下端幅が大きく広くなると共に、台側面も外開きとなる。しかし、台の前・後面は垂直。また、歯の台側は厚く、下端はかなり薄く整形される。前・後歯の間の整形痕は残さない。台の全面に薄く黒漆が塗布され、さらにその上に台表と前・後・両側面に赤色漆を塗布する。前壺・横緒孔の3孔はそれぞれ傾斜をもって穿かれ、孔内には横緒の一部が残存する。	100と対か
第35図 PL.27	100	木製品 一木高下駄	ほぼ完形	長 幅	24.0 (13.6)	高	(11.2)	クリ	台と歯が一体の一木下駄で、前後の歯の一部を欠き、全体に捻れる。台表の平面形は、前後端が丸くなる長楕円形で、最大幅は台前部にあり、台後部にかけて幅が僅かに減少する。前後の歯はほぼ平行で、台から垂直に下に長く伸び、下端幅が大きく広くなると共に、台側面も外開きとなる。しかし、台の前・後面は垂直。また、歯の台側は厚く、下端はかなり薄く整形される。前・後歯の間の整形痕は残さない。台の全面に薄く黒漆が塗布され、さらにその上に台表と前・後・両側面に赤色漆を塗布する。前壺・横緒孔の3孔はそれぞれ傾斜をもって穿かれ、孔内には横緒の一部が残存する。	99と対か
第36図 PL.27	101	木製品 一木下駄	完形	長 幅	21.5 8.6	高	4.4	コナラ節	台と歯が一体の一木下駄。台の前・後面は垂直に切断。台表の平面形は、四隅が面取りされた隅丸長方形で、最大幅は台前面端部にあり、台後面にかけて幅が僅かに減少する。前後の歯はほぼ平行で、台から垂直に下に伸び、下端幅がやや広くなると共に、台側面もやや外開き。前・後歯の間には横方向から削られた整形痕を残す。台の全面に薄く黒漆が塗布され、さらにその上に台表と前・後・両側面に黒漆を塗布する。前壺・横緒孔の3孔はやや傾斜をもって穿かれ、孔内には鼻緒・横緒の一部が残存する。	102と対か
第36図 PL.27	102	木製品 一木下駄	後歯一部欠	長 幅	21.4 9.7	高	5.8	クリ	台と歯が一体の一木下駄。台の前・後面は垂直に切断。台表の平面形は、四隅が面取りされた隅丸長方形で、最大幅は台前面端部にあり、台後面にかけて幅が僅かに減少する。前後の歯はほぼ平行で、台から垂直に下に伸び、下端幅がやや広くなると共に、台側面もやや外開き。前・後歯の間には横方向から削られた整形痕を残す。前壺・横緒孔の3孔はほぼ垂直に穿かれる。	101と対か
第36図 PL.27	103	木製品 一木下駄	前半半・前歯欠	長 幅	22.0 (10.4)	高	(7.6)	クリ	台と歯が一体の一木下駄で、台の前半と前歯・後歯の一部を欠く。台の前・後面は垂直に切断。台表の平面形は、四隅が面取りされた隅丸長方形で、最大幅は台前面端部にあり、台後面にかけて幅が僅かに減少する。前後の歯はほぼ平行と思われ、台から垂直に下に伸び、下端幅がやや広くなると共に、台側面もやや外開き。前・後歯の間には横方向から削られた整形痕を残す。前壺・横緒孔の3孔はそれぞれ傾斜をもって穿かれ、孔内には横緒の一部が残存する。	
第37図 PL.27	104	木製品 一木下駄	完形	長 幅	22.4 10.1	高	6.8	クリ	台と歯が一体の一木下駄。台の前・後面は垂直に切断。台表の平面形は、四隅が面取りされた隅丸長方形で、最大幅は台前面端部にあり、台後面にかけて幅が僅かに減少する。前後の歯はほぼ平行で、台から垂直に下に伸び、下端幅がやや広くなると共に、台側面もやや外開き。前・後歯の間には横方向から削られた整形痕を残す。前壺・横緒孔の3孔はそれぞれ傾斜をもって穿かれ、前壺に掛かる鼻緒・横緒が残存する。	
第37図 PL.27	105	木製品 一木下駄	完形	長 幅	22.7 10.0	高	7.2	クリ	台と歯が一体の一木下駄。台の前・後面は垂直に切断。台表の平面形は、四隅が面取りされた隅丸長方形で、最大幅は台前面端部にあり、台後面にかけて幅が僅かに減少する。前後の歯はほぼ平行で、台から垂直に下に伸び、下端幅がやや広くなると共に、台側面もやや外開き。前・後歯の間には横方向から削られた整形痕を残す。前壺・横緒孔の3孔はそれぞれ傾斜をもって穿かれ、孔内には鼻緒・横緒の一部が残存する。	109と対か
第37図 PL.27	106	木製品 一木下駄	完形	長 幅	22.0 9.8	高	7.2	クリ	台と歯が一体の一木下駄。台の前・後面は垂直に切断。台表の平面形は、四隅が面取りされた隅丸長方形で、最大幅は台前面端部にあり、台後面にかけて幅が僅かに減少する。前後の歯はほぼ平行で、台から垂直に下に伸び、下端幅がやや広くなると共に、台側面もやや外開き。前・後歯の間には横方向から削られた整形痕を残す。前壺・横緒孔の3孔はそれぞれ傾斜をもって穿かれ、孔内には横緒の一部が残存する。	

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長 幅	高	高			
第38図 PL.28	107	木製品 一木下駄	完形	長幅 21.8 10.4	高 6.4		クリ	台と歯が一体の一木下駄。台の前・後面は垂直に切断。台表の平面形は、四隅が面取りされた隅丸長方形で、最大幅は台前面端部にあり、台後面にかけて幅が僅かに減少する。前後の歯はほぼ平行で、台から垂直に下に延び、下端幅がやや広くなると共に、台側面もやや外開き。前・後歯の間には横方向から削られた整形痕を残す。前壺・横緒孔の3孔はそれぞれ傾斜をもって穿かれ、孔内には鼻緒・横緒の一部が残存する。	
第38図 PL.28	108	木製品 一木下駄	後歯欠	長幅 22.2 9.7	高 6.2		クリ	台と歯が一体の一木下駄。台の前・後面は垂直に切断。台表の平面形は、四隅が面取りされた隅丸長方形で、最大幅は台前面端部にあり、台後面にかけて幅が僅かに減少する。前後の歯はほぼ平行で、台から垂直に下に延び、下端幅がやや広くなると共に、台側面もやや外開き。前・後歯の間には横方向から削られた整形痕を残す。前壺・横緒孔の3孔はそれぞれ傾斜をもって穿かれ、孔内には横緒の一部が残存する。	
第39図 PL.28	109	木製品 一木下駄	完形	長幅 22.2 10.2	高 7.0		クリ	台と歯が一体の一木下駄。台の前・後面は垂直に切断。台表の平面形は、四隅が面取りされた隅丸長方形で、最大幅は台前面端部にあり、台後面にかけて幅が僅かに減少する。前後の歯はほぼ平行で、台から垂直に下に延び、下端幅がやや広くなると共に、台側面もやや外開き。前・後歯の間には横方向から削られた整形痕を残す。前壺・横緒孔の3孔はほぼ垂直に穿かれ、孔内には横緒の一部が残存する。	105と対か
第39図 PL.28	110	木製品 一木下駄	完形	長幅 21.5 9.5	高 5.8		クリ	台と歯が一体の一木下駄。台の前・後面は垂直に切断。台表の平面形は、四隅が面取りされた隅丸長方形で、最大幅は台前面端部にあり、台後面にかけて幅が僅かに減少する。前後の歯はほぼ平行で、台から垂直に下に延び、下端幅がやや広くなると共に、台側面もやや外開き。前・後歯の間には横方向から削られた整形痕を残す。前壺・横緒孔の3孔はやや傾斜をもって穿かれる。	
第40図 PL.28	111	木製品 差歯高下駄	完形	長幅 21.8 16.6	高 13.2		ハンノキ属	台と歯が別作りの差歯下駄で、完形であるが前歯が脱落し、後歯が折れる。台表の平面形は、四隅が面取りされた隅丸長方形で、最大幅は台前面端部にあり、台後面にかけて幅が僅かに減少する。台の前・後・両側面は下方に少し傾斜。台の断面は船底状となり、台裏には歯が挿入される溝をもち、前後の溝は各々が前側と後側へと下方がやや開く（歯は前後にハ字状に取り付く）。また、前・後差歯溝の内面前寄り中央および底面には、地獄柄接ぎのための削り出しをもつと共に楔が残る。前・後の差歯は高さが11.3cm、厚さ1.8cmで、共に下端幅が16.6cmとかなり広くなる。台の全面に薄く黒漆が塗布され、さらにその上に台表と前・後・両側面に黒漆を塗布する。前壺・横緒孔の3孔はそれぞれ傾斜をもって穿かれ、孔内には鼻緒・横緒の一部が残存する。	112と対か
第41図 PL.29	112	木製品 差歯下駄	前・後差歯欠	長幅 21.8 (7.9)	高 (4.2)		ハンノキ属	前・後の差歯を欠くが、台と歯が別作りの差歯下駄。台表の平面形は、四隅が面取りされた隅丸長方形で、最大幅は台前面端部にあり、台後面にかけて幅が僅かに減少する。台の前・後・両側面は下方に少し傾斜。台の断面は船底状となり、台裏には歯が挿入される溝をもち、前後の溝は各々が前側と後側へと下方がやや開く。また、前・後差歯溝の内面前寄り中央および底面には、地獄柄接ぎのための削り出しをもつ。台の全面に薄く黒漆が塗布され、さらにその上に台表と前・後・両側面に黒漆を塗布する。前壺・横緒孔の3孔はそれぞれ傾斜をもって穿かれ、孔内には鼻緒・横緒の一部が残存する。	111と対か
第41図 PL.29	113	木製品 差歯下駄	台後面欠	長幅 (13.8) 7.6	高 5.7		ハンノキ属	台の後面を欠くが、台と歯が別作りの差歯下駄。台表の平面形は、四隅が面取りされた隅丸長方形で、最大幅は台前面端部にあり、台後面にかけて幅が僅かに減少する。台の前・後・両側面は下方に少し傾斜。台の断面は船底状となり、台裏には歯が挿入される溝をもち、前後の溝は概ね垂直。また、前・後差歯溝の内面前寄り中央および底面には、地獄柄接ぎのための削り出しをもつ。前・後の差歯は高さが4.3cm、厚さ1.0cmで、共に下端幅が大きく広がる。一方、両差歯には、共に上部の台との接合面に地獄柄接ぎの楔が取まった状態で残る。台の全面に薄く黒漆が塗布され、さらにその上に台表と前・後・両側面に黒漆を塗布する。前壺・横緒孔の3孔はそれぞれ傾斜をもって穿かれ、孔内には鼻緒の一部が残存する。	

挿 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
				長 幅	高	厚			
第42図 PL.29	114	木製品 差歯下駄	2/3	長 幅 (17.3) (9.8)	高 9.1		キリ	台の前寄り右半と、前側差歯の右半を欠くが、台と歯が別作りの差歯下駄。台表の平面形は、四隅が面取りされた隅丸長方形で、最大幅は台前面端部にあると思われる。台の前・右側面は垂直。台の断面は船底状となり、台裏には歯が挿入される溝をもち、前の溝は前側へと下方が僅かに開く。また、前・後差歯溝の内面前寄り中央および底面には、地獄柄接ぎのための削り出しをもつ。前・後の差歯は高さが7.7cm、厚さ1.2cmで、共に下端幅が大きく広くなる。一方、両差歯には、共に上部の台との接合面に地獄柄接ぎの楔が収まった状態で残る。横緒孔の2孔は僅かに傾斜をもって穿かれ、孔内には横緒の一部が残存する。	115と対か
第42図 PL.29	115	木製品 差歯下駄	3/5	長 幅 (11.2) (7.3)	高 9.0		クリ	台の左縁および後面と、前・後の差歯の一部を欠くが、台と歯が別作りの差歯下駄。台表の平面形は、四隅が面取りされた隅丸長方形で、最大幅は台前面端部にあると思われる。台の前・右側面は垂直。台の断面は船底状となり、台裏には歯が挿入される溝をもち、前の溝は前側へと下方がやや開く。また、前・後差歯溝の内面前寄り中央および底面には、地獄柄接ぎのための削り出しをもつ。前・後の差歯は高さが7.7cm、厚さ1.2cmで、共に下端幅が大きく広くなる。一方、両差歯には、共に上部の台との接合面に地獄柄接ぎの楔が収まった状態で残る。前歯孔は傾斜をもって穿かれる。	114と対か
第43図 PL.29	116	竹製品 扇子	骨	長 27.0				竹製の扇子で、骨10本を遺存。貼られた和紙は、僅かに残存する。先端部ほど薄く細くなるテーパ構造で、骨は細長く、根もと付近で幅0.6cm、厚さ0.06cm、要孔をもつ。一番外側となる親骨は厚く、根もと付近で幅0.6cm、厚さ0.28cm、要孔をもつ。	
第43図 PL.29	117	竹製品 団扇	柄部	長 幅 (25.7) 13.7	厚 0.8			柄の部分に、「肩入れ」と称される一文字状の竹が取り付けられる。扇面となる骨部の多くを欠くが、残存する骨は幅0.4cm、厚さ0.1cm、その先端は細く二つに割れている可能性あり。	越生団扇
第43図 PL.29	118	竹製品 団扇	柄部	長 幅 (14.3) (11.0)	厚 0.9			柄の部分に、「肩入れ」と称される一文字状の竹が取り付けられる。扇面となる骨部はほとんど欠くが、残存する骨は幅0.4cm、厚さ0.1cm、その先端は細く二つに割れていると思われる。	越生団扇
第43図 PL.29	119	木製品 将棋(駒)	完形	長 幅 2.4 2.1	厚 0.7		トチノキ	五角形をなす将棋の駒で、桂馬。表面の馬の文字がかすれ、裏面の文字は成桂。	
第43図 PL.29	120	木製品 将棋(駒)	完形	長 幅 2.1 1.5	厚 0.7		散孔材	五角形をなす将棋の駒で、歩兵。表面の文字はかすれ気味となり、裏面の文字は確認できない。	
第43図 PL.30	121	竹製品 弓	ほぼ完形	長 幅 75.8 2.1	厚 0.4			竹製の弓で、片端部を僅かに欠く。断面は蒲鉾状。両端を三角に尖らせ、三角部側縁に糸(弦)掛け用の挟りを刻む。また、片側縁に僅かな浅い切り込みを有する。	
第43図 PL.30	122	竹製品 弓	完形	長 幅 76.4 2.2	厚 0.5			竹製の弓。断面は蒲鉾状。両端を三角に尖らせ、三角部側縁に糸(弦)掛け用の浅い溝をもつ。	
第43図 PL.30	123	竹製品 弓	一部欠	長 幅 (45.3) 1.9	厚 0.4			竹製の弓で、片方の先端部を欠く。断面は蒲鉾状。両端を三角に尖らせ、三角部側縁に糸(弦)掛け用の挟りを刻む。	
第43図 PL.30	124	竹製品 弓	先端部	長 幅 (21.9) 1.8	厚 0.6			竹製の弓の先端部。断面は蒲鉾状。両端を三角に尖らせ、三角部側縁に糸(弦)掛け用の浅い溝をもつ。	
第44図 PL.30	125	木製品 板	完形	長 幅 14.1 5.7	厚 1.0		マツ属複雑管束 亜属	表裏面に焼印をもつ板で、焼印の脇に孔を有する。焼印は縦8.0cm、横3.3cmの長方形枠内に、「㊦矢嶋」とある。	
第44図 PL.30	126	木製品 不明	完形	長 幅 6.3 6.2	厚 0.9			方形な板。木札か。	
第44図 PL.30	127	木製品 不明	一部欠	長 幅 4.1 (4.4)	厚 0.8			片側の側縁を僅かに欠く板。方形の木札か。	
第44図 PL.30	128	木製品 不明	完形	長 幅 5.0 4.0	厚 0.5			左右にやや湾曲する方形の板。四隅は面取りされ、中央左上寄りに木釘が残る。桶の補修用板か。	
第44図 PL.30	129	木製品 不明	完形	長 幅 2.3 2.1	厚 0.9			平面形は台形状で、上部ほど薄くなる。木札類か。	
第44図 PL.30	130	木製品 墨書板	完形	長 幅 3.7 3.1	厚 0.5		スギ	僅かに長方形の小さな板で、角を面取り成形。表面に墨書あり、右側に「日影村」、左側に「寺□口」。	
第44図 PL.30	131	木製品 不明		長 幅 3.4 3.0	厚 1.3			平面形がやや長方形の板状で、右側面に嵌め込み痕の段をもつ。裏面の周縁に墨痕か。	
第44図 PL.30	132	木製品 不明	完形	長 幅 3.0 2.9	厚 1.3			平面形はやや台形状で、四隅と表裏面の縁を面取りする。	
第44図 PL.30	133	木製品 箱	上面板	長 幅 10.8 (9.6)	厚 0.6		スギ	上箱の上面板で、左側を欠。表面の縁近くには、側面板との小さな接合釘穴を有する。また、表面中央に墨書「□ 碁石の箱か碁」。さらに、表面の周縁と各側面に黒塗り。	碁石の箱か
第44図 PL.30	134	木製品 漆塗板		長 幅 8.8 3.3	厚 0.9		ヒノキ属	長方形の板で、表面の縁と四隅を面取りし、表面に黒漆を塗布する。塗物製品の一部と思われる。	
第44図 PL.30	135	木製品 不明		長 幅 16.2 (4.5)	厚 0.5		スギ	薄身の板で、両側を欠。上下端の縁に木釘の列が残る。	
第44図 PL.30	136	木製品 不明		長 幅 27.7 6.0	厚 0.8			角のやや丸い板状で、表面の周縁は面取りされて丸みを帯びる。両端には2カ所ずつの木釘が残る。木製品の部品か。	

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第44図 PL.30	137	木製品 不明		長幅	31.1 2.0	厚	0.9		障子の棧に似るが不明。表面の両縁を面取りし、断面は六角。両端に柄をもつ。柄の長さ0.6cm。138と同一木製品の部品か。
第44図 PL.30	138	木製品 不明		長幅	30.1 2.0	厚	0.9		障子の棧に似るが不明。表面の両縁を面取りし、断面は六角。両端に柄をもつ。柄の長さ0.6cm。137と同一木製品の部品か。
第44図 PL.30	139	木製品 不明	先端部	長幅	(10.0) 1.9	厚	0.9		障子の棧に似るが不明。表面の両縁を面取りし、断面は六角。端部に柄をもつ。柄の長さ0.6cm。木製品の部品か。
第44図 PL.30	140	建具 障子 棧か		長幅	(14.3) 1.5	厚	1.3		断面が四角で、裏面に組み合わせ溝をもつ。
第44図 PL.30	141	木製品 不明		長幅	(28.5) 1.5	厚	0.6		断面が四角で、端部に木釘を残す。木製品の部品か。
第45図 PL.31	142	竹製品 不明	1/2	長径	45.5 (4.3)				一節分を利用した竹製品で、上下両端を切断し、上端の一部に切り込みをもつ。節内を抜いているかは不明。水筒か。
第45図 PL.31	143	竹製品 不明	ほぼ完形	長径	25.0 6.5				一節分を利用した竹製品で、上下両端を切断し、上端の1/3ほどを残して切り込みをもつ。その残った部分に孔を有する。節内を抜いているかは不明。水筒または一輪挿しか。
第45図 PL.31	144	竹製品 不明	ほぼ完形か	長幅	(12.9) 4.1	厚	3.5		茶筌状の竹製品。ササラか。若干潰れる。
第45図 PL.31	145	竹製品 不明		長幅	(9.5) 0.5	厚	0.2		竹製品の一部分で、竹籤状に薄く細長く、先端が尖る。
第45図 PL.31	146	竹製品 不明	完形	長幅	9.2 1.7	厚	0.4		竹製で両端に切断痕をもつ。中央に列状に6孔を穿つ。
第45図 PL.31	147	竹製品 不明	完形	長幅	8.6 2.0	厚	0.3	タケ垂科	竹製の孔を有する板状で、径3mmほどの孔を一列に6孔もつ。
第45図 PL.31	148	竹製品 不明	破片	長幅	(10.5) (1.1)	厚	0.4		竹製品で、中央付近に1孔を穿つ。
第45図 PL.31	149	木製品 荷鞍	1/4	高幅	(39.9) (28.0)	厚	4.9	エノキ属	荷鞍の前部左側で上端欠。緩やかな弧状を呈し、下方は直線的。上部には前部右側とを繋ぐ渡し木用の溝をもち、その斜め下方に後部左側とを繋ぐ渡し木用の柄孔（長方形4.3×2.2cm）を有する。
第45図 PL.31	150	木製品 不明	ほぼ完形	長幅	21.4 7.0	径	1.5~ 2.3	カツラ	二股枝を利用したV字状の木製品。表面には成形が施され、一部に加工痕が残る。
第45図 PL.31	151	木製品 不明	完形	径高	5.6 2.1	孔	1.4		丸木を輪切りし、芯を穿孔させる。樹皮を残す。
第46図 PL.31	152	加工木 不明	完形	長幅	27.5 16.7	厚	12.0		芯を残した丸木を利用し、上下端を切断後に裏表面を平らに加工する。上下面は平坦で、両側面は樹皮を残す。中央には表面から裏面へ抜ける円形の孔（径8.5cm）をもつ。また、孔の周囲は焼けて炭化する。
第46図 PL.31	153	木製品 不明	完形	長径	14.7 1.9				杵のミニチュア様で、両端側が太く径1.9cm、中央部は細く1.1cm。断面は円形で、木の芯を使う。
第46図 PL.31	154	藁製品 藁縄		長幅	(12.2) 4.6	厚	1.4		藁縄による結び目部。二つ折りにした縄に、輪を固定させる結び目をもつ。解放側の縄（先端）は欠。
第46図 PL.31	155	木製品 不明	一部欠	長幅	36.5 26.5	厚	1.5		用途不明な方形の板状の木製品で、一部を欠く。表面の左右両側に墨による縦・横に線を引くが、その中間には線はない。横線は細い刻みを施した後に引く。また、横線は左右共に11本で、その間隔は概ね3.0cm前後。縦線は左右共に中央寄りに1本ずつである。
第46図 PL.32	156	木製品 不明	一部欠	長幅	45.3 10.3	厚	1.7		木製品の一部分と思われる板材。左右両端に凸となる切り込みを有し、上端中央に逆台形状の切り込みをもつ。裏面の下端縁は段となり、左右両端と下端には木釘痕と木釘が残る。引き出し状の木製品の部品か。なお、一部炭化している。
第47図 PL.32	157	木製品 不明	完形	長幅	51.0 5.5	厚	2.8		断面長方形で、板状の細長い角材。
第47図 PL.32	158	建築材 加工角材	両端欠	長幅	58.5 7.0	厚	4.5		断面長方形の加工角材で、表面中央に長さ6.3cm、深さ1.0cmの溝状の柄をもち、表面に7カ所の釘孔をもつ。
第47図 PL.32	159	加工木 板		長幅	(66.0) 10.3	厚	1.1	マツ属複雑管束 亜属	隅丸となる長い板で、出土した時点で藁縄が斜めに間隔を置いて三巻残存していた。
第47図 PL.32	160	加工木 板		長幅	(30.7) (5.0)	厚	0.6	スギ	表面に樹皮を残す板で、側縁に釘孔列をもつ。
第47図 PL.32	161	加工木 杭	完形	長径	28.3 4.0				芯をもつ丸杭で、下端を削り出して尖らせる。樹皮を残す。
第47図 PL.32	162	加工木 杭	先端部	長径	(14.0) 2.8				やや曲がった丸木を素材に、先端を削った杭。
第47図 PL.32	163	加工木 丸棒	完形	長径	134.2 3.2				断面が丸く、長い棒。表面には、縦長に加工痕を残す。
第47図 PL.32	164	木製品 棒	ほぼ完形	長径	42.0 3.6			マツ属複雑管束 亜属	木の芯を残す断面が円形の棒で、先端部を僅かに欠く。表面には面取り等の加工痕が残る。
第47図 PL.32	165	建築部品 楔	完形	長幅	13.2 3.5	厚	1.4		長方形の板状で、片面の中央下部を斜めに削り、下端を薄くする。

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第48図 PL.32	166	鉄製品 鉄鍋	口縁部片					外反気味の平口縁で、口縁下で僅かに屈曲する。屈曲部内面は段となる。	
第48図 PL.32	167	鉄製品 鉄鍋	胴部片					外反気味に立ち上がる胴部片で、錆が著しく進行する。	
第48図 PL.32	168	鉄製品 鉄鍋	胴部片					外反気味に立ち上がる胴部片。	
第48図 PL.32	169	鉄・銅製品 小柄	ほぼ完形	長幅 18.3 1.4	厚重 0.4 34.2			刃部は直線的で、錆は進行するが、長さ8.7cm、幅0.6cm、厚さ0.2cmが現存し、先端は明確ではない。柄部は銅製で、長さ9.6cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm。柄の表面には、縁取りした内側に獅子と松・竹および下地に彫金細工が施されるが、使用により部分的に摩滅する。獅子と松・竹部の厚さは0.6cm。裏面には細工はない。	
第48図 PL.32	170	鉄製品 刀子	刃部片	長幅 (4.0) 1.0	厚重 0.2 (2.0)			錆が著しく進行する。	
第48図 PL.32	171	鉄製品 刀子	両端欠	長幅 (7.0) 1.1	厚重 0.2 (5.6)			刃部と茎部の間に段をもつ。	
第48図 PL.32	172	鉄製品 鍬先	側縁部	長幅 (17.8) 2.0	厚重 (1.1) 62.2			鍬先の側縁部で、断面がY字状となる。	
第48図 PL.32	173	鉄製品 不明	外縁欠	長幅 (5.1) (4.4)	厚重 0.2 (3.8)			薄いリング状で、内孔径3.0cm。錆が進行する。	
第48図 PL.32	174	鉄製品 釘	小片	長幅 (2.0) 0.8	重 (1.4)			断面形は概ね四角。	
第48図 PL.32	175	鉄製品 釘	頭部欠	長幅 3.8 0.2	重 0.7			細い釘で、頭部を欠く。中間で屈曲し、断面形は四角。	
第48図 PL.32	176	鉄製品 釘	1号土坑 両端欠	長幅 (8.9) 0.6	重 (13.1)			断面形は四角。	
第48図 PL.32	177	銅製品 縁金具か	完形	長幅 1.8 0.7	高重 0.6 0.7			上面形は長楕円形で、上端は外側へ屈曲した管状の金具で、上端下に縁が花びら状となるリングを2本もつ。	
第48図 PL.32	178	銅製品 煙管雁首	完形	長径 4.4 1.2	重 4.5			錆少なく、表面は金銅色。火皿はやや歪むが、径1.5cm。頸部から胴部側面に接合痕。	
第48図 PL.32	179	銅製品 煙管雁首	完形	長径 5.6 1.0	重 8.2			錆少なく、表面は金銅色。火皿は深く、径1.6cm。頸部から胴部にかけての上部が歪み、側面に接合痕。	
第48図 PL.32	180	銅製品 煙管雁首	火皿欠	長径 (4.2) 0.9	重 (3.7)			全体に錆が著しい。接合痕等は不明。	
第48図 PL.32	181	銅製品 煙管雁首	完形	長径 4.1 0.9	重 5.5			全体に錆。火皿は深く、径1.2cm。側面に接合痕。	
第48図 PL.32	182	銅製品 煙管雁首	完形	長径 4.9 0.9	重 5.8			全体に錆。火皿は浅く、径1.5cm。側面に接合痕。	
第48図 PL.33	183	銅製品 煙管吸口	完形	長径 6.9 0.9	重 4.9			錆少なく、表面は金銅色。胴部中央付近に段差。側面に接合痕。	
第48図 PL.33	184	銅製品 煙管吸口	完形	長径 5.9 1.0	重 3.5			錆少なく、表面は金銅色。側面に接合痕。	
第48図 PL.33	185	銅製品 煙管吸口	口付き部欠	長径 (5.7) 0.9	重 (6.8)			錆少なく、表面は金銅色。胴部の断面は八角形をなし、口付き部付近は円形。側面に接合痕。	
第49図 PL.33	186	銭貨 寛永通寶	完形	径孔 2.2 0.7	厚重 0.1 1.6			表面は金張り、背面はかなり摩耗。	
第49図 PL.33	187	銭貨 寛永通寶	完形	径孔 2.3 0.7	厚重 0.1 2.0			背面の上に文、下に二。	
第49図 PL.33	188	銭貨 寛永通寶	完形	径孔 2.4 0.5	厚重 0.1 3.6				
第49図 PL.33	189	銭貨 寛永通寶	完形	径孔 2.4 0.6	厚重 0.1 2.5				古寛永
第49図 PL.33	190	銭貨 寛永通寶	完形	径孔 2.3 0.6	厚重 0.1 3.1				
第49図 PL.33	191	銭貨 寛永通寶	完形	径孔 2.2 0.6	厚重 0.1 3.1				
第49図 PL.33	192	銭貨 寛永通寶	完形	径孔 2.2 0.7	厚重 0.1 1.8				
第49図 PL.33	193	銭貨 寛永通寶	完形	径孔 2.2 0.6	厚重 0.1 2.6				
第49図 PL.33	194	銭貨 寛永通寶	完形	径孔 2.4 0.6	厚重 0.1 4.3				
第49図 PL.33	195	銭貨 寛永通寶	完形	径孔 2.3 0.6	厚重 0.1 2.5			背面はかなり摩耗。	
第49図 PL.33	196	銭貨 寛永通寶	1/2	径孔 (2.4) 2.8	厚重 0.1 (1.4)				
第49図 PL.33	197	石製品 硯	1/2	長幅 (9.4) 4.7	厚重 (2.2) (135.5)	珉質粘板岩	表面の剥落が進行し、詳細は不明。		
第49図 PL.33	198	石製品 砥石	1/3	長幅 (4.8) 6.5	厚重 1.5 (71.9)	砂岩	表面を砥面とし、中央に縦位の浅い凹みをもつ。他の面は使用されていない。隅は面取り。	切り砥石	
第49図 PL.33	199	石製品 砥石	2/3	長幅 (9.3) 2.8	厚重 1.7 (80.0)	砥沢石	表面を砥面として使用。両側面と裏面および下端小口には粗い縦位線条痕が残る。	切り砥石	
第49図 PL.33	200	石製品 砥石	ほぼ完形	長幅 16.4 2.8	厚重 1.7 127.1	砥沢石	上端を僅かに欠損。表面を砥面とし、刃ならし傷あり。両側面と裏面および下端小口に粗い縦位線条痕が残る。	切り砥石	

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第50図 PL.33	201	石製品 砥石	2/3	長 幅	(9.4) 3.5	厚 重	3.7 (180.0)	砂岩	四面を砥面とし、左側面に折断面を残す。	切り砥石
第50図 PL.33	202	礫石器 磨石	完形	長 幅	7.8 7.0	厚 重	4.0 342.5	粗粒輝石安山岩	円礫を素材とし、表裏面を研磨する。特に、表面は研磨により平坦となる。	
第50図 PL.33	203	礫石器 石皿	1/6	長 幅	(15.4) (14.6)	厚 重	7.0 (1635.4)	粗粒輝石安山岩	左辺側の下端部破片。表面側は研磨により大きく凹み、裏面側には孔を多数穿つ。	
PL.33	204	植物 サルノコシ カケ		長 幅	4.8 (7.0)	厚	1.5		両縁を欠き、平面形は扇状を呈する。	

第6表 遺構外出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第69図 PL.33	1	陶胎染付 碗	33区 I-10・11 口縁～高台部 1/3	口 底	(10.0) 4.4	高	7.0	良好/灰色	釉に貫入が入る。	肥前陶器
第69図 PL.33	2	染付 碗	33区 M-15 高台部片	底	4.5	高	(1.6)	良好/灰白色	高台内に崩れた銘あり。	肥前磁器
第69図 PL.33	3	陶器 碗	33区 L・M-15 口縁～高台部 1/3	口 底	(11.0) (5.0)	高	(6.3)	良好/灰色	アメ釉。釉に貫入が入る。	瀬戸・美濃 陶器
第69図 PL.33	4	陶器 碗	33区 L-15 体部～高台部 1/4	底	(3.8)	高	(4.4)	良好/灰白色	釉に貫入が入る。	瀬戸・美濃 陶器
第69図 PL.33	5	陶器 片口鉢	33区 L-13・16 口縁～高台部 1/4	口 底	(17.0) 8.2	高	9.5	良好/灰白色		瀬戸・美濃 陶器
第69図 PL.33	6	陶器 すり鉢	33区 L-14・ M-15 口縁部片					良好/灰黄色	口端は丸みを帯び、口縁部は肥厚して有段となる。内面には縦方向に掻き目。	瀬戸陶器
第69図 PL.33	7	陶器 すり鉢	33区 M-15 体部片					良好/灰黄色	内面には縦方向に14歯の掻き目。	瀬戸陶器
第69図 PL.33	8	在土土器 内耳土器	33区 F-18 口縁部片					細砂粒/良好/黄 褐色	口端は平坦で、口縁部は外反気味。外内面共に横撫で。外面器表は暗褐色。	
第69図 PL.33	9	在土土器 内耳土器	33区 L-14 口縁部片					細砂粒/良好/黄 褐色	口端はやや外削ぎ気味で、外面は粗い撫で。外面器表は暗褐色。内面に耳を持つ。	
第69図 PL.34	10	在土土器 炬形	33区 口縁部片					細砂粒/良好/黒 褐色	11と同一個体。方形の火鉢の口端部と思われ、口端は平坦面を縁どる。外面は撫で。	
第69図 PL.34	11	在土土器 炬形	33区 底部片					細砂粒/良好/黒 褐色	10と同一個体。方形の火鉢の底部と思われ、内外面共に撫で。	
第69図 PL.34	12	染付 碗	33区 J-9 高台部片	底	4.0	高	(2.0)	良好/灰白色	碗高台部の周囲を細かく上下から打ち欠き、円形状に成形。	肥前磁器
第69図 PL.34	13	陶器 碗	33区 L-15 高台部片	底	3.8	高	(1.5)	良好/灰色	外面は灰褐色で、内面は鉄釉。釉に貫入が入る。碗高台部の周囲を打ち欠き、円形状に成形。	瀬戸・美濃 陶器
第69図 PL.34	14	陶器 碗	33区 L-15 高台部片	底	4.4	高	(1.8)	良好/灰色	内面はアメ釉。釉に貫入が入る。碗高台部の周囲を打ち欠き、円形状に成形。	瀬戸・美濃 陶器
第69図 PL.34	15	磁器 碗	33区 O-20 高台部片	底	4.0	高	(1.5)	良好/灰白色	碗高台部の周囲を上下から打ち欠き、円形状に成形。	肥前磁器
第70図 PL.34	16	木製品 漆塗碗	33区 M-19 体部片					散孔材	碗の身で、体部の破片。内外面に薄く黒漆を塗布し、その後内面を赤色の漆塗り、外面を黒漆塗り。さらに、外面には黒漆の上に赤色漆で丸に棒剣片喰の紋を描く。	
第70図 PL.34	17	木製品 不明	33区 G-13 完形	長 幅	7.4 7.2	厚	1.1		方形な板。木札か。	
第70図 PL.34	18	木製品 桶	33区 N-17 側板	長 幅	33.0 7.3	厚	1.6		桶の把手付側板。形状は短冊状で、上端が広く、下端がやや狭くなり、左右に湾曲する。上端幅7.3cm、下端幅6.1cm。上部に径2.2cmの孔を有する。裏面下端には段をもつ。	
第70図 PL.34	19	鉄製品 鍋蓋	33区 M-15 外縁片	径	(15.0)	高 重	(0.7) (18.2)		ほぼ平坦な蓋。	
第70図 PL.34	20	銅製品 鍋か	33区 L-14 底部片	長 幅	(3.4) (4.0)	厚 重	0.1 (5.3)		銅製鍋等の底部と思われ、胴部への立上がり僅かに残す。	
第70図 PL.34	21	鉄製品 火打金	33区 L-14 両端欠	高 幅	1.4 (9.1)	厚 重	0.2 13.3		両端を屈曲させ、中央を緩い山形状とする。	
第70図 PL.34	22	鉄製品 不明	33区泥流下 下端部	長 幅	(7.1) 2.1	厚 重	1.3 (77.5)		上部を欠いた断面形が四角の棒状鉄製品。	
第70図 PL.34	23	銅製品 煙管雁首	33区 M-14 火皿部	長	(2.1)	重	(2.9)		火皿は深く、径1.7cm。頸部から胴部を欠く。	
第70図 PL.34	24	銅製品 煙管雁首	33区 K-15 頸部～胴部	長 径	(2.9) 0.9	重	(3.1)		火皿を欠き、胴端部が割れる。側面に接合痕。	
第70図 PL.34	25	銅製品 煙管雁首	33区 L-15 頸部～胴部	長 径	(2.9) 0.7	重	(2.4)		火皿を欠き、胴部が歪む。側面に接合痕。	
第70図 PL.34	26	銅製品 煙管吸口	33区 F-13 黒色土層 完形	長 径	6.7 0.9	重	3.6		端部が歪む。錆少なく、表面は金銅色。側面に接合痕。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長	幅	厚重			
第70図 PL.34	27	銅製品 煙管吸口	33区 L-14 完形	長 4.0		重 2.3		短い吸口で、端部は潰れる。中央付近で径0.5cm。側面に接合痕。	
第70図 PL.34	28	銅製品 煙管吸口	33区 F-16 A 下畑耕土 完形か	長 4.7		重 1.5		両端が大きく潰れる。中央付近で径0.6cm。側面に接合痕。	
第70図 PL.34	29	銅製品 煙管吸口か	33区 J-17 口付き部欠	長 (3.3)		重 (2.0)		潰れて板状になるが、本来は管状と思われ、口付き部を欠く煙管の吸口と考えられる。表面は金銅色を残す。	
第70図 PL.34	30	銅製品 毛抜き	33区 L-14 完形	長 6.8 幅 0.9		厚重 0.1 8.1		左側が大きく歪む。上端は逆U字状となり、左右の両下端付近で屈曲してつまみ部をなす。	
第70図 PL.34	31	鉄・銅製品 匙状	33区 L-14 ほぼ完形	長 2.9 幅 1.3		厚重 0.2 2.2		中央より下半が板状に平らとなり、上半は柄状に両側から袋状に丸められる。また、下半側面には細く銅を貼付ける。	
第70図 PL.34	32	銅製品 不明	33区 M-15 完形か	長 1.5 幅 1.5		厚重 0.1 0.6		形状はイチョウ葉状に、半円形の下端中央に突出する箇所がある。突出部端部を内側に折り曲げ、半円部の縁も内向する。	
第70図 PL.34	33	銅製品 不明	33区 M-15 完形	径 0.9 高 0.5		重 0.3		管状で、上端は斜め。側面に接合痕。	
第70図 PL.34	34	銭貨 寛永通寶	33区 L-20 完形	径 2.5 孔 0.6		厚重 0.1 3.1		背面の上に文。	
第70図 PL.34	35	銭貨 寛永通寶	33区 L-14 完形	径 2.5 孔 0.6		厚重 0.1 3.9		背面の上に文。	
第70図 PL.34	36	銭貨 寛永通寶	33区 L-14 完形	径 2.5 孔 0.6		厚重 0.1 3.5		背面の上に文。	
第71図 PL.34	37	銭貨 寛永通寶	33区表土 完形	径 2.4 孔 0.6		厚重 0.1 3.3		背面の上に文。	
第71図 PL.34	38	銭貨 寛永通寶	33区トノゾ 4 A 下畑耕土 4/5	径 2.2 孔 0.7		厚重 0.1 1.3		背面の上に文。	
第71図 PL.34	39	銭貨 寛永通寶	33区 L-14 完形	径 2.2 孔 0.7		厚重 0.1 2.1			
第71図 PL.34	40	銭貨 寛永通寶	33区 L-13 完形	径 2.4 孔 0.6		厚重 0.1 3.6			
第71図 PL.34	41	銭貨 寛永通寶	33区 F-14 黒色土層 完形	径 2.2 孔 0.6		厚重 0.1 2.5			
第71図 PL.34	42	銭貨 寛永通寶	33区 L-14 完形	径 2.3 孔 0.6		厚重 0.1 2.7			
第71図 PL.34	43	銭貨 寛永通寶	33区 B-15 泥流下 完形	径 2.3 孔 0.7		厚重 0.1 2.3			
第71図 PL.34	44	銭貨 寛永通寶	33区 H-6 完形	径 2.1 孔 0.6		厚重 0.1 2.0			
第71図 PL.34	45	銭貨 一銭	33区表採 完形	径 1.5		厚重 0.1 0.5			
第71図 PL.34	46	石製品 砥石	33区攪乱土 1/2	長 (8.1) 幅 2.8		厚重 2.0 (83.4)	砂岩	四面を砥面とする。	切り砥石
第71図 PL.34	47	石製品 砥石	33区 L-15 1/2	長 (8.7) 幅 2.7		厚重 2.9 (94.5)	砥沢石	上下端を欠損。表裏面を砥面とし、両側面に粗い縦線条痕が残る。	切り砥石
第71図 PL.34	48	石製品 砥石	33区泥流下 1/5	長 (3.9) 幅 2.5		厚重 1.4 (22.7)	砥沢石	上下端を欠損。表裏面と右側面の3面を砥面とする。	切り砥石
第71図 PL.34	49	石製品 石臼	33区 L-14 1/4	径 14.5 高 10.2		重 (3750.0)	粗粒輝石安山岩	使い込まれ、すり合わせ部は摩耗している。白の上面に刻まれた溝は痕跡程度。芯棒孔はラッパ状に開く。	下臼
第71図 PL.34	50	剥片石器 打製石斧	33区泥流下 完形	長 9.2 幅 7.7		厚重 2.2 178.4	黒色頁岩	幅広剥片を横位に用い、周辺加工して器体を作成する。両側縁を弱く絞り込んでいる。刃部摩耗が部分的に残されている。	

第7表 鍛冶関連遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長	幅	厚重			
第73図 PL.35	1	鉄製品 鎌	33区 L-14 先端部	長 (3.8) 幅 1.7		厚重 0.2 (2.7)		鎌の先端部であるが、錆が進行する。	
第73図 PL.35	2	鉄製品 刀子	33区 M-15 刃部片	長 (3.3) 幅 1.4		厚重 0.3 (1.9)		刀子の刃部片で、錆が進行する。	
第73図 PL.35	3	鉄製品 火打金	33区 L-14 先端部	長 (2.4) 幅 0.8		厚重 0.3 (1.9)		山形を呈する火打金の先端部と思われ、先端が曲げられる。	
第73図 PL.35	4	鉄製品 不明	33区 L-14	長 3.3 幅 0.7		厚重 0.4 4.9		鎌の一部とも考えられる。細目の板状の鉄を折り曲げて、環状を造りだして、端部を合わせる。	
第73図 PL.35	5	鉄製品 不明	33区 L-14 上端欠	長 (2.7) 幅 2.0		厚重 0.6 (2.3)		中央が山形状に幅広となり、下端はU字状に折り曲げ、その先端は尖る。	
第73図 PL.35	6	鉄製品 不明	33区 L-14 ほぼ完形	径 2.2		厚重 0.6 3.2		外径2.2cm、内径1.1cmのリング状で、断面形は丸。	
第73図 PL.35	7	鉄製品 不明	33区 M-14 一部欠	長 (3.8) 幅 0.9		厚重 0.3 (2.8)		方形の金具で、下端は間が開く。	

遺物観察表

挿 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第73図 PL.35	8	銅製品か 不明	33区 L-14	径	3.5	厚 重	0.2 (1.5)		円形状を呈し、半円を欠く。
第73図 PL.35	9	鉄製品 不明	33区 L-14	長 幅	2.3 0.3	厚 重	0.3 1.2		断面が四角の棒状の鉄を、折曲げたもの。
第73図 PL.35	10	鉄製品 不明	33区 L-14	長 幅	2.7 0.7	厚 重	0.2 1.1		上下端が丸みをもち、下端がやや幅広の直線的なもので、 下端の一部を僅かに欠く。
第73図 PL.35	11	鉄製品 不明	33区 M-15	長 幅	(2.5) 0.8	厚 重	0.3 (1.3)		上下端は欠損と思われる。細長い板状で、上下に弧状と なる。
第73図 PL.35	12	鉄製品 不明	鉄滓集中部	長 幅	1.6 0.7	厚 重	0.1 0.7		薄い板状で、湾曲する。下端がやや厚い。鉄片か。
第73図 PL.35	13	鉄製品 不明	33区 L-14	長 幅	2.9 0.5	厚 重	0.2 1.5		板状で下端が細く尖る。中間でく字状に曲がる。
第73図 PL.35	14	鉄製品 不明	33区 両端欠	長 幅	(4.1) 0.9	厚 重	0.1 2.4		薄い板状で、捻れるように歪む。
第73図 PL.35	15	鉄製品 釘か	33区 L-14 完形	長 幅	3.7 0.7	厚 重	0.6 6.8		断面が四角。下端は尖らずに平らで楔状。上端は敲打に より平らに潰れる。
第73図 PL.35	16	鉄製品 釘	33区 M-15 ほぼ完形	長 幅	(4.2) 0.5	厚 重	0.3 0.9		上端が敲打により僅かに平らに潰れ、下端を僅かに欠く。 断面は四角。
第73図 PL.35	17	鉄製品 釘	33区 L-14 完形	長 幅	3.1 0.4	厚 重	0.3 1.8		上端は大きく屈曲する。断面は四角。
第73図 PL.35	18	鉄製品 釘か	33区 M-14 両端欠	長 幅	(2.7) 0.6	厚 重	0.4 (1.6)		断面が四角の棒状。
第73図 PL.35	19	鉄製品 釘	33区 L-14 両端欠	長 幅	(3.3) 0.4	厚 重	0.3 (1.0)		断面が四角の棒状。上部がやや曲がる。
第73図 PL.35	20	鉄製品 釘	33区 L-14 両端欠	長 幅	(2.1) 0.4	厚 重	0.4 (1.0)		断面が四角の棒状。
第73図 PL.35	21	鉄製品 釘	33区 L-14 両端欠	長 幅	(2.9) 0.4	厚 重	0.4 (1.5)		断面が四角の棒状。
第73図 PL.35	22	鉄製品 不明	33区 M-15	長 径	2.3 0.6	重	1.9		断面が円形に近く、上下端が敲打により平らに潰れる。
第73図 PL.35	23	鉄製品 釘か	鉄滓集中部	長 幅	(2.0) 0.5	厚 重	0.3 (1.3)		断面が四角の釘と思われるが、下端は切断痕の可能性あり。
第73図 PL.35	24	銅製品 不明	33区 L-15 両端欠	長 幅	(3.7) 0.1	厚 重	0.1 0.6		両端を欠く、細い棒状の金具。表面は金銅色。断面形は 四角。
第73図 PL.35	25	鉄製品 釘か	33区 M-14 両端欠	長 幅	(10.6) 0.5	厚 重	0.5 (7.1)		断面が四角の細長い棒状。
第73図 PL.35	26	鉄製品 釘	鉄滓集中部 下半部	長 幅	(4.9) 0.6	厚 重	0.4 (4.1)		断面が四角の棒状。下端がやや曲がる。
第73図 PL.35	27	鉄製品 釘	33区 L-15 完形	長 幅	3.5 0.4	厚 重	0.3 1.0		上端は斜めとなる未使用の釘。断面は四角。
第73図 PL.35	28	鉄製品 釘	33区 M-15 下端部	長 幅	(3.6) 0.7	厚 重	0.4 (1.8)		断面が四角の釘の下端部。
第73図 PL.35	29	鉄製品 釘	33区 M-15 下端部	長 幅	(2.7) 0.4	厚 重	0.3 (0.8)		断面が四角の釘の下端部。
第73図 PL.35	30	鉄製品 釘	33区 M-15 下端部	長 幅	(2.4) 0.6	厚 重	0.6 (2.0)		断面が四角の釘の下端部。
第73図 PL.35	31	鉄製品 釘	33区 L-14 下端部	長 幅	(1.9) 0.3	厚 重	0.3 (0.4)		断面が四角の釘の下端部。
第73図 PL.35	32	鉄製品 釘	33区 L-14 下端部	長 幅	(1.8) 0.4	厚 重	0.3 (0.8)		断面が四角の釘の下端部。
第73図 PL.35	33	鉄製品 鏝	33区 L-14 先端部	長 幅	(3.1) 0.5	厚 重	0.6 (3.0)		鏝の先端部で、端部は直角に曲がり先端をなす。
第73図 PL.35	34	鉄製品 鉄片	33区 M-15	長 幅	5.8 1.5	厚 重	0.4 4.7		上端が細く、下端が幅広の直線的な鉄片で、下端部に斜 めの切断痕を残す。
第73図 PL.35	35	鉄製品 鉄片	33区 M-14	長 幅	3.8 1.1	厚 重	0.5 4.4		上端が細く、下端が幅広のやや湾曲する鉄片で、下端部 に斜めの切断痕を残す。
第73図 PL.35	36	鉄製品 鉄片	33区 M-14	長 幅	3.2 1.0	厚 重	0.6 5.5		上端がやや細く、下端が幅広の直線的な鉄片で、下端部 に斜めの切断痕を残す。
第73図 PL.35	37	鉄製品 鉄片	33区 L-14	長 幅	3.2 0.7	厚 重	0.3 1.7		上端がやや細く、下端がやや幅広の直線的な鉄片で、下 端部に斜めの切断痕を残す。
第73図 PL.35	38	鉄製品 鉄片	33区 L-14	長 幅	3.3 1.0	厚 重	0.6 3.4		上端がやや細く、下端が幅広の直線的な鉄片で、下端部 には斜位に斜めの切断痕を残す。
第73図 PL.35	39	鉄製品 鉄片	33区 L-14	長 幅	1.9 0.6	厚 重	0.2 0.5		上端がやや細く、下端がやや幅広の直線的な鉄片で、下 端部に斜めの切断痕を残す。
第73図 PL.35	40	鉄製品 鉄片	33区 L-14	長 幅	2.1 0.9	厚 重	0.3 2.4		上端が丸みをもち、下端がやや幅広の直線的な鉄片で、 下端部に斜めの切断痕を残す。
第73図 PL.35	41	鉄製品 鉄片	33区 M-14	長 幅	3.0 1.2	厚 重	0.4 3.1		右側縁および下端部に斜めの切断痕を残す。
第73図 PL.35	42	鉄製品 鉄片	33区 L-14	長 幅	2.3 1.1	厚 重	0.5 3.2		上端が丸く、側縁は直線的な鉄片で、下端部に斜めの切 断痕を残す。
第73図 PL.35	43	鉄製品 鉄片	33区 L-14	長 幅	2.2 1.1	厚 重	0.2 1.6		上端がやや細めで丸く、下端がやや幅広の直線的な鉄片 で、下端部に斜めの切断痕を残す。

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第73図 PL.35	44	鉄製品 鉄片	33区L-14	長幅 1.8 1.2	厚重 0.3 1.6		上端が丸みをもち、下端がやや幅広の直線的な鉄片で、 下端部に斜めの切断痕を残す。	
第73図 PL.35	45	鉄製品 鉄片	33区M-14	長幅 3.0 0.7	厚重 0.4 1.3		右側縁に斜めの切断痕を残す。	
第73図 PL.35	46	鉄製品 鉄片	33区L-14	長幅 2.8 0.5	厚重 0.5 1.7		右側縁に切断痕を残す鉄片。	
第73図 PL.35	47	鉄製品 鉄片	33区M-15	長幅 2.9 1.1	厚重 0.5 3.6		左側縁に斜めの切断痕を残す板状の鉄片。	
第73図 PL.35	48	鉄製品 鉄片	33区M-15	長幅 1.7 1.5	厚重 0.4 2.2		左側縁に斜めの切断痕を残す板状の鉄片。	
第73図 PL.35	49	鉄製品 鉄片	33区L-14	長幅 1.8 2.4	厚重 0.2 3.4		上部に頂部をもつ山形状の鉄片で、下端部に斜めの切断 痕を残す。	
第73図 PL.35	50	鉄製品 鉄片	33区L-14	長幅 4.2 4.1	厚重 6.0 11.7		上端側は薄く、下端ほど厚くなる。右側縁には直線的な 切断痕を残し、左側の弧状となる部分も切断によるもの とみられる。	
第73図 PL.35	51	鉄製品 鉄片	33区L-14	長幅 2.2 1.2	厚重 0.3 1.3		板状の鉄片で、対角線上に弧状の切断痕を残す。	
第73図 PL.35	52	鉄製品 鉄片か	33区M-15	長幅 (2.7) 1.8	厚重 0.4 (4.4)		紡錘形を呈し、下端を欠く。周囲は切断痕か。	
第73図 PL.35	53	鉄製品 不明	鉄滓集中部	長幅 4.9 1.9	厚重 0.1 2.8		薄い板状で、上部が細くやや厚、下端が薄く幅広。右側 縁が緩い弧状をなし、切断痕の可能性あり。鉄片か。	
第73図 PL.35	54	鉄製品 不明	33区M-15	長幅 6.0 2.1	厚重 1.6 28.4		数枚の板状鉄を重ねるように折り曲げ、鍛錬した末端部 と思われ、板状鉄の重なる様子が残る。上端部は切断面 とも考えられ、鍛錬加工後に切り離された可能性が高い。	
第74図 PL.35	55	鍛冶遺物 鍛冶滓(含 鉄)	33区M-14 完形	長幅 2.9 3.0	厚重 1.8 12.6		やや丸みをもった鍛冶滓で、表面の一部に酸化土砂を付 着させる。弱く磁着し、含鉄部は全体に広がる。	
第74図 PL.35	56	鍛冶遺物 鍛冶滓(含 鉄)	33区M-14 完形	長幅 3.4 2.1	厚重 1.7 14.1		やや丸みをもった鍛冶滓で、表面に鍛造剥片や木炭片が 付着。磁着が強く、含鉄部は中核部。	
第74図 PL.35	57	鍛冶遺物 鍛冶滓(含 鉄)	33区M-14 完形	長幅 5.0 2.7	厚重 1.8 23.5		いびつな形状の鍛冶滓で、表面の一部に酸化土砂を付着 させる。磁着し、含鉄部は全体に広がる。	
第74図 PL.35	58	鍛冶遺物 鍛冶滓(含 鉄)	33区L-14 完形	長幅 4.4 2.4	厚重 1.5 28.4		いびつな形状の鍛冶滓。磁着が強く、含鉄部は全体に広 がる。	
第74図 PL.35	59	鍛冶遺物 碗形鍛冶滓	33区L-14 ほぼ完形	長幅 (8.1) 10.9	厚重 3.4 (319.7)		楕円形の中型碗形鍛冶滓で、上部が破面。上面は平坦と なるがやや凹凸をもち、木炭痕が付着する。下面は浅い 碗形となる。上面に弱く磁着が広がる。破面に気孔が認 められる。	
第74図 PL.35	60	鍛冶遺物 碗形鍛冶滓	33区L-15 ほぼ完形	長幅 (8.0) (7.7)	厚重 2.6 (192.7)		中型の碗形鍛冶滓。上面の中央にはやや凹むように粘土 質熔解物が盛り上がり、周縁はほぼ平坦となるが、上部 の一部は破面。下面は浅い碗形となり、炉床土が付着。 破面に気孔が認められる。	
第74図 PL.35	61	鍛冶遺物 碗形鍛冶滓	33区M-15 ほぼ完形	長幅 7.0 8.3	厚重 2.8 191.5		中型の碗形鍛冶滓。上面はやや凹凸をもち、木炭痕が付 着する。周縁の一部が破面。下面は浅い碗形となり、炉 床土を付着し、小礫が固着。上面に磁着が広がり、左側 ほど強い。	
第74図 PL.35	62	鍛冶遺物 碗形鍛冶滓	鉄滓集中部 2/3	長幅 (6.1) 8.3	厚重 2.2 (97.8)		中型の碗形鍛冶滓。上面はやや凹凸をもち、気孔が目立 ち、木炭痕が付着する。下面は浅い碗形となり炉床土が 付着。破面に気孔が認められる。上面に弱く磁着が広が る。	
第74図 PL.35	63	鍛冶遺物 碗形鍛冶滓	33区M-15 3/4	長幅 (7.5) 8.1	厚重 2.8 (135.0)		中型の碗形鍛冶滓で、周縁が破面。上面は緩やかに凹凸 をもつ。下面は浅い碗形となり炉床土が付着し、木炭痕 が付着する。上面に磁着が広がる。破面に気孔が認めら れる。	
第74図 PL.36	64	鍛冶遺物 碗形鍛冶滓	33区M-15 ほぼ完形	長幅 6.0 7.9	厚重 2.3 97.7		やや楕円形の中型碗形鍛冶滓で、上部左側が破面。上面 はほぼ平坦となるが、上下方向にやや湾曲する。下面は 浅い碗形となる。全体に磁着が広がる。	
第74図 PL.36	65	鍛冶遺物 碗形鍛冶滓	33区M-15 ほぼ完形	長幅 6.1 7.8	厚重 2.5 122.2		楕円形の中型碗形鍛冶滓。上面はやや凹凸をもち、木炭 痕が付着する。下面は浅い碗形となり炉床土が付着する。 上面に磁着が広がり、下側が強い。	
第74図 PL.36	66	鍛冶遺物 碗形鍛冶滓	33区M-15 1/2	長幅 (5.9) (7.4)	厚重 3.1 (135.2)		中型の碗形鍛冶滓で、上半が破面。上半の中央から左側 が大きく盛り上がり、縁辺とは二重となる。木炭痕が付 着する。下面は浅い碗形となり炉床土が付着する。上面 に弱く磁着が広がる。	
第74図 PL.36	67	鍛冶遺物 碗形鍛冶滓	33区M-15 完形	長幅 (5.6) (6.6)	厚重 2.4 (118.6)		小型の碗形鍛冶滓。上面は平坦であるが左上部に凸部を もち、酸化土砂が付着する。下面は浅い碗形となり炉床 土が付着する。上面凸部が磁着する。	
第74図 PL.36	68	鍛冶遺物 碗形鍛冶滓	鉄滓集中部 完形	長幅 5.5 7.4	厚重 2.2 99.0		中型の碗形鍛冶滓。上面は凹凸をもち、下面は浅い碗形。 上面に弱く磁着が広がる。	
第74図 PL.36	69	鍛冶遺物 碗形鍛冶滓	鉄滓集中部 1/2	長幅 (5.2) 7.4	厚重 2.6 (86.5)		中型の碗形鍛冶滓で、上半が破面。上面は粘土質熔解物 が盛り上がり、凹凸をもつ。下面は浅い碗形となり炉床 土が付着。破面に気孔が認められる。	

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第74図 PL.36	70	鍛冶遺物 碗形鍛冶滓	鉄滓集中部 2/3	長 幅	(5.0) (6.7)	厚 重	2.2 (92.9)		中型の碗形鍛冶滓で、周縁が破面。上面がほぼ平坦で、 下面は浅い碗形。破面に気孔が認められる。上面に弱く 磁着が広がる。
第74図 PL.36	71	鍛冶遺物 碗形鍛冶滓	33区L-15 3/4	長 幅	6.0 (5.6)	厚 重	1.9 (69.8)		中型の碗形鍛冶滓で、左縁が破面。上面は凹凸みで、 気孔が目立つ。下面は浅い碗形。破面に気孔が認められ る。上面に弱く磁着が広がる。
第74図 PL.36	72	鍛冶遺物 碗形鍛冶滓	33区M-15 1/3	長 幅	(6.5) (4.9)	厚 重	2.1 (66.1)		中型の碗形鍛冶滓。上面がほぼ平坦で、下面は浅い碗形 となり炉床土が付着する。上部と右半は破面。破面に気 孔が認められる。
第74図 PL.36	73	鍛冶遺物 碗形鍛冶滓	33区M-15 完形	長 幅	7.1 5.2	厚 重	2.2 80.4		左右両縁が不揃いな中型の碗形鍛冶滓。上面がほぼ平坦 で、下面は浅い碗形となり炉床土が付着する。全体に磁 着が広がる。
第74図 PL.36	74	鍛冶遺物 碗形鍛冶滓	33区L-14 1/2	長 幅	(5.1) (5.7)	厚 重	3.2 (71.5)		小型の碗形鍛冶滓。上面の中央がやや膨らむように凹凸 をもち、木炭痕が付着する。下面は突出した碗形で、炉 床土が付着するが破面が多い。破面に気孔が認められる。 上面に磁着が広がる。
第75図 PL.36	75	鍛冶遺物 碗形鍛冶滓	33区L-15 完形	長 幅	4.5 5.2	厚 重	2.6 61.7		小型の碗形鍛冶滓。上面はほぼ平坦。下面は突出した碗 形で、木炭痕が付着する。上面に磁着が広がる。
第75図 PL.36	76	鍛冶遺物 碗形鍛冶滓	33区L-14 完形	長 幅	4.7 6.0	厚 重	1.4 63.3		小型の碗形鍛冶滓。上面がほぼ平坦で、下面は浅い碗形 となる。左側縁付近には、粘土質溶解物が付着する。全 体に磁着が広がる。
第75図 PL.36	77	鍛冶遺物 碗形鍛冶滓	33区L-15 1/2	長 幅	(3.7) 5.0	厚 重	2.6 (40.3)		小型の碗形鍛冶滓で、上半が破面。上面はやや凹凸をも ち、下面は浅い碗形となり、木炭痕が付着する。破面に 気孔が認められる。
第75図 PL.36	78	鍛冶遺物 碗形鍛冶滓	33区L-15 1/2	長 幅	(3.4) 5.7	厚 重	1.4 (31.6)		小型の碗形鍛冶滓。上面はやや凹凸をもち、木炭痕が付 着する。上半は破面。下面は浅い碗形となる。破面に気 孔が認められる。
第75図 PL.36	79	鍛冶遺物 碗形鍛冶滓	鉄滓集中部 1/2	長 幅	(3.0) (6.0)	厚 重	2.1 (44.6)		小型の碗形鍛冶滓で、上半が破面。上面はやや凹凸をも ち、下面は浅い碗形となり、木炭痕が付着する。破面に 気孔が認められる。上面に弱く磁着が広がる。
第75図 PL.36	80	土製品 羽口	33区L-14 先端部片	長	(6.1)	重	(234.9)	粗粒輝石安山岩	断面形は径10.5cmと推定される円形で、粗粒輝石安山岩 製。先端部はほとんど溶損せず、粘土質溶解物が付着し 滓化する。内孔径2.4cm。
第75図 PL.36	81	土製品 羽口	33区L・M-15 先端部片	長	(4.8)	重	(49.0)	砂粒・スサ/良好 /暗灰色	断面形は径6.0cmと推定される円形。先端部は丸みをも って溶損し、黒色ガラス質に滓化する。内孔径2.0cm。
第75図 PL.36	82	土製品 羽口	33区L-14 先端部片	長	(4.5)	重	(57.3)	砂粒/良好/灰濁 色	断面形は径6.6cmと推定される円形。先端部は溶損し、 ガラス質に滓化する。内孔径2.1cm。
第75図 PL.36	83	土製品 羽口	33区L-14 先端部片	長	(6.3)	重	(239.6)	砂粒/良好/灰濁 色	断面形は円形と思われる。先端部の下側の一部であるが、 先端部は溶損し滓化。先端には炉壁との接合部が付着、 粘土質溶解物も付着。内孔を僅かに残す。
第75図 PL.36	84	土製品 羽口	33区M-15 先端部片	長	(4.2)	重	(52.3)	砂粒・スサ/良好 /灰橙色	断面形は径6.0cmと推定される円形。先端部は溶損し、 黒色ガラス質に滓化する。内孔径2.4cm。
第75図 PL.36	85	土製品 羽口	33区L-14 先端部片	長	(3.5)	重	(57.6)	砂粒/良好/灰橙 色	断面形は四角形で、角がやや丸みをもつ。先端部は溶損 し、ガラス質に滓化する。内孔を僅かに残す。
第75図 PL.36	86	土製品 羽口	33区M-15 先端部片	長	(4.1)	重	(69.9)	砂粒・スサ/良好 /灰橙色	断面形は一辺6.6cmと推定される四角形で、角がやや丸 みをもつ。先端部は丸みをもって溶損し、滓化する。ま た、先端には炉壁との接合部が付く。内孔径2.4cm。
第75図 PL.36	87	土製品 羽口	33区M-15 先端部片	長	(4.3)	重	(46.1)	砂粒・スサ/良好 /灰橙色	断面形は四角形で、角がやや丸みをもつ。先端部はやや 丸みをもって溶損し、ガラス質に滓化する。また、先端 には炉壁との接合部が付く。内孔を僅かに残す。
第75図 PL.36	88	土製品 羽口	33区L-14・15 先端部片	長	(4.2)	重	(63.9)	砂粒/良好/灰橙 色	断面形は四角形で、角がやや丸みをもつ。先端部はやや 丸みをもって溶損し、ガラス質に滓化する。また、先端 には炉壁との接合部が付く。内孔を僅かに残す。
第75図 PL.36	89	土製品 羽口	33区L-15 先端部片	長	(3.9)	重	(76.4)	砂粒・スサ/良好 /灰橙色	断面形は四角形で、角がやや丸みをもつ。先端部は溶損 し、滓化する。内孔を僅かに残す。
第75図 PL.36	90	土製品 羽口	33区M-15 先端部片	長	(5.5)	重	(62.5)	砂粒・スサ/良好 /灰黄色	断面形は四角形。先端部は溶損し、滓化する。また、先 端には炉壁との接合部が付く。内孔径2.2cm。
第75図 PL.36	91	土製品 羽口	33区L-14 先端部片	長	(8.8)	重	(139.9)	砂粒・スサ/良好 /灰橙色	断面形は四角形で、角がやや丸みをもつ。先端部の下側 のみであるが、先端先には極小の碗形鍛冶滓が固着して いる。碗形鍛冶滓の上面は平坦で、木炭痕が付着し、下 面は碗形となる。破面には気孔が認められる。
第75図 PL.36	92	土製品 羽口	33区L-14 体部片	長	(12.1)	重	(233.7)	砂粒/良好/濁橙 色	断面形が円形となる体部片で、表面は撫で。体部外径 7.4cm、内孔径2.7cm。
第75図 PL.36	93	土製品 羽口	33区L-14 基部片	長	(8.2)	重	(68.4)	砂粒・小礫/良好 /濁橙色	断面形が円形となる基部片で、端部は平坦となる。表面 は撫で。基部外径8.8cm、基部端厚1.0cm。
第75図 PL.36	94	土製品 羽口	33区M-15 基部片	長	(5.3)	重	(34.2)	砂粒・小礫/良好 /黄橙色	断面形が円形となる基部片で、端部は平坦となる。表面 は撫で。基部外径6.2cm、基部端厚1.3cm。

写真図版



1 町遺跡(40地区-33区)全景 北東から



2 平成23年度調査 33区 As-A泥流下 6号畑-1全景 南から



1 平成23年度調査 33区 6号畑-1 全景 西から



2 平成23年度調査 33区 6号畑-1 全景 東から



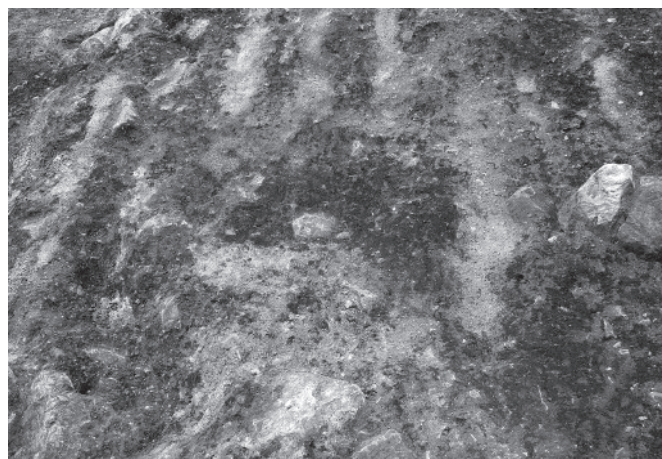
1 平成23年度調査 6号畑-1 東から



2 平成23年度調査 6号畑-1 西から



3 平成23年度調査 6号畑-1 西から



4 平成23年度調査 1号平坦面 東から



5 平成23年度調査 6号畑-1 断割り 東から



6 平成23年度調査 6号畑-1 断割り 東から



7 平成23年度調査 遺構検出状況



8 平成23年度調査 6号畑-1 検出状況



1 平成24年度調査 33区 調査区全景 東から



2 平成24年度調査 33区 As-A泥流下全景 北東から



1 平成24年度調査 33区(北西部) 2号畑 東から



2 平成24年度調査 33区(中央部) 4・5・6-1・7号畑 西から



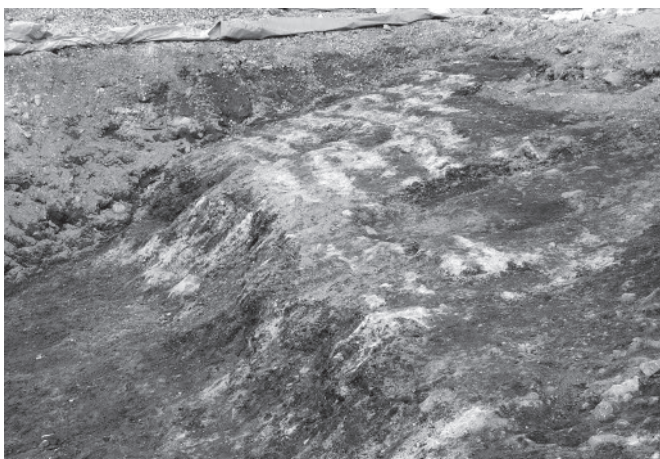
1 平成24年度調査 33区(南東部) 6-2・7号畑 北から



2 平成24年度調査 3号畑 西から



3 平成24年度調査 3・4号畑 畝変換部 西から



4 平成24年度調査 3号畑・1号土手 南東から



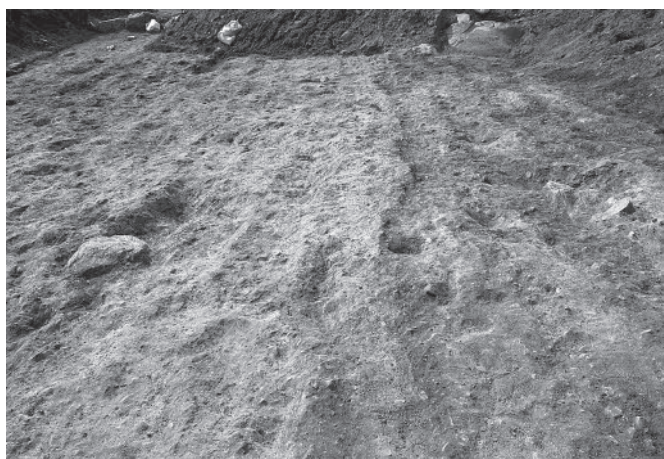
5 平成24年度調査 4号畑 西から



1 平成24年度調査 4号畑 軽石集中箇所 東から



2 平成24年度調査 4号畑 西から



3 平成24年度調査 4号畑(As-A除去後) 南東から



4 平成24年度調査 6-2・7号畑 北から



5 平成24年度調査 7・9-1号畑 東から



6 平成24年度調査 7・9-1号畑 南から



7 平成24年度調査 9号畑-1(南東端部) 西から



8 平成24年度調査 2号畑断面 東から



1 平成24年度調査 4号畑断面 東から



2 平成24年度調査 1号石垣 北から



3 平成24年度調査 2号石垣 東から



4 平成24年度調査 2号石垣 南から



5 平成24年度調査 2号円形平坦面 南から



6 平成24年度調査 泥流下畑 遺物出土状況 東から



7 平成24年度調査 泥流下畑 遺物出土状況



8 平成24年度調査 泥流下 遺物出土状況



1 平成24年度調査 鍛冶関連遺物集中 南東から



2 平成24年度調査 鍛冶関連遺物集中 南東から



3 平成24年度調査 鍛冶関連遺物集中 東から



4 平成24年度調査 鍛冶関連遺物集中 北東から



5 平成24年度調査 遺構検出状況



6 平成24年度調査 遺構検出状況



7 平成24年度調査 遺構検出状況



8 平成24年度調査 遺構検出状況



1 平成24年度調査 33区西 調査区全景 1号畑 南東から



2 平成24年度調査 33区南① 調査区全景 8号畑 南東から



1 平成24年度調査 33区南② 調査区全景 9号畑-3 南東から



2 平成24年度調査 33区南③ 調査区全景 9号畑-2 北西から



1 平成24年度調査 43区西 調査区全景 As-A泥流下面 東から



2 平成24年度調査 44区 調査区全景 1号建物 東から



1 平成24年度調査 1号建物床上敷物出土状況 西から



2 平成24年度調査 1号建物床板検出状況 西から



3 平成24年度調査 1号建物床下検出状況 東から



4 平成24年度調査 1号建物根太検出状況 東から



5 平成24年度調査 1号建物根太検出状況 北から



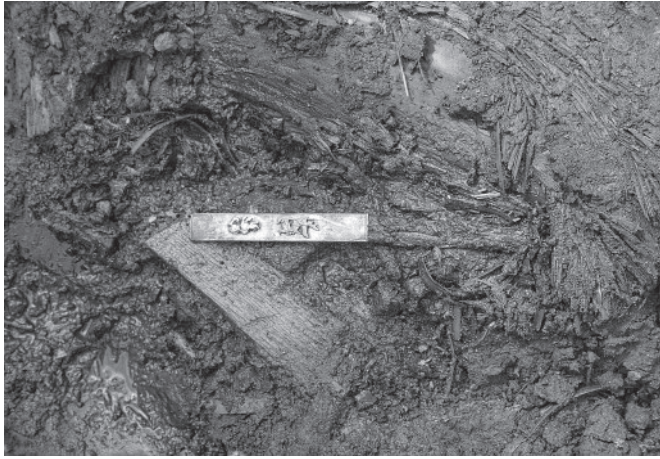
6 平成24年度調査 1号建物礎石検出状況 北から



7 平成24年度調査 1号建物礎石検出状況 東から



8 平成24年度調査 1号建物礎石検出状況 西から



1 1号建物 遺物(小柄)出土状況 東から



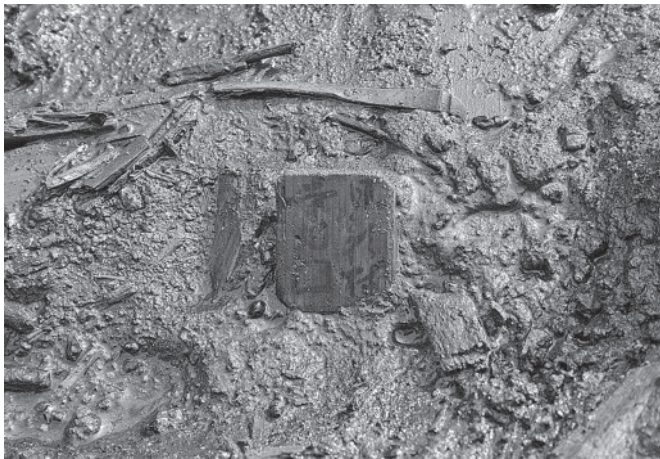
2 1号建物 遺物(木製品)出土状況 東から



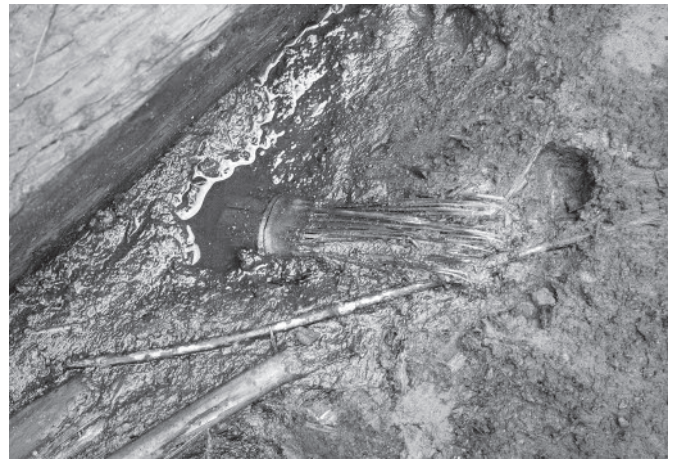
3 1号建物 遺物(金属製品)出土状況 東から



4 1号建物 遺物(お櫃)出土状況 東から



5 1号建物 遺物(墨書木札)出土状況 東から



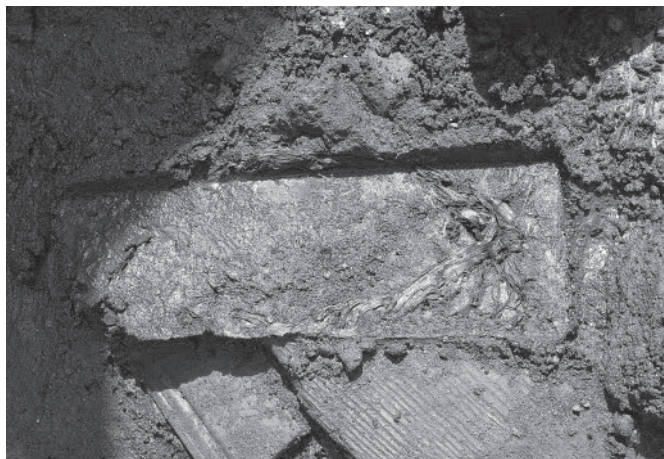
6 1号建物 遺物(竹製品)出土状況 東から



7 1号建物 遺物(下駄)出土状況 東から



8 1号建物 遺物(下駄)出土状況 東から



1 1号建物 遺物(下駄鼻緒)出土状況



2 1号建物 遺物(木製品)出土状況



3 1号建物 遺物(杓子)出土状況



4 1号建物 遺物(木製品)出土状況



5 1号建物 遺物(櫛)出土状況



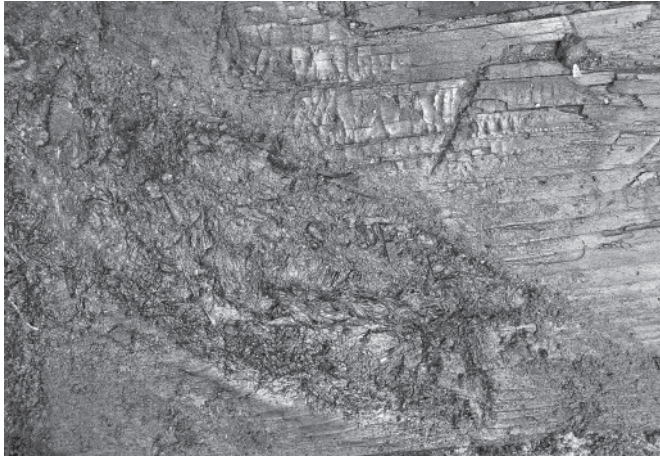
6 1号建物 遺物(櫛)出土状況



7 1号建物 遺物(櫛)出土状況



8 1号建物 遺物(焼印木札)出土状況



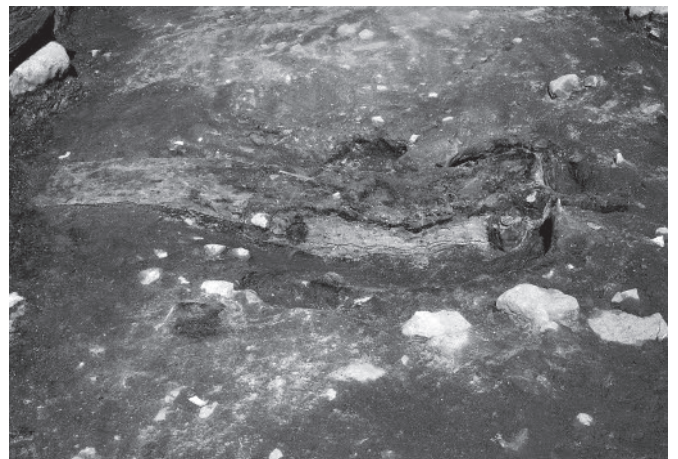
1 1号建物 遺物(草履)出土状況



2 1号建物 遺物(墨書板・鹿角製品)出土状況



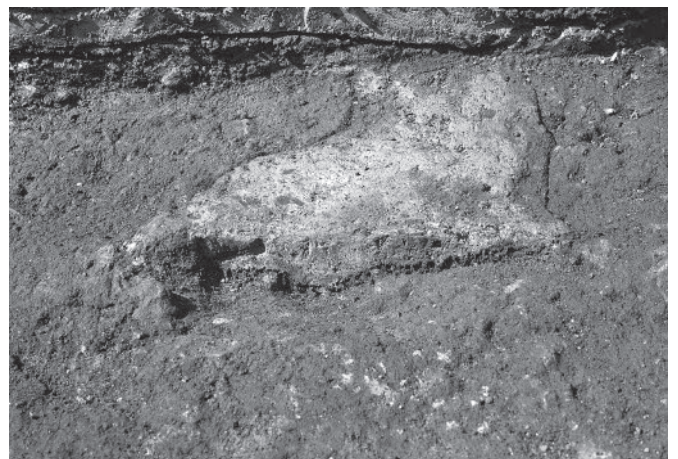
3 1号建物床下 1号土坑 西から



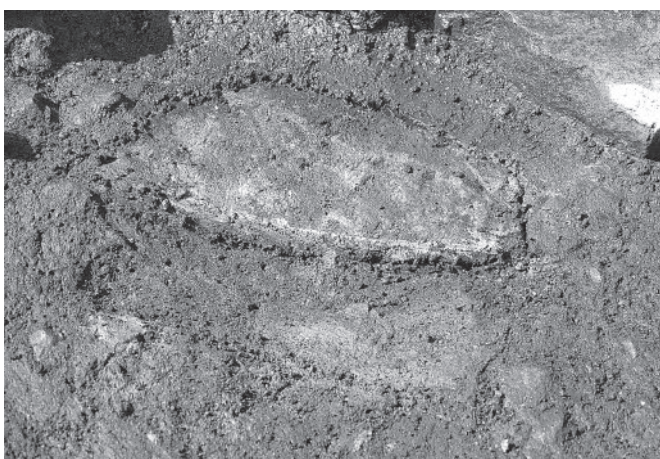
4 1号建物床下 1号土坑 土層断面 北から



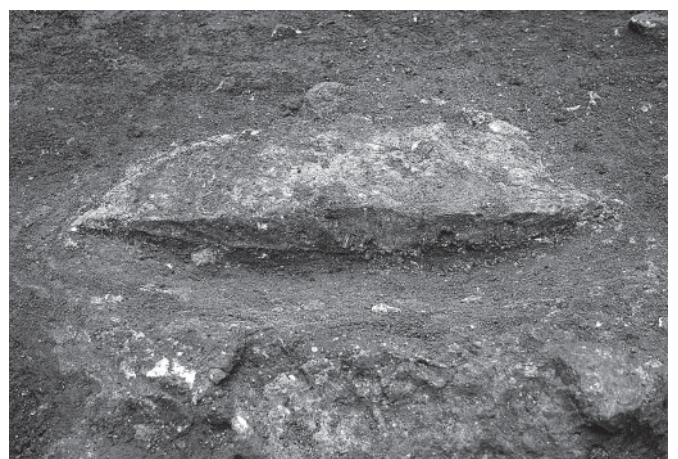
5 1号建物床下 焼土(2・3号土坑) 北から



6 1号建物床下 焼土断面(2号土坑) 北から



7 1号建物床下 焼土断面(3号土坑) 北から



8 1号建物床下 焼土断面(4号土坑) 東から



1 平成25年度調査 22区 調査区全景 東から



2 平成25年度調査 10号畑 西から



3 平成25年度調査 10号畑・土層断面 南から



4 平成25年度調査 道状遺構 西から



5 平成25年度調査 調査風景 西から



1 40地区-33区 尋常小学校跡地 南辺石垣 南から



2 尋常小学校跡地 南辺石垣 崩落状況 南東から



3 尋常小学校跡地 南辺石垣 残存状況 南から



4 尋常小学校跡地 南辺石垣 残存状況 南東から



5 尋常小学校跡地 南辺石垣 残存状況 南から



1建1



1建2



1建3



1建4



1 建 5



1 建 7



1 建 6



1 建 8



1 建 10



1 建 11



1 建 9



1 建12



1 建13



1 建14



1 建15



1 建16



1 建17



1 建18



1 建19



1 建20



1 建22



1 建21



1 建23



1 建24



1 建25



1 建26



1 建27



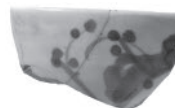
1 建28



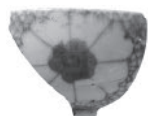
1 建29



1 建30



1 建31



1 建32



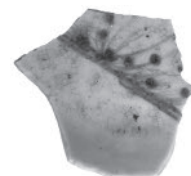
1 建33



1 建34



1 建38



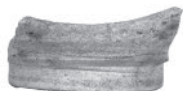
1 建39



1 建35

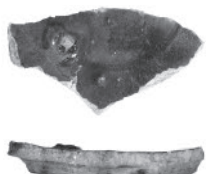


1 建36

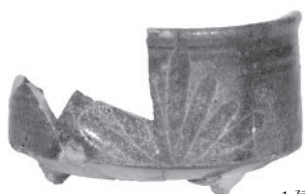


1 建37

PL.24



1 建40



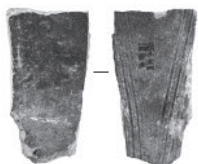
1 建41



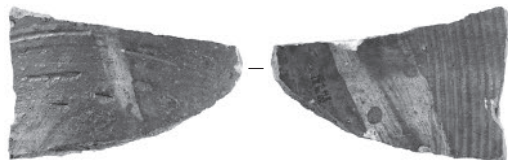
1 建42



1 建43



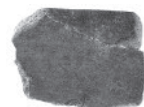
1 建44



1 建45



1 建46



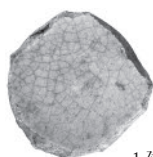
1 建47



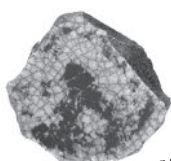
1 建48



1 建49



1 建50



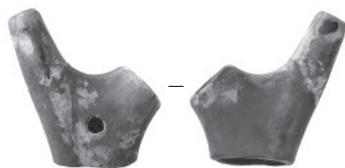
1 建51



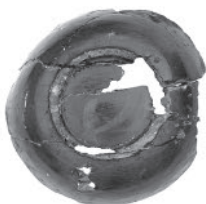
1 建52(4/5)



1 建53(4/5)



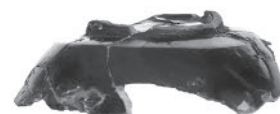
1 建54



1 建55



1 建56



1 建57



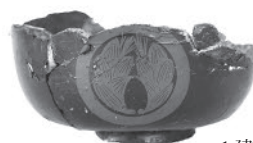
1 建58



1 建59



1 建60



1 建61



1 建62(1/2)



1 建63



1 建64



1 建65



1 建66



1 建67



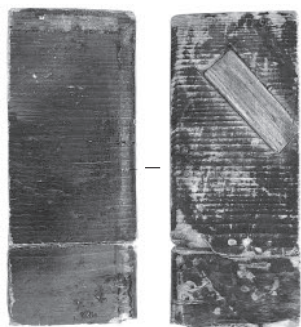
1 建68



1 建69



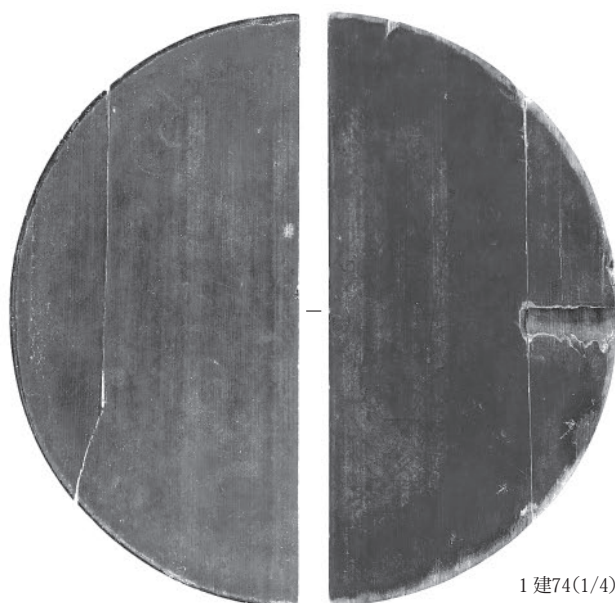
1 建70



1 建72



1 建73



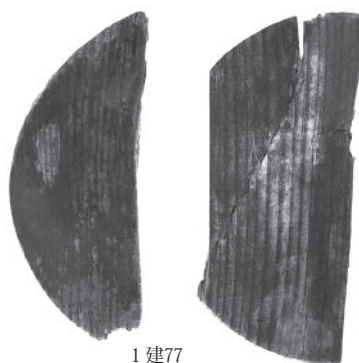
1 建74(1/4)



1 建75

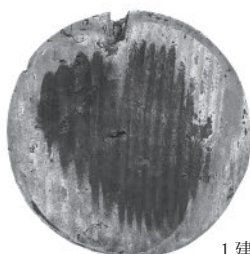


1 建71



1 建77

1 建78



1 建76



1 建79



1 建80



1 建81



1 建82

PL.26



1 建83



1 建84



1 建85



1 建89



1 建90



1 建91(1/4)



1 建86



1 建87



1 建88



1 建92



1 建93(1/2)



1 建94(1/2)



1 建95(1/2)



1 建96



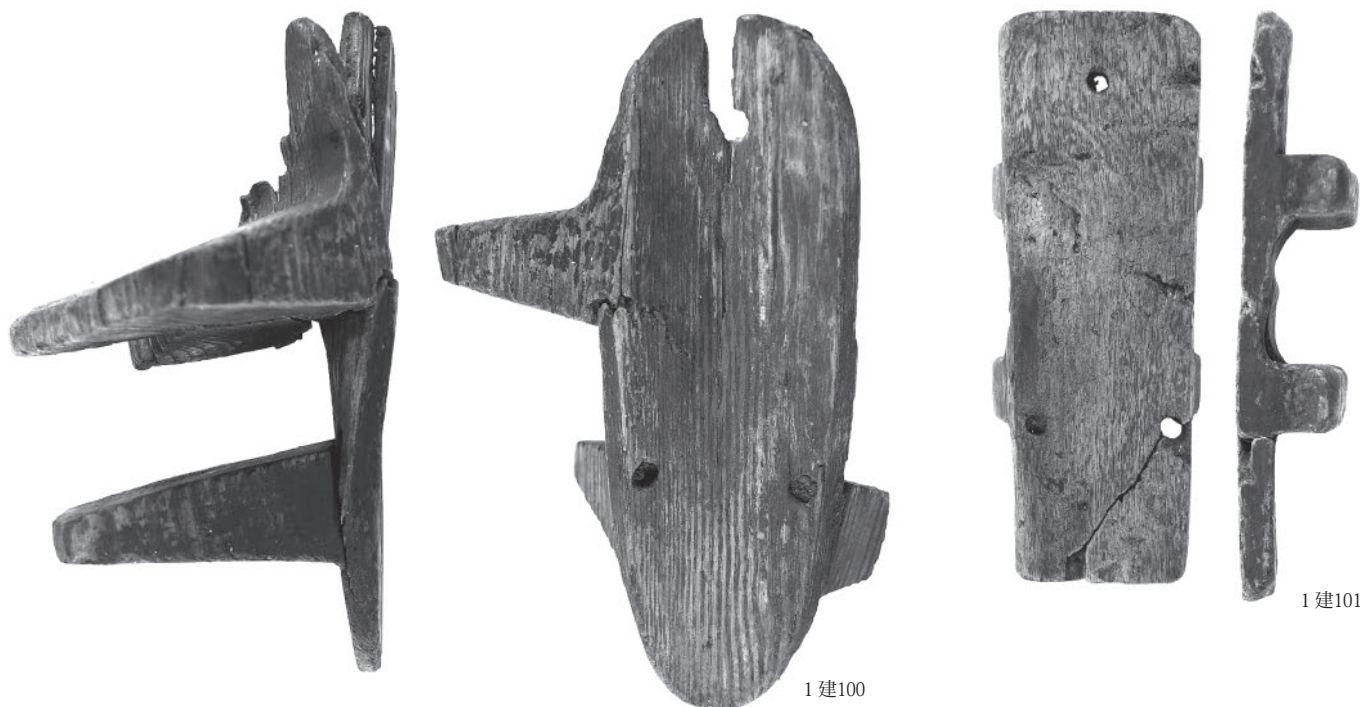
1 建97



1 建98



1 建99



1 建100

1 建101



1 建102

1 建103

1 建104



1 建105

1 建106



1 建107



1 建108



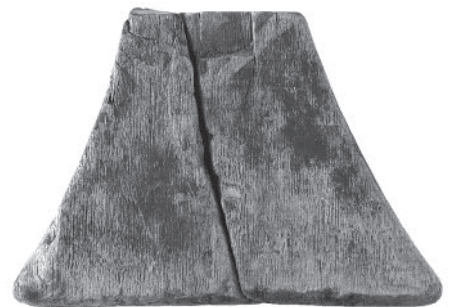
1 建109



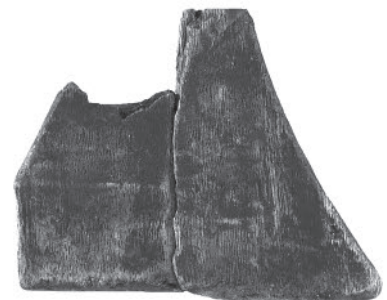
1 建110



1 建111-1



1 建111-2



1 建111-3

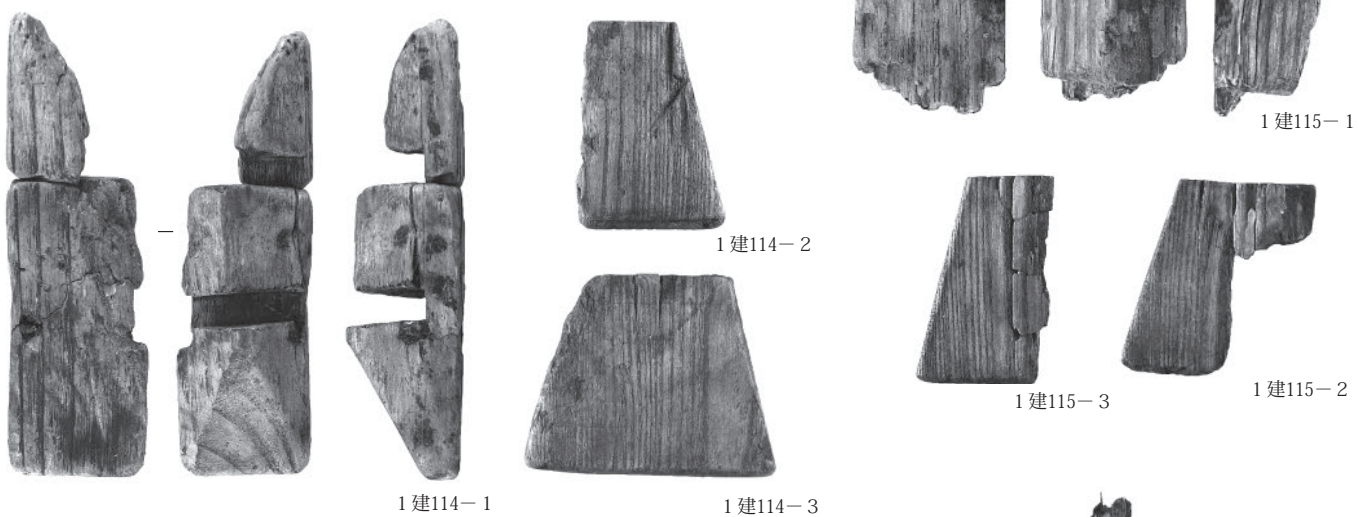


1 建112

1 建113-1

1 建113-2

1 建113-3



1 建114-1

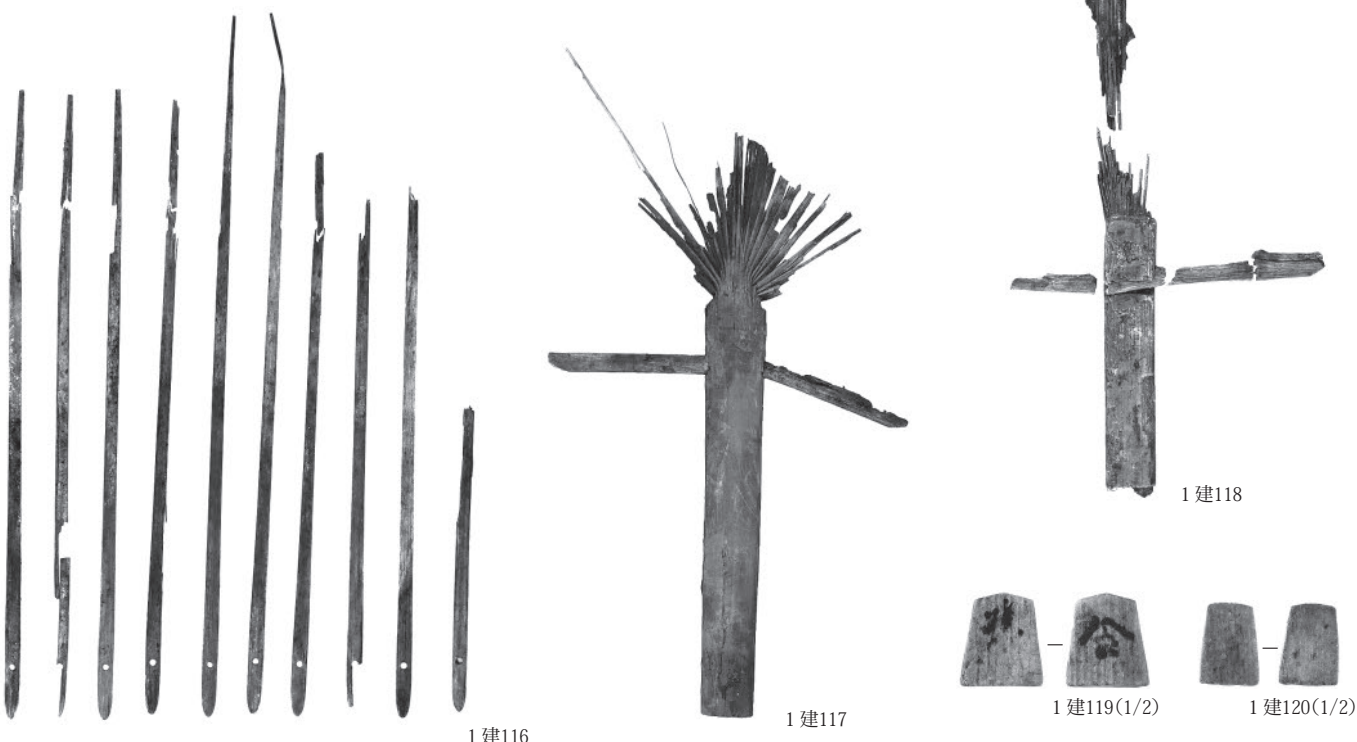
1 建114-2

1 建114-3

1 建115-1

1 建115-3

1 建115-2



1 建116

1 建117

1 建118

1 建119(1/2)

1 建120(1/2)



1 建142



1 建143



1 建144



1 建149(1/4)



1 建145



1 建146



1 建147



1 建148



1 建150



1 建152(1/6)



1 建151



1 建154



1 建153



1 建155



1 建156(1/6)



1 建157



1 建158



1 建159(1/6)



1 建160



1 建161



1 建162

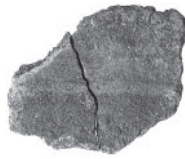


1 建163(1/10)

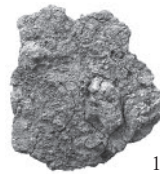
1 建164



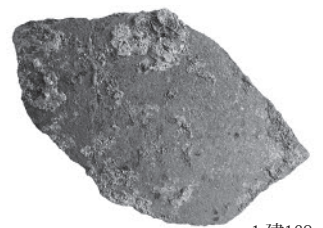
1 建165



1 建166



1 建167



1 建168



1 建169(1/2)



1 建170(1/2)



1 建171(1/2)



1 建172



1 建173(1/2)



1 建174(1/2)



1 建175(1/2)



1 建176(1/2)



1 建177(1/2)



1 建179(1/2)



1 建178(1/2)



1 建180(1/2)



1 建181(1/2)



1 建182(1/2)



1 建183(1/2)



1 建184(1/2)



1 建185(1/2)



1 建186(4/5)



1 建187(4/5)



1 建188(4/5)



1 建189(4/5)



1 建190(4/5)



1 建191(4/5)



1 建192(4/5)



1 建193(4/5)



1 建194(4/5)



1 建195(4/5)



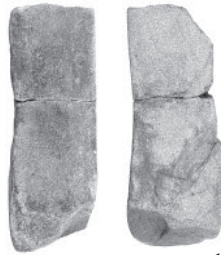
1 建196(4/5)



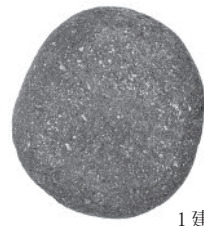
1 建197



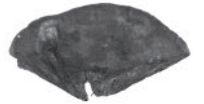
1 建200



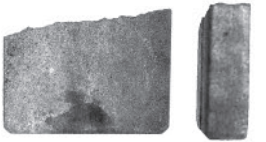
1 建201



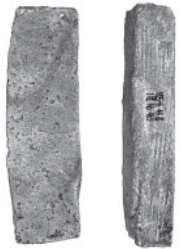
1 建202



1 建204



1 建198



1 建199



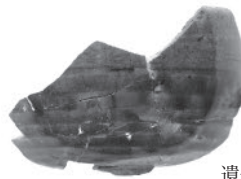
1 建203



遺外 1



遺外 2



遺外 3



遺外 4



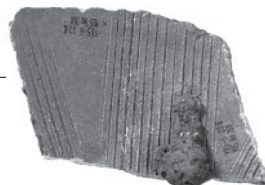
遺外 5



遺外 6



遺外 8

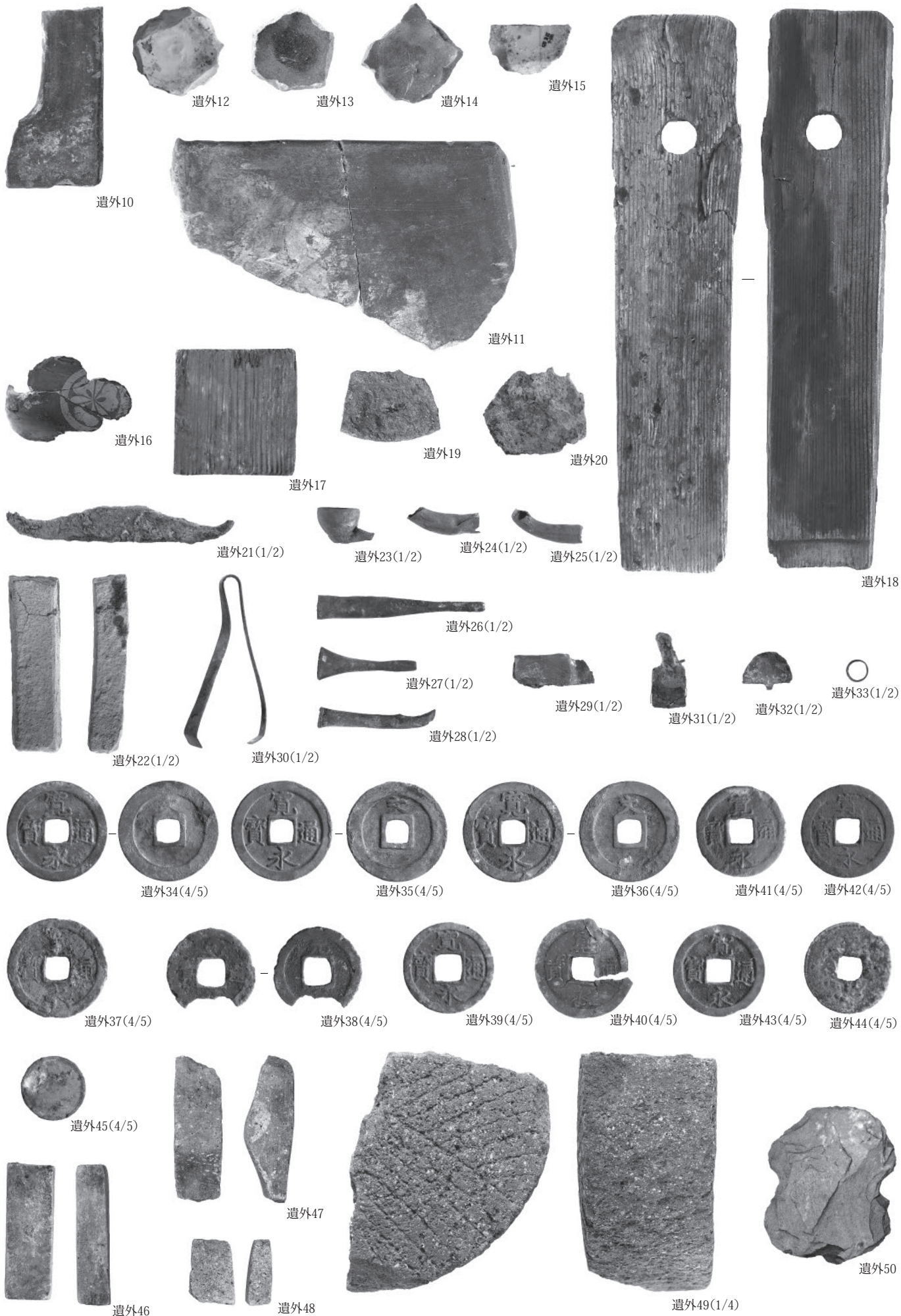


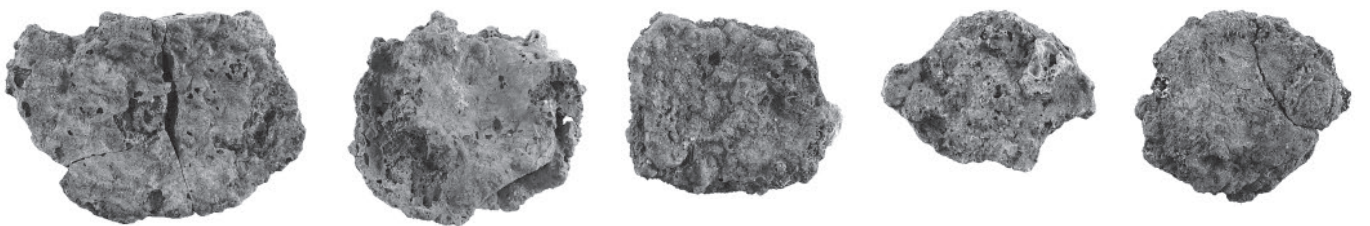
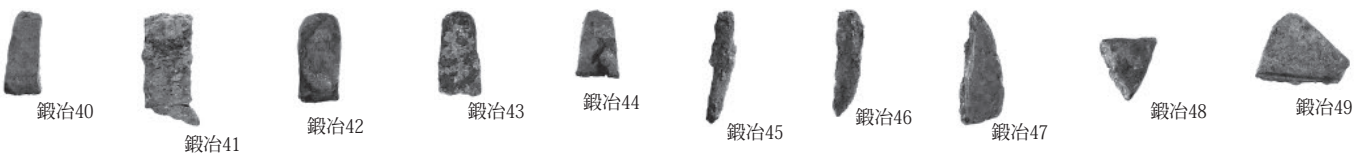
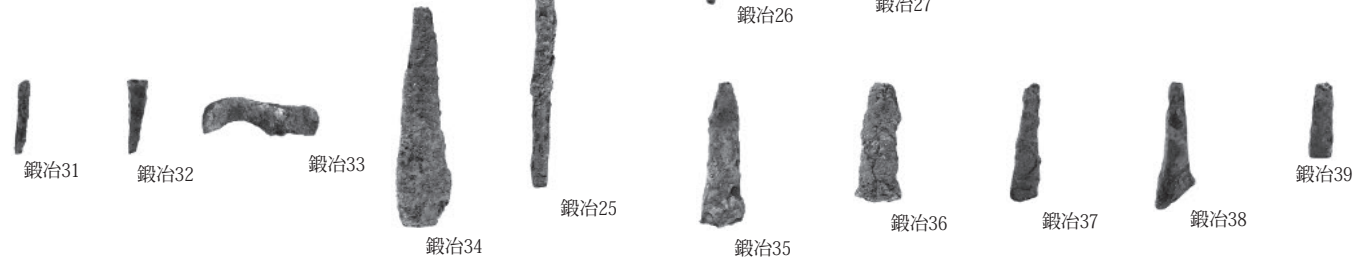
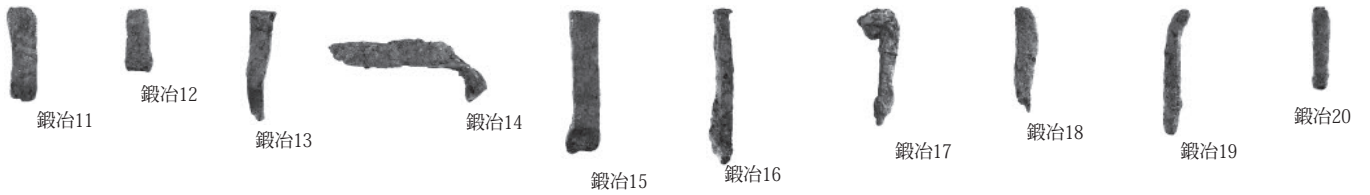
遺外 7



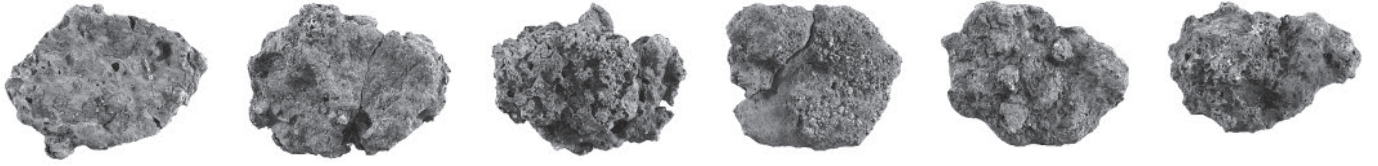
遺外 9

PL.34





PL.36



鍛冶64

鍛冶65

鍛冶66

鍛冶67

鍛冶68

鍛冶69



鍛冶70

鍛冶71

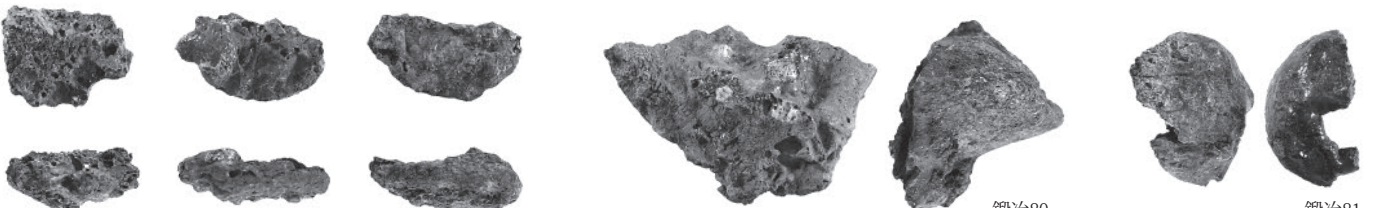
鍛冶72

鍛冶73

鍛冶74

鍛冶75

鍛冶76



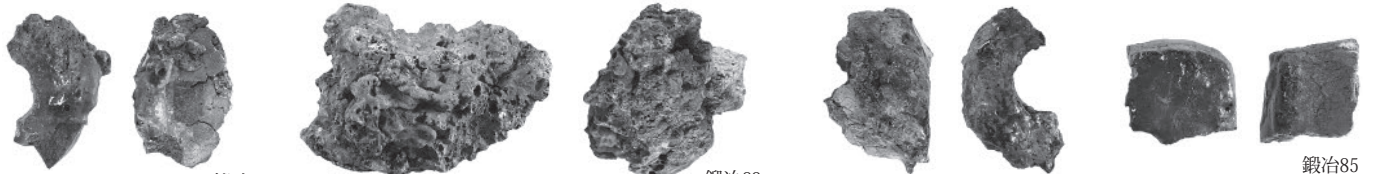
鍛冶77

鍛冶78

鍛冶79

鍛冶80

鍛冶81

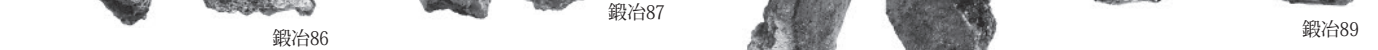
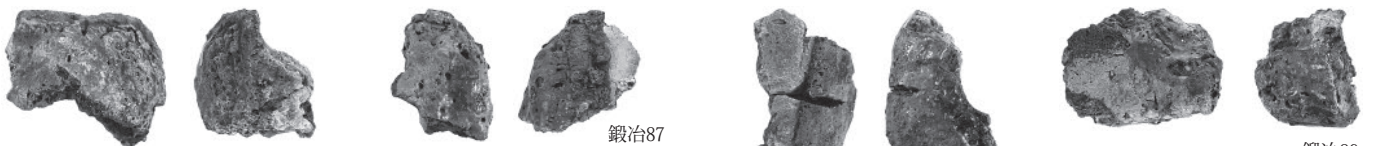


鍛冶82

鍛冶83

鍛冶84

鍛冶85

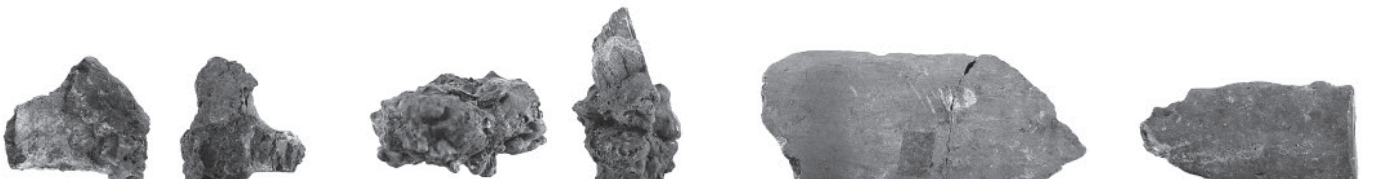


鍛冶86

鍛冶87

鍛冶88

鍛冶89



鍛冶90

鍛冶91

鍛冶92

鍛冶93



鍛冶94

報告書抄録

書名ふりがな	まちいせき
書名	町遺跡
副書名	八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	45
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	593
編著者名	谷藤保彦
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20150206
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	まちいせき
遺跡名	町遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんながのはらまちおおあざながのはら
遺跡所在地	群馬県吾妻郡長野原町大字長野原
市町村コード	10424
遺跡番号	0219
北緯(世界測地系)	363249
東経(世界測地系)	1410111
調査期間	20110701-20110731 20120516-20120531 20120612-20120910 20131003-20131004
調査面積	5,326㎡
調査原因	ダム建設
種別	集落/生産
主な時代	近世
遺跡概要	近世-建物1+畑10+石垣2+土手2+円形平坦面2+道1/その他-遺構外-縄文石器+陶磁器・在地土器+木製品+金属製品+鍛冶関連遺物+石製品
特記事項	天明三年(1783年)浅間山噴火に伴う泥流堆積物によって覆われた集落、生産跡。
要約	天明三年(1783年)浅間山噴火に伴う泥流によって埋没した大型建物を検出。建物は旧長野原村の宿場集落の東端に位置し、礎石・東・大引・根太・床板・床敷物が良好な状態で出土し、遺物は陶磁器・漆器・木製品・金属製品・石製品と多様。特に、漆塗横笛・扇子・将棋駒・小型弓といった調度品や遊戯具も出土。建物の東側には畑が広がり、宿場への草津路が通る。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第593集

町遺跡

ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第45集

平成27(2015)年1月28日 印刷
平成27(2015)年2月6日 発行

編集・発行/公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷/上武印刷株式会社

